

●ちかきあたりにはたちよりて、もしさる人やとたづぬれば。

若し其やうなる人やありしと問ふ也。

●その僧ははやこそこのごろにて侍しやらん、めで度往生し給ひにき。

去年の秋の頃、臨終正念にして身まかり給ひぬと。

●その後はけしかる尼のひとり出いるが、けふしもたがひて侍るにやと語る。

彼僧往生の後に尼のすみたる也、けしかるはあやしくことなると云ふ義にて、よのつねならぬと云意也、たがひてはいつも内にあるに、今日にかぎりて外へ行しにこそと語る也、是迄里人の詞。

●さだめなき世はさる事なれども、今さらあはれにたぼわて、一佛淨土もいと急がる、心ちすれば。

同じ佛の國に生れんと、ねがふ心いとすむ也

●ひかしのなごりは花の上にもわすれし物を。

なごりはわもかげの残ること也、今は已前に因しことを云ふなり、花のうへとは極樂の蓮の臺なり。

●各留半座乘華葉わが爲にもぞのこすらん、待我閻浮同行人その人かすにはもれじかしと、たのもしくたぼわて。

先だちて往生したる人、我身は蓮臺のかたはらにより居て、裝婆の同行を待となり、此二句は法照禪師の語也、五會法事讚下に云、各留半座乘華葉(異本葉字を臺字に作るもあり、古今兩ながら用ゆ)待我閻浮同行人、寄語裝婆修行者、念々精勤莫睡、此文の意を「さきだ、ばわくれし人をまちやせん、華の臺のなかば残して」又(新千載集に漸空上人)「見せばやと花の半を残しても、誰ふる里の我をまつらん」、さきだちし友や寶の欄に、のぞみて我をまつらんものを「愚誘

閻浮とは須彌山の南なる海の上にある國也、具には閻浮提と云ふ我朝も其内なり、衆經音義云、閻浮者從樹爲名、舊譯云「穢樹」提者略也、應言「提鞞波」此云洲已上。

●臨終のありさまなど委しくかたらふほどに、たぼわすして時うつりにけりと見れば(と見ればの

この字は、言釋に云、時の字にて暫時少刻のことより轉じ云、平言にちよと見ればと云義也、日もやうく入なんとす、立かへらん道もはるかなればいかはせましと思ひわづらふに、さても(然而もなり、こゝは上に思ひわづらふと云を受て云へり)けふは彌陀感應の日なり。

●けふとは十五日なるべし、感應とは衆生の方より佛を念する心を感じと云ふ、佛の方より其心をあはれみ利益を施し玉ふを應とは云ふ也、宗鏡錄に云

感是能感屬衆生、應是所應屬佛已上、十齋日に十佛を念することあり、十五日は彌陀にあたり又三十日に三十佛を配當するあり、其時も彌陀は十五日なり、紀の齊名の勸學會の詩序にも、念極樂之尊一夜山月正圓とあり。

●たましく又利物偏増のみぎりにちかし。

眞如堂に近しと云ふ義也、日は十五日彌陀感應の日に、彌陀尊の靈像の安坐し玉へる、眞如堂の近きあたりへ來り合せたることをのべ玉へり、文意可味、此時は眞如堂は神樂岡にあり、今其地を本

と眞如堂と云ふ吉田山の東の方也、北白河より近し、利物偏増とは本尊の利生、日を逐てしげき心也、四方要決に云、末法萬年餘經悉滅、彌陀一教利物偏増已上。

●事のついでなるは心やましけれども。

わざと參るが本儀なるに、此ついでといへば疎略に似て心ぐるしけれども也。

●かろかならぬ志は佛しり給なんと思ひて。

たろかならぬとはかろそかならぬ也、北白河迄來り玉ふことも、往生の道をたし玉はんが爲なれば也。

●その夜は眞如堂にまうで、通夜し侍りぬ。眞如堂は人王六十六代一條院御宇、正曆三年戒算上人の開基也、鈴聲山眞正極樂寺となづけて、慈覺大師の御作、彌陀の靈像を安置し玉へり、此本尊の靈驗、他に異なることは世間に其隠れなし、猶縁起にあれば行て見るべし。

通夜とは夜もすがら佛前にて念誦などする事也、附て云、嵯峨の釋尊も此帝の御即位の歲、永延元

年に渡り玉へり、正暦三年よりは六年已前也云々。

●夜さしふけ人うちしづまる程になりしかば。人定を日本紀に亥の時と點せり夜の四ツ時也、程は時分、には助字也。

●青嵐軒をはらふひひき、木のづから念佛衆生の聲をそへ、皓月いらかをてらすかげ、そらに攝取不捨の光りをます。

晴れたるそらの嵐の軒端をはらふが、自然に念佛の聲を添ふるが如く、明月の御堂の棟を照すが、佛の光明を増に似たるさま也、藤原爲雅の詩序に、

夜宿極浦之波青嵐吹兮皓月冷、(青嵐は晴嵐に同皓は韻會に潔白也) いらかとは和名鈔釋名云、屋脊曰_レ豊、(和名伊良賀)そらとは暗の字おしはかりて云也、念佛衆生攝取不捨は觀經の要文、向師今

青嵐皓月の一聯を以て、眞如堂の風景を顯し且本尊の御徳を讃嘆し玉へること、其意味至て深長也、先づ風聲月色を擧玉へるにて其夜の氣色思ひやらる_レ也、詩中に畫ありと云が如し、別して意味深長と云は、風聲を念佛によせ合せ玉ふは、彌陀

き身の上なり、されば此淺ましき身の上なる衆生を濟はん爲に、五劫に思惟し永劫に練行して、以光明名號攝化十方の御手段を設け玉ふ故、一聲稱名の當體に萬善の金持になり、其座で直に光明に攝取せられ、無量罪業の借金をすますなり、斯く云ふ道理なる故に、我等直に三賢の菩薩を飛越わて報土へ往生とげて、十地究竟の菩薩となる也、

(元照疏云、一念超三祇片言齊諸聖不修餘行得波維密方便) 依て諸佛も不可思議功徳と讃嘆し玉ひ、超世願王と仰ぎ玉ふ也、爾れば彌陀如來の無量無邊の御徳は、名號と光明の中にある故に、導師は光明名號攝化十方と釋し玉ひ、向師は今光明名號を青嵐皓月に結びて、本尊の御徳を讃嘆し玉へり、其巧なること可_レ知云々。

●心すごさも限りなきに、道のくたびれ取そへて(山あひの夜の氣色思ひやるべし)しづかに念佛すると思ふ程にさながら眠りにけり。

佛前にかしこまりて念佛せしが、いつともなく其まゝにて眠り入たる也、さながらは、しかしなが

は風大所成の佛にして妙觀察智を主どり玉へば、其本願も風大の聲に發する口稱念佛なる義を顯はし、其本願の口稱念佛する衆生をば、直に心光を以て攝取護念し玉ふ義を、月光の豊を照すによせて顯し玉ふ也、是則導師の御釋に、以光明名號攝化十方との玉へる意にして、諸佛超世の願王と仰がれ玉ふ濟凡の祕術なり、其濟凡の義趣を云はば、彌陀の因位に大願を發し兆載永劫に苦修練行して、尊體に無量の諸善萬徳を具へ其名を衆生に唱へさせ、名體不離の道理を以て(梅木爪等のこと)其徳を衆生に譲り、其名を離れぬ光明を以て滅罪の利益をさづけ玉ふ也、是れ至極の早業也、譬へば至て貧窮なる者あるを慈悲深き有徳の人の濟ふてやるに、借金なしになると金持になると同時なり、貧人豈喜ばざらんや、自力では善根功徳のまふけはできず、日々借金罪業の利はのぼる、唯日々零落墮獄を待つのみなり、たとへ少しの善根の財寶を貯ふるも六賊に掠めらる、況や一向に無善根の機なるをや、實に出離無縁のあさまし

ら也、それながらの意。

●されどもたびねのところがたく。「旅まくらいくたび夢のさめぬらん、思ひあかしうのまやくと」拾遺愚艸

●たいの枕たどろきやすければ。

●白氏文集云、老眠早覺常殘夜、此意を夫木抄に千里「わいてぬる目ははや覺めぬとこしなへに、夜半にあくればねてのみぞふる」。

向師此時五十七八歳の頃也、眞如堂緣起にも元享の頃とあれば也。

●程なくねさめてきけば、いつの程よりかまうでにけん、僧二人なつかしくわよりてうちかたらふおとすなり。

眠れる内のことなればいつ参れりとはしらす、なつかしく居よりてとは、むつまじげに近く坐したるさまなり、うちかたらふおとすとは、物がたりする聲の聞ゆるなり。

●一人はしきりにうちしはぶきたるこゑいと老たり、たのれからもよにたうとく思ひいれたる所、さ

ぞふかゝらんと見たり、ちかゞこのあたりよりまうでたる人なるべし。

二人の内に其一人は近き所よりまわり給へる體なり、たゞしはぶきせらるゝ聲をきくに、殊の外の老僧なりと聞ゆ。

いとおいたりとは、甚だ年よれる人と也、たのれからとは人がらのと也、(言釋に、たのれからは自の誤りなるかと云ふ、いかさま爾なれば穩也言釋可(見合)人體も殊勝にていかさま道心ふかく智解ある人と見たり、是豈に異人ならんや、本尊の變作なり、されば眞如堂縁起にも如來の變作疑ひなしとあり云々。

●いまひとりとは初發心のものなんめり、いづくよりの修行者にかあらんとたばゆ。

今一人は初發心の修行者なるべしと見ゆ、鎮西上人の云、出家人無住房、無住處者、天竺震旦、謂之遊行沙門、日本謂之修行者也、已上、修行者は即嵯峨の釋尊の化現。

●ねぶりにけるまに何事をかかたりけむと、ゆか

しくきゝたれば。是迄序分なるべし。

歸命本願鈔講說卷一終

歸命本願鈔講說卷二

第二、正宗分

正宗分に六番の問答あり卷毎に二問二答なり。

淨土宗は二尊一教の所立也、導師の釋に云、(玄義分)仰ぎ惟れば釋迦は此方より發遣し、彌陀は即ち彼國より來迎し玉ふ、彼に喚び此に遣る、豈に容去也、已上、されば遣迎二尊の大悲より、老僧と修行者に化現して、向阿上人に告玉ふは、我人をして決定墮獄の苦しみを抜き、順次に報土に往生せしめ給はん爲の御設けなれば、已下の六問六答を聞て安心起行の正義正理を決信すべし云々。

●修行者のいはく本師一代の諸教は機根の萬差に返すれども。

是より今鈔大段三段の中正宗分也、本師とは釋尊也、(前には彌陀如來を本師と云へり、所によりていづれをも云也云々)一代とは五十年、成道より入滅迄を云ふ、諸教とは大小權實八萬四千の法門を

云ふ、機根とは上中下の機利鈍の諸根也、萬差とは多端の義也、返するとは相應する義也。法華玄義に云、夫教本返機、機既不一、教亦衆多也、已上、字書云、返或作投、物相投合也、已上。

●末法萬年の利益は念佛の一門にかざれりといふ事みな承り及ぶ所也。

釋尊の御入滅より五百年を正法と云ひ、次の千年を像法と云ひ、其後の萬年を末法と云ふ、垂裕記に云、理教行果四皆備足、如佛在世故名正法、雖有上三全無果證、故名像法、像似也、於正故、修行既寡理教僅存、法已微末也、故名末法、已上、此末法に至りて利益あるは、本願念佛の法也、故に道緯禪師安樂集に、當今末法現是五濁惡世、唯有淨土一門可通入路也、已上、此の文の意を、頓阿法師(草庵集)「西へ行道より外は今の世に、淨世をいづる門やなからん、又慈惠大師は(西、方要決)末法萬年餘教悉滅、彌陀一教利物遍増と釋し、導師は(往生禮讚)萬年三寶滅、此經住百年、爾時間一念皆當得生、彼已上、此文を題にて覺

空上人新千載)「立ならぶかげやなからん萬代の、後まで、らす法の燈火」、又古歌に「草も木も枯たる野邊に唯ひとり、松のみ残る彌陀の本願」問念佛の法門は末世下根の機のみに被りて、上機の利益はなきや、答念佛の益は豎に三世に(正像末)通じ横に三根を益す、故に龍樹天親も願生し十惡五逆も往生す、譬は阿伽陀藥の萬病を利するが如し云々、問上代の機何が故に皆易行の念佛を修せずして難行を修するや、答上代は根機勝る、故難行を難義とせず、喩へば船駕に乗るは他力、歩行は自力なるに、達者なるは歩行くを樂とするが如し、足弱き者とは格別也、道路に難易の差別はなく、難易の差別は機に就て別る也、今も亦其如く法に難易の別なく、機に従て難行易行差別する也、末法の機は最劣にして足弱き者の如くなれば、彌陀の他力の船駕に乗せざれば、生死の大關を超えること叶ひ難し云々、故に此道理を本文に「末法萬年の利益は念佛の一門にかぎれりといふ事みなうけ給はり及ぶ所なりとの玉へり、始皇遁刺客難

(托、事實卷二)。
 ●しかはあれどもこの念佛の一行をもて決定往生すべきことほり、いかなる故としらす。
 ●しかはあれども、上を受けて下を起す詞、この念佛、このは本願を指す、念佛は稱名也、凡念佛と云ふに多種あり、理の念佛、事の念佛、散心念佛、定心念佛、融通念佛、參究念佛、作福念佛、祕密念佛、等あれども、此修行者は本願念佛の行者なれば口稱念佛なり、決定とは、三藏法數に云、決定者斷然不易之謂也、上、往生とは了譽上人の云、往者捨此往彼、生者蓮華化生也、上。
 ●もとより一文不知の身なるうへ、(註に云、みづからもうかはず)はかぐしく知識のをしへをもうけたまはらねば。
 ●他に隨ひて進み學びしともなしと也、はかぐしくとは、すゝむ意也、知識とは淨土宗の學匠也、發眞鈔に云、聞名歎德曰知、觀形敬奉曰識、已上。
 ●つやく／＼たちいらぬ事に侍り。
 ●初發心なれば無案内のよし也、つやく／＼は一切の

字にて、かつてしらの意也。

●不審までもをよばぬうひくしきなれば、いづくをいかにと問申すべしともをばねず、(不審は、いぶかしき義なり)たゞをろかななる心をつくみて、きゝやすきやうにをしへ給なんやといへば。(是は總じての問なり)

●老僧のいはくさやうの事は智者のわざなり、さらば愚老がわきまふべき所にあらず、(謙退の詞なり)申さむにつけて佛の知見もはかりあり(ただ佛のたほしめしなり、知と見とはあらず)人のあざけりいかゞあらん、(世人のそしりもさがたしとなり)そのうへたのづから(たま／＼の心なり)きゝをきたりし事も、ちかごろはいたく木ひにぼれてみなわすれぬらん。
 ●いたくは、萬葉に甚の字を點す(又痛太)、たひにぼれてとは、詩經に老の字なり、十二因緣經に云、人年老少、識、多忘者識轉、稍向後生處、已上、鄭君之幼女、(托、事實卷六)。
 ●されどもたづね給ふ所のさがたければ、心に

残りたらん事のかたはしを、いさゝかきこに侍らん。
 ●半ば忘れ半ば残りたるを片端と云ふ、いさゝかは少分の義也、きこに侍らんとは云ひ聞かしむる義也、源氏物語などに、何にても云ひたるをきゆるとあり、此鈔も爾か也、因に云、志しある人の法門を問ふに、我知ることを教へざれば惜法の罪とて至て重き罪也、彼樂特尊者の鳩摩羅の一偈を九十日が間に覺えられざりしなど、前生智者なりしに法門を祕惜せられし報なりしとなり云々、依三惜法、生無手鬼(托、事實卷七)
 ●いにしへ智者達の(念佛の安心)申されしは。是より正しく御說法也、老僧とは如來の御示現、實は彌陀の直説なり、其意を得て聽受すべし云々、先憶説の新義なきことを示す、經首の如是我聞の如し云々、學文ある人は法問にあやまりなき故に智者達と云ふ、是れ元祖大師并に其正統を紹ぎ玉へる二祖鎮西國師及御弟子の中の智者學匠達なり、下卷に問答あり、聖光聖覺源智湛空信空の五人を

擧られたり。

●念佛して極樂に往生すといふ事はさらに別の仔細なし。

淨土宗の大意は別してむつかしきことなしと也、是れ則元祖大師の御遺訓一枚起請文の意を總標とし玉へり、如來示現して説き玉ふ法門の開句にも、大師の御遺訓を用ひ玉へるにても、元祖大師の御所立、本願念佛の法門の徹底なることを尊信すべし。

禪勝房の云、淨土宗の大意は往生極樂はやすきこと、心得るまでが大事也、禪勝房はさしたる學匠にてはなけれども、道心深かりしゆる宗意の底を盡す名言多し、今の語及び念佛のくせつき玉への垂示、念佛往生の決定を生れたる者の必死するに比し玉へる等數々也、されば念佛すれば往生すと大らかに心得て唯申すが安心の徹底、本願所被の正機なり、若し唯申す計では、さう心得て斯ふ修してと別の仔細を存すると、却て往生を仕損するなり、故に大師一所の御法語に、疑はざる心にな

りおほせぬるうへには、唱ふるの外に別の仔細なし、仔細なき所に仔細をつくる時往生の道には迷ふなりと、猶別の仔細なき義は已下本文に具さなれば文に就て辨すべし、今此別の仔細なしと云ふに就て、未熟の在家などに、得て心得違ふことあれば夫れが爲に辨示せん、淨土門に於ても自身往生の外のことには、別に子細もあること故心得違ふことあり、先淨土門に於て通規化他門と云ふと、別規安心門と云ふの二あり、通規化他門とは、出家し學文し受戒し讀誦禮讚等つとむることある也、化他の爲には博く學文せねばならぬ也、又通規に依ては出家は勿論在家にても受戒などする也、此等は他を化する爲め或は佛法の通規を守る爲め也、此ときは且く別の仔細あるに似たり、別規安心門とは、此度正しく往生する爲には出家せねばならぬと云ふ別の仔細もいらす、學文せねば受戒せねばと云ふ別の仔細もなく、唯助け給へと思ひて南無阿彌陀佛と唱ふる外に少しも別の仔細なきなり、よりに一枚起請文は、御臨末に往生の別規安

心門の骨髓を示し玉ふ御法語故、唯往生極樂の爲に南無阿彌陀佛と申て疑なく往生するぞと思ひとりて申外に別の仔細候はずの玉へり、今此鈔も其通りにして、通規化他門はさしをきて、往生の別規安心門を示し玉ふ書故、念佛して極樂往生すといふ事さらに別の仔細なしと示し玉へり、念佛の行者此通別二門の譯を知らざるは、或は別の仔細もあればこそ、寺方で種々の事つとめると思ふたり、或は別の仔細なしと心得たる人は、出家杯の通規化他門に就てするを別の仔細と見て、一枚起請に背くと思ふ様なる心得違ひ、是皆此通別二門の譯を知らざる故也云々、爾れば淨土門も出家分上の通法には種々の事あれども、念佛して極樂に往生すると云ふ段には、在家出家も智者も愚者も唯往生の爲に、南無阿彌陀佛と申より外に少しも別の子細はなきことぞと心得べき也。

●いかなる悪人なれどもたすけ給へと思ひて南無阿彌陀佛となふれば、佛の本願に乗じて必うまるゝなり。

此一章は此鈔一部三卷の大綱、詞約かにして義趣残ることなし、則十八願文の譯文也、譯とは易也、謂換易言語使相解也（上）（周禮秋官疏）とありてかへること也、設我得佛等とは梵語を漢語にかへたるものなり、今の文は其漢語を日本語にかへ玉ひたる也、云何かへ玉ひたるぞと云ふに十方衆生と云を、いかなる悪人なれどもと譯し玉ふ、十方衆生とは善惡智愚の簡ひなく、生とし生る者を攝し盡し玉ふ、今悪人を擧玉へるは劣を擧て總を攝するの義也、然して大悲の底は本爲凡夫にあれば也云々、至心信樂欲生我國を、助け給へと思ひてと譯し、（助け玉へにうを偽りなく、眞實なるは至心の義、頼めは助くるぞと思ひて疑なきは信樂の義、餘事をねがはず極樂へ助け玉へと思ふは欲生我國にあたる也）、乃至十念を、南無阿彌陀佛と唱ふればと譯し、（乃至は平生十念は臨終云々）若不生者不取正覺を、佛の本願に乗じて必うまるゝ也と譯し玉へり、願文の機心行を次第して譯し玉へば、此文の通りに心得れば即本願を心得たる也、

(願文は覺がたけれども此文は覺に易し、覺れたれば同事なり云々)、偕此文中に於て必生ると云ふこと氣のつけ處也、我身の上に引受け喜ぶべし、必は字書に定辭也、專也、果也等とあつて、皆ゆるぎなき義なり、爾れば我心に佛に助け玉へともたる、心ありて、口に南無阿彌陀佛と唱ふる身となれば、誰も必とゆるぎなく、皆極樂に生るゝに定りたる身となりたる也、然れば生じたる者は死ぬるは定り、死で其行先きがいかなる苦しみ處であらふも知れざりしに、今は其死ぬると云ふが即ち極樂へ生るゝのぢやと決着せば、喜ぶ心は生ずべき筈也、少しにても此所に嬉しき心あるが、實に安心の決着せし印し也、此所に少しも嬉しき心なき人は進んで唱へ嬉しく思ひならふべし、云々。

●その願といふは四十八願の中の第十八の願に設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺と説たまへるなり。

是を念佛往生の願と名く、此鈔三卷も此願文の次

●その願を委しく心得るに、機にきつて心行あり、佛につさて誓願あるべし。(これはまづ總じて判す)

●その中に十方衆生といふは、まづ往生の機類をさだむ。

是より願文の略解也、八方上下を十方と云ふ、其の中の生きとし生ける者を衆生と云ふ、平等覺經に云、十方世界諸天人民蜎飛輾動と已上、衆生とは祐法師の云、衆生世故名衆生、已上、弘決四云衆生者衆縁和合名曰衆生、所謂地水火風空識名色六入因縁生、衆生者無明爲本、依愛而住以業爲因已上、了惠上人云、衆生廣通善惡男女衆機也已上。

●往生の機類をさだむとあるに心を付べし、此所を念佛の機類を定むともあるべきを、往生の機類との玉ふと安心の肝要なり、念佛の機類を定むとの

玉へば紛れ多し、念佛の言は諸師諸宗に勸る念佛に紛れ、又二世安樂祈禱御禮報謝の念佛など云ふにも紛るゝ故、蓋をぬらび邪を排斥して往生の機類を定むと釋し玉へり、下に往生の安心と云ひ往生の起行等の玉ふ所皆此意にて、如來の願意往生に限り祈禱御禮報謝等の餘意なき旨を、屹度示し玉へること可知、(向譽上人の俚語の意。)

●善人も悪人もをさまるべけれども、大悲のほいをはかるにもつとも悪人を先とすべし。

諸佛もしかね玉へる十惡五逆の機を助けんとて、木こし玉へる大悲の本願なれば悪人をさきとすと云也、さきは前後の義趣にはあらず、最要と云ふ義なり、(決疑鈔の意也)了譽上人の云、當流の相傳於本意二あり、一には能化の本意(上機爲要)二には大悲の本意(下機爲本)罪者を別して憐み玉ふこと、諸佛等同にして彌陀如來に局るべからず、涅槃經云、如レ有レ七子然於三病者一心則偏重、如來亦爾、於三諸衆生非レ平等、然於三罪者一心則偏重(略抄)云々、答誰云、諸佛罪者を憐み玉はず

と、若利根障輕にして改邪回心し修行勇猛ならば化し玉ふべし、若鈍根障重にして怯弱下劣ならば憐み玉ふと云へども、救濟し玉ふこと叶ふべからず、爾るに彌陀如來は福薄因疎鈍根無智十惡五逆の罪者迄も洩すことなく攝し玉ふ、憐み玉ふことは別なけれども攝と不攝を混同せんや、されば大悲の究極は殊に彌陀如來にあり、猶諸佛通總の慈悲利根障輕を濟度して、魯鈍罪惡の凡夫を捨玉ふことは諸教に散在す、今其一を云は、涅槃經三十一迦葉菩薩品第二十四、三子、三田、三器、三病、三馬、三施の六譬を出して、如來迦葉菩薩に示して五逆闍提をば捨玉ふことを説き玉へり、三子、第一子は父母恭敬利根智慧、菩薩に喩、第二子は不敬父母鈍根無智、闍提五逆に喩、父母教告の時は第一子に教授す、次に第二、後第三云々、佛化も亦如是、佛言如三十二部經修多羅中微細之義、我先已爲諸菩薩說、淺近之義爲聲聞說、世間之義爲一闍提五逆罪說、現在中難無利益

以憐愍故爲生諸善種子、三田、上田、中田、下田、農夫先づ上田に種ゑ、三器、完器、漏器、破器、乳酪等を盛るに先づ完器、三病、易治、難治、不可治、醫、先づ易治を療す、三馬、調伏大力、不調大力、不調羸老、乘者初馬を用、三施、貴族聰明持戒、中姓鈍根持戒、下姓根毀戒、施主先貴族、是諸佛化先上機、應知、又彌陀の大悲は下機を本とするの義は、導師の釋に云、(玄義十五)諸佛大悲於苦者、心偏愍、念常沒衆生、是以勸歸淨土、亦如溺水之人、急須偏救、岸上之者何用、濟爲已上、古歌に「慈悲の目にくしと思ふ人ぞなき罪ある身こそ猶あはれなれ」罪科ある人を理づめにしては刑罪なり慈悲に理はなき也、實に彌陀如來の本願は諸佛の通規通戒にも背き、因果報應の道理にも違ひ、大悲至極の本意を顯して惡人を目あてとして救ひ玉ふ、爰を超世の本願とも諸宗超過の法門とも云也、是を談する故に格外の別風と云ふ也、依て今本文に善人も惡人も乃至もとも惡人をさきとすべしとの玉へり、魯國義姑(托、事實卷

四)、俊乘坊放盜、(托、事實卷六) ●至心信樂欲生我國といふ往生の安心をあかす。是は安心の總釋也、此に三つ初に大經により次に觀經により後に彌陀經に依て結す、細釋は中卷にあり。當流には此八字を横の三心と習ふなり、名越には觀經に一者二者と説き玉ふ次第に合すれば、今經の至心等も豎の三心也と云ふ、當流には願文の至心等を小經に一心と説き玉ふ故、願文を横と定めざれば、彌陀經の一心が唯一心になりて三心なること顯れざる故、横の一心に三心の籠ることを顯すの義なり、又の一義は下にあり云々。 ●くはしくは三心あるべし。一者至誠心、二者深心、三者回向發願心、(依觀經)曰、具三心者必生彼國、釋曰、若少一心即不得生、「朝夕に我身のうへをかへり見て、三つの心の有無をしるべし」大師の曰、(和灯二條)詮する所生死の報ひをかるしめ念佛の一行をばげむが故に眞實心といふ也、深く念佛を信すといふは、餘行

なく一向に念佛になるなり、餘行をかぬれば深心かけたる行者といふ也、(一行不足の思ひありて、餘行を兼るを遮する也、云々)又常に退する事なく念佛するを回向發願心といふ也、(取要)觀經は九品に三根を分ち、(上品三人是遇大凡夫、中品三人是遇小凡夫、下品三人是遇惡凡夫)玉ふ故三心も豎に説玉へり、大經には十方衆生と善惡の衆機を總攝して説き玉へるゆゑ、三心も横説し玉ふなるべし云々。 ●要をとればたすけ給へとわもふ心にたりぬ。孝經註疏に云、以一管衆爲要已上、是彌陀經によりて、横に三心を具するやうを顯し玉へるなり、經に一心不亂とあるを、二祖上人(鎮西宗要二の卷)云、今一心之言は散心の中に餘の雜行を止めて一向に念佛するを以て一心と云ふ也、是を以釋には專復專と云へり、(法華讚云、極樂無爲涅槃界、隨緣雜善恐難生、故使如來選要法、教念彌陀專復專)一行を一脈することを一心と云ふ也、隨緣雜善を誠むる一心也、散心を止め定心になれと云

ふ一心には非ず已上、此意を古歌に「三つ四つとわけて教ゆる法の糸、思ひよるにぞ南無阿彌陀佛」爾れば觀經の豎三心は、本願の至心信樂欲生我國の横三心、其横三心も所詮は助給への一心にこもると見定るが、圓光大師の御隨自意、則御遺誓の、唯往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申て、疑なく往生するぞと思ひとりて申外には別の仔細候はず、但し三心四修と申事の候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて、往生するぞと思ふ内に籠り候也と、仰せ置れたる正意也、故に今本文に要をとればたすけ給へと思ふこと、るにたりぬとの給へり、猶此旨委しく中卷に問答あり、其下に至りて辨すべし。 ●乃至十念といふは往生の起行をとく、彌陀の名號をとなへん事十聲一聲迄もすてじとなり。是起行を釋し玉ふ、細釋は中卷の末に出す乃至とは大師の曰、(大經私記)言乃至者從多向少之言也、(御傳二十一)翼讀解、從少向多義不宣、註に云、十念といふは、佛の法身を憶念するにもあ

らず、佛の相好を觀念するにもあらず、彌陀の名號を稱念する事也、乃至十念とは平生多念の行者はいふに及ばず、臨終にたゞ十念したらんものまでもすてじとの心なり、述聞鈔云、本願十念成就一念皆可限臨終也云々、宗門にて一念十念と云ふは、何れの所にても臨終に約する也云々、願文に念とあるをこゑと替へ用ゐ玉ふて、導師の御釋に、稱我名號十聲一聲等と釋し玉ふにより、大師の念聲は一の相傳に依順して述べ玉へる也、源と本願は音聲ならではならぬ所由は、彌陀如來は風大所成妙觀察智を司どり玉ふ御佛と云ふ云々、大師の御法語に云、煩惱のうすきあつきをもかへりみず罪業の輕き重きをもさたせず、たゞ口に南無阿彌陀佛と唱へて、聲につきて決定往生のたもひをなすべし、此鈔中末^{切下}、佛すでに一念十念までも生れしめんと誓ひ玉ふ、その願むなしからば、いかでか往生をとげざらん、唯聲を本願に委せて名號を唱ふべきなり、往生至要決(向阿上人の述)彌陀の名號は往生の定業なり、我名を唱へ

ば必ず生れしめんと誓はれたるが故に、これによりて上一形を盡し、下一念に至るまで、決定往生の業にあらずといふ事なし、是則南無阿彌陀佛と出る聲は、みな彌陀の本願に准するが故なりと、現證を擧げば唐僧銜、啓芳、圓果の傳(托、往生卷四)

●若不生者不取正覺といふは誓願をたつ、その念佛せんもの生るまじくばわれ正覺をとらじといふなり。
 ●是誓願の總釋也、(細釋は下卷にあり)註に云、念佛せん者をかならずうまれしめんとねがひ給ふを願といひ、うまるまじくはみづからも佛にならじとちかひ玉ふを誓といふ、正覺、梵に云、阿耨多羅三藐三菩提、此云無上正等正覺、正以簡邪覺即昭了也^{已上}、(益經疏)誓願の別は車を引譬。
 ●たほよそいづれの教にも機と心と行との三つをおきらむるが、諸宗の大事にては侍るなるに。
 上には略して願文を解し、已下は機教堪不の相を示す、凡、是總じて佛法の大意なればたほよそと云

ふ、いづれの教にも顯密權實諸教にわたる、大事是少縁のことに非れば大事と云ふ也、註に云、たとへば人の水をのみて冷暖自知する如く、みづから身のほどをはかり知るべし、此教はわが機に相應したりやいなや、われは廣大の道心をたこすべき器量なりやいなや、我に甚深の理觀を修すべき智解ありやいなや、右もしひとつも不相應ならば、いかに甚深の法なりとも我爲には益なからん、眞修行の人、心をむなしくして審察すべし、一時の傲慢をもて永劫の沈淪をいたす事なかれ、菩提心は諸教の地盤、理觀は諸教の入眼なれば此二つを擧て機教の應不をしらべよと云々、末法成佛決斷章云、(正三老人の嗣法、惠仲禪師の述)凡諸宗の師たる人々、機を觀せずして己宗の甚深なる法門をさづくる事、衆生の成佛と不成佛をたもひ給ふ事なくして、唯宗我法我の建立のみを要とし玉ふ故なり、しかるに今念佛をすゝむる事は、一人なりとも實に退轉なく成佛し給ふやうにと存するまでなり、全く別の心なし、(三州山中の庄

屋云々)。

●かの聖道門のなかに。
 聖道諸宗の中に、天台の教を擧て淨土門に對し難易の別を知らしめ玉ふ、聖道門、決疑鈔云、從凡至聖名爲聖道、門者出入之義也、謂出火宅入涅槃故也^{已上}。

●五逆の調達をさして三菩提の記前をさづけしが如きは。
 註に云、梵語には提婆達多(又達都とも調達とも云ふ皆梵語也、此翻天熱)といひ、此には(此所と云ふとならん、調達を漢語と云ふにあらじ云々)調達といふ、阿闍世太子をすゝめて父母をころさしめ、花色比丘尼をころし、佛の御足より血を出し、和合の縁をやぶれり、(是を五逆といふ)かゝる惡人なりしかども法華經の會座にして此提婆、後に成佛して天王如來となづくべきよしをさづけ玉へり是を記前といふ、提婆五逆に二義あり、一に自造三逆、教他二逆、今の註是なり、二に自作五逆と云ふことあり、三逆の上に放象毒爪の二を

加ふる也、放象は提婆於象頭山二千大象を飼ふに、諸象に酒を吞まして佛の通り玉ふ道に放ちかけて踏殺させ奉らんと、佛忽ち獅子と現じて追散し玉ふ、毒爪とは提婆十指の爪に毒を塗り佛を禮し奉る由にて、近付より佛の御足に是を塗る也、されども佛は藥樹王身を現し玉へば毒の爲に侵され給はず、此二つを加へて自作の五逆とも云ふなり、戒疏に云く、何故名逆、以違恩養福田極故、亦違佛世兩王化故、名之爲逆已上、法華經提婆品云、提婆達多劫後過無量劫當得成佛、號曰天王如來、應供、正徧智、明行足、善逝、世間解、調御丈夫、天人師、佛、世尊、世界名天道已上、三菩提、靈芝云、阿耨多羅此翻無上三藐云正等、三菩提云正覺即佛果號也已上、記前光明文句云、記者記成道事也、授劫國數量名爲前已上、提婆現身墮獄(珠林三十一丁引阿含經)法華經にても別して提婆品は最勝なり、羅什三藏翻譯して王城に送り玉ふとき、官人拜見して此品餘りに殊勝なりとて王城にとめて、二十七品を天下に流

通し此一品をば流布せしめざりしなり、其後隋の世に至りて漸く二十八品具足して流通することになりしと也、斯く此品を祕藏珍重するは何故ぞと云ふに、五逆の提婆畜趣の龍女が成佛を説きたる故也、今私に法華の所説を吾宗に對校して殿最を示さば、提婆天王如來の記前を受けたれども、無間一中劫の受苦を免る、ことを得ず、成佛は其後のこと也、爾るに我宗正依三經隨一、觀經の下品下生の人は、五逆の罪人也、知識に隨て十念唱ふれば、金蓮來迎の靈相を感じて大往生を遂ぐ、(成佛往生言異意同)法華に龍女成佛、我宗には王譽妙龍、龍譽高天、二尊院の池の龍、餘畜を云は、鸚鵡の往生、(往生集)建曆の頃、山城國猿往生、元享の頃河内國平岡村の馬往生、水犬の往生、(近世往生傳)又女人往生は韋提希夫人並五百の侍女、荊王夫人並侍女、中將法尼云々、此は是れ一應の對待也、再往は絶待不共の超世本願の法門也されば彌陀經要解(智旭)云、絶待圓融不可思議也、華嚴奧藏、法華祕髓、一切諸佛心要、菩薩萬行司

南、皆不出於此矣、設欲廣爲歎述、窮劫莫盡、有智者自當知之已上、法華最勝如前、又一切衆生總記前と云ふは、餘經に説ざる所也、謂方便品云、若人散亂心、入於塔廟中、一稱南無佛、皆是成佛道已上、天台大師、此一稱南無佛を阿彌陀如來と、諸經を引て釋成し玉ふ、爾れば畜趣の龍女が成佛も、五逆の提婆が記前も總じて一切衆生成佛の記前も、皆南無阿彌陀佛より出る也、依て惠心の云、實釋迦牟尼佛一代五時顯密教、此皆不離阿彌陀三字、故摩訶止觀云、阿彌陀佛是法門主也、荆溪大師此文を釋して、諸經所讚多在彌陀故以西方而爲一準已上、斯る道理のある故に、智旭大師法華の祕髓と釋し玉へる也云々、「提婆品を註一字に習合のこと、(法華直談七本三十一)まづは機をさらはぬ法なんめりとのもしけれども。

罪如鷲、言下登不喜法忍位已上。●僧那を始心にむすび。是は先づ發心の難き事を云ふ也、僧那は梵語此にハ弘誓と云ふ、初發心より強く四弘誓願を發す也、むすびとは結の字にて要期の義也。●妙觀を十乘にこらさしむるにいたりては。是は次に修行の難きを云ふ也、十乘の妙觀は摩訶止觀にあり、圓頓行者正修の觀法也、止觀に云、觀心具十法門一觀不思議境、二起慈悲心、三巧安止觀、四破法偏、五識通塞、六修道品、七對治助開、八知次位、九能安忍、十無法愛也已上、集解に云、十種之法、運載行人、游方至極名十乘也、而一々乘、並以妙觀觀於陰心顯於三千三縮之理、故云觀法也已上、こらすとは凝の字也、觀心凝住義也、(水が氷となる云々)。●發心修行さらに下根のおよぶ所にあらざるが故に、つひには機をねらふ教になりぬ。前の僧那と妙觀をさして發心修行云々、止觀には發大心修大行と云ふ事あり云々。

機をさらはぬ方はまづ心易きやうなれども、心行がむつかしければ、その機木のづから希れ也、彼提婆は惡人なれども、根利障重の機也、了譽上人云、智者逆惡如達多、機前開逆即是順悟、利根造

「下根の及ばぬと云ふに就て、最勝仙人緣、(托、事實卷五)」

●されば其無始生死よりこのかたさすが佛教にもこそあひつらめとも。

無始とは發眞鈔に云、往來生死始不可得、故名無始。已上、生死とは四教義云、從地獄至非々相天、雖然苦樂不同、未免生而復死、死已還生、故名生死。已上、さすがとは有繫の字にて一方によりはてぬ詞なり、佛教にこそあひつらめとも、安樂集に云、遠劫已來應值多佛、何因仍自輪回生死、不出火宅。云々、佛教とは值佛及遺教に値に通ず、謂らく番々出世の佛にも値ひ、亦正像末の三時に知識の經卷にも値つらんなれどもと云意也。

●いままでなは流轉の凡夫なる事は、機根つたなくして心行のおよびがたきによるなり。

佛性もあり佛にも値ひ遺法にも値つらん、今日、迄成佛の滞りぬるは機法不應の故なりと也、流轉とは惠琳の音義に云、梵には言僧婆洛、此云流轉、謂於六趣循環往來不絕已上、凡夫とは大

にて侍るに。

自力の出離は三學均等ならでは成就せぬことなれば、下智下根は思ひ絶たること也、腰ぬけの高山に登り水心なき者の河海を渡ることを望まぬが如し云々。

●今この淨土の教門彌陀の本願をもて我等が分にあて、見れば。

淨土の教門は總、彌陀の本願は別也、分は分限分際也、あて、見ればとは擬の字也、此の機教の應不を知るが、佛法に入る者至極の肝要也、今時末法の惡衆生であり乍ら、餘行を修め出離せんと欲するは、皆此の機教應不を考へ知るが肝要也と云ことを存知せざる故也、番匠の材木つかふに、すみがねを擬て其つかひ方を考ふるを以ても知るべし云々、大師の小消息、其擬てやうを數々示し玉へり、今こゝには機心行の三つの相應を示し玉へり(是唯開合の異なるのみ云々)

●すでに極惡をすて給はぬうへは、もとよりつくろはすしてその機なり。

乘義章に云、凡は謂く凡鄙夫は謂士夫已上、心行心は發心四弘誓、行は修行十乘の妙觀等云々、機根もし堅強ならば、云何ぞ成佛せざらん、機は下根にして難發難修の心行なる故に、猶色かへぬ生死流轉の凡夫にてある也、上機とは云何ん、謂く我不惜身命、但惜無上道、彼寒蟬枯木を懷いて喚へども首を回らさずと云へるが如し、佛道修行打成一片更に他面を顧みざるなり、最勝仙人、雪山童子、善財童子等、(托、事實卷五)

下機とは云何、夢幻の浮世に常見を起し、名聞利養に心をゆだねて出離に心を用ゐざる也云々、此世のことにてさへ成し難きを成せんとするには、不惜身命でなければ成せぬ、豈身命を惜む者のよくする所ならんや。

淨土門にて身命不惜の得心云何、淨土門なればとて惜身命を募ることあらんや、是に就て不惜身命に重々の分別あり、此こと淨土要略抄に四種の分別あれば是を示すべし云々。

●しかれば自力の出離はつやく思ひたねたる事

是れ先づ機の相應する義を示し玉へり、極惡とは極重惡人也、惠心僧都要集に、觀經を取意して、極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂(助講要文集一の卷見合)又大師或人の問に答て(和語灯七)、無宿善往生の義を示し玉ふ下にも、此極重惡人の文、及淨度經、若有重業障、無生淨土因、乘彌陀願力、必生安樂國の文を引て、又きはめて罪人の他の方便なからんも、彌陀を唱へ奉らば極樂に生るべし、又もし重き障りありて淨土に生るべき因なくとも、彌陀の願力に乗じなば安樂國に生るべしと候へば、たのもしく候、と仰られたり可思合。

●又機のつたなきにつけては、かのづからたすけ給へとたもふ心もたこりぬべし。是は心の相應する義を示し玉ふ也、西要抄に云、我身のありさまに心をかけて、なすわざのみな罪なる事を思ひ知れば、かゝるをもすて給はぬふしぎさよと、いよく本願に信心がすむなり、記主禪師云(一言芳談)淨土宗の元意、助け玉へと思ふに不過已上、(助け玉へに偽りなきは至誠心、助

け玉へと思ひ付疑はぬは深心、助け玉へ南無阿彌陀佛と唱ふるは回心發願心也、
 機のつたなき等とは、導師の機信の御釋の意也、
 我身わるしと思ひ知れば、自然と助け玉へと實に思はるゝ也、我身あさまし、かなしと思ひ知らねば助け玉へとは思はぬもの也云々、「あさましと侘る計りを手向にて、唱ふる外の心あらじな」
 ●心にたすけ給へどだにかもへば、はげまざるに申さるゝ念佛なり。
 是は行の相應するすがたなり、勵は勉力とありて、もと其なきをつとめてすゝめ發すの義也、助け玉への意さへ發れば、すゝめ發すに及ばず、ひとりでに申さるゝと也、導師は、自身罪惡生死凡夫又信外輕毛、又隨風東西譬如輕毛、元祖大師は十惡の法然房、愚癡の法然房、又戒に於て一戒をも不持等、鎮西上人は助け玉へと心にも思ひ口にも云べしと云々、記主禪師の助け玉へを淨土宗の元意との玉へる、四祖一般一大事の相傳也、此助け玉への意の起らぬは、我よしと云ふ慢心ある故也云々

王昭君が事實、美醜兩女謙慢の別、托、事實卷四王昭君を詠「見る度に鏡のかげのつらさ哉、かゝらざりせばかゝらざらまし」。
 疾前無藥機前無教なれば、往生を願ふ心だにあれば、彌陀を頼み名號を唱ふべし、我は罪惡の病人也と、疾ひあることを知れば、自然と本願の醫者を尋ね名號の藥を吞む也、故にはげまざるに申さるゝ念佛也と示し玉へり。
 ●はかなきこの世さまにつけてだにも、なげきある時のまぎらには南無阿彌陀佛とこそいはるめれば。
 ●はかなきは、河海抄には、いふかひなき心と有、常にげにくしからぬ事に云ふ也、日本記には、無道の字をはかなしと訓せり、白氏文集に云、有起心歸佛者、擧手合掌必先向西、有怖厄苦惱者、開口發聲必先念阿彌陀佛云々、西行云、なげきの家、かなしひのとほそにも、かこつかたとは、此ほとけの御名をとなへ奉る、「茶碗わつても南無阿彌陀佛云々」。

●まして後の身をいかゞと思はん人はわすれてもとなへつべくこそ侍れ。
 ●後の身とは後生の事也、慈鎮和尚の詠に拾玉集「何となき口すさびまでちぎりける、佛の御名は南無阿彌陀佛」此わすれてもと云は、強く申すべき理を示し玉ふ也、後世思ふ身は忘れず申すべきこと、忘れても、申さであるべきことならねば申せと也、是強く申べき道理ぞと示し玉へる義也。
 ●さればこの機と心と行にてぞ。我等が生死をいでん事はむげにたやすくなり侍りぬる。
 ●是迄に淨土門機教相應のことを示し玉へり、むげとは最下と云ふに同く、是よりやすき事はなき也、
 剪燈新話の註に云、容易は甚易き也已上、
 機は出離無縁の極重惡人、心は僅に助け玉へ、行は四威儀を簡はず、分々の口稱乃至臨終の十聲一聲迄、實に無下と是れより易きことあらんや云々。
 ●さるには又さしもたやすかるべくもなき往生を、これ程のふんにてはいかゞとぞかへりて疑がはれぬべけれども。

註に云、よのつねの人おもふやうは、往生の大事をとぐる人は、たゞの心にてはよもあらじ、さだめて強盛なる大信心もありて、奇妙の法をも修する事なるべし、しかるに唯惡人のまゝにて、たすけ給へとのみ思ひて名號を唱ふる斗にて往生すといふは、あまりかるくしきやうにて疑はしき事なりといふべし、これ本願の由來を心得わかぬ故なり、此事愚迷のみにあらず、賢智もなほ信じがたし、初心のみにあらず久修もまたうたがふ、經に難信の法とあるは此ゆゑなり。
 淨土或問に云、良由淨土教門至廣至大、淨土修法至簡至易、以其廣大而簡易故、聞者不能不疑焉、廣大者一切機根攝收都盡、上而至於等覺位中一生補處菩薩亦生淨土、下而至於愚夫愚婦與五逆十惡無智之徒、臨終但能念佛悔過歸心淨土者悉獲往生也、所謂簡易者初無艱難勞苦之行、又無迷誤差別之緣、但持阿彌陀佛四字名號、由此得離娑婆、得生極樂、得不退轉、直至成佛、而後已也、其廣大既如彼、其簡易又如

此、故雖智者亦不能無疑焉已上、近く我朝に其證を云はゞ、顯眞、明遍、智海、湛敷、永辨、靜嚴、貞慶、證眞等大原に集會して談論ありしが如し云々。

雲棲大師の云、(彌陀經疏抄) 喻如有人身在罽圍(劫濁、牢獄に入られたるなり)復膺楚達(見濁、斷常六十二見、眞性を混亂す)復繫枷杻(煩惱濁、八萬四千行者の心神を逼亂して眞明發さらしむ)復染疾疫(衆生濁、我見我慢眞心を逼惱す)復被監押(命濁、色心連特は命、催年減壽は濁)將臨誅戮(危在頃刻、而能於中忽然解脫)是之謂難、不但自脫併諸罪人悉得免離是難中難也。

●もし生れずば正覺をとらじとちかひ給ひぬるうへは、ゆめく卑下すべくもなかりけり。

佛の誓にひかれてする往生なれば、吾身わろしとて卑下すべきやうはなきなり、惠心觀心往生論に云、雖十惡不可卑下、雖五濁不可猶豫已上、おのがちからにて生ればこそ身の程をまかへり

みめ、佛の願力によるべからんには、いかさまにてこそかなはめなどは思ふまじき事ぞかし。かへりみめとは、かへり見るべければなり、いかさまとは、何程にて佛意に叶ふべしとあて見るなり、父子相迎に云、おのがちからはともかくもあれ、たゞ他力の強きにひかれてたのまばかならず往生すべしといふなり云々、公孫述が傳に云、蒼蠅之飛不過數步、附託驢尾得以絕群已上、(群は同類也)

●されば善導大師の(觀念法門の引證也)若我成佛十方衆生、願生我國稱我名號、下至十聲乘我願力、若不生者不取正覺と釋し給ふて。

是は攝生増上縁の釋に、第十八願の文を引れたるに、文字を改め言葉を略して、願文の意を釋し顯し玉へるなり、三心私記に云、願生之言即含至心信樂之義已上。

●乘我願力のことばをそへられたる事は、これ程につたなき機のわづかなる心行は、さらによようにたつべくもなきよはくしきなれども。

我等が機と心と行とは餘り弱くして畢竟往生の用にたえず、唯本願にすがる迄也、(小兒の漸と立つときに人手を打てこへくと云ふ、其言に隨てよぼくとして來る、是れ呼ぶ聲に引立らるゝ也是に合せ思ふべし)

●さしもねんごろに生れしめんとおほしめす佛の御志の力にとりたてられて、その本願に乗するが故に、往生するなりといふ事をあらはさんとなるべし。

乘我願力の四字を加へ玉ふ此心也、元祖大師の曰(和語灯二、機法の決信を示し玉へり)いかに誠をいたすといふ輩も、造惡の身の己がちからにて、往生を成就せん程の事いかでか侍るべき、たゞ本願の不思議にて往生はし侍るべき、さやうに誠もふかくよからん人の爲には、あながちに不思議の本願をおこし給ふべきにあらず、この道理を存して專修念佛の一行に入るべし云々、宇津宮蓮生の歌に「おもひたつ心ばかりをしるべにて、我とはゆかぬ道とこそきけ」

●しかるをよのつねの人のおもはくは、かひなくたゞおのがこゝろざし己が行の功にてうまれんするやうに心得て、ひたすら佛の御力とのみは思はぬこそおほけなき事にて侍れ。

註に云、たゞ佛の願力のみにてうまるべくもなき者が生るゝ事なるに、念佛宗の案内しらぬ人は、わが心のいみじく我行のよきちからにて往生すべしとおもへり、是身に應せぬ事也、惣じて凡夫の身として報土に生るべきいはれなし、まして極惡のわれらいかでのぞみをもかくべき、たとひいかなる心行ありとも凡夫の分際何ほどの事かあらん、かひなくとはかひなくしくもなき心也、(言釋易無益なきことなり)ひたすらは一向の字(ひとへに、たゞと云ふほどの意)おほけなきは、丸秘抄に無應氣と書きたり、身に應せぬと云ふ義、(言釋負氣無の意、我に似合ぬこと)「おほけなくうき世の民におほふかな、我袖立袖に墨ぞめの袖」●さる程にすゝろに心行もふそくにおほへ往生も疑はしげなり。

我が勵みにてする往生のやうに思ふ故、安心もた
たず起行もなほ足らぬ様にのみ覺て、いつも往
生に疑ひある也、すゝる(そゝる音通)眞淵が言
釋、無事無故訓意なりと云ふ、註には、源氏の
河海抄に無端の字なりといへり、心ならずといふ
義也とあり、又大師の御法語にたゞひらに信じて
だにも念佛すれば、すゝるに三心はあるなりと、
和語灯二の卷にあるを御傳二十一卷には此すゝる
を自然にかへ用ゐてあり、さればすゝるは又自
然と云ふ義なり、諸説の義大に同じ云々、
●これしかしながら他力のいはれをおもひわかぬ
ゆゑなり。

註に、西要抄に云、念佛するをば、おさなき子の
深きあなにわちて、父母をさげびよばふにたとへ
たり、それいかによばふとも己がちからにてはあ
がらめや、たゞきこゑてたすけられん事をのみこ
そ思ふらめ、稱名の用意これになすらへてしりぬ
べし、いかほど多念にはげむともたのが力にては
かなふまじければ、たゞいく度も佛にうれへきこ

にて、他力の往生をとげんと也云々、此中卷に云
く、されば穢土をいで、淨土に生れん事はしかし
ながら佛の御ちから也、たすけ給へともひて名
號を唱ふるのみぞたのがはげむところなる云々、猶
他力の名義細釋は、西要抄上卷を見るべし、向譽
上人曰、自力に他力の添たるはよし、他力に自力
を添たるはあしと、自力に他力の添とは、上根
利智の高僧地前地上の聖者の念佛は、皆自力に他
力の添たる也、たとへば行舟に順風の添たるが如
し、(風なくもこぎて行んと思ふに風あるは彌々よ
し、聖者達は念佛せずとも出離に難なし、然るに
念佛し玉へば早作佛云々)、他力に自力を添るをあ
しとは、我等如きの造惡の凡夫はひとへに他力
念佛往生なり、然るに餘行を添るときは一行不足
の過ちより、大悲の本願に乗する事を得ざれば、
往生の益を得ることなし、たとへば帆かけてはし
る船に櫓かひを添るはよからぬ如し、彼の東施が
西施をまねて捧心せしが如し云々、されば此鈔の中
末^五に、南無阿彌陀佛とゝなへてよろづは佛にま

かせ奉るべし、さてこそ念佛の聲を孩子の哭する
ことゑのこゝしとも釋したれど、念佛鏡に云、又念
佛は如^三孩子哭聲。
●又修行者とひていはく、
前には總じて念佛往生の故を問答し玉ひ、今は別
して十方衆生の句に就て論じ玉ふ、夫れ罪に輕次
重の三等あり、輕は在家の十惡、次は出家の破戒、
重は五逆の罪人、(則觀經の下品三生是也)爾るに
修行者既に僧の身也、出家の破戒は殊に罪も重か
るべし、其上始終妄念やまざれば此分にては往生
いかゞと疑ふの問也、答の大意は重罪の五逆往生
す、況んや次罪の破戒何ぞ往生せざらんやと、論
決す、次罪の往生をゆるすときは輕罪の往生は論
をまたす、されば輕次重皆往生の機也、誰の人か
彌陀大悲の洩れん、故に本願に十方衆生と誓ひ玉
ふ、平等不簡擇の義を釋成し玉へる也。
此下にて惡人往生と云ふに就て、人を惡に導くな
りと誹謗邪計する腐儒あれば爰に合せ辨せんとな
ら、助講要文一の卷に辨破あり。

●本願の中の十方衆生といふは惡人をもて本とす
べしとの給はせつれば、その機にもるゝものはあ
るまじきなんめりと、まめやかにたのもしけれど
も、(上^{十四}十方衆生といふは先づ機類を定む、善
人と惡人も共にたままるべけれども、大悲の本意
をはかるに尤も惡人を先とすべし)
註に是はまづ總じて信受する事をいふ也、のたま
はせつればとは宣の字にて仰られたればといふ義
也、まめやかとは眞成と書きて眞實と云ふに同じ、
ともは雖の義にて前を押へて後を起す也。
●たちかへり又我身のありさまを思ひとくには、
猶うたがひのゝこらざるにあらず。
疑に三の故あり、煩惱、惡業、妄念也、(三心要集に
は四疑あり合せ辨せんとならば和字本^六)
●そのゆるはかやうに姿は黒衣なりといへども、
こゝろは白俗よりもにぞれり。
是れ始に煩惱に依て疑ふ也、黒衣とは總じて出家
を云ふ、白俗とは在家を云ふ是れ服色に名を立る
也。

六道講式に云我等適測頭不測心、染衣不染心常念世俗事假名阿蘭若破戒之過還越白衣可耻可悲已上、大藏一覽云、身披縮服心猶俗也已上。

●あやまりて出家のかたちをかりて渡世誑惑のかりごととし、沙門の名をぬすみて名聲利養のなからだちとせり、これ無刀の大賊なり劫盜よりもつみあらんかし。(是次に惡業によりて疑也)

●あやまりてとは本意に背きと云ふ義也、(本意は出離生死なり)世渡りの爲に人をたぶらかしまどはすを渡世誑惑と云ふ、沙門とは僧のこと也、(沙門は梵語こゝには勳息と翻す)名聞とは世の外を聞かざること、利養とか己が爲に財利を心ること也、無刀の大賊とは刀を持たぬ計の大賊也と、劫はあらはに奪ひ取るを云ふ、(追劍押込等)盜とは竊かにかくし奪を云ふ、(夜盜)淨心誠觀曰、經云此は無刀大賊罪於劫盜已上、允堪發眞鈔云、無刀大賊者雖無刀杖而潛掠彼利、非賊是何、律中凡損五錢即大盜也故言大賊已上、又手を以て盜み牆を

この壁を破りて取を賊とせず、佛制に違し戒を破るを大賊と云ふともあり、三要誓、梵網經云、弟子寧以此身投熾然猛火大坑刀山終不毀犯三世諸佛經律與一切女人作不淨行弟子寧以熱鐵羅網千重周匝纏身終不以此破戒之身受於信心檀越一切衣服弟子寧以此口吞熱鐵丸及大流猛火經百千劫終不以此破戒之口食於信心檀越一切飲食、(善惡因果集二)中丁、虛受信施罪臨終惡相のこと、托、往生卷五)

●たましくうちしづまる時は、又妄念こゝろにきほひて念佛はたゞ口ばかり也。

●是後に妄念によりて疑ふ也、往生要集に云、晝日念佛閑檢其實淨心是一兩其餘皆濁亂已上、「打むかひ御名をよべどもよそごゝろ、照らす佛の心はづかし」無能上人。

●あまりなるには人はよもこれ程もあらじ、わが身ひとつのくせにこそとまでたばゆにも、かゝらん身のありさまをばすこしひきかへてこそ、十方衆生のうちにも、いらめとたばゆるは、ひがごとく侍るをやといへば。

類書纂要云、人性偏好如人之病癖不瘥、(癖はかたまりにして腹痛也)、又正字通に嗜好之病、晋書に杜預云、臣有左傳癖、白居易詩云、人皆有癖我癖在章句、慈鎮和尚の歌に「人ごとに一つの癖はあるものを、我にはゆるせ敷鳥の道」

●老僧のいはくあな事あたらし。

●あなは古語拾遺云、古語事之甚切皆稱阿那云々、あなあゝあらあゝら等皆通ず、大字を訓す、(大賢のあな大字也、大賢は借字恙虫の僻説云ふに足らず云々)事あたらしとは破戒往生は本願成就して事古りたり、然るを云何と疑は、事新きたづねかなと押かへしてとがめらるゝ也。

●諺註に事新しと云ふ、解するに初めは我身ひとつの癖にこそとまでおほゆると云ふを事新しと云ひ、後には破戒往生を疑つて事新と云ふ、義に解釋せられ、要解も註の後義に同じ、私に考ふるに後義穩當なる歟。

●註に湛澄上人問者の意を汲みて述懐教示あり、云くわれらなまじゐに僧の身となりて無戒にして信

施を費し、破戒の姿をかざりて不淨説法す、嗚呼その罪いくばくぞや無間地獄の業にあたり。

●不淨説法のこと珠林四十二不淨説法の部に云、雜寶藏經第三丁不淨説法有其五種、一自言盡知佛法二説佛教三時出諸經中相違過失三於諸法中二心疑不信、四自以所知非他經法、五以利養二故爲人説法、舍利弗如是説者當墮地獄不至涅槃已上、因に示す破戒無戒の説法は悉く不淨説法なりと云ふにはあらず、此事を無住の沙石集に辨じ置きたれば示さん、沙石六上丁五邪命説と云ふ名目佛藏經に出でたり、有所得とも云へり同じ事也、世間の人は有所得と云ふは布施を望み

てする説法と思へり、經中には諸法實相をしらずして、(念佛往生は自然悟道にして則諸法實相得無上道なり)有爲の法を説きて、(現世の祈禱人天の痴福)無相の理を説ざるは(即相無相得無生忍)邪命説法なり、無所得の道理を説かざる故に(無上菩提無爲涅槃)有所得と云ふ也(有爲の所得の不淨業を説く故に有所得説法と云ふなるべし、夾書は本

書にはなし、淨土門に唯往生の爲と念佛を説を有
 所得にやとひがめ心得ることあらん者の爲に、無
 所得説法の義を知らしめん爲私に加ふ、俚語にあ
 りて記す。かゝる説法は三千大千世界の人の眼を
 くじるよりも罪也、又日夜に十悪を作るよりも重
 き罪也、十悪を造る者をば人は是を師とせず、其身
 苦に墮すと雖ども人を引ておとすことなし、有所
 得の説法は人をして生死の業を増し實相の理に遠
 ざからしむると云へり、まして布施の希望は名利
 の爲なれば云ふに足らず、但し正法念處經には名
 利の心なくして利他の思に住して法を説くは上品
 の法施、勝他の心にて説くは中品の法施也、名利
 の爲に説くは下品の法施也、天上の智慧の鳥とな
 りて法喜を轉ると云へり、此は法をありの儘に説
 きてしかも利益を思ふにや、「私に云、初め勝他名
 利の心ありて説法を始むれども、説く法を曲げず
 而利益を思ふなるべし」。

佛藏經の説は實相に違すれば世間の福業あれども
 菩提にうとし、此經に我れ無量の佛に値ひて供養

せしに、多劫の間、只轉輪王の位を得て菩提を得
 ず、諸法實相を悟りて我れ佛と成れりと説き玉へ
 り、されば有相の福は次の生に威勢ありて天に生
 じ、若は國王大臣長者ともなれども、眞實の智慧道
 心なくて威勢に誇りて衆生を惱亂し罪業を作りて
 第三生に必ず惡道に入る也、著相なくして福を作
 るは道の助也、執心有て善を修するは出離にはう
 とし、福業に道をさへ道を助くる二の様な著
 有無による能々わきまへ存すべきものなり、佛藏
 經は道人の見るべき經也、説法せん人いかに無
 相の法門を説き正直に説くべし、我非をかくさん
 とて因果をみだるべからず、十輪經には末代に正
 見僧とて、我身非法也とも佛法の道理を正直に説
 き、善惡因果をみだらず生死涅槃の差別を説かば
 福田たるべさ由見たり、心地觀經にも此人をば
 僧寶とすべしと云へり、羅什三藏濫行になりて後
 は寺の邊りに住して緇衣をかけて、説法の度毎に
 まづ我身は泥の如く我出すことばは蓮華の如しと
 ぞ申されける、末代には我身の非をしらず持戒の

人をばくだしかへりて非法の行を徳と思ひ、道俗
 に向て自嘆し濫行非法にして放逸なる人多し福田
 の徳もあるべからず、心あらん人聖教によりて我
 非をかざる事勿れ、天人南山大師に語て破戒の人
 をまほらすば誰か佛法を弘めんと云へり是は正見
 の僧なるべし、邪見ならば利益もなし天人何ぞ是
 をまぼらん、破戒無戒なりとも實相無漏の法を正
 直に説く僧を天人守るべしと見たり、己が非を
 覆藏せん爲に法を私曲に説くこれを邪見と云、亦
 因果撥無にして惡無過の見に陥るを邪見と云ふ。
 註に淨心誠觀法を引て云、白衣修戒施壽盡生天
 堂、沙門倒慳惜不觀空無常唯知造惡業觸事
 皆而牆、破戒違律儀無慙故覆藏、我作現我受三
 塗遣誰當已上、發真鈔云、十誦曰未來世中出家之
 人入地獄、白衣生天以俗人無法在身、但專信
 故得生天也、出家有法爲世福田、乃返毀犯妄
 受信施、閉諸惡門、故入地獄也已上、かゝるいた
 づらものなればこそ、ひとへに彌陀佛をたのみ奉
 りて超世の悲願をかこつものなり、これ淨土門に

歸して念佛を修する濫觴なり、淨土本緣經云、若
 人造多罪得聞六字名、火車自然去華臺即來迎、
 極重惡人無他方便、唯稱彌陀、得生極樂、若有
 重業障、無生淨土、因乘彌陀願力、必生安樂
 國、さればこそ末世の凡僧は、自宗も他宗も彌陀
 を念する事もとして此ゆゑなり、無戒破戒にし
 て信施を受け、其上有所得不淨説法をなして重々
 の極惡にして、他に助かる方便なき故に偏に彌陀
 を頼み奉る也、しかるを修行者の今さらに疑はる
 は事あたらしきや、「淺ましと詫る計を手向に
 て、唱ふる外の心あらじな」
 ●ひたすらにこりにそみたるよりも、中々なまう
 かびてはつみおほき事ぞとはしり給はずや。
 註にひたすらにこりにそみたるは在家のこと
 也、中々とはかへりてと云ふ詞也、なまうかびと
 は其身僧尼となりて其心未だきよからぬこと也、
 已に家を出て戒を受けても、心さまあしく戒を破
 りつれば、其罪多くして地獄にたつること也、籌木
 の巻に、をりくねんじぬすくやしき事もたほ

かんめるに、佛も中々心きたなしと見給つべし、濁りにしめるほどよりもなまうかびにては、かへりてあしき道にもたゞよひぬべくぞたばゆる云々、なま韻會に云く生は熟の對也とありて未熟の義也、源氏になまくの^{カクテ}上達部とあるもなまなりなる心也、又枕の草紙にのみたる歌のなま覺とあり、ては要解にはにてはとあり心同じ云々。

●されば在家の十惡は下品上生にうまるれども、出家の破戒は下品中生とこそとかれたり。
註に在家の十惡は唯々業道なるが故に輕罪とす、出家の破戒は惡業の上に違制の過を重ねたれば其罪さらに重し、されば觀經の説にも在家十惡人の回心念佛するは、下品上生に生ると説き、破戒の僧の改悔して念佛するは下品中生に到ると説き玉へり、傳通記云、問前受佛戒後雖破、何重十惡、答十惡唯是業道也、破戒亦加違制故云次罪、已上又云、破戒罪重於十惡、當來墮苦亦彌增盛、今依此義以定品位、若依前所受戒功德如萎占、葡萄猶有餘香、出地獄已速近法、佛出於生死、若

依此義破戒之者、猶勝十惡無戒之人、已上智論云佛法中出家人雖破戒墮罪、罪畢得解脫、出家の功德のこと、(珠林三十一丁初、出家部并敬僧篇委説) 鬱鉢羅華比丘尼のこと、(珠林三十一丁初、托、事實卷五)、醉婆羅門出家の事、(托、事實卷五)、老翁出家のこと、(宇治拾遺十一丁三) 如此法門抑揚一概すべからず、云々。

●すべてこのごろのありさまは世もをしなべてにこり、人もたなじくつたなければ、よきもあしきもたゞいふといはぬとにてこそあれ、心のうちをくらべたらばいく程のけぢめ侍らじかし。
註に人毎に我心をば見かぎりて、世の人の心はよも是程あしくはあらじと奥深く思はるゝものなれども、更にしからず、世も五濁の末代なれば、人もたしなべて拙し、心の清き人と云ふともいく程のことかあらん、いか様放逸の人と慚愧ある人とは聊かの變りはあるべけれども、地體が凡夫なれば見思の惑はさながらあり、さまでのちがひめはあるまじきと也、けぢめとは物のちがひめを云ふ

也、源氏伊勢などにもある詞也、掲目とも書也、凡夫の分はいか程心が清ければとて大方かぎりあること也、其心が用に立ちてする往生にはあらず、性相決判門の時は、人空を悟る二乗の聖者だに報土には生じ難し、まして一毫未斷の凡夫は、ふつに往生する道理なし、佛願不思議門の時は、善き凡夫も惡き凡夫も等しく往生する也、導師曰、一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上縁也と、新後拾遺賢珠上人「濁る世の人の心を其まゝに、捨ぬ誓を頼む計ぞ。」

●たとへばそれはともかくもあれ。
●たとへば假令也譬にあらず、「たゞたのめたとへば人のいつはりを、かさねてこそはまたもうらみめ」と詠るたとへの詞今に同じ、此一轉語最も筆力強し、凡夫の往生は佛願による心のよしあしによりてすることならねば、論じて證なしすてたけと也、「よしといひあしと思ふも夢なれば、みなかりこめて南無阿彌陀佛」向譽上人
●まづ此阿彌陀佛を諸佛にこゝてたとび奉る事は

何ゆゑとしりたまふ。
註に此の人唯だ彌陀の貴きことのみを知りてたとき所以を知らず、諸佛の中に此佛のみを取わきて貴ぶことは何に所以ぞと其根元を能く知るべし、呂氏春秋云、所爲貴驥者爲其一日千里也、已上心拙なければこそ彌陀を頼め、身わるければこそ念佛を申すことなれ、永觀律師云、我身若持戒精進ならば何ぞ彌陀をしも頼ん、破戒懈怠の身なれば十念往生の願を頼む也と。

●さしも十惡五逆の機をわづかに一念十念の功にて、たすけ給ふ事のならびなきかたよりこそ、超世のほまれをもあげて、一代の教にもほめられ給事ふにて侍れ。
註に是れ別して彌陀を敬ふ仔細也、極重の惡人を助け十聲一聲迄を洩さず、十方の諸佛に超て比類なき高名なれば超世の願王と申す也、釋尊四十年の御説法の度毎に此佛をのみ讃め玉へるも此故也、元祖大師、(小消息)十方に淨土多けれど西方を願ふは十惡五逆の衆生のうまるゝ故也、諸佛

の中に彌陀に歸し奉るは三念五念に至るまでみづから來迎し玉ふ故也、已上十疑論云、釋迦大師一代聖教、處處說法唯勸衆生、專心偏念彌陀佛、已上、弘決云、諸經所讚多在彌陀、

●さればその本願のたこりは三世の諸佛にもすてられ十方の淨土にも入られぬもの、惡をわこし罪をつくる事はあらかし風よりもはげしくとき雨よりもしげくして、さだめて惡道にわちなんとするをあらはれまんが爲に。

是より超世本願興起の由致を述玉ふ、註に我等無始より今まで煩惱惡業にまみれたるゆせものなれば、十方の淨土には扉を閉てきらはれ三世の諸佛も手を放ちて捨て玉ひぬ、(奉公人は主人の旋背くと暇がでる、嫁も姑の云ふことを用ひねば離縁せらる、云々)元祖大師禪勝上人へ示し玉へる御語に云、極樂のあるじにてたはします阿彌陀佛こそ、何事もしらぬ罪人どもの諸佛菩薩にも捨はてられ十方の淨土にも門をさゝれたるもがらを、やすくゝとたすけ救はんといふ願をわこして十方世

界の衆生を來迎し給ふ佛よ。(翼讚に云、破戒解怠無信謗法の輩は諸佛の國土を擯出せられ天龍鬼神も跡を拂ふて唾すなど説く、涅槃大集梵網十論等の説)惡をわこすとは心の煩惱のこと也、つみをつくるとは身と口とに作る惡業のこと也、風は目に見ねば意にたこへ、雨は形あれば業に喩る也、是則安樂集の文意也、若論起惡造罪何異暴風駛雨、暴は爾雅云、日出風爲暴、已上、和名鈔云、暴風は乃和木乃加世、已上、駛は篇海類篇云、詩止切音史、疾也、已上。

●こゝろを五劫の思惟に盡し身を兆載の修行にくだきて、たて給へるちかひ成し玉へる願ぞかしな。五劫思惟は前に註せり、註に身を兆載の等とは法藏菩薩已に五劫思惟をきはめ玉ひて後夫々の願成就すべき難行苦行をなし玉へり、其ありさま大經の私記に委し、兆載とは數の名也、其修行の時節久しきを云ふ、修行とは六度萬行也、なは下知

の詞、大經云、於不可思議兆載永劫、積植菩薩無量德行、已上、義寂疏引風俗通云、十萬爲億、十億爲兆、十兆爲經、十經爲十、十十爲十、補十補爲、選十選爲、載、已上、淨影云、在不足位、研習勝進故曰修行、已上。

●それをばたが身のうへとかおもはるゝ、しかしながら我等が爲にこそ侍るめれ。

註にしかしながらとは併の字にて思惟も修行も共に云ふ意也、そもゝ五劫の御心づくし永劫の御身の苦みは誰を助んとて御營みぞや全く餘處のこには侍らす、我等を助けられんが爲の難行苦行也、悲哉我等が心さまの拙き故あぢきなく大悲の御胸を痛ましめて、菩薩の御身に苦みをかけ奉ることよ、彼御修行の時は大悲にたねす御身の痛みをも忘れて手足をさき御目の玉をもくりて施し給ひけんこと、あはれに忝けなくて心なき墨染の袂にも涙をつゝみ侍るぞとよ、せめて夫れをば我等故の御事とだに思はずして、猶本願をよそゝしく思ひ往生を疑はんことは云何なる罪の報ひぞや

嗚呼つれなき心哉、往生講式云、情思大悲誓願之深、涙連々不溜、實四十八大願併爲衆生、僧祇劫苦行偏爲我等也、已上、元祖大師云、永劫の修行はこれたれが爲ぞ、未來の衆生にゆづり給ふ超生の悲願は何の料ぞ、心ざしを末法の我等にわくり給ふ、已上。

此段如來の御恩の恭く貴きことを思ひしりなば、身の堪ぬ心の及ばん程は力を盡し修行すべき也、希は貞女兩夫に見ゆす忠臣二君に仕へすと云ふ如き志節を存したきもの也、韓朋が妻。

眞如堂本尊の御歌「時すぎて益なき法をすてよかし、五劫思惟は誰が爲ぞそも、戀しなん命をだにも思はぬに、浮名のたつを何歎らん、願阿、かりそめの色のゆかりの戀にだに、あふには身をも惜みやはずる」大師。

●かゝるいたづらものなればとて諸佛はうらめしくすて給ひにしを、われらにもとてかたじけなく彌陀ひとりあはれみ給ふ故にこそ、我建超世願、必至無上道、此願不満足、誓不成正覺、とはの

捨ひしか。

註に父子相迎に云、諸佛もしかねたまへる十惡五逆の機をたやすく往生させぬる大悲の至極をあらはして佛も世に超たる高名をとたぼすなるべし已上、我建より下の二十字は大經の文、則法藏比丘自ら稱へ玉ふ四誓の偈也、此文のをよめる新千載源邦長「世にこゆる誓の海のみをづくし、たつるしるしはいつも朽せじ」俚語に云く阿彌陀如来の誓願を海にたとへ、其深きことを云へば五障の女人五逆の罪人を攝取し、その廣きことを云へば十方世界と誓ひ玉ふ、みをつくし淨標と書す、河の中に木を立て舟に水の淺深を知らしむる也、難波の浦に始るを以て難波に是を讀也、難波なる身をつくしてても）などよめり、此木朽れば則立替更に朽果ることなし、彌陀佛の誓願因位に於て御身をくだき力を盡して建て始め玉ひしより已來、多劫を経れども朽ることなくして十方衆生を度し玉ふに喩へたるなり、(淨標を身をつくすにもかまよはせたる也)、津は助語なり。

註に終のかの字すみてよむべし、かなと云へる義也とあれども、要解にはの玉ひしものをと云義也とて、壬生忠見が「戀すてふ我名はまたき立にけり、人しれすこそ思ひ染しが」と云かの字に同じ心なるべしとあり、言釋にはか字濁るものと云ふほどのこと、云て要解の義に同じ、云々。

●されば本願にはわく所なく總じて十方衆生とこそきたれ。
註に本願とは上に引たる本願の文也、わく所とは善人惡人のわかちなき也別の字也、大師の云く(御傳四十五禪勝上人へ御示語)十方衆生の願の中には、有智無智、有罪無罪、善人惡人、持戒破戒、男子女人、乃至三寶滅盡の後の百歳の間の衆生までももるゝ事なし、乃至たゞござかしき機の沙汰をばせずして、ねんごろに念佛だにも申せば皆悉く往生するなり、念佛往生の義をかたくもながくも申さん人をばつやく本願をしらざる人と心得べし、云々。
向譽上人の云、南無阿彌陀佛と申て往生する外は

萬事詮なく覺候、此念佛を申にさまゝ入組たる事どもを沙汰する人は、平等大悲誓願の慈恩をかへり見ぬ要なき人のいふ事なり、後の世いかゞとたもはん人はひらに本願を信じて、南無阿彌陀佛といふより外は津の國の、なにはの事もあしかりぬべし。

●いつかは善人をのみといひたるや、そのうへはたいまづ善人は善人ながら、惡人は惡人ながらありのまゝにてをさまるべしとこそ心得られたれ。註に元祖大師の云く、善人は善人ながら念佛し惡人は惡人ながら念佛して、たゞうまれつきのまゝにて念佛する人を念佛にすけさゝぬとは申也。

(念佛問答集、御傳廿一卷常の御詞の中にも出) ●つたなかりし心のもちやう、わろかりし身のふるまひをあらためてのちかなふべくば、善人をのみ救ふ本願とぞ申べき、さては何をもてか世にこねたるちかひのしるしとせん。

是前の修行者の詞をふみての返答也、ふるまひとは日本紀には威儀の字、行迹の字をよませたり、

●しるしとは惡人往生が超世のしるし也。

●たゞし(唯の義しは助字也猶をなほしと云に同じ)ねらぶ所は(不願不稱の人をわりすつる也)わが國にうまれんとたもひて名號をとなへんものをと侍れば、往生のねがはしからざらん心と念佛にたもむかざらん心をぞ、いか程もあらためずしてはかなふまじかんめる。

註に元祖大師の云(御傳四十五卷禪勝上人へ御示)極樂のねがはしからず念佛の申されざらん斗は往生のさはりとなるべし、念佛にもものうき人は無量のたからをうしなふべき人なり、念佛にいさみある人は無邊のさとりをひらくべき人なり、あひかまへて願往生の心して念佛を相續すべし云々、次にひけたる釋文にも但使回心多念佛とあり、願行具足ならでは生れがたし、記主上人の云、又有計設不調心、稱佛名者往生直因之輩、若無安心、非本願念佛何生淨土、此是戒禁取見故今文亦誠斯見耳(散記一の卷)、當世もかゝるすゝめありと聞ゆゆ、しき僻事也、此所本願の正意たる願

行具足の正義を示し玉ふ下なれば、註にも其意を用ゐて散記の文を引かれたり。

「西山流義に行具の三心と立つ、是僻義なり、さらば諸淨瑠璃等の中にある念佛にても往生すと云ふになる也云々、因に一念義のこと現當兩益の事。

●このゆゑに（一切の機をわらばず唯不同心念佛の人をわらぶとの引證なり）法照禪師は。

註に唐の代の高僧也、是を五會法師と云ふ蓮社七祖の第四祖なり、文殊の口授を受けて一心に念佛して五會の念佛をす、め五會法事讚二卷を著し玉へり、其事迹高僧傳往生傳に審らか也、佛祖統紀云く長安の五會法師法照は善導の後身也云々、此八句は五會讚上卷にあり般舟三昧の讚也、撰擇集にも引玉へり、禪林寺靜遍僧都常に此の八句を誦して淨土宗の肝心此文なりと申されけるとなん。

●彼佛因中立弘誓。

此弘誓は別して十八九の願也、弘決に云、弘者廣也、誓者約也已上。

●聞名念我總來迎。

是總の句也、此句來迎の二字古より上下同じから

す、五會讚には灰胎の韻を用ゐて迎來とあり、繪詞傳等には來迎とあり、（來迎とあるは打開に開け易き故なるべし云々、）

●不簡貧窮將富貴。

簡は字彙に云く選也、高誘云无財曰貧、鰥寡孤獨曰窮已上、孝經大義云、位尊曰貴、財足曰富已上、

●不簡下智與高才。

淨影云、才德過人曰高才、唐韻に云く才は智也。

●不簡多聞持淨戒。（此前に四句を略す）

●不簡破戒罪根深。

智旭師云、身口所起惡業名罪、意地造業之本名根、長時積集名深已上、是より下は眞侵の韻なり。

●但使廻心多念佛。願行具足なり。

●能令瓦礫變成金。

大論云、能變瓦石皆使爲金已上、說文云、礫は水中の細石也、（和名佐々禮伊之）「崑崙山のこと（劉子新論崑崙山之下には以金抵鳥）」

十八通第七重經論相違門、鑛金、練金、純金、變金、四種を諸宗に配釋して淨土宗を變金一乘と成

釋し玉ふも此釋文により玉へること云々。

「常蟻生天」

●と釋して（四教集解に云釋謂解釋消釋矣）持戒も破戒もとてもかくても機のよしあしはさらにもいはず、（前の六句の意なり）たゞ往生のこゝろざしにて南無阿彌陀佛と申さんのみ本願にはかなふべしといへり。（後の二句の心也）

總じて右の釋の内にも機心行の三重ありと見ゆ。

●抑（發語の詞なり又篇海類編に云ふ按也）三世の諸佛いづれか多聞淨戒をほめ破戒罪根をすて給はざるや。

已下上の八句の文の和解也、諸惡莫作衆善奉行は諸佛の通戒なり。

●我等無始よりこのかた六道の貧里にまよひて、福智の珍財をうしなへる事は。

久しく六道を巡りて功德の寶なきを貧里と云ふ、福とは前五度（施、戒、忍、進、禪）智とは第六般若波羅密なり、法華方便品に云、見六道衆生貧窮無福惠已上、西方要決云、福智珍財并皆散失已上

字書云 珍寶也財貨也已上。

●諸佛こぞりて惡をやめつみをとゞめとのみ、いましめ給ひしわきてにかなはざりしによりて。

こぞりてとは諸佛ことごとくと云ふ意なり、萬葉に悉の字を點せり。

●かなしく慈悲の父母にすてられて、あぢきなく流轉のみなし子となり（には助字）しゆゑなり。

是我等が諸佛に捨られたる仔細なり、慈悲の父母般舟讚に云、釋迦如來は實に慈悲の父母也云々

今は諸佛に通じて云ふ、あぢきなくせん方なき心也、無爲、（史記）此詞も所によりて其意替るなり、無狀無道無事無端無情とも書たり、みなし子とは

篇海類編云、少無父母曰孤已上、釋名云、無父曰孤、孤願也願望無所瞻見也已上。

●しかるを彌陀の本願にも、又多聞淨戒をわらびとり破戒罪根をわらびすてたまふ事ならまじかばいかゞはせん、かゝるつたなき身にはわもひたれたる往生にてぞあるべきに。

註に多聞とはひろく佛法を聞きしることなり、淨

(620)

戒とは清淨に戒を護持すること也、(多聞も淨戒も七聖財の隨一なり)撰擇集に云、若以多聞多見而爲本願者、小聞小見輩定絶往生望、然多聞者少小聞者甚多、若以持戒持律而爲本願者、破戒無戒人定絶往生望、然持戒者少破戒者甚多已上、記主禪師云、當世勸持戒、律師等、雖似勸正見、立破戒不正義、令機疑悔、甘露天、命蓋斯謂也、已上世に善導法語となづくる物あり、偏に持戒念佛をすゝめて破戒無戒の往生を許さず、かれ智なきが故に佛願の深きことを知らず、悲なきが故に下機を顧みず筆にまかせて偏見をしるす、其非を正すこと洞空律師の破戒往生章の如し、又此頃善導遺誠と云ふもの世に流布す類藏集より出たり、偏へに持戒の念佛をすゝめて破戒の往生をゆるさず、然るに其文體尤も拙く義道餘に異なり信用するに足らず、況や昔より長西録の僞妄の部に入ぬ、贗本なること分明也、破戒無戒の往生の得否を論ずるに三義の別あり、謂く僻見、邪見、正義也、(僻見は破戒往生を許さず、大悲本願往生の門戸をと

ざす、邪見は一念義惡無過に墮す、正義可知)、養鷹(托、譬喻卷二)輪扁劉輪(托、譬喻卷三)始皇逃刺客難(托、事實卷二)戒は佛法の地盤にして通規のこと云々、若し助業の義に就て云は、戒は鞘の如し念佛は刃の如し、念佛の刃大切の故戒の鞘を以て邪見退墮のさびの出ざる爲とする也、爾れども正しく勝負のときはさやは用に立す刃が用に立つ如く、正しく往生の業となるは念佛にて戒行ではかなひ難し云々、又一念義はさやなしに身斗持てさわざり回る如く亂心者に同じ、又其身も願生念佛の正身でなく、御禮報謝の竹みつに他方の名目の銀箔付たれば、芝居の道具で煩惱業苦の頸さること出来ざるが如し云々。

●いま此釋の中に不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深とて、たゞねなじ詞にいひすてられたるこそ、ことに耳にたちてたうとく、本願の人によらぬほどもかたじけなくたほわて、喜びのなみだもふかくにこほれにけり。

註に破戒と持戒とは善惡はるかなるに何とて同じ

(621)

詞には云ひすて玉ふや、もとより彌陀如來の大悲は三學分外の輩を助け玉はんが爲めに三學の關の外にたて玉へる本願也、持戒破戒にて進み退く道に非れば同じ詞に云ひすてられしなり、耳にたちて、持戒善人の耳には立まじけれども、我等が破戒惡人の耳には簡び捨られざることの嬉しく尊く有難く至て耳にたつ也。

本願の人によらぬ、人にはよらず聲による也、元祖大師の云、(大胡消息)煩惱のうすくあつきをもかへりみず、罪障の深き淺きをも沙汰せず、只南無阿彌陀佛と唱へて聲につきて決定往生の思ひをなすべし、松蔭の顯性房の云く(一言芳譚)心の專不專を論せずして、南無阿彌陀佛と唱ふる聲こそ詮要と眞實に思ふ人のなきなり。

和論語云、源希義(左馬頭義朝五男、號鎌倉御曹子)後號土佐官者無官無位頼朝同母弟、治承四年頼朝義兵時、平家以家綱害之云、惡事を誠めこらす世は多くあれども、善き事を擧げ用る世は希也、人の惡き事を聞て善き人へ語る人は多く

あれども、善事を聞てよき人に語る人は希也、世にある人をあがめ用る人はあれども、世になき人を捨ずして愛する人は希れ也已上。

三世諸佛は悉く多聞淨戒の善人を譽めあげて救ひ、破戒の罪根深の惡人を惡み捨て玉へるに、唯我彌陀如來のみ持戒破戒善人惡人の撰びなく、稱名の聲をしるべにして世に捨られたる我等を愛み救ひ給へり、是を超世大悲の別願と云ふ、實に希有不思議の利益豈歸依せざらんや。和州彌三郎(托、往生卷五)、宇治田原淨閑寺(托、往生卷三)

●又法然上人の鍛冶往生番匠往生との給ひけんも、たゞもとの身がらをあらためずとも、念佛せば往生すべしといふ心なるべし。

註に云、善人惡人僧俗男女士農工商賢愚貧福生れつきの儘、夫々の身がらを改めずして直ちに念佛すれば直に本願にをさめられて皆往生遂るなり、元祖大師の云、彌陀如來本願の名號は、木こり草かり菜摘み水汲みの類ひごときの者の、内外ともに

かけて一文不通なるがとなふればかならずうまれ
 なんと信じて、眞實にねがひてつねに念佛申を最
 上の機とす云々、淨土宗の書籍數百卷所詮は唯名號
 を唱れば往生すと云ふことのみ也、別しての肝要
 は一枚起請文也、謂く南無阿彌陀佛と申て疑なく
 往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候は
 すと、此相傳にさへ通徹すれば淨土一宗の法門に
 滞ることあることなし行者深く之を思へ。

鍛冶 倭名類聚鈔云、鍛冶は段野二音也、四聲字苑
 云、鍛打金鐵爲器也、冶燒鐵銷鑠也、倭名序云、
 鍛冶之音誤涉假冶云々、然れば鍛冶とよむも久し
 きこと也。

番匠 下宗學集云、番匠飛彈之流也、已上、要解に云、
 愚案するに工匠を番匠と云ふは鑄の字を略して書
 しことか、鑄はたつきとて工人の具なり、又の廣
 き斧なりと、洲私に云、工匠を番匠と云ふは、飛
 彈國の大工禁裏の公役を勤めける故番匠と云ふこ
 とにて、飛彈の内匠と云へるも此義なり、番も内
 も共に禁裏に就て云ふ義也、内匠と云ふが大工の

名と云ふには非ざれば、内匠頭と云ふも禁役を勤
 むる工匠を司ざるの官也。
 ●かくてぞげに(かうありてこそまことに)本願も
 ひしとわが物にたはねて、彌陀も諸佛にこゝてた
 のもしかんめるを。

此文前後に照應す、謂く前に何をもてる世に超た
 る誓ひのしるしとせんとあるに應じ、後には本願
 のよそなる物になりぬと云ふに應ず。
 ひしとは要解にはきびしの上略にもや侍らん、稠
 の字密の字をもきびしと訓す、物のすさまじきや
 うのこと也と云々、言釋には菱の實をわりてあはす
 るに能く合ふより云ふ詞也と云々、又要解(下の卷
 初)に慈鎮和尚の歌を引けり拾玉集「いかにせん
 人もはらはぬ夏の池の、ひしとも物のたもひとら
 れぬ」これはひしと云ふ詞を、菱によせてよみ玉
 へりと云々、(菱は言釋に合して本語と見ゆ、要解
 の稠密の義も其義あれども本語に非ず)、
 註に云、女は髪を置ながら男は烏帽子を著たる儘、
 世の營みは兎にも角にも昔しの我を少しもかへ

す、角を頂だきながら直に本願にたさめらるゝ也、
 斯く領納してこそ本願も手に取りたるやうにて彌
 陀もしたしく頼もしき事なれ、已上は本願の方に
 は人にわけへだてなき旨を示し玉ふ、已下は衆生
 の方よりわけへだてをなす故に、三縁の益に漏る
 るぞと誠め玉ふ。

●人ごとに女は尼にもなり男は法師にもなりて、
 在家のちりにもけがされず妄念のにこりをもすま
 してぞ、佛の御こゝろにはかなはんずるとおもへ
 るほどに。

註に出家は一と筋に念佛すれば往生もやすかるべ
 し、在家は名利に貪著すれば往生いかゞと疑ふ也、
 出家の身になりても心はかはらぬものなれば、さ
 まで一と筋にもなりがたし、昔より在家の往生し
 たるためし幾多き事也、淨摩尼と云ふ珠を濁れ
 る水になぐれば清くなる如く、念佛を口に含めば
 心の濁りも自ら清くなること也、此事大師十二ヶ
 條の問答にあり云々、和語燈四の卷^{四十一}十二ヶ條問
 答に云、問云、世をそむきたる人はひとすぢに念

佛すれば往生も得やすき事也、かやうの身にはあ
 したにも夕べにもいとなむ事は名聞、昨日も今日
 もおもふ事は利養なり、かやうの身にて申さん念
 佛はいかゞ佛の御意にもかなひ得べきや、答云、
 淨摩尼珠といふ珠をにぎれる水に投れば、珠の用
 力にて其水清くなるがごとし、衆生の心は常に名
 利にそみて濁れることかの水のごとくなれども、
 念佛の摩尼珠を投れば、心の水おのづからきよく
 なりて、往生をうる事は念佛の力也、わがこゝろ
 をしづめ此さはりをのぞきて後念佛せよにはあ
 らず、たゞ常に念佛して其罪を滅すべし、されば
 昔より在家の人多く往生したるためしいくばくか
 おほき、心のしづかならざらんにつけてもよく
 佛力をたのみもはら念佛すべし。

凡そ世人、自力他力の法門の差別を知らざる故に
 安心決定せざるなり、謂く聖道の法門は心地をみ
 がく自力の修行なれば、名聞利養の心少々も芽せ
 ば修する行法の功德を滅す、淨土の法門は三學無
 分の機を詮に目がけて立て玉へる他力本願の修行

なれば、唱ふる念佛の功德にて煩惱惡業の罪を滅す、此差別をしらずして聖道淨土自力他力の法門を混雜するもの故に、自力の執情にひかれて身をかへりみ心を願みて決定往生の安心立たざる心、能々心得わくべき也云々。

●いまの我身は本願のよそなる物になりぬ。如來の方よりは分け隔はなけれども、衆生の方より我身持心持のよからぬに計り目をつけて、他力本願に乘じ得ざる也、されば註に佛の御誓ひの詞には十方衆生との玉ひつれども、御志は我等を本として目がけ玉へる本願也、されば彌陀の本願はもとより我等がものにてこそあれ、案内を知らぬ故に身を本願に任せ兼ねて本願のよそなるものなるは我心からなり。

淨土宗は一大事安心は機法二種の信にあり、從來の心得違は機信の釋を信知せざるの失也。

●かくて(かくのごとくにては)あたらし念佛もいたづら物なる心地にて、佛もうとくとおぼゆれば、註に我等が申す念佛も往生の業とやならんと、あ

ぶなく申す念佛なれば罪も消に難く功德も得難し、又我等が方より外様になりて佛の御心にかなはじこのみ隔心すれば、彌陀如來にも遠ざかりうとくしくなる也「極樂へ行んと思ふ心にて、南無阿彌陀佛といふぞ三心」石清水八幡宮、深澤法印告玉御歌

●人能念佛を還念のしたしきおもひもなく。

法事讚に云、人能念佛を還念、專心想佛々知人已上、記に云、口念彌陀一名爲念佛、心緣所歸一名爲想佛、したしき思ひとは親縁の釋の意也、是は心のしたしみ下は身の近き事也。

●かのれとをさかる心のへだてに。註に我方より隔心して見佛の障りとなる也。

●籠々常在行人前のちかきたのみもなし。

註に法事讚云、淨土莊嚴諸聖衆、籠々常在行人前已上、佛は常に我前にましますも煩惱の雲たちかくして見奉らず、もし見ることあれば陰雲の月をかめたる如く、たほろくとして見に玉ふなり、ちかきたのみとは近縁の釋の意なり、定善義云、衆生願見佛即應念、現在目前故名近縁已上

「南無といふ二字を呼より阿彌陀佛、枕のもとにかげうつすなり」目の前に佛は常に通ふごと、木もへばす、む御名のかづく、「阿彌陀佛と申計りをつとめて、淨土の莊嚴見るぞ嬉しき」大師。●かゝる念佛にてはつみもきわがたく、佛のむかへもいかゝあらん。

註、雲棲云至心念佛一聲、滅八十億劫生死重罪、所以者云何至心故也、若至心罪則不滅已上、ほとけのむかへもいかゝあらんとは身を佛に任せぬ故也。

●されば終時從佛坐金蓮のほいもながくたがひぬべし。

註、法事讚云、行者見已心歡喜、終時從佛坐金蓮已上、是増上緣釋意也、定善義に云、衆生稱念即除多劫罪、命欲終時佛與聖衆自來迎接、諸邪業繫無能礙者故名増上緣已上、(蟻川新右衛門のこと云々、不來迎の邪義辯破)

●あさましかるべき事ぞかし。

是前を結ぶ也、打任せて申せば親縁近縁増上縁の

三縁の大利益を得ることなるに、我から心、おきばみて佛願に遠ざかる故、此三縁の益を得ざることに實にあさましきかぎりにこそ。

●さしも佛のかたよりはいかさまならんをも捨じとたほしめされたるを、こなたよりかゝるつみある身なればと、なまさかしき心の木にこそ中々身のあだにては侍れ。

註、下卷に云、われらをみちびき玉ふべき佛の御方便はもとよりした、めまうけられたるを、たゞ衆生のかたよりあやふみて身を本願にまかせ兼たる心のなまさかしきにこそ、けふまで往生もといこほりぬれ、今よりにても心をかすたのみをかけばやがて本願に乗すべし已上、心の鬼とは河海抄に恐ろしき心也とあり、なまさかしき心は往生のさはりなれば心の鬼といへり已上。

私に云、心の鬼と常に云ふは、面にあらはさす内心に人を貶して我利を得んことを思ひ謀るを云ふ、今は其義にはあらず、往生は大悲本願に打任すべきことなるを、我から界下して本願のよそなるも

のなるを云ふ也云々。
 「身をわもふ心の中をたがはずば、身には心もあ
 だとなるべき」他阿、註に身のあだとは往生のさ
 はりとなる、心は身の仇也、(傳法院を燒僧、托、事
 實卷七)

●たゞひたすらにたのまゝしかばよろづの罪はゆ
 るし給なんかし。

註に眞如堂の本尊ある時法然上人に示し玉へる御
 歌「たゞたのめよるづの罪はふかくとも、我本願
 のあらんかざりは」よろづの罪、三毒五欲見惑思
 惑の其儘を十方衆生と誓ひ玉へり云々。

●わもはずに心をきばみたるは、この世ざまにも
 にくき事なり。

註にわもはずには思の外也、心置はみたるとは
 隔心する義なり、はみは添字也よしはみなど云ふ
 に同じ、此世の心の交りにも我方よりは打とけて
 心易く思ふ人の、思の外に心置て隔がほなるはわ
 ろきもの也、にくきとはわろきとにくむとにかゝ
 りて見ゆ、是は世事を以て准へ示さん爲にまふけ

て云、下は正説也。

愚男含米(托、事實卷六)

●いたくわるからんにつけてこそ、いとゞたすけ
 玉へと思ふべけれ。

註、中卷に云、かゝるをろかなる身にてはいか
 いと思ふより佛にはとをさかり、わろきにつけて
 もさりとてはたすけ給へと思ふより、佛にはちか
 づきたてまつるなり已上、和語灯五丁身の罪惡
 をもて往生を不定にわもはんは大なる錯りなり、
 さればとてふてかゝりて惡からんにはあらず、
 本願の手廣く不思議なる道理を心得ん爲なり云々、
 ●されば永觀も。

註に禪林寺の永觀律師、後一條院の頃の人也、康
 和年中に往生十因を作り玉へり云々、永觀の傳、釋
 書、本朝高僧傳、十因私記(望西作)發心集、百因
 緣八等に出。

●我身もし持戒精進ならば、なんぞかならずしも
 彌陀のみ頼まん、破戒懈怠の身なれば十念往生
 の願をたのむなりとの給へり。

是往生十因第十因文也。我等若持戒精進者、何唯
 持彌陀何偏欣極樂爲破戒懈怠身貴十念往
 生願之故也已上。

註に、もし戒をもたもち勇猛に精進する器量あら
 ば三學六度何れの法をも修め佛になりつべし、何
 しに必ず彌陀の本願をのみ頼まんや、迦才の淨土
 論に若自知有定惠分者、即於此方修道求無
 上道、若自知無定惠分者、則須修淨土門就
 淨土中求無上道已上、精進 上生經疏云、精者謂
 精純、無惡雜故、進者謂昇進、不懈怠故已上、

懈怠 唯識云、懈怠於善惡品修斷事中懶惰爲性、
 能障精進増染爲業已上、今時世に多く此永觀の
 語や、導師の機信御釋や、大師の十惡の法然房愚痴
 の法然坊と仰せられたるなどは、所化を誘引方便
 の御詞也と心得たる人たほし是誤り也、本地の上
 にては論なし垂迹凡身の上にては悉く實言也、大
 師の云く末法の凡夫十惡ならぬは大千界に一人も
 なしと云、智に淺深あり愚に厚薄あれども、一向
 に愚の名を離れ給へるは唯佛のみにして等覺の苦

薩にさへ一分残る無明あれば猶愚の名を遁れ玉ふ
 ことなし、(西方要決科本上三三)

優婆塞多化益上慢比丘(説因五十九)

●その外の人にはましてさこそたのみ侍るべけれ。
 律師の高徳なるすら身を卑下して大悲本願を仰ぎ
 玉へり、況んや愚惡の凡愚は、偏に佛願を仰信す
 べしと也、(是迄は勸門也已下は誠門也)。

●たゞしかればとて(かくあればとて)本願をた
 のまん人は、とがをあらためずつみをわそれすと
 いふにはあらず。

是誠門にして行者の用心也、一念義邪立なること
 可恐云々。

註に總じては諸惡莫作は諸佛の通誠也、本願には
 こりて罪を恐れぬは邪見也往生す可らず、三代上
 人並に此僻見をいたみ玉へり、隨分に惡を止めん
 と慎めども、地體が凡夫なれば罪惡はとゞまると
 なし、彌陀の本願は是非なく此人を助け給ふと心
 得べし、されば及ばぬ迄も心の放逸を改んとし身
 の威儀をもとへのんとするは、誠に正見の善人

なれば、佛の御心にも叶ひ祖師の御語にも准すべし、傳へ聞くこの頃念佛者の云、念佛門には戒行なし威儀を調ふるは聲聞の行也、身を謹みてよからんとするは未だ本願に乗せぬ初心者也、罪にならば安心未決定の人也、身を顧るは弘誓の舟に乗らぬ故也と云々、嗚呼末代なる哉僧は增慢にして憶説をたくみ、俗は放逸にして簡便なるに隨ふ、正人正教はふるきことゝて信するに人なし、邪師邪教は珍らしければ競ふて是を傲ふ、所謂下俚巴人類は和する者多く、陽春白雪は屬する者すくなし、能々僉議すべきこと也。

李勉辨姦邪(托、事實卷四)

●罪人は往生すれども、罪業は往生のさはりなり、身をば卑下すべからず、つみをばかざるべし。註に是は記主上人の御語の意也、此四句殊に巧み也、第一第三の句は本願を信する様也、第二第四の句は因果を信する様也、(傍註に第一第三の句を因果の信とし第二と第四を本願の信とあるは寫誤なり)心傳集に云罪人は往生すれども罪業は往生

のさはりなり、ほとけ大悲の本願なるゆへに往生不定といふはかろしき事なり、さりながらさばりとならばこはき事なり、淨土の安心は是ほどまじいふが手なり、そのゆゑは本願を手づよくたもへば身のいたづらになるをしらす、罪業をつよくたもひあはせては本願の徳義を失ふなり已上。

●このいはれをよく心得給はせよ。註に記主上人の云、罪是往生障最可止之、然不可思罪人不往生、懺悔念佛力滅罪故、抑見世人各墮偏見難叶佛意、悲哉信因果者他力信弱、信本願者因果理緩、庶幾專信本願兼信因果、即叶佛意可遂往生者也已上。

專兼の二字分別のこと

○たとへば人のわやのどがある子をあはれむ、たかすところをいましめざるにあらず、いましむれども又つる事なきが如し、(以上はたとへ)彌陀の本願罪人をすくふ、つみをにくまざるにはあらず、にくみながらすて給はざるこそわりなき慈悲にては侍るめれ。

此法警元祖大師御法語意也、漢語灯十二箇條問答云、譬如人親哀諸子、其中有善子有惡子、俱雖成慈悲行、惡子怒目捧杖、誡惡人不捨本願、付彌佛知見可耻可悲、謂父母有慈悲、而父母前行惡、其父母可悦乎、乍歎不捨乍哀惡也、佛亦如是已上、人の惡を行するを見て他人は惡みて不哀親の惡むは則哀也、かゝる行ひしては果は宿なし乞食非人斬罪にも行はるゝであらうと、今より後を思ひやりて哀む也、他人の惡みて悲まぬは善因善果惡因惡果の通總因果報應の掟の如く、親の惡みて哀むは如來無盡の大悲の如し、かゝる惡業煩惱にて、未來は必ず惡趣に墮して、無窮の楚毒を呑んことを悲み恐れ玉ふ故、惡み乍らも捨て果ぬ本願を建て、攝取し玉ふ也。

●さればそのたもむきを心得てふるまはん人ぞ、わろくも佛の御心にはかなひ侍るべき。註に正見なる故、佛の御心に叶ふ也、決疑鈔に云、本自起惡造罪凡夫、雖存諸惡莫作之理、而數忘數退深可慚愧、就如是機、彌憑他力本願、就如是

是機彌信、自身罪惡、常能念佛期、臨終暮、即現其人前、誓願不虛必坐華臺也已上。

●法然上人の御をしへには。

黒田の上人(是は伊賀國名張郡也と云云、和語灯日講録四の卷)へつかはされし御書の詞也、世間に流布して上人の小消息と云へり、(和語灯四十七、御傳廿一)此御書初重の卷物、投機の相傳云云。

●十惡五逆も往生すと信じてすこしのつみをも犯さじとたもへ、重罪なをうまるいはんや小罪をやとの給へり。

註に是も本願と因果と兼て勸誡の心あり、已造を攝し未造を抑する也、是を前に引たる上人の御語に引合せらるゝが此鈔の才覺也、たもへどあるが字眼也、是意樂正見をすゝめて惡無過の邪見を誡め玉へる也、若し犯すこと勿れとあらば我等凡夫は往生望みを絶べき也、聖道自力は悉く犯すこと勿れと也、他力易往の大悲の構へ可仰可貴云々、●十惡五逆も往生すと信せよといふはにくみながらすてたまはぬ御心をしるなり、(本願の信なり)

すこしのつみをもたかさじとたもへといふはすて
ねどもにくみ玉ふ事をつゝしまん爲なり、(因果の
信なり)にくみながらすて給はずとしりぬれば、
重罪なりともうまれん事うたがひなし、(はじめの
何なり)すてねどもにくみ玉ふぞかしとしりてつ
みをおろるゝ時は、いはんや小罪をやといよく
たのもし、(後の何なり)げにもにくみてすて給は
い超世の悲願かひなかるべし、我らなにをかたの
みとせん。

註に一とたび諸佛に捨られたるを助け玉へばこ
そ、超世の悲願とは申せ忝なきこと也。

●すて給はねばとて、つゝしまずばあまりにあや
にくなる心や。

あやにく、生憎可憎の字を、杜詩遊仙窟などに
あやにく、あなにくともよめり、心なきを云也、
註に大悲にあまわて心をゆるすは醫者をたのみに
して毒をくらはんが如し、あやにくは思ふやうに
なき義なり、右へと思へば左へなりて心にかたは
ぬことを、俗に云ふ氣の毒なる心也、往生大要鈔

云勸強信方一起於邪見誘不令起於邪見成
信心不強無術事也已上。

●かゝらんひかくしさをぞ、佛もかへりてうと
みたまふべき。

註に、かくの如くに心のひがみたるものをば佛も
うとましく思召すべし、記主禪師云、若起於罪
無過之思縱雖念佛不可往生是邪見故已上、
ひがくしきは惡無過の僻見也。

●さればとてつみをことごとくやめてこそといは
んも又風情すぎたり。

さればとてはしかあればとて也、上にて罪を誡る
ことを云へばとて也、

註に、罪を慎めと誡るに付て又因果になづむとを
いさむる也、大過不及ともに偏見也、罪を悉く止
むるとは凡夫の分にてはならぬとなり、いかなる
持戒の人も身口の罪は麁強なれば謹むべし、意地
の罪は微細なれば除き難し、既に煩惱の根本深し
何ぞ罪業の枝末をたゝんや、安樂集云、縱使一形造
惡但能繫意專精能念佛、一切諸障自然消除定

得往生云々、風情過るとは仔細過るなり、歌の
心の過たるをも風情過ると云ふ也。

當世の血氣の勇者は動もすれば風情過るとあり、
他の機根をはからず強ちに持戒を勧め法衣より念
珠に至る迄、殊更に風流をつくるひ是非を分たず、
古風を改め威儀をことやうにして人目を驚かすも
の多し、是は我執驕慢より發りて異を顯はし衆を
惑はす佛の御誡め也、初心の行者かゝる人に交り
なば自然に名聞者になるべし、西方の行者は念佛
是本なり其餘のことは皆末なり、兎ても角てもあ
りなん、唯大様にして人目にたゝす邪見の振舞を
せずやすくすなほなるべし、所謂遠山のみみぢ野
邊の一樹は(一言芳談)道人の忌む所也、但し眞實
に慚愧ありて自然に威儀をたゞしくせん人は此限
りに非ず、今は羊質虎皮の漢を誡むる也。

●なにとしても五濁の凡夫のくせなれば四儀の作
罪とまらるべきにあらず。

時機を鑑みて必竟の教勸す信すべし仰べし云々、註
に既に此五濁惡世に生れたる薄地の凡夫なり、罪

業は無始よりの習なればくせになりて起ち居に止
り難し、五濁は劫、見、煩惱、衆生、命濁也、四儀は
行住坐臥の四威儀なり、鎌倉宗要云、爲凡夫辨被
行惡業已上、序分義云、言劫濁者然劫實非是
濁、當劫滅時諸惡加増也、言衆生濁者劫若初成
衆生純善、劫若末時衆生十惡彌盛也、言見濁者自
身衆惡總變爲善、他上無非見爲不是也、言煩惱
濁者當今劫末衆生惡性難親、隨對六根貪瞋競起
也、言命濁者由前見惱二濁、多行殺害無慈
恩養、既行斷命之苦因欲受長年之果者、何由可
得也、然濁者豈非是善、今略指五濁義竟已上、
和語灯五三十三信空上人あるとき問て云、往生の業
において思ひさだめをはりぬ、たゞし一期の身
のありさまをばいかやうにか存候べき、答ての給
はく、僧の作法は大小の戒律あり、しかりといへど
も末法の僧これにしたがはず、源空これをいまし
むともたれの人かこれにしたがふべき、たゞ詮す
る所は念佛の相續するやうに相はかるべし、往
生の爲には念佛すでに正業也、このむねをまもり

てあひはげむべきなり。

畢陵伽罵河神、(托、事實卷二)舍利弗願習、難陀姪習、大原問答第十二永辨の問下、

●たとひわづかにきよき心をおこせども水にゑがくごとし、貪瞋のなみ、なきり來りてしばらくもやむ事なし。

註に、たましく善心の起るとあれども、三毒の煩惱常に發りて僅かの善心はやがて消散するなり、序分義に云、貪求五欲相續是常、縱發清心猶如畫水已上、涅槃經に云譬如畫石其文常有、畫水速滅勢不久住、瞋如畫石、諸善根如被畫水已上、婦の城を泣き崩し、或は角を生じ鱗を生、石に畫が如し、寺社へ施入貧病等を惠む、報を望むは貪欲に移り、我こそその念橋慢に移る、水に畫くが如し。

●すでに煩惱のみなもとをたえず、いかでか罪業のながれをやめん。

註に、源を塞がされば其流れ斷ゆるとなし、身口の罪業は意の煩惱より發る、既に一毫未斷の凡夫

也何ぞ罪を止めん、法界次第に云、煩以喧煩爲義、惱以逼亂爲義、喧煩之法逼亂行者心神等已上、貞觀政要云、流水清濁在其源也、猶源濁而望水清理不可得已上。

●たゞわるしとしり、あまさしとたもふこゝろばせまでを申にてこそあれ。

註に、たゞ正見になりて放逸ならざれと云ふ迄の誠めなり、其うへ罪を恐るれば助け玉への心もすすむなり、(一念義の邪勸可斥)「あまさしと佗る斗を手向にて、唱ふる外のこゝろあらじな」。

●ねんじかねてあやまりたらんかりは、それぞかし、助け給へ南無阿彌陀佛と思ふべかんめるも。註に念じかねては堪忍しかねてなり、たもひかねてと云ふべきを、聲に云ふとは心を強く云はん爲なりとぞ、伊勢物語にも此詞あり、やあまるとは心ならず罪をつくることなり、夫ぞかしとはかゝるあさましき我身なるぞ助け玉へ南無阿彌陀佛と申すこと也、べかんめるも、もの字は付字也、夫木「わが脇を枕にしつゝおもふ哉、げにたのしみ

はこれにすぎじも」

●かゝるを隨犯隨懺の念佛とはいふなり。

註に、善惡の二念前後に交りて、罪を犯しつればやがて懺悔し、々々して又犯せば又懺悔念佛するを、隨犯隨懺の念佛と云ふ也、此こと往生禮讚に出たり云々、隨犯隨懺の名目は心地觀經にあり、隨犯隨懺に念時日の三別あり、則上中下三根に約す云々。

●罪垢こくくきにて身つねに清淨ならん。

註に、罪業の垢すでにつきて其身きよかるべし、三千佛名經に云、我身に二の障あり、罪垢穢身、經百千劫雖洗難淨、乃至唯有禮懺極清水耳猶可洗、我罪業垢已上、

俚語に、隨犯隨懺は常使清淨意也、譬ば都の女は朝起ると洗粉にてすりみがきて湯をつかうこと日日懈りなし、田舎の女は湯をつかはす水をすこしぬらした迄也、世話はなければも容儀はすたるなり、生質は直らざれども日々洗ふと洗はぬとは大

に違ふなり、田舎女の彼岸參や祭禮などに俄に粉ぬかで洗ふ、たとひ面容は美なるも耳脇鬚先に垢が残り、うぶ毛のゆさくするに白粉はのらぬなり、念佛者も如此、常に申は垢付を直に落すが如し、自體の煩惱消滅はせざれども、念々稱名常懺悔、罪垢悉く消れて身常に清淨なり。

●臨終の時罪人惡人の名をあらためて來迎の佛善男善女とほめ給ふべし。

註に、善惡さだまりなく、因縁もとより空也、惡を起す時は惡人、善を修すれば善人也、平生念佛の功にて、日比の罪を滅したれば、臨終の時來迎の佛、善男善女とほめ玉ふなり、觀經下上品の文に云、爾時彼佛即遣化佛化觀世音化大勢至至行者前讚云、善男子汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝已上、傳道記に云、善男子者當品之人、雖惡人回心念佛、則滅惡障故讚云善已上。

●さてもなこれほどに福薄因疎の機、識疑行淺の身としてすみやかにあとを婆婆にをざかり、心を淨域にすましめん事はひたすら他力本願の御恩

ぞかし。
 註に是れより此卷の總結也、十方衆生の句に付て下機得脱の御恩を歎ずる也、さてもなごは感歎の詞也、我身に引受て見ればしみくぐと忝き也。過現の善根うすく値佛の因業うときもものを福薄・因疎と云ふ、其心たるかにして修行の功淺きを識痴行淺と云ふ、すみやかに等とは、總じて聖道門は、其感障を除きて實理を顯すが故に三生六十劫を送り四生百劫をつむなるに、念佛の行者は僅に一形十念の功にて臨終の一刹那に往生するが故にすみやかと云ふ也、西方要決に云、親逢聖化・道悟三乘、福薄因疎勸歸淨土、已上又云、人天兩位疎動不安、智博情弘能堪久處、若也識癡行淺恐溺・幽塗・必須遠・跡娑婆・栖・神淨域、已上靈芝云娑婆亦云・索詞・此翻・堪忍・悲華經云是諸衆生忍・受三毒及諸煩惱・故、已上。
 聖覺法印の唯信抄略書、罪ふかくはいよく極樂をねがふべし、不簡破戒罪根深といへり、善すくなくばますく彌陀を念すべし、三念五念佛來迎

といへり、むなしく身を卑下しこゝろを怯弱にして、佛智不思議智を疑ふ事なかれ、たとへば人たかき岸の下にありてのぼる事あたはざらん、ちからつよき岸の上にあつて綱をたろしてこの綱にとりつかせて、われ岸の上に引登さんといはん、ひく人の力を疑ひ、綱のよわからん事をあやぶみて、手をたさめてこれをとらずば、更に岸の上へのぼるべからず、偏に其言に隨ふて掌をのべてこれをとらんには、即ちのぼる事を得べし、佛力を疑ひ願力を頼まざる人は、菩提の岸へのぼる事難し、唯信心の手をのべて誓願の綱をとるべし、電光朝露の命、芭蕉泡沫の身、わづかに一世の勤修をもて、忽に五趣の故郷を離れんとする、豈ゆるく諸行をかねんや、諸佛菩薩の結縁は、隨心供佛の朝を期すべし、大小經典の義理は、百法明門の暮をまつべし。
 觀經上品下生他方得益文云、遊歷十方供養諸佛、於諸佛前聞甚深法、經三小劫得百法明門、住歡喜地、已上。

「いろく」の花の匂ひを朝ごとに、四方の佛にたむけつるかな其國衆生常以清且各以衣被盛衆妙花供養他方十方億佛、供養諸佛願第二十三願、隨意聞法願(第四十五願)。
 ●多生曠劫にもいかでか報じたてまつらん。
 註に、生々世々劫を重ねても、争か此大悲の恩徳を報謝し盡さんや、記主上人云、曠猶懸也、已上列子註、曠遠也、已上。
 ●誓到彌陀安養界、還來穢國度人天、願我慈悲無際限、長時長劫報慈恩。
 註に、是は法事讚の文也、本願の御恩は身をくだきても報ひ難ければ、誓をたて、彼國に生れて後、幾度も穢土に立かへりて衆生を濟度し、慈悲心きはまりなく、未來際を盡くして如來大慈の恩徳を報い奉らん意也、此を佛恩報謝と云ふ、世人多くは起立塔像、飲食供養等のこと、思ふて居る也、是れも報恩にかけ離れたることにてはなけれども、貪瞋具足の凡夫のなす業、清淨に調ひ難ければ、報恩と云はんもたこがましき程也、又一念義は佛恩

報謝の稱名と立て、本願所建の深旨に背き大悲の御胸をいため奉る云々、又乞食の御報謝云々、皆間違也、我正宗の佛恩報謝と云ふは、今所引の文及び初夜禮讚の、自信教人信、難中轉更難、大悲傳善化、眞成報佛恩と釋し玉へる是れ也、禮讚の文は自證化他に約し、今所引の法事讚文は往相還相に約し玉へり、發願文亦同じ、元祖大師の云く我身一人まづよく往生をねがひ念佛をばげみて、位高く往生して急ぎかへり來りて人々を引導せんとなふべきなりと、「うまれてはまづ思ひ出んふる里の、ちぎりし友のふかさまことを」(新千載集源空上人)。
 蓮生願上品云々、惠心云、若生極樂、智惠高明神通洞達、世々生々恩所知識隨心引接、以天眼見生所以天耳聞言音、以宿命智憶其恩、以他心智了其心、以神境通隨逐變現、以方便力教誠示導云々、
 又世の人還相を報恩なることはしれども、往相を報恩なることを知るは希れ也、還相に往相を具せ

ざるはあるべし、往相に還相を具せざるはなき也、彼の土に到れば任運に拔濟の大悲發れば也、譬へば江戸に多くあること也、娘一人大名衆の奥様になるも一門が皆知行取りになる也云々。

●さうではいかうちうちくどかれたるけしきいかにつれなからん心も、げにとはさすがたもはれぬやうこそ。

註に、さうなくては何として此御恩を報せんやとて、聲もわななきうち涙ぐみてくどき立らるゝけしき、道心色にあらはれ至誠人を感せしむ、いかに無道心のしづ山がつ迄も感じ入べしと押しはからるゝ也、つれなきとは色もかはらぬこと也、心のたれぬかたなり、つれなき松に吹嵐といふに同じ心也。

歸命本願鈔講說卷二 終

歸命本願鈔講說卷三

(本鈔中卷)

註に曰、題號歸命の二字は横の三心也、願文安心の八字は觀經の三心也、彌陀經の一心も唯だ此の歸命の一念也。

●修行者又問ふていはく。

註に上卷の問答には機類を決し、此の卷には心と行とを沙汰す、即ち二重の問答あり。

●本願に至心信樂欲生我國といふは、ひろくいへば三心なり、要をとればたすけたまへの一念にたりぬと、のたまひつる。

是れ上卷にて、老僧の給ひし事なり。

●その三心とは、いかなる心にて侍るぞ、なごてか又たすけたまへとおもふ一念にわたるべからん、くはしくかたらひ給なんやといへば。

初めに豎の三心を問ふ、なごて已下は横の三心を問ふなり、なごてかとは、何とてか也、

●老僧の云く、よく問ひたまひたり、(來問を歎じ

て善哉といふ)すゝみても申たかりつるに、(本懷をあらはす)これなむ往生の大事にて侍るべし。

●なむとは言釋に、古言は奈毛、中古より奈牟と云へり、奈はことを云入るゝ辭、毛は助辭のみ、

安心僻越すれば念佛徒らに施して往生を得ず、是れを大事といふ、されば大師は淨土宗の大事は三心の法門にありとの給ふ、(七箇條起請文)例せば

天臺宗には一心三觀、眞言には阿字の大空三昧、禪家には見性成佛等を、宗々の一大事とは云ふなり、今も其の如く、我が宗の一大事といふは、往

生を期する道に三心といふ一大事あり、されどもこれなほ偏に心得る時は失を生ずる事ある故、諺

註此の下に勅修御傳中、舜昌法印の大師三心の法門に於て、或は豎或は横、機に對して御示し一準

ならざるを、評決したまへる語を引き給へり、湛師の引文其旨深哉、御傳に曰、抑上人ある所には

三心の要をくはしくをしへ、此れ則上に云ふ七箇條起請文に、淨土宗の大事は三心の法門にあるなり、もし三心を具せざるものは、日夜十二時にか

うべの火をはらふが如くにすれども、つひに往生を得ずといへり、極樂をねがはん人は、いかにもして三心の要を心得て、念佛すべきなりとの給ひ、又撰集三心章、三經私記、及御傳、語灯、に出づる所々への御返狀に、委しく三心を述玉へる如き、是智者學匠へ對しての御教示なり、智者學匠は三心を委しく解知領納して、三病を退治し、一向念佛三昧にて往生すべし、故に此機に對しては、委しく教へ給ふなり云々。

ある所には、三心の沙汰詮なきよし仰せられたり、大師の御法語に、よくも知らざる三心沙汰して、あしさまに心得て往生やしそんずらん、(七箇條起請文の取意)との給へる類なり、此れ愚痴無智の者へ對せられての御示し也、此人によるべき事也、疾前無藥機前無教とて、教の左右は機に就て差別する也、大師のかく兩様に示したまふを譬へば、沙石集に出づる、山神と、百足と、蛇と、足の多少をのみ論じて、道行くの要たる事を知らざりしをもて準知すべし、智者學匠の知具は百足

の如く云々、無智文盲の機具は蛇の如し云々。唯名號を唱れば、必往生すとばかりまめやかにたのみて唱れば、其の人の心におのづから三心もそなはりぬるを、中々に三心とてことごとくしく申なす程に、かへりて信心をみだる事も侍るなり、蛇に足をそへたらば、却て道を行きなやむべし、機具にたらはぬ事なきを、却て三心沙汰をそへば往生の道に滯るべし云々、信心とは念佛の事也、稱名の聲に一大事の往生を打ちまかする心といふ事なり、信は疑に對する事如常談云々。

かゝらん人の爲めには三心の沙汰無益なるべし、蛇は足なけれども、よく川を渡り、木にのほり、竹を傳ふて自由自在に行くが如く、愚痴無智の輩には、知不知のとりざたなく、唯念佛すれば往生すと勸むべしとなり、されば今日愚痴無智の人は、三心沙汰を打ちすて、所詮一度は死なねばならぬ、その死ぬる時に極樂に往生せばやと思ひ、口に南無阿彌陀佛と唱へさへすれば、決定往生遂る也、八幡大菩薩の神詠に、「極樂へ行かんと思ふ心

にて、南無阿彌陀佛といふは三心、扶木鈔に出でたり、極樂を欣はしく思ふに、偽なきは至誠心なり、往生を欣ふに、餘行を雜へず、念佛の一行に打ち固まりたるは深心なり、極樂を欣はしさに、聲に立て、南無阿彌陀佛と申さるゝが回向發願心なり、向譽上人曰、余が三心の具し様は、生あるものは皆滅す、泣いても笑ふても、祈りても藥でも死なねばならぬ、若し今にも死んだらばと氣がついて、助け玉へと思ひて南無阿彌陀佛と申すは、三心具足の念佛と存決して、人にも勧め吾れも申すばかりなり、兎角今度極樂に往生せばやと思ふ、正直の心向けを説き示すを三心といふと心得て、善につき惡につき、淨につき不淨についても、死を忘れぬ様に思ひならへば、自然と念佛が申さるるなり、その申さるゝ念佛は皆三心具足の念佛なり、「今死ぬと常の心に思へ唯、さなきは人の誠なきもの、夫が直ちに念死念佛、淨土用心にして、三心具足の念佛なれば、常に死を思ひ本願大悲の尊くゆるぎなきを思ひ、南無阿彌陀佛とくりかへ

し、申すが肝要なり。

若し日來は疑の心もありて、三心具足せぬ人も、聖教を學すれば道理にをれて、三心の發る事もあれば、左様なる人の爲めには、三心の要を知らんも大切なるべし、疑心を退治するに深心の法門あり、曰く、こざかしくして一行に入りがたく、本願念佛の信取りしめなき人にて、深心の聖教をよく學得すれば、機法二種の決信、就行就人の立信、正雜二行の得失、正助二業の分別、願非願の簡別、正定業之道理にをれて、一向但信稱名の行者となりて、自然と心具するものなれば、三心の法門を學することも大切なりとぞ、これ百足の足の如し云々、附て云、若少一心即不得生なれば、三心の内何れにても、一を缺けば往生を得ざること勿論なれども、殊更に深心の一について示したまふは、要中の要深心なればなり、(疑がひの心もの、もの字外を兼ねる字なり、具には疑がひの心も、虚假の心も、餘事回願の心もありて、三心具せぬ人もあり云々、)一向にこれを非とせば又

(640)

そのとがあるを、上に擧ぐる大師の、よくも知らざる三心沙汰して、あしざまに心得て、往生やしそんずらんなど仰せられたる等を依據として、一向に三心を廢却して、三心は無益の事など云はんは、大なる僻事にてあれば、誡め給へり、譬へば蛇や山神が、百足に足を切り捨てよと云はんが如し云々、このすぢを心得なば、上人兩様の御勸進、更らに相違をなすべからず。

知其の機に三心の法門委しく教へ給ふと、機具の機に三心の沙汰詮なきよし、仰せられたる兩様のすぢを心得分ければ、更らに相違あらずと、舜昌法印の評したまへる盡理の評決貴むべし、されば智者は、知具にて念佛して往生し、愚者は機具にて念佛して往生すといふ、不簡擇大悲本願の深旨を信受すべし。但し知具の人なればとて、念佛を申す中に三心を起すといふ事にはなし、三心は虚假、疑心、不回向、の三病を退治する法門なれば、この病を治する爲めに、この法門を學ぶ事なれば、知具といへども往生の爲めに念佛するところ

ろは、機具の人とかはる事なし、故に大師は、(念佛往生義)三心といへる名は各別なるに似たれども、詮するところは一向専念といへる事なり、一筋に彌陀を頼み、念佛修して餘の事を雜へざるなりと、(語灯七卷に出)又御遺誓には、唯往生極樂の爲めには、南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひ取りて、申す外には別の仔細候はず、但し三心四修と申す事の候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内にこもり候也、との給ひ、又稱念上人も、三心四修を沙汰する事は、一向専修になさん謀なり、一向専修になり終りぬれば、別に三心四修のさだめなし、たゞ念佛して往生を待つばかりなりとの給へり、此の意を古歌に「二つなく頼むになれば木のづから、三つの心はありけるものを」、又た「三つ四つとわけて教ゆる法の糸、思ひよるにぞ南無阿彌陀佛」已上、湛澄上人の諺註の意に依て、三心の横豎、知具機具の大意を辨じ畢んぬ。

偕て此下にて、向譽上人の俚語に、如來平等不簡

(641)

擇の大悲本願と、行者の助け給へと本願に歸仰する間を、親子の至親に譬へ合せて勸誡し給へること、至つて貴とき教示なれば、撮要して辯述すべし。俚語に曰く、念佛往生の安心は親子の如く心得、往生の起行は夫妻の道、貞節を守るが如くすべし、安心とは、十方衆生の機の方の心向けを云ふ、曰く、助け給へと思ふばかりなり、起行とは、正雜得失の義不義を云ふなり、晏子が曰く、忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見ゆすと、起行は本願唯稱なれば、一向唯信口稱なるべし、晏子又曰く、一心を以つて百君に仕ふべし、百君に仕ふるに一心を以つてすべからずと、一佛の本願にかなへば諸佛の本意に協ふ、諸佛を並べて修すれば、一佛の本意にもかなはずと、此の事龍山大善寺、開山讚譽上人の説法式要に嚴しく勸め給へり。世範卷上に云く、人の至て親しきは莫過父子云々、至は極也止む事なきをいふ、夫妻の間親しけれども、至とは云はず、唯貞節の義のみなり、故

に昵と計云ふ、若し道に背く事あれば義絶離別す、父子の間は然らず故に至といふなり、(楞嚴經、勢至圓通章如母憶子云) 偕親子の間は、形貌の好醜をとらず、心の善惡を云はず、機の利鈍を論せず、至て親しきは親子也、其故は、凡夫顛倒の迷妄姦熟を根として出生したる故、一向善惡のわけなしに、ひたまよひに愛するなり、夫妻の間は形貌の好醜、心の善惡、機の利鈍をわらぶ故に、昵とはいへども至とはいはず、今も又爾り、本願を除きて、自餘の諸善功德聖道自力の修行は、三學の器量を選び、心の善惡、機の利鈍に、悟入の遲速を論する故に、至極究竟とせず、故に夫妻の間の如し、爾るに、彌陀の本願念佛往生の安心は、是れと異にして、至て親しき親子の如し、其故は如來不簡の大悲より興起する故なり、抑彌陀の因位法藏菩薩の發願は、初地分眞如の位に至り、同體佛性の理を明らかに悟り玉ひ、さては一切造惡の凡夫なれども、助け玉への念だに起して、南無阿彌陀佛と申せば、決定往生するぞと究竟し玉ひ

て、念佛往生の本願を建立成就し玉ふ、平等一子の誓願なれば、善惡利鈍の撰びなく、皆悉く拔濟し給ふ至つて親しき親子の如し、是を不簡擇の大悲と云ふ也、此間の意得を一の事實を以て教勸せば。

橋氏妙沖 (托、事實卷八)

昔より子の行方を尋ねし親は多けれど、子として親を尋ね慕ひしは稀なる事也、今は行者の安心とする三心の大綱を辨する事なれば、子の親を尋ね慕ひし因縁を引用して談する也、世間を見るに、祈禱二世安樂の爲めに念佛申す人は數塵沙の如くなれども、唯往生極樂の爲めに念佛申す人は甚だ少し也、とても念佛申すとならば、唯往生極樂の爲めに申されよ、さすれば子として親を戀ひ慕ふが如し、今此の三心は、親子の如くと教勸する行者の安心なれば、此縁を引ひて本願大悲を示し、往生極樂の孝養を勸むる也、妙沖の斯く孝養の誠を盡せしは至誠心也、又斯く志のよき婦人なれば、定めて妻とせん、妻とせんなどいふ人もありつら

んなれども、一向に心を振らず、唯父の歸葬を願ひ、遺骨を持歸りて孝養を遂げたるは深心也、斯く心を盡し父の恩免を蒙り、正五位下の追贈の詔を奉り、耻辱をそゞぎ我念願を遂げたるは回向心也、豈人の至て親きは親子に非や、又至て念佛者の要なるは、助け給への三心に非ずや、妙沖も中途にて孝情ゆるまり、誘ふ水に隨ひなごせば其の素意を果さんや、又念佛者も、若し名利の爲めに二世安樂と回向せば、争てか往生の本懐を達せんや、爾れば異學異見の爲めに動亂破壞せられず、唯一筋に往生極樂の爲めに打ち傾きて念佛せば、三心具足決定往生の行者たるべし。

●そのゆゑは。

此の下、三心の大綱を示すに選擇集を寫し給ふ。

●經には三心を具するもの、かならず彼の國にうまるゝとゞき。

觀經に曰、若有衆生願生彼國者、發三種心、即便往生、乃至具三心者必生彼國と、それ念佛者の三心に於ける、鳥の兩翼車の兩輪の如く、必

す具足すべき也、云々。

●釋にはもし一心もかけねれば、うまるゝ事をいはずと云ひて。

偈語に曰く、諸餘の行業を交へざる一向口稱の行者なれども、名利の心ありて人目を飾るときは、至誠心を缺く、(是に因等起、利那等起の別ありて、因等起の虚假は生せず、利那等起は生ず)、又祈念祈禱二世安樂等と回向するは、餘事回願なれば回向心を缺く、又虚假不實の心もなく、餘事回願もせざれども、慈悲智慧持戒道心のすけをさせば深心を缺ぐ、是等を若少一心即不得生と云ふ、これ即ち前にいふ、鳥の一翼を缺けば空に飛ぶ事を得ず、車の一輪を缺けば道を走る事を得ざるが如し云々、決疑鈔に曰、所言三心同時相應、更不可有具闕不同、然而前行位隨行者根機、有具一具二謂虚假增者缺、至誠心疑心增者闕、深心不回向增者闕、回向心已上、選擇集曰、明知一少是更不可、因茲欲生極樂之人、全可具足三心也、已上。

●そのおもむきゆるがせなるまじきことゝみわたるり。

選擇集曰、行者能用心敢勿令忽諸已上、三心具すれば往生し、若し一心をも缺けば三惡道に墮す、後世の昇沈苦樂の差別、今の三心具不具にかゝる、豈に忽諸にして可ならんや、須らく用心すべき事なり。

●されば念佛するものゝ中に往生をとげぬが侍るは、一心もかけにけるこそ。

聖覺法印の唯信鈔に曰く、世の中に彌陀の名號を稱ふる人多けれども、往生する人のかたきは、此の三心を具せざる故なりと心得べし、已上。

偈語に曰く、御傳並びに沙石に出たる、天王寺の東門の阿闍梨は、日本第一の唱導師なりしが、平生願ひの通り最後に十念高らかに稱へて命終せられけるが、三年忌といふに弟子の僧に託していふやう、吾れ平生名利の念に住したる故に、魔道に落ちたりとさめぐ泣かれたりと、この阿闍梨平常人に尊ひられ、歸依せられんと思念したる虚

假増の人なれば、三心不具の故に、念佛は申され
けれども往生せず、魔道に墮ちられたり、慎むべ
き事なり、故に本文に、

●三をぐしたらんもの、うまれぬはあるまじき
事なり。

是れは釋の三心既具、無行不成とあるを御釋し給
ふなり、註に三條派、名越派等には、三心具した
る者にも不生の類ありといへり、一條派白旗派等
には、心具の者に不生の類なしと存す、(委しくは
心具決定往生集、述開口決抄等を披きて知)、已上
三心の大綱總釋畢、已下は豎の三心の釋。

●その三心といふは、一には至誠心、(本願の文に
は至心と云ふ)、二には深心、(本願文には信樂と云
ふ)、三に向發願心、(本願文には欲生我國、觀經
と對し見よ)、一には至誠心と云ふは眞實の心と釋
して、虛假の心をいましめたり。

註、疏云、至者眞誠者實、又云、不得外現
賢善精進之相、内懷虛假、已上、虛實眞假と相對し
て、虛假は眞實のうら也、遊仙窟に、二字引合せ

ていつはりと訓ず、古歌に「西へ行く岸の岩かど
ふみ見れば、苔こそ道のさはりなりけり」、するど
き岩かどには怪我せねども、苔にはすべりて怪我
する也云云、惡業は慚愧する故往生を障へねども、
虛假は往生をさゆ、云云。

大師の曰く、人に過たる往生のあだなしと、意は
鳥獸に對してはかざる心なけれども、人に向へば
飾る心の出るものなれば、欣はしくもなき極樂を
欣ふ振りを顯はし、往生がしたくもなきに、往生
のしたき様に、口にも云ひ、身にも世を厭ふ様に
見せるものなれば、人に過たる往生のあだはなし、
との給へる也、いましめたりとは、誠の字にて、さ
なせぞと制する義なり。

偕此三心に具不具、往生得不得を分別するに、多
くの四句あり、先至誠心の虚實と、多少と、始終と
に、各々四句分別あれば略示せん、一には一向虚
假心、(外實内虚人也、一向誑惑渡世の人也、全此人
不可得往生)是は決定不可往生の人也、謂く身す
ぎ口すぎ、名聞の爲にする也、彼一休和尚の畫贊

に「かねたゝきかねがなければかねたゝく、かねさ
へあればかねはたゝかぬ」と詠る類、又西の尾東
の尾の上人の類也、二には一向眞實心、(内外俱
實の人也、見淨土宗の行者也、決定往生の人也、外
虚内實の人も今に攝すべし云々、隱德乞安居料(托、
事實卷三)是決定往生之人也、曰く單直仰信、還愚
痴の行者也、爾し一向眞實と云へばとて、凡夫の
事なれば、歷縁對境の世間の名利は起るべし、唯
往生の解行に付て、名利の心を發さざるを一向眞
實といふ也、三には虚實俱具心、是或可往生也、
謂く因等起に於ては半は眞實の因等起を發し、半
は虚假の因等起を發す也、半實の時に命終すれば
往生し、半虚の時に命終せば往生せず、故に或可
往生の機といふ也、(但し此機は通途の機に非ず、
別に一類の機也、四句を作る時は此の機ある也)、
四には非虚非實心、是は未入佛法世間十惡の罪人
なれば、勿論不可往生なり、此の機を擧ぐるは、
四句を作る時の法也、論藏に四句を作りて法相を
釋するとき、第四句を謂除前相と云て、今要に非

る事を擧るは四句を成せん爲めなり、(頌疏四十七
入丁等に委し云々、已上一向の四句畢)、
次に多少の四句とは、

一に多虚少實心、是れは不往生の人也、此事一往
にては不審也、少實の故に小分往生を許すべきか
爾らず、故は小湯を水に入るゝ如く、少實何ぞ往
益を期するにたらん可思、二に多實少虚心、是は
若可往生の機也、是又一應にては不審也、多虚少
實決定不往生ならば、多實少虚心は決定往生の機
なるべし、少湯を江河に入るゝの譬分明也、況ん
や多實願心の功を以て少虚の罪を滅し、佛の加念
を蒙るべし、護念を蒙らば何ぞ往生を遂げざらん
やといふに、是れに口傳あり、上昇難下沈易也、
謂く上昇には少障も逆流の故に昇り難し、故に若
可往生といふ、多虚少實は順流の故に、少障あり
ても障りをなさず、故に不可往生也、又多實願心
の功、少虚の罪を滅すべしとは理に叶はず、凡そ
他力護念の益を得ることは、至誠心を具した上に
蒙る事なり、護念に依て心具となることならば、

一切凡夫不殘往生すべし、豈に然らんや、猶因等起一向眞實の行人は、剎那等起に暫時虛假を發すと雖も、臨終には決定して正念に住して往生を遂ぐべし、而るに今の多實少虛の機は、因等起の多實なるに依て、多分往生はすべけれども、若し少虛の時命終せば往生すべからず、故に若可往生と定むるなり、されば此の因等起一向眞實の人の、剎那等起に虛假を發すは往生し、因等起に虛實雜起するは、往生不定の義趣能く、分別すべき也云々、三に多少俱實心、是れ決定往生之人也、四に多少俱虛心、是れ決定不往生の機也、已上多少四句畢。

次に始終四句とは、一に始虛終實心、是れ往生の機なり、三心の義を聞きて、懺悔念佛する人云々、(念稱法子)二に始實終虛心、是れは不可往生也、自造罪退、異學異見退、命欲終時、及び懶惰放逸等にて、三心を退轉する類なり、(退者下種)、三に始終俱實心、是れ

決定往生の機也、知具、機具、俱に一向信の行者也、四に始終俱虛心、是れは不可往生也、始より名聞利養にて、終に至るまで回心せざる人、已上始終の四句を畢んぬ。

●念佛せんにまことしき心ありて、いつはる心なかれとなり。

是れ上の句は至誠を勧め、下の句は虛假を誡むるなり、其の誡むる虛假とは、現世の名利の爲めに申す等をいふなり、至誠といふは譬へば人あり、故郷へ歸らんと欲し、或は人の許へ行かんとするに、志の厚きは風雨寒暑の艱難をかへりみず、思ひ立て行く也、志の薄きはこれに反して知るべし、途程百里の定數は、志の厚きも百里は百里志の薄きも百里は百里也、日に十里二十里づゝ行くに、日に五里六里宛行くとの違ひこそあれ、志に厚薄ありとて、道程は近くも遠くもならぬなり、所詮行ふと思ひ立つ誠さへあれば行きつく也、今もまたその如く、所詮この度往生したいといふ至誠心あれば、志の厚き日々五萬十萬の者も、志の

薄き五十遍百遍の者も、皆悉く往生する也、故に導師の御釋に、一切善惡凡夫得_レ生者、莫_レ不_レ皆乘_レ阿彌陀佛、大願業力爲_レ増上縁と釋し給へり、若し志の厚き者を撰び取て、薄きを捨て給ふ事ならば、吾儕如きはいかせん、一切善惡凡夫と一とつらに、不簡擇の大悲本願實に頼もしき限りにこそ云々。

●たとへば人の心にはさまざまもたもたはぬ事なれども、ことばにはたもたふよしにいふを、まことなきいつはりとは申すやうに、念佛せん人の心も、このなすらへにしらぬべし。

●たとへば、准の字也、古歌に、「偽りのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからまし」。●心のうちには往生の事迄も思ひいれずながら、なべてこのごろの世のしきなるを、いかうたてうとたもひて申人も侍るらん。

是より在家出家共に、虛假の起る筋を示し給へり、註に、是れは名聞の念佛也、我心から往生がしたくて申にはあらねど、大かた世間のならひなれ

ば人のそしりやあらん、老者の後世願はぬは妻子の心も耻かしと思ひて申し、或は僧などの世に貴く思はれんとて、人目ばかりに道心ある風情して申すは、皆虛假の念佛也、うたてうとは、轉の字にて、意はよからぬ事を云ふ也、委しく言釋に云々、●もしは又身のすてがたきまゝには、世わたるはしにとりなして、となふるものもありぬべし。

註に、是は利養の念佛也、墨染の形に身をやつし念珠を手にくるも、詮はたゞ人の歸依せられて世を過ぎんとの謀り事也、其の心には露塵計りも後世を思はずして、渡世誑惑の爲にまことしく念佛申す、是れを利養の念佛と云ふ也、續後撰集(貞慶上人)「これをこそ誠の道と思ひしに、なほ世を渡るはしにぞありける、一休和尚の、鉦たゝきて行乞する坊主の繪贊に、「かねたゝきかねがなればかねたゝく、かねさへあればかねはたゝかね」大開秀吉公の御前にて、或僧殊勝らしく念殊をつまぐり、微音に念佛しければ、上人は、「霞の衣きりの珠數、あまりうたてきそら念佛かな」し

ら涙のたちまるとき世渡りの、ためにそめなす
黒の衣は、無刀の大賊罪は強盜より深し云々。

●これらはみな、心は名利のかたにたもむきて、
行は往生を心ざすよしなり。

是れ次上の世の式と、世渡る橋に取なすとの二義
をさすなり、西の傾く木を伐れば必らず西に倒
る、東に傾く木を伐れば必らず東に倒る云々、夫
れ名聞利養は貪煩惱なれば、凡夫は生得の目鼻に
等し、ければ能々心を用ひて制せざれば、起らず
といふことなし、其發起するに就ては、命を捨つ
るに至りても願する事なし、(能因の事、西尾東尾二
上人の事、(托、事實卷七)

爾れば虚假と眞實とは、他人の知るべき事に非
ず、唯己々が心に願みて慎むべき事なり、されば
鎮西上人は虚假を禁じ給ふとは、右の縁を日々
の物語りにし給へりと、註に、何事をするにも誠し
き心なくては成就する事なし、唯砂を蒸して飯と
なさんと思ふが如し、名聞利養の爲めに念佛せ

ば、累劫にも往生すべからずと、砂を蒸してとは、
禪家龜鑑に云く、婚を帯びて坐禪せば、砂を蒸し
て飯となさんが如し、唯熟砂と云ふべし飯と云ふ
べからずと云々。

竹谷乘願上人の云く、疑心者往生聖教中明之と
いへども此人は諸の功德を修して(念佛及餘行)往
生といふを疑ひ乍らも、猶罪福を信じて諸の功德
を修して胎生を得る人の事也、大經下之に曰、
佛告慈氏、若有衆生以疑惑心修諸功德願
生彼國不了佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣
智、無等無倫最上勝智、於此諸智疑惑不信、然
猶信罪福修習善本願生其國、此諸衆生彼
宮殿壽五百歲常不見佛、不聞經法、不見菩
薩聲聞聖衆、是故於彼國土謂之胎生、虚假の者
の往生は一分もなき事也、已上、虚假の者には願生の
心なく、唯誑惑名利の心のみなれば、往生すべき
道理一分もなき也。

偈語に曰、或大和上(敬首)此註の累劫不生とい
ふを論じて曰く、名利の爲め念佛を累劫不生とは、

ちと強き註也、名利の念佛でも遠生の因とはなる
べし、誑ひ淨瑠璃の念佛さへ遠生の因となれば、
名利誑惑の念佛も、遠生の因とならではと勸進せ
られたり、然るにこれは甚だ背はれざる説也、註
の累劫不生とあるは、則疑問鈔下卷、至誠心の釋
に、妙樂大師の弘決四之一^三文を引證したま
ふ段を、取意潤色せられたれば、累劫不生と判す
るは相傳の正意也、夫れ願は御者の如しとも、又
た溝渠を穿つ如しとも、譬へられて、一切の諸善
功德は願に従ふ事、牛馬の御者に従ひ、水の溝渠
に流入し、終に大海に入るが如しと也、猶此の義
耳近く譬へば、金を拾ひたるを、金を盗みたるを
云何、金を拾ひたるは無思慮なれば、誑淨瑠璃の
念佛の如し、盗みたるは故思の煩惱なれば、虚假
に偽れる名聞利養の念佛の如く、遠生の因ともな
らず、上に却て邪因邪業にして、輪回沈淪の業を
造り堅める也云々取意。

因に不具三心に、利益の有無を云は、疑心には
二種ありて、本願を疑ふは往生せず、自身を疑ふ

は往生を許す、(三心要集、疑問鈔、五重拾遺)又本
願を疑ひながら、猶信罪福の機は、胎生を得るこ
と次に辯するが如く云々、餘事回願は餘佛の淨土
を願ふも、結縁の益を得るとは、理在絶言、假令娑
婆執着より壽福を願ふも、少分遠生の因と成らず
といふことなし、大乘の實説は、一切の善は眞如よ
り起る、其善何ぞ眞理に歸せざらん、故に近果は
有爲に報ふと雖も、遠果は成佛に至らずといふ事
なし、神佛に祈禱の法あるは、欲の釣を以てひき
て結縁をなし、此遠因を植むしめんが爲也云々、虚
假の行者のみ結縁の益ある事なく、累劫不生の判
釋あるは、誑惑不善の心よりなせば也、疑心も煩
惱なれども、一向不信の者には疑心もなく、志は
あり乍ら法門に暗き故本願を疑ひ、又本願をば疑
はざれども、身を顧りみればあまりに不調なる故
機を疑ふ、云は、憐むべくして惡むべき機にはあ
らず、故に一分は往生をも許さる云々、又餘事回
願も餘土を欣ふは、機教の應不も、願非願の差別
も知らざる故、願生の益をこそ得ざれども、總じ

て佛法歸依の人にして不信邪見に非る故、結縁遠生の因をば失はず、唯々此虚假不實の人のみ、誰或渡世名聞の悪意業にして、佛法外に出たる故、遠生微因の益を得る事なき也。

●かゝるは虚假にいつはれる念佛なるべし。
註に、不空罽索經を引て云、内懷^三魔朽^一外現^三賢善^二方便作行貪^三求名利^一自損損^二他共入^三地獄^一已上、
●たい心に往生がしたければ、くちに南無阿彌陀佛と申さるゝこそ、眞實にまことなる念佛にては侍れ。

此の章段、中卷一卷の骨自也至要也、言葉和らかに、口稱に至誠心具はる旨を顯はし給へり、兎角泣いても笑ても行かねばならぬ死出の山路の旅なれば、死なねばならぬと決定して、後世助け給へと心の底に往生を願ひて、南無阿彌陀佛と申すべし、是れ即ち至誠心にて決定往生の念佛ぞと也、上には、たどへば人の心には等と、譬へをもて虚假を誡め、今は譬へを以て眞實を勸むるなり云々。
●たとへば何事もかざりたる世の中に、人のゆの

ほしき水のほしきといふのみぞ、いつはならぬ事にて侍らん、いさゝかにてもほしき心のなき程はこはれぬ事にてあれば、そのほしき心にこさうすきはありとも、こふことば、みなまことなるべし、(これ眞實のたとへなり、)後世にむけてもかくこそありたけれ、すこしにても往生がげにしたくたほねて、南無阿彌陀佛となへんには、そのねがふ心にふかきあさはありとも、申さん念佛はみなまことなるべし。

註に、人の心に上中下ある故に、至誠心にも九品あり、如何程淺くとも誠は誠也、信心も爾か也、鶴の足は長く鳩の足は短し、それぞれ生れつきのまゝなり、上人云く、われら如きの凡夫、木のれらが分に付て、強弱眞實の心をたこすを至誠心となづく、(往生大要鈔)

願心淺深の分齊、譬に出る湯水のほしきといふに付て三根を分別せば、至て渴きの甚しき時、喉より火の出るが如くなれば、乞ふ志至つて強きが如く、至て願心強きは導師御在世の百有餘人の捨身

往生、大師の御弟子津戸の尊願、及熊谷蓮生の、

「此の世をばたきいともこりはてゝ、もねたつばかり彌陀ぞ戀しき」と讀める類云々、行にて曰は、三萬六萬十萬者等云々、又渴する事火の出る程にはなけれども、驗しき坂道など登るか、酒の酔ひ醒め等には乞ふ事急也、中機の願心は、「長けれど何れもひけん世の中の、憂を見するは命なりけり、」あゝいやなる娑婆苦界の有様や、早く往生遂げなばと厭欣の思ひ深く、世をひとくねりくねりたる色ある人を云ふ、行にて云は、千遍已上一萬二萬に及ぶ云々、又少し渴する人は、やれ湯水欲しやと乞ふ程にはなけれども、どうやら渴く氣味もあれば、一つ呑んだらよからふにと思ふより乞ふ位の事、下機の願心は常に厭欣の思ひ度々も發らざれども、いづれ一度は死なねばならぬ事なれば、その時には御來迎に預りて往生を遂げんと思ふ人、行にて云は、日課十遍二十遍五十遍百遍等、誓ひて唱ふるが如し云々、此の三機に、各々三根を分別すれば九品あり、猶委細に分別せば八

十一品となり、無量無邊に分る也云々。

●こゝろざしふかくば上品に生れ、あさくば下品にこそ下るとも、皆往生の埒の内には入りぬる也、埒は埒の誤字なり、埒は集韻、芳無切音孚、説文に郭也同郭云々、埒は力輟切音劣、馬埒也、字典に云、書界分程曰埒、れつらつ音通云々。

註に、其の眞實の心深くして、命をも捨て、手足を切り、身の毛もよだち涙を流す程の人は、上品中品にも生るべし、それ程強く盛んにこそなくとも、往生の志だにあらば、弱くとも薄くとも下の三品には生るべし、兎角往生の人数にはづれぬ也往生大要鈔に曰く、三心につひて、強き弱きあるべしとこそ心得られたれ、弱き三心具足したらん人は、位こそさがらんすれ、なを往生は疑ふべからざる也、それに強盛の心を起さずば、至誠心かげて永く往生すべからずと心得て、濫りに身をもくだし、剩へ人をも輕しむる人々の、不便にたほゆる也已上。

●その下品にうまるゝ程のまことは、よにやすき

(652)

事なるべし。
註に元祖大師至誠心をよみ給へる歌、(翼贊三十卷)「往生は世にやすけれどみな人の、まことの心なくてこそせね、世には凡そ廣き心也、誰れにても心也。

俚語に曰く、(註には心の強弱の沙汰のみなれば、通師起行の純雜にて至誠心を示し給へる、大師の御法語を引て示し給へること、勸誠の妙也云々)實この心とは、死を忘れず念佛するは至誠心也、歌の意を解して曰く、念佛往生の本願の至誠心なれば、往生の外にこの世の身すぎ口すぎ、渡世誑惑の虚假不實を翻したる心にて、一筋に後世助け給へと本願を頼み、彌陀一佛の名號を稱念するを、至誠心と云なるべし、故に語灯(二卷三十)に曰、至誠心とは餘佛を禮せず、彌陀を禮し、餘行を修せず彌陀を念じて、專にして專ならしむる也と、又七箇條の至誠心の御言葉に云く、念佛の一行を勵むがゆゑに、眞實心とはいふ也と、然れば安心起行共に一向なれば至誠心也、少しにても偽りて、

虚假を交へ餘行を修せば、至誠心缺けたる也、爰を「往生は世に………」と詠じ給へる也。
●ゆめくは、往生をかたくはたもふべからず。
ゆめくは、齋てふ言葉にて、いみ謹むの義になれば、さな思ひそと誠むる義也(いゆ普通)實に南無阿彌陀佛と云ひさへすれば往生する、易修易往の念佛往生の本願なれば、甚だ心易き往生の教法也、されば元祖大師の御法語に、(和語灯二四)云く、三心の中の至誠心をさまぐに心得て、ことに誠をいたす事を、かたく申なす輩も侍るにや、しかれば彌陀の本願の本意にも違ひて、信心かけぬるにてあるべき也已上、
註に此の心に付て、今も昔も異議ありけり、或は熾盛の心と云ふ事、(蓮華谷、九品寺覺明上人等、此計也、宗門之中にも心得悪しき問々此の計あり)或は佛の眞實と云事、(一念義所立、凡夫之念は皆雜毒と云て、三心を佛所具之心と云々)、或は實相觀解なりと云ふ事、(臺宗之義)或は妄念交はれば誠心に非すと云ふ、(諸宗一統他門の教皆爾り、別

(653)

して禪家等に示教する也、)或は此心は内外不調を嫌へば、外を謹まぬがよしといふ、(是別して一念邪徒之常談也云々、)或は韋提の眞心にひとしめ、(是又一念義之教勸也、愚禿が和讃に、慶喜相應一念後、與韋提等獲三忍、)或は善導の熾盛にたくらべて、すゝめし人もありけんかし。
光明大師、道場に入て念佛し給ふに、寒冷に汗を流し、聲つき體倒るゝに至らざれば休み給はずと、是は導師の別徳にして、全く三心の中の至誠心と云ふには非ず、夫れを悪しく心得たる人々は、寒冷に汗を流して念佛せざれば至誠心に非ず、或は首をふり體をゆすり、鉦をせめてて申すとき、三心を具すなど勸るあり、是れ甚しき誤りなり、至誠心とは唯偽る心なく、ありのまゝにて念佛申すを云事也、此の事を淨土要略鈔に、心得易き譬をもて示し給へば擧て示さん、譬へば三人の賓客あらんに、一人をばはやくかへれかしと思へども口には色代してしばし留れといふ、是を偽りといふべし、一人を深からねども、心の中にもとま

れかし、何となき昔物語をもせんと思ひて、とまれといふ、是れはあさけれども、心に思ふ事を口にいへば、猶まことにあるなり、一人をばなほざりならぬ大事、いはんと思ふに此の次ならでは、後にまたといはん事もあらじなど思へば、さらば歸らんと云ふも、身もいたき計りにねはて、とまれといふ、是はゆるしき深き實にてあるべし、此の三人はじめの一は偽、後の二は淺き深きのかはりめあれども、同じく實の心といふべきなり、今往生のまことも是れにて知りぬべし、往生を欣はずして、言葉に出で願ふ由をいはむこそ、虚假とはきらふべけれ、心に願ひて、口にも云ひ身にもふるまはんは、淺くとも實にてあるべければ往生すべきなり、更に嫌ふべからず、總て至誠心の下の釋には、自力といひて嫌ひたる事もなし、また勇猛なるべしとすゝめたる事もなし、唯嫌ふ言葉には偽りを出し、勸る言葉には實あれといへり、大師の勸めのまゝに心得て、外の語を加ふる事なかれ已上、總てと云ふより已下總結の文、能々

領納すべし、自力といひて嫌ひたる事もなしは、一念義の邪を簡び、又勇猛等とは、強盛の義をわらび、唯嫌ふ言葉に等とは、不得外現賢善精進等の御釋、一切衆生心口意業所修解行、必須眞實心中作等の御釋をさす也、是が導師の勸めのまゝに心得て、外の語を加ふる事なかれと、結し給へり。爾れば在座の面々、願生の心偽らずして南無阿彌陀佛と唱れば、決定注生毛髮計りの違ひもなく往生する故に、本文にゆめゆめ往生をかたくはたもふべからずとの給へり。

●されども人の心すなほならぬより、やすき念佛にくせもつきぬるこそ、返すくほいなくたぼゆれ。
註に所詮至誠心と云ふは、正直の心也、曲れる事を嫌ふ也、眞正直にてすらくと申す念佛也、(既に願文に欲生我國とあれば、唯往生の爲めに申すを眞正直にすらくと申すと云ふ也、)夫れに名聞の癖がつき、利養の癖のたこりて、往生せぬは本意なき事也、先づ其の惡癖の根本が貪煩惱の名利

也、故に今は其の根本を擧げて誠められたり、枝末につくる惡癖の其少分を云は、或は持戒のくせを付け云々、或は慈悲道心の癖をつけ云々、或は口傳相傳の癖云々、或は祈禱或は御禮、或は信心、別して現當兩益二世安樂の惡癖、天下滔々として惡風をなす、可悲可痛云々、故に本文に返々ほいなくたぼゆれと歎き給へり。

●人ごとにつくろはぬ心にて、たゞありに申す念佛ならば、みな往生はしてんかし。
註に、此の世の無常なるがあじきなさに、あはれ往生を遂げやと思ひて、南無阿彌陀佛と申すは、正直にありのまゝなる念佛也、名利の繕ひ飾りなき也、たゞありとは、ありのまゝといふ如く、つくろひ飾りなきを云ふ也。
●凡夫のならひなれば、此世さまの事こそあらめ、往生の方ばかりは、ねんじてさな侍りぞかし。此一段の勸戒なき時は、凡夫決定往生の安心立難き也、所以は煩惱具足の凡夫は、諂ひ飾り偽り曲りて、人を誑かし迷はす事は性得の持前也、され

ども後世の勤めに向ては、堪忍してさなきやうにせよとの諫めなり、如來の本願は元來、本爲凡夫兼爲聖人として、凡夫の往生を本意と誓ひ給ふ故に、今生世間並々の名利は、凡夫性得のまゝに許されたるは、甚だ貴き事に非ずや、故に二祖上人の云く、凡夫は歷縁對境の名利は可起也、往生の解行に於ては一向眞實なるべしと云々。

さて凡夫とは、彌勒問經に曰、遠離聖人法、染著身見等、住五欲資生、已上、大論に云、愛妻愛子名爲凡、惜身惜命名爲夫、已上、亦百喻經下、夫婦爲食、餅無言要期の譬、これは凡夫内の三毒に喩ふ、亦涅槃經に、猴を生け捕る爲めに、木葉にもちを塗り、菓實をつけ置いて捕らしむると、是は外の五欲に比す、此の二喩は凡夫たる人には比較すべし、かゝる淺間しき凡夫なれども、後世の爲めには堪忍して、人見せ名聞利養の爲めにせず、亦餘法餘行の脇目せず、祈念祈禱二世安樂と回向せず、唯往生極樂の爲めと振り向け欣ふべ

しと也、此の事後心の者は何もむつかしき事はなけれども、初心の内は甚だ難し、名聞利養は性得の凡夫なれば、此の世の上の持前が、得ては後世欣ふ念佛の方へも出たがる也、故に本文に念じてさな侍りぞかし、とあり、念は字書に常思とありて、絶えず心に思ふを云ふ也、是れも惡の方は易きなり、最愛可愛の色念、食ひたい飲みたい儲けたいの貪念は、相續して絶えねども、名聞にせず利養にせず、と云ふ善の方は思ひ兼ねるを用心して、強いて思ひならべと也、さな侍りぞかしとは、さはしかの反にして、俗にさうといふ意、なは勿れの約めにして誠むる詞なり、意は此の世の上の名聞利養の念を起す如く、未來の爲めの念佛に名聞利養の念を發すこと勿れと誠め給へる也、されば註に、物毎に名利の念の起るは、凡夫の定めたる習ひなれば、此の世の事にこそ、名利を得捨てずとも、後世の事にはこらへて、さうなきやうにせられよかし、との誠め也、此の御誠め則ち我門相傳に符合して、實に末世の凡夫往生の一大故實

也云々、若し此の相傳を得ざれば、邪僻に墮して往生の徑路を閉ぐ事なれば、用心の爲めに示すべし、先づ一念義の邪立は凡夫の念は皆雜毒、些少も正心ある事なしと立て切て、後生の資料を奪ふ事、教行信證等、至誠心の事を云ふ下は悉皆爾り、爾らば觀經の三心、大經の願文等は、如何に云ぞといふに、願文の至心信樂欲生我國、觀經の至誠深心回向心は、皆佛の所具の心にて行者の心には非ず、其の佛所具の妙心を皆雜毒の凡夫へ、御回向なし下さるゝ故、即便往生遂る等と邪勸をなすが一念義の邪立也云々、次に聖道自力の人は、別發大悲の本願を知らざる故、後生の事は勿論、此の世の事にも名聞利養の心ありては、往生遂ぐべき理なしと立て切るが至つて多し、是れ唯因果應報の理に泥みて、超世の悲願を知らざる故也、(此事委しくは大原問答の前序、勝の義を許せば、易の義を許さる下を見て可辨、)後に相傳の正義とは、委しく上より辯する如く、凡夫は性得の諂曲誑他、此の世渡りの中にも、是を斷せ

よ是を伏せよとあることならば、我儕凡夫は永く往生の望みを絶たんに、此の世の身すぎ世すぎの爲めの諂曲誑他はさもあらばあれ、後世往生の爲めの念佛を、名聞利養の爲めにせざれば、皆往生を許さるれば、往生の望みなくばやみなん、分に隨ひ極樂へと志ざす心さへあれば、皆往生の埒に入ることに忝き限りに非ずや、あゝ危い哉、一念邪義は世間に瀰漫し、聖道自力は八宗九宗と廣きに、邪坑にも墮ちず自力執情にも泥まず、彌陀超世の本願、兩祖開宗の正義に歸入せん事、げに如何なる果報ぞや云々、(洛の上人勘定場にて往生のこと)註に、所詮これは正直の心也、心の正直なる人は自ら神佛の御心にも叶ふ也、殊に淨土宗たる人はほれぐと正直なるがよく侍るぞと、從來云ふ如く、たとひ心は諂曲なりとも、往生の修行計りは正直なるべし、其の正直と云ふは名聞利養の爲めにせざる也、亦元祖大師、至誠心の體を釋し給ふに、(和語灯一卷^{三十一})至誠心は深心と(深心とは、餘佛を禮せず、餘法を終せず、念佛一行にて往生

疑ひなきを云ふなり、)回向心(回向心とは、現當兩益二世安樂、祈念祈禱、及餘佛の淨土に往生を欣はず、唯々極樂往生の爲め回向する也、)とを體とす、この二を離れては、なにゝよりてか至誠心をあらはすべき、廣く外を尋ぬべきにあらずと云々、爾れば深心の一行と、唯往生極樂の回向心あれば、虛假不實の病なき至誠心具足にて、決定往生の行者なれば、仰で信じ伏して一向專念に稱名の相續が肝要。

已上三心の大綱と、至誠心の義を辨じ畢ぬ。
●二に深心といふは、ふかく信する心なりと釋して、往生なうたがひぞといましむる也。

疏曰、言深心者即是深信之心也、上、夫深心は宗門元由、往生極樂の根基なれば、説聽共に浮心を驅除して思ひを爰に留むべし云々。

先づ宗門開出、深心に依る義を示さば、了譽上人云、(十八通)總依二代別依三經、總依三經別依二經、總依二經別依一句、總依二句別依一字、と次第省略の頌文を作り、信の一字を以て

建立する所の淨土宗也と、定判したまへり云々、偕此の信心と云ふ名言に就て、聖道淨土の別ある事を知るべし、始めに聖道自力の信心とは、自の三學の力を以て自身即佛と信じ、或は是心是佛等と信するを聖道自力の信心と云ふ也、畢竟我心の強弱進退にかゝはり沙汰するが、聖道自力の信心也、たとへば兼好が徒然草六十九段に出る、大根の精、敵兵を防ぐ事、又沙石集に出る萬病に藤こぶを妙藥とすること、空願寺の盲僧白紙を金色の佛像に拜みなしたる、仙樹に登り仙河に浴し、恒河を淺く渡り、王霸がこた河を渡り、李廣が矢の堅石をうがちし等、皆悉く聖道自力の信心の譬説に評量すべし、其故は大根も押領使も、一己に限りて他の及ばざるわざなり、白紙を金色の如來と拜み顯はす事も、彼盲僧一人に局つて他の及ばざる所にて、自の信心力の致す一機の所感なれば、聖道自力の信心の譬とすべし云々。
次に淨土他力の信心とは、信佛の因縁を以て、報土に生ずるを他力の信心とは云ふ也、聖道自力の

信心と一混する事勿れ、信心の名言は同じけれど、其義各別也、既に自力と云ふ、他力と云ふ、何ぞその差別なかるべき云々、されば不簡擇大悲の本願念佛を信するといふ、信心のたとへなれば、氷上を走り、恒河を渡り、堅石を穿つ等譬ふる義あらんや、是等はこれ別機所感の靈應なれば、萬機普益の譬には合はず、爰を以て他力信心の譬には、馬に乗り船に乗る等を譬とするなり、故に元祖大師他力の淨土宗門を開創し給はん爲めに、選擇集第一章に、如來一代の所説を分別して、聖道門淨土門と教相を二分に別ち、修證の方をば自力他力と名けて、譬へて云く、陸路の歩行は苦しきが如し、(聖道自力の修業の如く)水路の乗船は樂しきが如し、(淨土他力の修行の如く)陸路と水路と、歩行と乗船と、苦と樂と、相對して譬へ給へり、聖道自力の信と云ふは、水を氷と見なして渡り、大根を兵となしてつかうやうに、煩惱即菩提と悟り、自身即佛とつかう也、淨土他力の信といふは、水を正直に水と見、大根を正直に大根と

見る様に、唯有のまゝに、我身は罪惡生死の凡夫と正直に思ひ取りたるを信心と示ふ也、故に大師の曰、(和語灯一往生大要鈔と號して、三心を廣く釋し給ふ、今所引は右三心の結勸の法語なり、木ほかた此の信心のやうを、人々の心得つかぬと覺ゆるなり、)心のそみく、身の毛もいよだち、泪も落ちるをのみ、信の起ると申すはひが事にてある也、それは歡喜隨喜悲喜とぞ申すべき、信といへばうたがひに對する意にて、疑を除くを信とは申すべき也、見る事につけても、聞く事につけても、其事一定さぞとたもひとりつる事は、人いかに申せども、不定に思ひなす事はなきぞかし、これをこそ物を信するとは申せとの給へり、爾れば扇を正直に扇と見、茶碗を律義に茶碗と見定めて、疑ひなきを信といふなり、されば念佛にて往生するぞと聞いて、南無阿彌陀佛と申さるゝは信心也、爰を歌に、「うたがひのなきしるしには、一向に南無阿彌陀佛」と念佛申すは疑なき故なり、南無阿彌陀佛と云はるゝ外に信心を

求むべからず、念佛するが即ち信心なればなり、斯く心得て念佛相續する人を、深心具足の信心者とは申すべし、其の證據は、隨蓮房の緣、(御傳二十八卷下)。

諸宗門に別立深名の相傳あり、散記に曰、問前後二心不置深名何局第二名深心耶、答疑心易起信心難成、謂別行人多破往生爲之失信、疑怯心起便從輪回是大事故、別置深言誠其狐疑立眞實信、以除猶豫不定心、凡深心者不爲四重破人所動亂破壞、以此分際名爲深心、前後二心不爲破人所動亂者、依信心功故不云深已上、四重破人の義は下に至て辯せん、又宗門相傳に、三心傍正の分別あり、決疑鈔四に云、問三心有傍正、答三心至要有何傍正(經曰、具三心者必生彼國、釋曰、若少一生即不得生と云ふ故云々)若夫對機應有傍正、(疾前無藥機前無教故應病與藥云々)謂約虛假增者誠心爲正、餘二爲傍若約疑心增者深心爲正、若約不同向增者第三爲正、又取要(要中之要也)言之深心

爲正、以此信心決了凡夫爲往生機、若具此心二心自具、自餘二心未必如此、論註及安樂唯立三信不釋二心、信知、於三心中深心爲正也、已上、三心の中、要中の要は深心也、其深心立信の釋文廣けれども、(就人、就行等)機法二種の信根本也、(委しくは本文に就て辯述すべし)愚惡の凡夫往生の機たる事を信知すれば、異學異見の邪雜人ありて、云ひ妨げんとするも、眞實に往生を願ふ至誠心も退かず唯往生の爲と振向ける回向心も退かざる故に、散記の文には、前後の三心、不爲破人所動亂者、依信心功と釋し、決疑鈔の文には、若具此心二心自具と釋し給へり、故に問師十八通に總依一代乃至別依一字と、信の一字を淨土別開の根元とは釋し給へる也、自餘の二心は未必如此とは、名利の爲にせず、眞實に極樂往生の爲とは志せども、機法の信は具不具不定也、又餘事に回向せず、唯往生の爲とはふり向けても、機法の信亦具不具不定にして、深心を具すれば必ず前後二心具足するに同じからず、依

て論註安樂集にも前後の二心を略して、深心のみを詮とし玉へる也云々、偕又深心肝要とのみ聞て、唯信心さばくりのみにかゝりて、却て信心を失ふ事あり、其の事西要鈔に委しければ擧て示さん、上の本に曰、抑も彌陀の本願慈悲ひとくし攝し、衆生の根機善惡同じく歸するといふ事、たびたび承りふりにき、それにつきて五逆の惡人もねらばれず、一念の稱名もすてられずときくまでは、佛願まことにさぞあるらんと疑ひなく、我分よもはづれじとたのもしき程に、信心具足して申念佛こそ往生はすれといふたり、さては我身にはそれやいまだしからんとあやぶまれて、往生も尙一定とも覺ねば、心も今ひとときは浮立ちぬるあさましさに、たして本願があやまりなければと思ひなせども、それも安心の上にごそと、立かへりくうかれ居たるをば、いづかたにつきてか落居し侍るべきとへば、聖こたへていはく、今承るやうは、すでにたこりたる信心を心からたもひさまされたるにこそ、物のゆくへ知らぬとて、いとうた

てうも侍かな、先づ其の機のわるきをも、行のすくなきをも捨てぬ本願といふまでを聞て、疑しからず、樂もしくたほすらんをこそ、即ち信心とは申せ、其外には更に何をかもとめ給はん、如何に十惡五逆一念十念もときけども、さはいへどたはやすくはあらしをなど、本願をかすめ疑ひて、たうとくもねおほへぬこそ、信心のなきにてはあれ、たほかた、此ごろは念佛の法門耳なれて、あらくしく願力をよもとまでうたがう人は世にまれなり、さればわりなき佛の御慈悲など、きををり、さすがたのもしと心動かぬ者やはある、それをやがて信心とだにもしらましかば、往生はかやすく思ひかためなんを、このうへに、今ひときは、おこらんする事のやうにもてなやむ程に、たまくたのもしく覺ねつる心をさへ、思ひさまして、はては信なきなげきをす、(註に所詮往生も一定と思へば一定、不定に思へば不定になる如く、信心もあると思ひて喜べば、なき信心も自ら起るなり、我身には信心なしと悲めば、ある信心

もさむる者也、身を卑下するも事によるぞかし、思ひ切つて念佛すべし等)これいさゝかの趣をあしく心得たるゆゑなるべし、よく思ひ給ひわくべき事になんありといはるれば、げにあしくこそ心得侍りにけれ、日頃は唯佛願はうたがはしからねども、わが信心やいかにとおぼつるより、決定往生の思ひもおさへられて、心やましかりつるに、その本願の頼もしきが即ち信心なるべからんには、更に何をかわづらはん、物のいはれしらぬは、げにやすかるべき道にも、滞るならひなり等。註に、これ領納したる詞也、信心の起り易き事を知れば、往生もたやすく思はるゝものなり、爾るに未練の學者は、此の信心を事々しく云ひなす程に、人の心を妨げて、往生の障りとなる大切の事も、よくく吟味すべし已上。

玖須の地頭の女、(托、往生卷三)

又深心具を知り易き故實あり、夫れ心には形なく事相に顯はれざれば、其具不具知り難きもの故、事相の起行の方より、心具を易く領知せしむるの

義也、此義趣大師の御法語に云く、(和語灯二の卷十七、七ヶ條起請文の序に、三心を釋し玉ふ御法語なり)、深心とは深く念佛を信するの心なり、ふかく念佛を信するとは、餘行なく唯一向の念佛になるなり、少にても餘行をかぬれば、深心かげたる行者といふ也、(私に云く、此の餘行を兼ねれば深心かくるとは、念佛一行に不足の思ひありて、餘行を修し加ふるをいふなり、助正傍正等の機に就て云ふには非らず、云々)所詮、釋尊の説き置きたまへる浄土の三部經は、念佛の一行を説くと心得、(三經ともに念佛を附屬したまへるなり)、彌陀の四十八願は、偏へに念佛の一行を本願としたまふところにて、(導師の御釋に、偏標念佛最爲親と、又た一々願言稱我名號と釋したまへる也)、ふた心なく念佛すれば、おのづから三心具足する也、已上、見つべし、三心の中にも要中の要たる深心を具する事、何ぞ六ヶ敷事かと云へば、念佛一行にて往生決定と思ひ取て唱ふる計也、是則行業によせて、心具を知り易く示し玉ふ也云々、又深心者

深信之心也と云ふ、信の字に就て至誠深心の二心を混亂することあり、是の信字に誠の訓ある故に、信心とは偽りなき誠の心ぞと僻して心得たるより發る也、故に向譽上人此の誤りを正す爲めに、信心とはまかする心と訓じ給へり、(安心客問等に出たり)、夫れ信をまことと訓ずることは、眞誠實の字と通じて、虚偽に對する時の訓也、然るに今の信心とは、信佛本願心と云ふ事にて、疑慮に對するの信なれば、誠の訓は應せざる也、何をもち知るぞならば、問師の直牒に、決疑鈔の深心を釋する下に、兵食尙可去信不可去、(弘決、所引の孔子の語也)、と云ふ引文あるを、(南軒張氏曰、生期有死人之定理也、至於無信、即欺詐相奪、無復人理、是重於死、夫食與兵、固爲急務、然信爲之本、無信則雖有粟而誰與食、雖有兵而誰與用哉、已上)論語(第十二)顔淵章に云、子貢問政、子曰足食足兵民信之矣、子貢曰必不得已而去、於斯三者何先、曰去兵、子貢曰、必不得已而

去、於斯二者何先、曰去食、自古皆有死、民無信不立、已上。
此の文に、信者眞と見たり、難校、深心の文、乃至彼信當至誠心、今引證且く約信名言、歟云々、是誠の訓は至誠心に當りて、深心の信に當らざるの明判たり、應せざるの訓を用ゆれば、其失あること言を俟たずと雖も、初心の爲めに是を示さば、誠の訓を用ゆるときは、二心(至誠心深心)同訓混亂の失と云ふ、三心とは説ける金文に煩重の失をおぼすると言ふ、疑心病の治方を缺ぐと云ふ、一蹉百蹉餘は進へて知るべし、されば至誠心は自心を信にし、深心は佛願を信じて不疑義なれば、二心に自他の差別あることを知るべし、凡宗門の要は三心にあり、三心の又た要は深心にありて、往生の得否全たく此の心にかゝれり、故に通師世人に易く此の心を得せしめん爲に、信心の文字にまかする心といふの、和訓を施し給へる事、最も信受すべき也。
深心に三種の四句分別あり、一には一向信疑の四

句、二には始終信疑の四句、三には多少信疑の四句也、初めに一向信疑の四句とは、一には一向信心、(決定往生之人)、二には一向疑心、(決定不得往生之人也)、若は又有二分往生歟、一分往生と云ふの義、心得難き事なれば辨知すべし、夫れ三心の中一つも缺けば往生を不得事は、若少一心即不得生の定判ありて動きなき事なり、故に一分往生の義あるべからず、故に三祖此の事には、年來思惟を盡して明らめ得玉へる事、委しくは疑問鈔^{十六}已下出たり、文長ければ要を撮て示さん、抑疑心に就て二種あり、一には安心の疑、二には起行の疑也、其の安心の疑あれば往生を不得事は宗門の定判なれば、二祖此の義を顯して決定不得往生之人と決し給へり、其の起行の疑とは、是に生不の二種あり、其往生するの機を云は、安心の中には機法を信じて往生を疑はずと雖、抑も我身は決定往生の機かと思惟するの所に、我心正體なく厭欣もはかしくしからず、生死を離れ淨土に往生せんと欲する、大なる望みある身の思ひ計も

これなき故、我身の癖として憂きをも嬉しきをも、共に深く思ひ入ざる歟と、これを顧れば現世の事に付ては、歎にも深く思ひ沈み、喜にも深く思ひ悦ぶ故に、我身に三心も具せずして往生せざらんかと疑ふ、此れ機をも疑はず、法をも疑はざれども、唯我心の正體なきを疑ふ故に、起行の疑に屬す、是は三心を具するの上なれば往生一定なり、本とより下機なれば、厭欣の緩なる疑は不飽足の疑ひなり、凡夫の習ひ、所得の功德を自ら覺知せざるが故に、是を疑ふと雖も遂に往生を得るなり、其の不生の機を云は、厭欣緩なる中に、實に三心も具せず、其志も淺くば往生すべからず、此人の疑は道理の疑ひなれば、疑の如く往生すべからざる也、斯く起行の疑ひに二種ありて、一は生じ一は生せざる故、二祖上人若は又有二分往生歟と記し給へる也已上、疑問鈔の取意也、(委く談せんとならば鈔をもて辨すべし)、此の起行の疑一分往生の義、三祖二祖より相傳なかりし故、多年思惟の功を積で者得し給へるの義也、然るに此

の義二祖の三心要集に出たり、されば此事を西譽上人の五重拾遺下^{十五}に歎じて、疑心に二ある事三心要集に見ゆたり、記主の今案符合辨師義深仰可_レ信との給へり、三祖の器量獨歩絶倫、宜哉二祖の然阿は辨阿が盛年になれるなりとの給へる事や、三には信疑俱心、(不定往生の人也、若得_レ往生歟、若不得_レ往生歟)、四には非疑非信心、(非一向往生之人也)。

次に始終の四句とは、
 一には始信終疑、謂初發心時、信佛本願後退_レ信心住_レ疑惑心也、唯殖_レ宿善非順次往生也、二には始疑終信、謂初懷_レ狐疑後生_レ信心也、是回心往生之人也、三には始終俱信、曰一度發心已復無_レ退轉人_レ也、此人決定往生、亦人中の分陀利華也、四には始終俱疑、謂一期無_レ信無_レ佛法潤_レ既無_レ現益亦無_レ當益可_レ悲後生重歸_レ三途_レ矣。
 次に多少の四句とは、
 一には多疑少信、曰多_レ狐疑少_レ信心也、不得_レ

往生之人也、二には多_レ信少_レ疑、曰多_レ信心少_レ狐疑也、若悔_レ疑取_レ信亦有_レ出離_レ歟、三には多少俱信、謂四威儀不論_レ久近有_レ信佛心也、是最上之機也、四には多少俱疑、謂未_レ決_レ了佛之本願、常懷_レ猶豫無_レ一分之信也、可_レ謂寶山中無_レ手之人也。

此外深心の釋文廣博なれば、示すべき法門數々あれども、且く之を略す、就_レ中就人就行之立信は、必ず舉て示すべき法門なれども、是は本文に出る機法二種の信釋の、機信は就人、法信は就行立信に當れば今は是を略す云々。

●これにつきて二つの信あり。
 是につきてとは、深心者即是深信之心也と云ふにつきて也、二の信ありとは機法二種の信釋なり、此釋文は諸教諸師の中未曾有の妙釋なり、能々信受すべし、要を撮て云は、我身は罪惡の者なれども、佛の願力にかなひて往生すると信する也。
 初に機信の御釋を舉給ふ、
 ●一には自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よ

りこのかたつねに没し常に流轉して、出離の縁あをことなしと信じ。
 註に、我はこれ罪を作り惡を起し不善身也、無始より六道に迷ひ回りて、得脫の縁なしと信する也、常に没するとは、久しく三途に沈みたりし事也、常に流轉とは、いつも六道を回りし事也。
 次に法信の御釋を舉げ給ふ、
 ●二にはかの阿彌陀佛四十八願をもて、衆生を攝取したまへば、疑ひなくうらたもひなくかの願力に乗じて、さだめて往生する事を得んと信せよといへり。
 註に、罪人なりと雖も、佛の願力を縁として必ず往生を得んと、疑ひもなく氣遣ひもなしと信す也、うらたもひ、裏思ひにて疑ひ氣遣ひは心の裏にて、とやかくと思ひ煩へば也。
 俚語に曰、今此二つの信といふより、深心釋の終、たのもしくたほに侍りけるよと云ふ迄に、五節あり、今は第一自註の格、第二比校の釋、たへば世の中等と云へる是也、第三二門對判の釋、かの聖道

等と云へる是也、第四譬說の釋、たへば世の中等といへる是也、第五結勸の釋、さもげにわろき身ぞかしな已下。

●いまこの二の信のたもむきは、苦海常没の身に於て、出離の縁もなき我らぞかしと、ひたすら自方のかげたる事をしらせて、(是はじめの信の心也)、されども彌陀の本願によりて、疑ひなく往生せんことこのうれしさよと、うらくと他方に思ひつかせんとなり。

これ後の信の心也、(わろき身をわるしとすれば阿彌陀佛、誓の外にあからめせず)うらく、註にはうらくとは、其心に疑の氣もなく晴々としたるを云ふ也、天氣の長閑に晴れたるを、うらくなる空なりと云ふ也等と云々、言釋にはこの言は、もと弱々めくらふ事也云々、さてこの文もやをらそらくと思ひつかせんとの、手だてふ意とこそ聞ゆれ等云々、洲私に案するに、註に引く萬乘のうらくに、てれる春日よめる意より見れば、春日の照れるは穩和にして夏

秋の日の烈しきに似ず、さればこの烈しき夏日を聖道自力の自身即佛と立る決信に比せば、我身に出離の縁なしと自力の缺けたる事を自知して、偏に本願に托する教門なれば、弱々より轉じたる春日の穩和に照すに比して、うら／＼の言を用ひ給へるにやあらん、但しこれは註と言釋につきて云へる也、又予が料簡は、麗の字をうら／＼うら／＼うるはしと訓ず、而して麗を玉篇には好也、廣韻には美也と註すれば、今のうら／＼は、うまく他方に思ひつかせんとなりと云ふ義と見れば、何の入組たる事もなく、其義趣至つて穩當也、註に萬葉のうら／＼に、てれる春日とよめるを、遅々と點じたるによりて、菅家の詩の二月三月日遅々とあるを引て、晴れたる空の義とせられたるは、言釋に破したるに謂れある歟、二月三日遅々は、晴れたる事を云ふに非ず、日長ふして暖和なるを云ふ義なれば也、されども言釋に、今のうら／＼を弱々の義にて、やをらそろ／＼と思ひつかせんと、てだて、ふ意と聞ゆと云へるは、今の義に非

ず、人命無常の世にありて、順次に出離往生の安心を示すは、速かなる上にも速かに、決着せしめんことをこそ要とすれ、何ぞやをらそろ／＼などいふ事あらんや、註の引證は不合なれども、心に疑の氣もなくはれ／＼としたるといふは、今の文意には不遠云々、又註に蓮華谷の僧都の、白拍子往生を讀せられたるをも、言釋に次に引き、うらうらと本願を信する人といふも、女にてよわ／＼となだらかに信に入る意なる事、心ざかしき者は往生不定也と云ふに答へても知るべ也と云へり、これも弱々となだらかに等と云ふより、うるはしと見る方よくかなへり、謂く彼等は心あるものなればとは、白拍子などは人によりて身を立つるものなれば、われはがほせず他の心に隨ふ事になれたれば、自力を頼まず佛の他力を信受し易きを、かく云はれたるなるべし、故にうら／＼を、うま／＼いみじくの義とすれば上にも契ひ、下の心ざかしき、なま信じの不往生に對しても、よく契ふ事可知、過奢兩人懲不、(托、事實卷一。)

●たとへば世の中のならひもさこそあれ、かなしくかすにもあらぬ身となりぬればこそ、わびてはすゝろに世もしたはしく、人のなさけもことになれしくわぼゆるやうに。
俚語に曰く、第二節比較の釋也、意の如く佛法の大道理、自の心性の珠をみがきて、本有實相の理を顯すを詮とするに非ずや、爾るに今家の所談、罪惡を信じて何の要ぞと云ふ不審を通せん爲めに、此の比較の釋ある也、(決疑四、散記)、當章比較の趣き、予よく身に取りて覺あり、二十六歳にして、(通師二十八歳にて尾州に歸國し給へば、在關の間の事と知らる)、少しの故ありて六十六部と成つてきらすを食し、古草鞋を拾ひ、野山に夜を明したるも、心から修行の爲めにせしすら人の情を嬉しく思へり、まして世にわちぶれたる、わび人となりたらんにはいか計りならん、他を云はば、桑名の家中川上團兵衛、(三百石)家中にありし時は、甚だ潛上なりしが、追放にあひ佗人となりて、予に情を求むる有様至つて卑劣なりし。

註に、身の豊かなる時には、人の恩もさのみには悦ばず、數ならぬ佗人となりては心細く悲しくて、何となく世もうらやましさにあらぬ願もたこる、其折には聊かの情をかけられても、しみ／＼と辱く思ふ者也、字彙に云、佗は失志貌已上、時にあはず志を失ふを佗人と云ふ也、俚語に曰く、例せば小山田太郎高家、(太平記十六^{二十}前後見合すべし、托、事實卷八。)
●わが身の罪惡深重なる事をよく／＼わもひ知りてこそ、(機を信ず)かゝるをすてぬ本願と、まかんもいと／＼かたじけなくはわぼぬべけれ、(これ法を信する也、前のたとへに合せ見るべし。)
俚語に云く、本願を信じ奉りて餘意なく但信稱名すれば、自然と深心具足し決定往生するぞと勸め給へり、爾れば人々此の道理を感じて、身命を顧みず但信の稱名相續が肝要。
●かの聖道の修行にわもむく人は。
俚語に曰、是より下五節の第三、二門待判の御釋也、意は聖道自力門と、淨土他力門と二門を對待

して、聖道自力の難解難入なる事を知らせて、深く本願他力の易修易行なる事を信せよと、勧誘し給ふ下。

●初心より極佛の思ひをなすゆゑに、凡身のあなうらにこゝこほらす、佛祖のいたゞきをこゝんとたもへり、されば自身即佛とたごりて他力本願をたとしめたり。

註に、聖道とは淨土宗ならぬ他門の事也、大乘聖道門を修行する人は、初心の時より唯心性の珠を磨きて、本有の理を顯さんとす、されば自身即佛と觀じつめて、他力往生をいやしむる也、眞言には父母所生身速證大覺位とをしへ、禪家には直指人心見性成佛と示し、天臺には煩惱即菩提生死即涅槃と觀じ、華嚴には初發心時便成正覺と談す、何れも極佛の思をなし、其觀解高々として佛祖の頂きをふむなり。

註に、華天密禪四箇大乘の立方を擧げられたり、此所立勝れざるには非ず、併し時をもて云へば、正法よりして像法までなり、機をもて云へば上根

上智ならでは相應せず、爾るを今時は末法五濁濫漫の、下智下根造惡之機也、須く機教の應不を考ふべし、彼の良心僧都すら弘法大師の即身成佛を現じ給ふを見て、自身の智力を慢じて魔道に墮落せられたる事、存海法師の行者用心集に出たり、云々、又禪僧の同情を失せし縁、白隱の闍提記聞、數件を出す。

●この淨土の出離をもとむるものは、鈍根無智の機なるゆゑに、縁を本願にからずしては、運を穢方につくしがたし。

註に鈍根無智とは、其性鈍にしてならへる觀智もなきを云ふ也、縁とは佛力の増上縁也、運を穢方につくすとは、三界の道たゆる義也、西方要決に云、興少學之軍修運竭穢方已上、弘決に云、業相は是能運、生死は是所運也等、云々。

●これによりて、身を出離の縁なきものとくだしはて、たのみを超世の願にかくる心をたこさしむる也。

風航鈔釋解に云、若慢擧自身則不能尊重

他、彼德光論師不敬慈尊等是也、故謙下目身罪惡、次深信願他力攝取已上、超世の願に等とは、超世といふに二義あり、一には超勝地前世間之位(法藏菩薩の發願は地上眞位なれば也)、是は義寂等の師の意にして傍義也、二には法藏選集諸土之中善妙二建此願故、超世通途諸佛本願故、是名超世、如下文云、無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能及、又云、清淨莊嚴超踰十方一切世界、身土兩願既超諸佛攝衆生願亦當然故、又凡夫入報土義勝諸佛故、(鈔及合讚)是我宗正義也、超世願(助講要文集一)。

●たとへばよの中の人ありさまも、あやしき柴のいほりにすめども、あるじとなる時はたごるけしきあり。

註に、これ聖道初心の人の、自力を勵みて慢擧するにたとう、あやしきとはいやしき義也、あやしのしず山がつと云ふ、乞食の夫、妻に誇事。

●いみじき玉のうてなになうで、も、やつことなるをりは、へるこゝろあるがごとし。

淨土門に入る人は、如何なる智者學匠迄も、彌陀を主人として我身を卑下するに喩ふ、いみじきは、美の字にてすぐれたる義也、やつことは、奴の字にて下部の事也、へるとは、謙の字にてへりくだる也已上、既に天親菩薩は地前の十向の滿位、龍樹の初地、馬鳴は四地の高位なれども、偏に淨土を欣ひ、猶ほ等覺補處の高位たる文殊普賢の願生の偈に、願我臨欲命終時、盡除一切諸障礙、面見彼佛阿彌陀、即得往生安樂刹と願じ給へり、是豈に謙る心あるに非や、されば大師の御遺誓にも、たとひ一代の法をよくく學すとも、一文不智の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じうして、たゞ一向に念佛すべし、との給へり。

美醜兩女謙慢(托、事實卷四)

●我人にしたがふと、我人をしたがふるとはその心もちかはることなり。

註に、史記云、且夫臣人與見臣於人、制人與見制於人、豈可同日道哉、已上、聖道淨土の修行の用心のたがひめは、これになぞらへてしりぬ

べし。
 註に、聖道の學者は、自の三學にほこりて身を高くし、淨土の行人は他力をたのみて我が身を卑下するなり、鎌倉宗要に云、信自身罪惡者、諸教之中未_レ有_レ此信、唯有_レ瑩_レ心性珠_レ顯_レ本有理_レ謂_レ衆生心法有_レ眞有_レ妄、無明風吹_レ眞心水_レ動成_レ妄心波_レ故知_レ妄心本源_レ而悟_レ入寂靜湛然眞心_レ名曰_レ成佛_レ方今大師不_レ立_レ此理_レ偏述_レ罪惡_レ立_レ他方信_レ此乃不_レ改_レ遍計執情_レ出_レ生死_レ故實也_レ已上、眞心水、動水を離れて波あるに非ず、水即波、波即水、古歌に「雨あられ雪露雲波水、海川とても水ならぬかは」、佛界即九界、九界即佛界と悟り極むるを自力聖道の悟りと云ふ也、導師所立淨土の教門は、罪惡に目をつけて偏に佛願によりかゝるなり、此の道理を譬へば、火をもて火を消し、蠶をもて蠶をぬく手段也、誤ても小水をもて大火を消んとし、深く打ち込みたる蠶を、微劣の小力にて抜く事を得んや、思て可_レ知、此故實を玄忠大士の釋に云、
 (首書論註下_三十)氷上に火を燃く、火猛きときは

氷とく水解くる時は火滅する如し、見性の火滅して無生の智水となる等と、云々、我等が眞心の水は、迷情煩惱惡業によりて出離無縁の厚氷と凝り堅りたるに、助け玉へと本願に託し、南無阿彌陀佛と火をたく也、是れ全く取捨分別の迷情にして遍計の執也、此迷情にて唱れば、超世大悲の本願の構にて順次に淨土に往生す、往生すれば即悟無生、眞實無漏の智水と融する也、是を見生無生と相傳し、今は不_レ改_レ遍計執情_レ出_レ生死_レ故實との給へる也、故實は故事の是なるを云ふなれば、即疾往生成佛のたゞしき習ひ事ぞと也。
 ●されば往生を期せん人は、返すくをこのげなく身の程をしり給へとよ。
 註に、聖道の人こそ初心の輩も、身の程を忘れて智慧だてをばすれ、念佛の行者は涙分をはかりて佛をたのめと也、期は心あて也、をこのげは註に嗚呼の字を書とあるを、言釋に嗚呼の字をあてるは後世のわざ也、當つべき字は未だ知らず、意はわるかにして、さかしら心あるを云ふに似たり等

と云々、身の程を知るといふは、七字口傳也、昔明禪法印念佛を勧められけるが、さかしだちたる事さこしめして、身の程知らずの物たばねすと仰せられける、(期の字は、要期とてねがひ求むる義也)大師の云、智慧をもて生死を離るべくば、源空何ぞ聖道を捨て、淨土門に入らんや、然間涙分をはかりて淨土を願ひ、他力を頼みて名號を唱ふと、顯眞、明遍、等此御言を信受し給へり、此所大原問答序談の意也、彼序に云、凡廢惡修善佛教正意也、廢々不_レ廢何爲、息妄修心者行道之大途、息息不_レ息何爲、只須_レ憑_レ彌陀之本願_レ唯須_レ唱_レ他力之名號_レ、此則造罪之上廢惡之法也、妄心中息妄之行也、佛法修行中不可_レ有_レ易_レ於此_レ而已_レ已上、澆末の凡夫は不_レ廢不_レ息之機計なるに、是れを顧みざる故に身のほどを忘れて、永く生死の海にたゞよふ也云々、是れについて先づ其のねごるあやまちの證をいはし、諺にもねごるもの久しからすと云へり、太政入道の威勢にほこり、將門等が勇にほこり、或は智に誇り、富に誇り、家國を失ふ事故

擧に違あらず。
 野千欲妻王女亡身事、(托、事實卷八)鼠之智撰(托、事實卷七)、已下は澆末下愚の身の程を忘れて、機法不應の聖道自力の修行にはしたつる、をこのげを誡むる也、俚語、此下に念佛の行者と云に、六種のをこのげを誡められたれば要を撮て示さん、一には相傳口傳のをこのげ、二に信心有無のをこのげ、三に妄念起不起のをこのげ、(已上の三種は、自體凡夫と云ふわけを知らぬ故なり)、四に持戒破戒のをこのげ、五に雜行雜修のをこのげ、六に現世祝願のをこのげ、(已上の三種は、願非願のわけを知らぬ故なり。)
 第一に口傳相傳のをこのげとは、茶湯、靈膳、塗香、燒香、座具、等のをこのげありて、單信口稱の行者を輕蔑する事あり可_レ痛、決定し信すべし、出離生死往生成佛の道に、口傳相傳といふ事全くなき事也、若し口傳相傳にて往生成佛すと云はし、忽ち大師の御遺訓に、此の外に奥深き事を存せば二尊の憐みにはづれ本類にもれ候べし、と起請

誓言なし給へるに違逆す、依て是を相傳口傳のこのげと云ふ也、(附て云ふ、宗門に五重宗脈の相傳あるは、自他共に本願口稱一行にて、順次往生を決定印可する義也、今のをこのげに似たる事にあらず云々)

第二信心有無のをこのげとは、それは一念義徒の云ふ事也、我淨土宗門にては、念佛往生と決勸する也、されば大師の曰く、いかに信心をいたすといふ輩も、造惡凡夫の分際にて何ぞ往生を成就せんや、唯本願にまかせて一向に念佛すればこそ、佛力の不思議にて往生はし侍るべし、との給へるに背く也、されば念佛往生と決信せず、唯だ信心の有無をさばくるは以ての外のをこのげといふべし。

第三に妄念起不起のをこのげ、此一件破戒往生章に付て、妄念往生の辨あり見るべし、自體煩惱具足の凡夫なれば、妄念の起るは勿論の事なり、火あれば必ず煖氣あり是れ決定の義也。

上來三つのをこのげは、元來我身煩惱具足の凡夫なりと云ふ事を失却せる故に、口傳相傳に滞り、信

心の有無に泥み、妄念起不起を沙汰する也、是れ尤もおこがましき事也、古徳の語にも、凡夫は妄念の外に心はなきなり、少しも心さばくりせん人は、本願に乗じたりとは思ふべからず、妄念の中より申す念佛は、濁りにそまぬ蓮の如くにして、蓮臺に乗する時妄念の心を纏して、悟の心とはなるべき也と、斯く大らかに申すが此宗の掟也、爰を以て本文に、されば往生を期せん人はをこの氣なく、身の程を知り給へよとはの給へり。

第四に持戒破戒のをこのげとは、此一條亦破戒往生の章に委しく明せり可見、又大師禪勝上人の問に答へて、末世には持戒もなく破戒もなしと、傳教大師の末法燈明記を引て決し、この上は持戒破戒の沙汰あるべからずと、此の凡夫の爲めに起し給ふ本願なれば、たゞいそぎてもく名號を稱すべしとの給へり、(御傳四十五丁^{十六}、翼讚可見)。

明に知ぬ大悲の願意、機を云へば三學無分を目あて、時を云へば末法萬年餘教悉滅の時までを利物偏増の念佛なれば、何ぞ戒の持破にあづからんや、

されば又選擇集には、不_レ簡_三多聞持_三淨戒_二不_レ簡破戒罪根深_一の釋を引證し、御遺誓には、申外に別の仔細候はずと示し置れたり、爾れども專修の行者も、追付佛となるものがと思て、殺生せず、盜みせず、邪姦妄語をも慎み、自然と戒法に叶ひ、自然と善根に組するは、たとへば問屋の落こぼれの如く、問屋は落こぼれを自あてとせんや、念佛の行者戒の功德をもて、往生の業をあてんや、思ふて可_レ知云々、又大師の玉く、淨土宗安心起行の事、義なきを義とし、様なきを様とす、淺きは深き也、唯南無阿彌陀佛と申せば十惡五逆も、三寶滅盡の時のもものも、一期に一度善心なき者も、西東のしらね者も決定往生を遂る也、釋迦彌陀をもて證とすとあれば、蕩直に念佛するが宗の正意なれば、持戒破戒に滞らず、但信稱名するをこのげなく身の程を知るといふ也。

第五に雜行、(人天三乘、有漏無漏に通ず)雜修(念佛の外餘法を修するを云ふ)、のをこのげ、是は本願大悲の密意を採らず、宗の元由にくらき人、出離

に志うすき故に、一行に專精ならざる者のわざ也、本願には稱名念佛の一行の外、更に餘法餘行餘善はなき事なり、其故は二百一十億の淨土の中に諸行を選捨し、唯稱名一行を選取し本願とし給ふ、念佛一乘と決信すべし、(西要鈔見るべし)、故に記主の曰、萬行の中唯口稱の一行、特り能く本願に順すと云々、但し此安心決定の上に、專修をさへざる善事に結縁助成せんは制の限に非ず云々、本願口稱の決信なく、雜行雜修のをこのげ世に少なからず。

第六に現世呪願のをこのげ、此條わけて誤りの甚だしき也、其故は阿彌陀佛因地に穢土不清淨の行を選び捨て、淨土清淨の行を選び取て、本願とし給ふ事を知らざる故に、自然と輕蔑(彌宜、山伏、陰陽師、のかはりにするは輕蔑する也、喩ば小豆の中にある蟲喰、鼠の糞、石砂など撰り出したるをつかみ入るゝがごとし)するといふものにて、甚だ悪しきのみならず却て輪回の業をかたむる也、されば夢想國師の語に、佛神に今世の事を祈り求るは、譬へば國主に紙一枚を所望するが如し、何ぞ所願

を望まざるや、何ぞ佛神に無上菩提を望まざるや、
 (和論語九丁) 所領を與へる大名が紙一枚を與へ
 かねふか、造惡凡夫の往生を遂させ給ふ願王の、
 わづか二世五十年を守り給はざらんや、爾れば大
 名に紙一枚を望むは、是れ國主を輕蔑する馬鹿者
 に非や、念佛は無上功德の大善にして、生死を出
 離する往生成佛の大法なれば、今世の祈禱に用ゆ
 るは、國主に紙一枚を望むが如く、阿彌陀如來を
 輕蔑する常没の罪人なり、何ぞ順次往生の所領を
 望まざるや、琥珀よく塵を吸へども穢れたるをば
 吸はず、磁石よく鐵を吸へども、曲れる針を吸は
 ずといふ事あり、行者よく思量せよ、眞實に
 往生を期する人ならば、穢れたる祈禱二世安樂の
 餘事回願なく、虛假不實の曲れる心なく、唯一筋
 に往生極樂の爲に向稱名し給へよと、依て本文
 に、されば往生を期せん人は、返々をこのげなく、
 身の程をしり給へよとはの玉へり。
 ●さもげにわろき身ぞかしな。
 是より已下、五節の第五結勸之釋也、註に、さて

もまことによからぬ我身の有様かなと、歎息する
 詞也、是れ先づ機信を結し玉ふ也。
 ●かもひと思ふ事はのちの身のあだ、なしとなす
 ことはこの世のいなみ。
 ●思ひと思ふ等は、内の三毒、貪欲、瞋恚、愚痴、
 の煩惱なり、なしとなす等は、外の惡業、殺生、
 偷盜、邪淫、(身三)妄語、綺語、惡口、兩舌、(口
 四)七支の罪也。
 ●惡をなす時は寢食をもなほわすれ、善をなす時
 は起居みなわづらはし、かゝるあさましきかは、
 身ながらもさすがにたぼゆらん、出離の縁なき身
 とは、あらがふところなかるべし。
 註、あけくれ心にたくむ事は、皆三途の業なれば、
 後生の身の仇なり、昨日も今日も名利の爲めにつ
 かはれて、未來の支度を忘れたり、惡にはいさみ
 善にはものうし、是程あさましき身なれば、我な
 がらもたぼあるべし、生死を離るべき縁ありと
 はのあらそふまじ、經に云、一人一日の中に八
 億四千の念あり、念々の常の作す所は皆是れ三途

業也、正法念經に曰、心は是第一の怨也、此
 怨最も爲惡已上、簡要錄に云、觀世人爲善心輕
 爲惡心重、何以得生淨土、請以現事驗之、對
 佛像則不如接大寶之恭謹、學經法則不如
 求賊之勤劬、毀他則氣麁言滑、讚彼則氣緩語
 澁、或以我惡之則覆善揚惡、我好之則掩短
 美長、或爲積惡怒他私說、或作微善恨人
 不知、於惡事則陰費千金、亦能緘口、施善
 事則方營一食、便自矜功、凡此用心方沈惡趣
 欲、以少善求淨土者難哉已上、又長明發心集
 卷八云、男女に愛着して命をすて、勝他名聞の爲に
 肝膽をくだくやうなどは、末代とても熾盛なら
 ずや、奕打といふものどもあつまりて、雙六打つ
 を聞けば、夜もいねず晝も立ざる事もなく、七
 八日など片時もやまず、其の間の身の苦しき、
 心を碎く様たとへていはんかたなし、されど貪欲
 勝他の心の切なる身力にて、かのづから心をやし
 なふかたもあるにや、目もつぶれず、腰もすくま
 ず、よしなきすさびには、かく心をいれども、

善根といへばゆるく懈怠する也已上。
 ●寢食、寢は臥也、眠は眼の食の故に之を斷ては盲
 ず、彼阿那律の釋尊の呵嘖を得て、七日眠らずして
 肉眼を盲せられたる如く、爾るに惡業をなすには、
 眠を除くにも盲せず隨増恐るべし、傳へ聞く、加
 州の士大槻傳藏は年月を経て直宿せしに、主君の
 心を得て逆謀を成さん爲に、更らに眠らざりしと
 なん云々、食はもとより、人命は食にあり、之を斷
 てば死すべきに、惡業をなすには食を除きても死
 せず、隨増恐るべし。
 ●起居、書言故事の註に云、起居は人の動靜也已上、
 動靜と云ふに四威儀を盡す、謂く行は動、住坐臥
 は靜也、善事とさへ云へば四威儀皆煩はしと也、
 豈に淺間敷我等が身の上に非や、惡の爲に忘る、
 寢食を、善事の爲に忘る、かといふに一向忘れぬ
 也、今近く一事を擧て證せば、念佛聽講と云へば
 睡眠を芽し、食事の後る、事を思ふに非や云々、さ
 らば善事の爲に煩はしき起居が、惡事の方に煩は
 しきかと云へば更に然らず、惡事の爲に運ぶ足は

踵も地につかず、立ちながらの嫁そしり咄し、姑そしり咄しには足もすくまず、坐して惡事の密談にはしびれもきれず、臥には「秋の夜の千夜を一夜にかさぬとも、言葉残りて鳥や鳴くらん、」位の事にて、煩はしきこと更になし思て可_レ知云々、是何故なれば、惡は生々に薰習し、善事はいまだなれざる故也、今薰習せし惡に心たけく巧み深き事實を云は_レ。令_レ削_レ美人鼻_レ托、事實卷七。

●三惡の火坑あしにまかせて入ならんとす。
 ●三惡の火坑とは、地獄餓鬼畜生なり、それをすべて火坑といふことは、三惡道の業因すべて貪瞋痴の三毒の火より造る惡業なれば、所感の報を火坑と云ふ也、凡そ愚縛の凡夫は、善には怠りて心すゝまず、惡には面白くて心もすゝみ身も勇む故、三惡の火坑足に任せて入なんと云ふ、足とは業也、他人のなすわざに非ず、我でにすゝみ入ぞと、自業自得の所以を示し給へる也。
 ●永劫の苦果なにとかせんとするや、(已上機信の

結勸畢ぬ。

註に、心よからぬ故様々の惡業のみを造り、業に任せて、三惡道の深き火の坑に落ち入なんとす、一度惡道に入ぬれば、苦みを受ぬる事永劫極まりなし、その報をば何とかせんと思へるぞや(矢張永劫之苦患を受る覺悟也やと也、)

父子相迎云(上末_{三十一})、唯人は人、我は我なる獨生獨死獨去獨來の道こそ、思ひやるも心ほそかるべけれ、後世とても他人なるまじければ、なにともならばなれとは、わねもひはなすまじかんめり、世人薄俗にして不急の事を争ふと説きて、今生のいとなみの命あらばとゆるがるべきをば、足をそらにして急にし、後世の出立ちの今もしなばと急なるべきをば、手をたんだきてゆるくす、これかしてしとやせん、わろかなりとやせんと已上、般舟讚に曰、生盲信業走、隨業墮深坑已上、定善義曰、三惡火坑臨々欲入已上、六道講式云、夫於_レ身作_三罪_二殺生偷盜邪婚也、於_レ口造_三四罪_二妄語綺語惡口兩舌也、於_レ意造_三三罪_二貪欲瞋恚愚痴

也於_三此十惡_二上品犯者墮地獄、中品犯者入餓鬼道、下品犯者趣畜生道不止三品之罪誰免_三途報已上、新續古今(勝定院贈太政大臣)「くりかへし思ひつゞけて歎かな、なにと迷ひをしづのをだまき」已上、出離無緣の機信の勸進異。
 已下は本願他力の法信の勸進。
 ●しかるに彌陀如來かやうのつたなきものを、たすけんために本願をわこし給ふによりて、わづかに一世の勤苦をもて、ながく九品の快樂をうけん事はかぎりなき悦ぞかし。
 かやうのつたなき等とは、思ひと思ふ事は後の身のあだ、なしとなすことは此世の營み計にして、死ぬる事を忘れたる人をかやうの等と云也、わづかに一世の等とは、是大經の文を和らげて示し給へり、經に曰、雖_三一世勤苦須臾之間_二後生無量壽佛國快樂無極已上、快は、篇海類編に云、喜也稱_レ意也已上。
 此の一世勤苦須臾といふに就て、三途の壽命の長遠なるに對すると、又聖道自力修行の劫數を歴るに對するの意もあるべし。

須臾は頃刻の事にして、しばしわづかと云に同じ、俱舍(世間品の頌文)などに、晝夜を三十須臾と云ふ等の、時量を定むる義には非ず。
 先づ三途の壽命の長遠に對するとは、畜生の壽は長短不定、其長きは千萬億歲乃至、一劫を経ると(甘露味論の説と、續因九、十一引之)あれども、これ一應の説、再應は彼の祇園精舍の蟻(賢愚因緣經の説、說因九、十四)鳩(大論出、說因六、十三)の如きは、無量劫を経ると云々、餓鬼は人間の一月を一日一夜として、月年を成して壽五百歲也、(人間の年月にては一萬五千歲也)地獄の最初、等活の壽命五百歲也、是人間の歲時に非ず、先づ人間の五十年を四天王の一日一夜として、彼の天壽五百歲也、此の五百歲を等活地獄の一日一夜として五百歲也、されば等活の一日一夜を、人間の歲時につもれば九百萬年に當り、一年は三百二十四億歲也、(經律異相、佛祖統記三十二)況んや黑繩衆合等、其の壽轉々倍増して、無間地獄は劫數でつもる也、如此三惡の壽命の長遠に對すれば、誠に人

問の一生はまたく内也、故に經に須臾との給へり云々、又聖道自力修行の長遠に對するとは、夫れ生死出離成佛を云ふに、小乘の行にて出離が三生六十劫、四生百劫等と云ふ、大乘にて成佛は三祇百大劫と云ふ、此長遠の劫數を皮肉分張難行苦行をなす事なるに對すれば、人間一生の修行は誠に僅かなる事也、故に經に須臾との給へり、此須臾なる修行もまだ難行とでも云はゞこそあれ、唯身の堪へ心の及ばん程、口稱念佛するのみの事なれば、實に貴き法門に逢ひし事を喜びて念佛すべし、問かゝる易行の本願念佛を勤苦と説きたまへるは云何、答、凡夫は總じてなれざる事には退屈し、殊に善事に懶く、惡事に心進むが持前なれば、是を勸誘し給ふ故、苦修難行には非ざれども、懈怠を防ん爲に勤苦とは給へり、されば導師の御釋、(往生禮讚)上在三形似如少苦、前念命終後念即生彼國豈非快哉じ上、念佛するは實の勤苦には非ず、唯だ初心の凡夫のなれざる故に、苦の如く思ふに順じて説き給へることは、似如の二字にて可

知、無能上人の詠に「はじめにはものうかりしが今はまた、念佛せざればわびしかりけり」と、又「後の世の多きあたひを思ひつゝ、いさみすゝみて御名を稱へよ」と、喩へば雇はれつかはるゝ者の過分のあたひを取んと思へば、苦しく苦勞なるをも物の數ともせず働くぞかし、まして我分相應にすゝみつとめてだにあれば、順次に地上の菩薩となつて、其の儘觀音、勢至、普賢、文殊、と肩背をならべ、膝を組ん事過分の面目に非や、かやうの道理を以て本文に、わづかに一世の勤苦をもて、永く九品の快樂を受けん事は、限りなきよるこびぞかし、とはの給へるなり。(往生要集上本に云、今學二十樂而讚淨土猶如三毛以之滯大海、一聖衆來迎樂、二蓮華初開樂、三身相神通樂、四五妙境界樂、六引接結緣樂、七聖衆俱會樂、八見佛聞法樂、九隨心供佛樂、十增進佛道樂。)

● 照孝院殿(托、往生卷二)
 ● あやうしな(さてもあやうき事かな)この本願にあはざらましかは、かなしくからきめは見てま

じ物をと。
 註に、生死事大無常迅速也、一息來らざれば則ち後世に屬す、此の一筋の息すでにされなば、一蹉これ百蹉にして、如何に悔ゆともかひあらんや、一度人身を失へば百劫にもかへる事かたし、あやうきは此の一生也、十惡常に造りて、後世の仕度なし、晨夕とさはぐ間に、思ひよらず病を受け死に趣きなば、地獄に墮ん事決定也、昨日にも命をばらば、悲しく閻魔の呵責にあひ、獄卒の鐵鞭をうけて、苦しき目に合ふべし、今日此の不思議の本願に逢へる事は多生曠劫の幸也じ上、この本願といふに、不值佛法に對すると、聖道自力に對するの二意あり、總じて佛法に値ずば争で修行せん、修行なくば、何を以て罪を滅せん、罪滅せずば惡趣に墮するの外あらんや、故にあやうしな等と云々、又同じく佛法に値ふと云へ共、聖道自力の法門に値たる分にては、愚惡下根の凡夫争でか如說修行する事を得ん、如說修行ならでは、罪障を滅し生死出離往生成佛の利益ある事なし、然るに超

世大悲の法門、機に善惡の差別なく、入りと入る人悉く如說修行する故に、一人として往生成佛せざるはなし、謂く惡人も如說修行すれば、謗法闍提回心皆往、下機なれども如說修行、上盡一形至十念三念五念佛來迎云々、故にあやうしな等と云々、からきめとは、辛苦の義也、「九重の花の臺を定めずば、煙の下や棲ならまし、(定家)「たちかへりまたぞ沈まん世に超る、本の誓ひのなからまじかは、(新後撰隆轉)

● うしろめたき、心のあだの身をはなれぬにつけても、本願のかたうどのことにたのもしくたばね侍るぞとよ。
 ● うしろめたきとは、(言釋に上の二十四丁と兩所に解釋あり)初にはこはうしろ見ま欲てふ言にて、後ろくらく心たかるゝ事なりと云ふ、後には吾後ろの見ぬすて心に痛きを後目痛きといふを轉じて、人の心の後ろ暗きをも云ふと云々、初説はたきと云ふを欲の言とし、後説は痛の略言とす一應見れば左右するなれども、背ろ見たきに見なざれば、心

痛きと云へば二説相通して初後の別あるのみ、今は背目痛の方ならん歟、心のあだとは、煩惱の事也、身を離れぬにつけても、煩惱妄念は生れ付ての目鼻の如く、止めやめんとするに止む事なし、かたうとは、方人とかく、我に與力し後楯となるを云ふ也、ことに云ふに、力ありて、字眼也、餘法餘行にては止め止めんとするに、煩惱惡業の止まらざる者の助かると云ふ利益ある事なし、爾るに他力大悲の本願念佛にのみ、此の利益ある事を顯はしたる詞也、云々已上。

●三に回向發願心といふは別の仔細なし。
回向發願心を釋するに二義あり、淨影大師曰、直爾趣求説之爲願、挾善趣求説爲回向已上、これは發願と回向とを別釋するに、己作未作兼唯直挾の差別をもて委知せしむるの義也、宗門に於ては、第三心を別釋する義はなき也、曰、回向も但の回向に非ず願生の回向也、發願も但の發願に非ず、回善願生也、釋に云、(往生禮讚)所作の一

切善根悉く皆な回して往生を願ふ故に回向發願心と名く已上、さて此回向といふに就て、往想回向、還想回向といふ事あり、三心の時は往想回向也、唯常に申す念佛を極樂往生と振り向けるを云ふ也、還想回向とは、釋云生彼國已還起大悲回入生死教化衆生亦名回向也已上、發願文の如き、上半は往想回向也、下半は還想回向云々、往還具するに論なし、往想のみにて、還想なき者の生不生の事、諸師は往生を許さず、兩祖大師は往生すと決し給ふ也云々、(決疑四卷、十八通)

又平等回向(是を淨土宗には總回向と云ふと心得べし)別回向(切回向と云ふとは異なれり云々)又三世の善根を回すると、過現の善を回するとの二意あり、我門に過現の善を回するは、造業決定し感化の力强し、故に三經一論皆已造の善根を回す、故に過現の善を回する也、華嚴經等には、三世一念圓融の道理を説く故に、未來の善根をして生長せしめんが爲の故に三世の善を回する也云々、(疑問鈔下七の意)私案るに、宗門に過現の善を回す

るは耽著有相を宗意とすれば、圓理に心を運ぶは好まざる故なるべし云々、又亡者回向といふ事あり此回向の得益に熏發直出の差別あり云々、(委しくは別録の如し)さて是より、三心の第三回向發心の義を細談せば、先づ回向心に二種の四句分別あり、初に願行有無の四句。

- 一には有願無行、(非宗意願孤無所至不往生也)、
 - 二には無願有行、(非宗意行孤無所至不往生也)、
 - 三には有願有行、(宗之本意願行具足決定往生也)
 - 四には無願無行、(非宗意世間之人也、一向宗亦爾り、往生すむと云ふて願を奪ふ、申は自力と云ふて行を奪ふ云々。)
- 次に西方餘事對待之四句。
- 一には一向西方願、(宗之本意決定往生人也)、
 - 二には一向餘事回願、(非宗意全不往生人也、是祈禱念佛する人也)、
 - 三には西方餘事俱回願、(非宗意不定往生人也、是現當二世安樂と祈る人也)、
 - 四には西方餘事不回願、(全不往生、世俗の輩の無記念佛)已上、回向發願心の二種四句を辨じ畢。

但し初めの願行有無の四句の、第二無願有行に就て評論あり、或說法者曰、祈禱之爲になりとも、二世安樂之爲になりとも、念佛申しさへすれば往生するぞ、偏窟に唯往生極樂の安心でなければ往生せずと局情に思ふべからず、其證據にはとて、執獅子國の阿彌陀魚の縁を引出して、是は魚を取る爲め計に申したれども往生せり、況や祈禱二世安樂の念佛で往生せいでとは、宗の非本意を勸進せり、是れ甚しき邪説なり、又有人の云、今時は皆人下根にして祈禱を樂欲す、殊に高貴富裕の人に向て驕直に唯往生の爲に申せと勸めては決して機を失つべし、故に祈禱になりとも念佛申しさへすれば、結縁となる等と云々、是は後ろに歩んで前にすまんとし、轅を北にして越行かんとするが如し、二祖は是を邪因邪業輪回業と、誠め玉へるをば、云何ぞ必ず是等の勸化を信用する事勿らん、(無願有行、有願無行の二、何れも宗の本意に非ずと雖ども、強て得失を論せば、有願無行は三生果遂の願に乗じ、無願有行は其益なし、直牒五

(382)

丁云、唯願雖二違因一唯行微々佛力難及、依何果遂因とならん云々、阿彌陀魚の縁、(決疑鈔直牒四、托、往生卷五)

●たゞ申念佛を極樂に回向して、まめやかに往生せんとながふを云ふ也。

たゞ申念佛とは、祈禱二世安樂、身すぎ口すぎ人見せの虚假等の念佛に非ず、三心具足の念佛也、
「たゞたのめよろづの罪は重くとも、我本願のあらんかぎりは」とこの佛勅のたゞと同じ、名喚法子の歌に「たゞ申せたいと思ひて唯申せ、申はたゞの唯申也」、(芝山重豐郷の云く、此歌唯申念佛の骨隨を詠みあらはしたる、さとり歌とも云ふべし)されども又無念無想になりて、うか／＼と申が唯申と云ふには非ず、唯南無阿彌陀佛と出る聲が、本願に願じて往生と信する計也、大師の御在世に、聖光聖覺の二師へ對して示し給へる、散亂妄念をも顧みず、身の淨不淨、心の善惡、三心の沙汰をもせず、唯南無阿彌陀佛と申す、是則決定往生の故實也、心腑に收めて忘るゝこと勿れとの玉ふ

が、直ちに唯申しの念佛也。

又此回向心に、臨終回心の往生と、命終退の不往生との義を示さば、此の義は上の二心にもあれども、回向心の下にて辨するは、殊に其機多ければ也云々、先臨終回心往生の義を云はば、平生は祈禱二世安樂等と心得て申したる人の、最後にせまり世の無常不定を覺知して、今度は必死と決定して、極樂往生と回向して往生する人あるべし、されど世間に専修の勸めを聞ても、此平生不安心の人の往生せるをもて、回心往生といふ、義を知らず、潔く正心を立て得ざるあり可レ悲云々、次に命終退不往生の義を云はば、平生は臨終正念往生極樂と志したる人の、最後に病苦にせめられて病氣本復に回向して、往生仕損する人もあるべし、病業に報ふ事なれば、念佛の行者にもいかなる難病長病を受けんも計り難ければ、常に能々心を練りて、節操を亂るべからず、註に曰、念佛往生義云、(和語灯七、用意問答^{十四})回向發願心と云ふは、修する處の善根を極樂に回向して、かしこに生せんと

願ふ心なり、別の義あるべからず已上、選擇集上云、回向發願心之義不可^レ俟別釋^レ行者應^レ知已上、三心の中回向心の義心得やすし、故に大師別釋をなし給はず、依て本文にも別の仔細なしと、極略釋にて畢り給へり已上、豎の三心釋を畢り、已下は横の三心を示し給ふ。

(683)

歸命本願鈔講說卷三終

歸命本願鈔講說卷四

●さてくかやうにくはしく申わけば、中々事多くして、かへりて詮なるべきところやかくれぬらん。

已上に豎の三心釋し畢りて、已下は横の三心釋なり、今文は結前生後にて、上を結びて下を起すの文也、其意は古歌に「をしゆれば中々なほぞ迷ひける、言の葉しげき法の道芝」とよめるごとく、上の如く豎の三心を委説すれば、詞しげくして却て所詮やまされなるとなり、大師曰、三心の名目ばかりを打ちきくときは、いかなる心を云ふやらんごことくしくたばぬべけれども、善導の御心にては心得易きこと也、已上、善導の御心等とは、散善義禮讚等に廣く三心を釋し玉へども、所詮の所、至誠心は虚假を誡めて眞實の厭欣をすゝめ、深心は疑慮不定の心をいまして、稱名正定業なることを決信するをすゝめ、回向心は餘事回願を誡め

て、唯往生とふりむけよとなれば、何もむつかしきことはなきぞと也云々。

●たゞ三心のたほすがたは、まことしく本願信じて往生せばやと思へて侍るなり。

註曰、捨子問答に云く、凡三心といへばとて、別別にたこすべき心にてはなき也、たゞねんごろに佛を頼みて深く極樂を願ひ、一心に名號を唱ふる人の心を、三品にわけて三心とは説くなり已上、まことしくと云ふが至誠心なり、本願を信じてと云ふが深心也、往生せばやと思ふが回向心なり、三心私記に云、以不僞心信佛本願方欲往生是曰三心と已上、大師云く、往生の心まことにて我身を疑ふとなく來迎をまつ人、これ三心具足の念佛申す人なり已上、此意を後嵯峨院の御製に「こごばには三つと説けどもひとすぢに、まことをいたすこゝろなりけり」、「極樂へゆかんと思ふ心にて、南無阿彌陀佛といふは三心」。(八幡宮の神詠)「僞はらすまた疑はず彼國を、願ふは三つの心なりけり。」(無能上人) 此故に本文に、たゞ三心の

たほすがたは、まことしく本願信じて、往生せばやと思へて侍るなり、と示し玉へり、問三心に横豎の別あるは何の故なりや、又いづれや本、何れや末委しく示し玉へ、答是所對の人によりて横豎各肝要なれども、本願大悲の構へより尅論すれば横の三心は本にして豎の三心は次なるに似たり、先所對の人に依りて差別あるにて二義あり、一には有病の機のは横の三心肝要にして、無病の人のためには横の三心肝要たり、決疑鈔、三(選擇第八章三心篇の釋)若有衆生本無三病不治自安、聞厭欣說願具三心也、若有衆生有虚假障障即往生聞說二者至誠心即除虚假障、有疑心障亦障往生聞說二者深心除狐疑障、有不回向障亦障往生聞說二者回向發願心除不回向障本不具三心之者俟一二三說始具三心、斯人即是豎具三心也已上、又舜昌法印云、(敕修御傳の評語) 抑上人(宗祖大師)ある所には三心の要を委しく教へ、あるところには三心の沙汰詮なきよし仰せられたり、これ人によるべき

事なり、名號を唱ふれば必往生すとばかりまめやかに頼みて唱ふれば、その人の心にたのづから三心もそなわりぬるを、中々に三心とてことくしく申す程に、かへりて信心をみだる事も侍るなり、かゝらん人の爲めには三心の沙汰無益なるべし、もし日來は疑ひの心もありて三心具せぬ人も、聖教を學すれば道理にをれて三心のたこることもあれば、さやうならん人の爲めには、三心の要を知らんも大切なるべきを、一向に是を非せばまたそのとがあるべし、此のすぢを心得なば、上人兩様の御勸進さらに相違をなすべからざるものなり已上、是等の御傳へをもて横豎各々其機に隨て肝要なる事を知るべし、されども豎に具すると云ふも其病を除く迄を云ふことにて、除き已れば横具の人に同じく、助け玉へと身を本願に打ち任せ、唯申すより外はなきなり、されば横豎を尅論すれば、横具は本願所被の本となる事顯然たるに非ずや云々。

又一義を云は、豎の三心は宗義弘通の法將に被

り、横の三心は單直無智の在家に被る、譬は法將は醫者の如く在俗は病人の如し、若し醫者にして醫學なくば病根を見究め、所應の藥を調劑し毒忌み等を指揮し本復せしむる事を得んや、今も其の如く、宗義弘通の出家にして虚假疑心不同向の三病を辨せず、至誠心深心回向の三藥をも知らずば、争て衆生を拔濟して淨土往生の利益を與ふることを得んや、餘は且置く、三心の法門に於ては心を止めて學ばずんばあるべからず、無智の在家は病人の如く、藥能はしられども、醫の教に隨て藥さへ吞めばよし、却てこしやくだてするは害ある如く、かれこれと法門さばくりは却て往生の害をなすなり、されは大師の御示しに、たゞひらに信じてたにも念佛すれば、すゞるに三心はあるなり、さればこそ世にあさましき一文不通の輩の中に、一筋に念佛するものは臨終正念にしてめでたき往生どもするは現に證據あらたなることなれば、露ちりも疑ふべからず、中々よくも知らぬ三心沙汰して、あしざまに心得たる人々には、臨終のわる

くのみありあいたるは、それにて誰々も心得べきなり、(和語灯二の卷) 現證(長四郎等の如し)、如是豎の三心は出家、横の三心は在家と云ふは一應の配當なり、豎具の出家と雖も再往往生の入眼は横具なり、是れも譬へば彼醫者の醫學したるも、自身の病氣には他の醫師の療法をうくる如く、豎の三心を學知したる出家も、自身往生の爲には助け玉へと本願にすがる、横具の外あることなし、されば豎具と云ふも、唯病を除く法門の安立にして、落付所は横具にあれば、是も亦横具其本なる事知るべし。

此の道理を以て、宗門に發迹入源と、施化利生の二門を分別し、愚鈍念佛を第一と相傳る也云々、(此義次下に委悉せり、具には下にて可し知)。

●又詮するところ、三心とは本願をたのむ心にて侍れば、佛たすけ玉へと思ふ心だにあれば、三心はたのづからその中にをさまるべきなり。

註に、是は前に修行者の尋ねられしこと也、(上に問て云、なごてか又助け玉への一念にたるべから

ん、委くは教へ玉へなんやといへばと、上人の云、心には阿彌陀佛助け玉へと思ひて、口には南無阿彌陀佛と唱ふるを三心具足の名號と申すなり、已上、寂惠上人の起請文に云、先師に承り候ひし相承の安心は、真とある心にて疑ひなく往生せんと思ふを申し侍るなり、是も猶煩はしく唯助け玉へと思ふが往生の安心にて候、此の助け玉への心の内に、三心も四修も籠りて必往生するぞと候ひし也已上、此心を扶木抄に、權僧正公朝「二つなく頼むになればたのづから、三つの心はありけるものを」、俚語に曰、現世後世兼て頼まず、唯一筋に後世助け玉へと思ふて稱念すれば、我れしらすに三心具足するとなり、又た世間の惡事なれども、一筋に願へば其事成就すと云ふことを云はば、金輪の謠に「蜘蛛の園にあればたの駒をつなぐとも、二た道かくる人は頼まじ」、(此歌の發りは長明發心集八卷に出る、四條の宮の半女みなぞと云ふ女の、人を恨みて、貴船明神へ百夜丑の時詣でせしより發るなり、可し知人をのらふ惡事な

れども、我身を捨て、一すぢに祈りし故、願のまに人を殺して恨をはらしたるなり、明神かく云ふ誓はなけれども、一筋に祈りたれば、其願ひ満足せり) さすれば善惡共に心を一所に制すれば事として辨せずと云ふ事なしと云ふ、佛勅信するに餘りあり、況んや若不正者不取正覺の大誓願在す阿彌陀如來に向ひ奉りて、唯一と筋に極樂往生助け玉へと思ひ入て、唱ふる人の往生せぬ理ありなんや、然るを心得違ふて現當兩益、世安樂など、二道かけて唱ふるは大なり誤なり、實に蜘蛛の園にあればたの駒はつなぎとむるとも、二道かくる人の往生は頼みなき極りなり、又往生のために正定業たる本願正因の稱名を、但信口稱する人は決定必成の往生也ゆめく疑ふべからず、我一人を往生させしとして十劫正覺の如來、假令身止諸苦毒中、我行精進忍終不悔の激誓を無益になし、我建超世願の自誓に背き、如是大願誠諦不虛超世間の讚言虚妄ならんや、仰で信じ、伏して但信口稱に心根を決して稱名相續すべし、夫れ人とし

て心に把握なく、境を逐ふて轉ずるものは現當共に大事をなすことあるとなし、されば又心に把握ありて確乎として一事を守れば、現當共に大事を成せざることなし、尤も守るべき一事とは何ぞや、世間に於ては孝の一事を守り、出世に於ては念佛の一行を專にすべし、各此の一事に心を止めば、世間出世間共に一大事を成辨せんこと掌をさすが如し、そは又何にが故ぞ世間百行の中に孝の一を擧げ、出世間萬行の中に念佛の一を取るぞとならば、世間恩分の最は親に在り、出世大恩の最は彌陀慈尊に極る故なり、先づ世間の孝を云はゞ三道一致に是を勸む、四十二章經に曰、凡人事天地鬼神不如孝其親已上、梵網經に曰、孝順は至道の法なり孝名爲戒已上、菩薩胎骨經に曰、阿難白佛言、世間萬法莫過父母劬勞恩大、諸仁者由之觀之粉骨碎身未足爲報已上、爰を以て釋尊成道して先づ御父淨飯大王を度し、次で初利天に昇つて御母摩耶夫人の爲に一夏說法して、十月懷胎の恩を報じ玉ひ、又觀音菩薩は寶冠に彌陀を

頂き、勢至菩薩は寶瓶に彌陀因位の白骨を盛りて頂き玉ふ、猶又釋尊は御父の葬送に棺を荷ひ、亦御入涅槃の後金棺より起坐し合掌して、御母摩耶夫人に對して遠屈來下と謝辭し玉ふ、而して後阿難に對して告て曰、後世の不孝の爲に我母摩耶に對したりとの玉へり、(聖女の事、地藏本願經に出)佛菩薩既に爾り、況や凡夫として父母の恩を忘れ可ならんや、故に導師は散善記に三福無分人面畜生との玉ひ、大師は大經私記に、孝養法有内外共是不聊爾最以是爲往生業との玉へり、又彌勒勸孝の偈に曰、堂上有佛二尊一懷惱世人不識、不用金彩裝成亦非梅檀彫刻、只看現在爺孃便是釋迦彌陀也、若能供養得何別用作功德已上、(民間の麥つきうたに、後世を願はゞ二親わがめ親は三世の彌陀如來と)、(已上は佛道の勸孝)、次に神道の勸孝を云はゞ、大和國龍田明神の託宣に曰、(和論語一の卷神祇の部に出でたり)、なべて貴き賤しき人、天を祈り地を祭り、もろくの

神を祈らんよりは、汝が父母によくつかへよ、即ち兩親は内外の神明なればなり、なんぞ外に祈りもとめんや已上、又伊勢國三島明神の託宣に云、人家貴賤を論せず、必ず内外兩宮の神のみますあり、若よく親につかへて崇敬せば天より寶の雨を降らし、地より一切のたから涌出し、天神も地祇も日夜その家に影向したまひて、所願としてかなはずといふ事なし已上、たゞ仰げうつし繪ながらかぞいろの、外にはあらじ神も佛も、(此の歌は遊行尊任僧正の、駿河富士郡今泉村五郎左衛門孝徳に依りて、九十三石の御朱印を賜ふ、是を賀して父母の畫像に讀せり)。

又儒道の勸孝を云はゞ、孝經一部此一事を明し、四書六經に散説す、曾子曰、百行之先莫過於孝、孝至於天、則風雨順時、孝至於地、則萬物化生、(備中國柴木村勸助のこと、新著聞集一孝篇に出)、孝至於人、則衆來臻、(僞て訴費利支丹、托、事實卷二)、可見三道一致に孝を讀することを、是外なし我が身に受くる最上の恩あるゆゑ也、されば

父母恩難報經、(後漢沙門安世高の譯)、曰父母於子有大増益、乳哺長養隨時將育四大得成、右肩負父左肩負母、經歷千年更使便利背上、然無有怨心於父母、此子猶不足報父母恩已上、斯く大恩を受けたる父母に孝せず不孝なれば、其罪至て廣大なり、雜寶藏經に、佛の曰、若人於父母所作少供養、護福無量、少作不順罪亦無量也、已上、長嘯啓蒙上、不孝者古往近來速有天罪之事、如群籍所詳不瘡于此、以夫背王法者、或無情者、或人之所憎者、或多留多難者、其家日々衰落子孫斷絶等、悉皆莫不出於不孝矣、此即天之所惡而罪無所逃、天地之間、可懼可不慎、然而速改過盡孝養者則天豈惡之乎、已上、不孝現罪の證(武田信玄、托、事實卷四)次に出世萬行の中には、念佛一行を最要とする義を示さば、導師の釋に云、諸佛所證平等是一、若以願行來收非無因緣、然彌陀世尊本發深重誓願、以光明名號攝化十方已上、佛果の上は平等

なれども、因位各別の發願は果上に於ても自然と差別あるなり、其因願の有無とは、諸佛は唯善惡因果應報の理に任せて、三學無分の下機を救はんと云ふ別願なく、彌陀は因位の極惡最下の惡衆生を救はん爲に、五劫に思惟を累ね、四十八の大願を發し、兆載永劫苦修練行して十劫以前に願成就果し、機を云へば五逆十惡、行を云へば臨終の一念十念迄も、皆悉く順次往生遂げしめ玉ふ故に、自らも我建超世願と名乗り、釋尊も無上大利と讚じ、諸佛も擧て不可思議功德往生不虛と證誠し玉へり、如是諸佛不共別願を發起し成就して、我等如き三學無分愚惡最下の機を、攝取愛愍し玉ふ大慈大悲の恩分を蒙るが故に、出世萬行の中に於て、御本願の念佛一行をわらび取て修せよと云ふ也、因位發願有無差別の義を譬へば、鑄物師が香爐火鉢等に種々の模様を付るには、先夫れく鑄形を拵ゆるは諸佛因位別願の如く、正しく金をわかしてつき込む時は差別なし、是れは所證平等の如し、平等につきこめし器は、或は鶴龜、或は草

木花果等、種々に差別あるは、鑄形に依りて分るなり、今も其の如く、因位の願行各別に依て、人法二執の蠟は流れ落たる平等所證の佛果の上にも、猶利益に種々の差別あり、多寶に法華證明、藥師に衆病悉除、彌陀に萬機念佛往生等云々、應レ知。
 可^レ見世間の最要は孝に止り、出世萬行の最要は念佛にあることを、而して此の二要六つかしきことに非ず、最明寺時頼入道の歌に「親の氣にいらんとすれば違ふなり、そむかじとせよあふものぞかし」と、父母の命に背かぬ様にするが孝行なれば、これいとやすきことなり、佛願佛意に任すが安心、「頼め人たのむ人には頼まれん、頼まぬ人も頼めとぞ思ふ」と云ふが佛意大悲の徹底なればなり、されば本文に、又證する所、三心とは本願を頼む心にて侍れば、佛助け玉へと思ふ心だにあれば、三心は自らその中にをさまるべきなり、とは示し玉へり。

●しかるゆゑは、罪たほき身のおさましければ、佛ならではないかだとおぼゆるに付けてこそ、助け玉へともたもはるれば深心もこれにこもれり。機法二種の信あり、歌に「かゝる身を佛ならではどはかりに、悲しくもあり嬉しくもあり、」
 ●そのたすけ玉へとたもふ心には、露のいつはりもなきぞかし、それをこそ至誠心とも申せ、(露は極少の義なり)是のたすけ玉へと思ふは、やがて回向發願心にて侍るなり。
 ●やがてとは、とりもなほさず、すなはちの心なり、助け玉へとは、極樂に生れんことを頼む故なり。
 註に、向阿上人往生至要決に云、その助け玉へと思ふ心に三心はたのづからそなはるなり、然る故は、まことしく助け玉へと思ひていつはらざるは至誠心、ひとすぢにたのもしく思ひて疑はざるは深心、助け玉へと願ひ思ふはすなはち回向發願心なり已上。
 ●あまりにつたなくなりて、心のいたりすくなき身には、本願いし／＼の事までも猶たもひわきが

たかんめれば、それにつけてもわづかにたすけ玉へとばかりこそ、思ひねつべき心にては侍れ。
 註に、無下にたろかなるものは、心のはたらきなければ、本願の委しきいはれも得聞わせず、其の様なものに付けても、此助け玉へとばかりの安心なれば、思ひ易き心ぞとなり。
 ●これ程の事は又たれかたもはでもあらんなければ、みな往生はしつべくこそあれ。
 註に、念佛往生の安心は、所詮此れ程と心安なければ、いかなる者も往生し易き事なり、此れ法藏比丘の昔し、五劫に思ひを盡して夜晝となく案じ立玉へる本願の三心なれば、あだに云ふべき事にあらず、よく下機にかなへる心もち也、(本願の大悲にて、よく下機にかなふ様に案じ立て玉へるなれば、あだ疎そかに小むつかしく云ふべきことにあらずと云ふ意)。
 ●三心のゆくゑもしらぬ、あやしのめのわらはべなどの往生する心づかひは、みなこのつらにてこそ侍らめ。

註に、三心は何れの經にかあるらん、其の名も知らぬ賤しき女わらべなどが往生するは、皆此の助け玉へと計り思ひて來迎に預かるものなり、和漢の往生傳に、無智の童男童女の往生を多くのせたり、和名抄に云、童男(乎乃和良倍)童女(女乃知良倍)つらとは列の字なり、皆此なみの安心ぞと云ふ心也。

上人云、たゞひらに信じてだにも念佛すれば、すするに三心はあるなり、さればこそ世にあさましき一文不通の輩の中に、一筋に念佛するものは、臨終正念にして、めでたき往生どもをするは現に證據あらたなることなれば、露ちりも疑ふべからず、中々よくも知らぬ三心沙汰して、あしさまに心得たる人々は、臨終のわろくのみありあひたるは、それにてたれもく心得べきなり(七箇條起請文)。

俚語に、三心をよく知りたると云ふは、一筋に往生せばやと本願を信じて、一向念佛する人を云ふなるべし、信心沙汰にか、はり居たる説教師、一

人は行水のたらしの中にてのめり死し、一人は富の札をよびながら死せり、是れ臨終のわろくのみありあひたるなり、とかく南無阿彌陀佛の聲に、我等が一大事の後世を任せ置く心を三心とは云ふなり、凡今時談義僧とて、世渡りするに滅多に信心呼はりせぬはなく、一人として臨終のよきはなし、可_レ恐_レ可_レ慎_レ云々。

●たゞし三心こまぐとならひ知りたる人も、念佛うち申しわたるつねの心づかひは、たゞ助け玉へともたるゝなんめり。
●たゞしとは簡別の言なり、本願の案内を知らぬ男女の類、又他宗の人々は同じ助け玉へと思ふにも智者學匠の助け玉へと思ふは貴からんと存する非を、防ががために簡別し玉ふなり、俚語に云、(御傳十九丁)阿波之介と云ふ陰陽師、上人に給仕して念佛するありけり、或時彼の俗をさして、あの阿波之助が申す念佛と、源空が申す念佛といづれがまさると、聖光房に尋ね仰せられけるに、心中にわきまふるむねありといへども、御言葉を受

け玉はりてたしかに所存を治定せんが爲に、いかでかさすがに御念佛に等しく候べきと申されたりければ、上人ゆゑしく御氣色かはりて、されば日來淨土の法門とては何事をきかれけるぞ、あの阿波の介も佛助け玉へと思ひて南無阿彌陀佛と申す、源空も佛助け玉へと思ひて南無阿彌陀佛とこそ申せ、更に差別なき也と仰せられければ、もとより存する所なれども、宗義の肝心(宗義肝心は、不簡大悲が諸宗超過格外の法門也)いまさらなるやうにたふとくたばつて、感涙を催しきとぞ語り玉ひけるに上、されば鎮西上人は、助け玉へ阿彌陀佛と、常に心にも思ひ口にも云也とぞ仰せられたり、依て記主禪師(東宗要)先師の定言に佛助け玉へと被_レ仰、即是歸命也、(次下の註にも引れたり)と釋し玉ひ、又寂惠上人の起請文(次上に出でたり)先師に承り候ひし相承安心は、眞ある心にて疑ひなく往生せんと思ふを申し侍る也、これも猶わすらはしくは、只助け玉へと思ふが往生の安心にて候、この助け玉への心の内に、三心も四修も籠りて必

す往生するぞと候ひし也、又良順上人(寂惠上人弟子)の起請文に云、たとひ智慧をそなへたりとも、往生に趣かん人は、ならひし智慧をば心に忘れはて、無智のものゝ又心なくうち頼みて、念佛する心なるべしに上、代々正義の相傳知_レ是_レ云々、依て本文に、たゞし三心こまぐとならひ知りたる人も、念佛打申て居たるつねの心づかひは、たゞ助け玉へともたるゝなんめり、と示し玉へり。
●されば阿彌陀佛をたのみ奉りて、往生をねがふほどの人は、智慧あるも智慧なきもまちつく所は、みな等しき心もち也。
俚語に、智愚ともに南無阿彌陀佛にて往生するぞと、決信するが本願勸化の正意也云々、註に、法然上人の起請文にも、たとひ一代の法をよくく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じうして、智者の振舞をせずして唯一向に念佛すべし云々、これ代々相傳の一大事也、歴代の起請文(安心決定集の事也、七枚起請文とも云ふ、大師、鎮西、記主、寂惠、了順、了實、

(604)

了譽、)をも見るべし、又大師云、日頃習ひたる智恵は往生の爲には物の用にも立つべからず、されども習ひたるかひには、如斯知りたるは、かりなき事也、(凡夫有相の智恵學問は、生死出離の用に立たずと、斯く知りたるは計りなき事也と、斷惑證理の無漏智ならざればなり、)

●さてこそ念佛の功德を得る事も、往生のほいをとぐる事も、智者なればとてもまさらず、愚者なればとてもわとらず、賢きも愚かなるもわなじく佛のむかへにあづかり、高きも卑しきもともに花のうてなにはのぼるらめ。

註に、智者が上品に生れ、愚者が下品に生るゝにても無し、滅罪の多少も、來迎の有無も、たゞ信心による智者にはよらず、何事も佛の御しわざなり、人の賢愚にはよらず。

俚語に、此信心によるとあるを、念佛によると改むべしとて、多く證文を引給へ共一概にしがたし所詮は夾書に、勿論念佛にまかする心と見れば、信心と云ふてもよけれども、殊更本文に念佛の功

能を得る事もとあれば、彌々註も念佛によると改むべし、かやうの所信心と云ふ詞より念佛と云へば、聽衆の聞受けもよく合點し易きものなりとあるにて可_レ知、通師の意は、信心の名言はとかく心得違ふ人多く、いらざる氣いじり心さばくりのみして、却て淺心退信する事ある故、聽衆の聞受け易き爲に念佛として、自然と深信せしむるの義趣と見たり、さればとて、註に信心と云ふが誤りと云ふにはあらず、此所の文段は、心存助給に横の三心を具する事を示し給へる下なれば、念佛の功德を得る事も、阿彌陀佛を頼む心あるより得、往生の本意をとぐる事も、阿彌陀佛を頼む心あるによりて得るぞと云ふの義なれば、文意を解し得て契當せり應_レ知、(講說之時是を辨せよと云ふには非ず、初心の心得の爲に記すのみ、)十勝論十四卷_{二十}(能所同修勝文)光明黑谷之爲_{吾門高祖}也唯持_{尊號}而往_{西矣}、吳瓊法藏之爲_{屠沽下流}也偏念_{佛名}而離_{東矣}又論_{其所叙之位階}者、心堅念多速坐_{上品上生之蓮臺}未_必以_{屠房酒室之}

(605)

人_{而爲}下矣、謂_{其所得之深法}者、往生以後忽登_{地住}已上之高科、又不_論宿習厚薄之異、而成_差、大都能化自修勤唯以_{持名一法}、温_行徒弟訓偏以_{念佛一行}、主徒同行智愚齊行、唯是本願稱名之一法而已、此是平等之慈訓、而亦即無偏之攝受也、斯義唯在_{我家教行}而都亡_{餘門經典}矣、夫七衆通行之與_{嗣傍別授}、通局優劣其如何矣、然今自宗明詰等、以_{自修要行}全授_{求法群徒}、佛法修行之人開眉含咲、胡_絳加之乎行人思察已上、隨文略解して、不簡擇大悲本願を歎すべし。

●たほかた三心は必らずしもならひておこすべきものにあらず、只往生だにもしたくなりぬれば、木のづからぐする事にて侍也。

俚語に、此段大切肝要也、仰信を教勸し給へり、學知の功を用ひざれ共、後世を恐れて願生の心さへあれば三心は自ら具するとなり、註に、習ひて得るを知具の三心と云ふ、念佛して自然に具はるを行具の三心と云、洲云、行具の三心と名目すること、大師も仰られたること語燈錄にあれども、

西山に云ふ行具の義とは異にして機具の三心の事也、西山に蓋する故今も機具と云方よろし、因に西山の行具とは、たとひ心に仰頼の心なきも、南無阿彌陀佛と唱ふれば、必ず三心を具すと立、楷定記云、信心一發立即生也、曰、衆生三心(十八願)正覺佛體(十七願)此願行合成南無阿彌陀佛六字_等と云、又た三心證得十劫既成等と云て、最初發心即便往生と立れば、何ぞ已後に心の有無を論せん、願行合成の南無阿彌陀佛なれば、心なき唯行も必三心を具する等と立る也云々、是は一念義の無願無行には異れども、無願有行の失をば免れざる也云々。

大師曰、三心は必しもならひ沙汰せざらん無智の人や、さとりなからん女人などの得具せぬほどの心ばににてはなきなり、まめやかに往生せんと思ひて念佛申さん人は、自然に具足しぬべき心也已上、是則機具三心の御示し也、此機具往生と、知具往生之義を譬へば、爰に二人あり、一人は愚かなれども、衣食住所におごり氣なく、而して職分

(696)

を出精しつとめて、福裕に暮らす是機具の如し、愚鈍無智なれども生者必滅の理を合點し、修行精進して往生の果報を得る也、又一人は智慧利根にして、商賣の道にさどく、裕福にくらすは知具の如し、智行兼備の學匠は、生者必滅の理を決定し給ふ故、至誠心にて厭欣因果の理を究めて、虚假不實の心を起さず、深心にて機法二信の義趣に通じ、就人就行の理を決して、いかなる異學の妨難にも露塵も疑念を生せず、回向心にて餘事回願す可らざる道理をたて、唯往生の爲に單信稱名して、乘佛本願上品往生の本懷を遂る也是知具の如し已上、知具と機具との譬也、反是智者の三心を具せぬと愚者の三心具せぬ義をも可知、たとひ如何なる福裕の人なりとも、酒宴遊興放蕩嬌奢にして、自の職分を勤めずば、身上滅却せんに争なきが如く、如何に智解ありとも、勝他名聞を締とし、厭離欣求の正見を失し、口稱稱名を怠廢せば、往生成佛の大利を得べき理なきが如し、又祿もなく持傳へたる財もなく、僅かに日雇ぐらしする類の

者、當分少々手回る錢あれば、酒の肴の遊女屋のと云に遣ひ捨て、もう年よりて日雇かせぎも出来ぬと云になれば、乞食非人となる外なき如く、愚者は因果の理にくらく、唯眼前の名利に貪著して、祈念祈禱にのみかゝり、出離生死往生成佛の果報に望みなく、自業自得の火車來現、もとの古栖の獄苦を得る也云々、されば智者愚者共に生者必滅の理を合點して、後世を恐るゝ心より、助け給へと本願にすがり、南無阿彌陀佛と分々に申しさへすれば、自然と三心具足して決定往生遂る也、此義を本文に、往生だにもしたくなりぬれば、自ら具する事にて侍る也、との給へり。

●されば智者の往生せぬもあり、愚者の往生をするもあり。

●さればとは、上を攝して下を發すの言、先智者の往生せぬもありとは、其現證を云は、(東門の阿闍梨の事、御傳四八丁)愚者の往生するもありとは、(空阿彌陀佛の事御傳四八丁)紀之吉住(扶桑往生傳下丁)崔婆(托、往生卷二)白子之妙照(托、

往生卷三)

●これみなしるとしらざるにはよらず、ねがふとねがはざるとのゆゑなり。

俚語に、無能上人の歌に「三心は知る事難く具し易く、具す事かたくしりやすき也」と、いかなる一文不知の愚人なれども、願生の心あれば三心具る也、たとひ博學多智なれども、願生の心なければ具し難しとなり、

註に、念佛名義集云、故法然上人、まのあたりをしへ給ひしは、三心も具する事易き也、善導仰られたるを見ぬきてこれを心得つれば、如何なる無智の人もやすく三心を具足する也、無智の人の申は、主は我身に三心を具したる事をしらねども、三心を知りたる人の此の人に付そひて見れば、夜はよもすがら申、晝はひねもすに申、ちかくよりてとへば、此人の申やうは、あひかまへて此たび往生せんと思ひとりて、此念佛を申はしめてより、さらに怠る事片時も候はず、此念佛を申つけられて忘れがたく候也と、かく委しく物語りするを聞

(697)

に、みな此三心を學ばすならば、よくくならひたる人にすこしもたどらず、此の人はこれ自然に三心を具したる人也云々、又昔深澤法印信尊と云ふ僧、此三心をしらん爲に八幡宮に詣で、祈り申しける時、御示現に、「極樂へ行かんと思ふ心にて、南無阿彌陀佛といふぞ三心」と告させ給ひけるとなん、此事は鎌倉の宗要集に記し給へり、玉葉集第十九にも是をのせられたり、詞に相違あり見るべし已上。

●さてくかやうにあまりたやすき事にて侍る程に、人ごとにかへりてはまことしからず思ひて、さすが往生ほどの大事をとげむには、いかにも智慧も深く悟りもあらん心にて申さん念佛をぞ、佛うけひき給べき、たゞたすけ玉へとばかりはかるがるしと、事たらぬげに思ひあひたり。

俚語には、已下は横の三心の餘論、導空兩大師勸進の趣きを向阿上人潤色依順して勸進し給ふに、十科ありとて別科を立て辯じ給へり、湛澄上人は、已下もやはり老僧の御說法として談し給へり、通

(698)

師の見所し難し、故に註に隨て辯ず、(此事辯せよと云には非ず心得の爲に記し置)。
 註に、さとりとは義解の事也、うけひくとは承引也、事たらぬとは不足がましく思ふ也、思ひあへり註に、思ひ定める心と云を、言釋に破して思ひ相へりと云かなへり。
 俚語に、往生程の大事とは、釋尊一代の教法は生死出離成佛得脱を一大事と宣説したまへり、故に天台は八萬の聖教は生死の二字に促ると云へり、聖道自力門は成佛と云ひ、淨土他力門にては往生と云ふ、言異に音同じければ往生は大事なり、故に往生程の大事をと云へりと。
 註に云、他宗の人は、元より大悲の願意に無案内なれば皆此安心を輕しむる也、自宗の中にも小ざかしき人は、動すれば此所を心得違ひて、いないな念佛の法には別に奇特のやうあらん、争か助け給へと計にて往生の大事を遂んやとて、自ら才學を顯はして珍しき義理を添へて勸むるなり、又往生に無智の僧ありて、禪法の片端を聞き誤りて、

己れ既に玄理を得たりとて人に教へて云く、念佛申にも助け給へと思ふ心のある程は往生はゆせじ、無念にしてうか／＼と申せば本願に叶ふと云ふ、これたかしき事也、已に本願には安心を説給へり、行ひとり運ばず、心を業の主とす、唯願唯行も往生せず、構へて邪師の説を信じて其に、地獄に落る事勿れ、嗚呼末代とは申し乍ら、かゝる淺間敷事こそなけれ、言を無智の道俗に傳ふ、須らく祖師の古き教に任すべし、慎みて凡僧の新しき勸めに隨ふ事勿れ。
 ●かやうの疑はげにもとたほゆるやうなれども、もとより彌陀の本願は愚痴(本書智なれども寫誤なるべし)無智のものゝ爲めなるに、さやうに智慧才學あらん心をとちかはれては、人をわかぬ利益ありなんや。
 かやうの疑とは、上のさて／＼かやうに已下を受けて云ふ也。
 註に、念佛門に立入らぬ人は、疑をなさんこと打ち任せたる理りなるべし、こゝが超世の悲願也、

(699)

機を云へば五逆迄ををさめ、行を願する時は一念十念迄を立玉へり、安心をとらん時、如何又至りて易き心迄ををさめられざらん已上、愚痴無智は言異に義同、俱舍の頌疏に云ふ、痴と者愚痴也、亦名無智、無三決斷、故已上、無智を救ふは本願の目的なり云々。
 ●又聖道門の心は智慧をきはめて生死をいで、淨土門の心は愚痴にかへりて往生をとぐるゆゑに。
 聖道門等、此土入聖得果は三學兼備ならでは生死を出るの理なし、今智慧の一を學て戒定を略し玉ふは、其勝れたるを學て餘を容するの義也、譬ば盜賊を斬罪するには、手をもて盜を捕へ、繩をもて縛り、刀をもて斬るなり、煩惱の盜を戒手をもて捕へ、定繩にて縛し、智劍にて斬る、小乘にて三界繫縛の煩惱を斷盡して無學果に至り、大乘にて等覺位に昇り、一點の無明を斷じて妙覺位に至る、仕學の此智慧には必戒定を具す、盜を斬ると云ふには必捕縛の二を具するが如し云々、きはめ

ては字眼也、此生死出離の智は、有漏有相の劣慧に非ず、無漏無相の眞智なる事を顯はす字也、淨土門の等とは、淨土の教は自力を捨て、他力本願に託して、後世往生を期する事なれば、自の三學の有無を云はず、煩惱の伏斷をも論せず、唯彌陀の大願業力に依託するを證とする故、智慧さばくりしては仰賴の信立難き故、愚痴にかへりて、仰信するを宗の故實とする也、偕此愚痴に還ると云ふに、宗釋を考ふるに二義あり、一に愚痴の當體を還愚と云ふ、二には還歸の義也、一に愚痴の當體をさすとは、柔鈔八卷に曰、還の字に強に不可存、意許、但淨土の機は愚痴ながら往生すと云ふ也、已上、二には還歸の義とは、十八通第二重玄義序題門の下に愚痴に還る行相を釋して、結文に願は諸の學教の人地、諸義理、合掌又手し、心に念じ口言、助け給へ南無阿彌陀佛、已上、私に此二種ある義趣を考るに、智慧を窮る聖道に對する此所の如きは愚痴乍らの義、又解信仰信對の時の如きは、願愚に還り成るの義なるべし云々、(一枚起請文の、

(700)

無智の輩に同じことある杯、還歸還成の意也、又此還愚と云ふに就て、聖道諸宗の人師、及生學生の俗士杯に、愚痴に還れと云ふは、智慧を研げと云ふても所詮出来ぬ人に對して、詮方なさに教ゆる方便教など、思ひ僻むる類數々あり、是淨土の法門を學ばざる故の愚案也、夫れ報土得生は、通途佛法の定判にては、分眞如の悟りを開きたる上位の菩薩よりでは叶はず、三賢四善根の菩薩も望絶わたる事也、然るを具縛の凡夫の分際にて、如何に智慧を研きたればとて、無漏の眞智を生じ得べきや、若眞智悟り易き事ならば、上根上智の菩薩何ぞ地前の下位に劫數を歴給はんや思ふて知るべし、依之我宗門の安立は、凡夫の報土得生は偏に彌陀世尊超世別願の構へなれば、觀念義解の智慧さばくりを捨て、偏に大悲の本願に依託し、十百生の大利を得る也、されば導師は、正由_二托_三佛願_一以作強縁_二とも、善惡凡夫得_レ生者莫_レ不_レ皆乘_二阿彌陀佛大願業力_一爲_レ増上縁_二也、等とも釋し給へり云々、今聖淨二門に於て出離の得不を對辯せ

ば、譬へば蛇蠅蜂等の、障子の紙を鑽りて出んとすれども出ることを得ざるは、今時澆末の凡夫の智慧をもて生死を出でんとするが如し、若し猫の爪、鼠の牙等あれば紙を破りて外へ出んことかたからざる如く、御在世及正法等の上代上根上智の類は、觀念眞智の爪牙するどなれば生死出離難からねども、蛇蠅の如きは爪牙なき故紙を鑽ることを得ず、澆末愚惡の凡夫何ぞ眞智の爪牙あらん、牙爪なくば紙破るべからず、眞智をみがき得ずんば生死を離るべからざる事、準て可_レ知、然るに我門淨教の出離は愚痴仰信に他力に隨ふ、譬へば蛇蠅の爪牙なきも、他の障子を明くるによつて易々と外へ出る、無_レ出離の凡夫なれども、彌陀超世大願の構へに生死の門戸を八字に開き給ふものか合せて可_レ知、既に明てある障子を出る豈に爪牙のありなしを論せんや、故に諺註に云く、上人の云、聖道門意窮_二於智慧_一而出生死_二淨土門意還_二愚痴_一而生極樂_二淨土門初めより解了をこととせ

ず、唯信佛の因縁をもて偏に他力を仰ぐ計りなり聖道門も後には智をすつれども、初めは智慧より入るなり已上。

聖道門の如きは頓中の漸にして性頓也、淨土門の如き頓中頓にて相頓也、悉くは十八通第二重教相分之下可_レ見、洲剃髮の當初、西圓寺本殿にて念佛し居たる時、西の方の障子を蠅の鑽らんとして苦しむを見て、聖道淨土の出離難易の趣を比べ思ひけるが、其後智旭大師の宗論を閱せしに此辨別あり、又傳燈錄には、彼宗意に就て此譬あり、古靈行脚し、回て參_二受業師_一師窓下看_レ經有_二蜂子_一投_レ窻求_レ出、靈曰世界如_レ許濶不_二肯出_一鑽_二他故紙_一云、聖道諸師の願生淨土は、南岳、天台、永明、智旭等、近く舜昌法師の述懷鈔、惠仲禪師の禪祖念佛集等、(茲脫和尚發心の事、托、往生卷三)。

●自力をもて生死をいでんみちにぞ、ゆゝしく智慧才學あらん心も大切なるべき、他力にすがりて往生とぐるかたにては、中々たゞたすけ給へとねもふが故實にて侍る也。

上文の和釋也、註にゆゝしくと云ふを解するに、二人丸秘抄と言ふを引くを、言釋に偽書なれば引證すべからず云々、義に於ては害なし、古來ゆゝしくと云ふ詞、忌の字をあて、善惡に通じて言ふ言葉と註せり、今も甚だしく勝れたなどの意也、中●註にかへりてと云義、故實、註に代々相傳の習也、乃至章昭が曰、故實は故事の是なる者已上松蔭の顯性房云、佛助け給へと思ふ心を第一のよき心にてある事を、眞實に思ひしる事人ごことなき也已上、玄義分曰、仰惟釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎、彼喚此遣豈容_レ不去耶已上、聖光上人曰、此宗出離是爲_レ故實云々、已上諺註、故實の譬(夜討の相詞、托、譬喻卷二)。

諸此助け給へと思ふは、一宗の故實順次往生の樞鍵なる故、俚語に七義を立て、細釋し給へば、今要を撮て示さん、謂く助け玉への念は、一宗の故實、大事、相傳、祕事(已上の四は横の三心に總配し、已下の三は豎の三心に別配也、)還愚、執心、發願、(已上七義)。

(701)

第一に助けたまへを故實と習ふは、故實とは故事の是なるを故實と云ふ、一宗の源底最極の一大事なりとぞ、されば決疑鈔四丁曰、偏信佛願自身全存三出離無縁、方乘本願得往生即是宗出離故實也(取意)謙遜と高擧之別、美醜兩女の事(托事實卷四)親里に頼なしと思ひ切て、偏に主人を頼む子供は身緒をもつべき前相也、順次往生常座道場生諸佛家に準思すべし、松蔭の顯性房曰、佛助け給へと思ふ心を、第一のよき心にてある事を、眞實に思ひ知る人毎になき也、されば助け給へと思ふ心ありて念佛申す人は、宗の故實に叶ひたる由緒正しき行者也、愛をもて第一に助け給へを宗の故實と習ひ定むる也。

第二に助け給へを宗の大事と習ひ、傳ふる其所以は、往生の一大事は助け玉への念にある故也、大師御生涯の勸進、御傳語灯等にのする詮要は、助け給への安心に定る也、今一二を云は、助け給へ阿彌陀佛と思ふ外に別念を置かずと、此法語にて知るべし、助け給へと思はまたなき一大事と知

られたり、既に別念を置すと玉ふ最も信受すべし、(觀念云々、二世安樂御禮等の別念起すべからず云々)又七ヶ條起請文の序に、淨土宗の大事は三心の法門にありと、其三心を教へ給ふとしては、心には阿彌陀佛助け給へと思ひ、口に南無阿彌陀佛と唱ふるを、三心具足の念佛といふ也と示し給へり、されば此鈔にも三心の要をこれば、助け給への一念にありと決し給へり、故に助け給へを宗の大事と習ひ究むる也。

第三に助け玉へを宗の相傳と習ふは、大師二祖上人に傳へ給ふ肝要は、助け玉への一念也、御傳十九卷云、或時上人阿波の介といふ俗をさして、あの阿波の介が申す念佛と、源空が申す念佛と何れがまさるかと聖光房に尋ね仰せられけるに、心にわきまふる旨ありといへども、御詞を承りて慥に所存を治定せんが爲に、いかでかさすがに御念佛には等しく候ふべきと申されたりければ、上人ゆゑしく御氣色かはりて、日比淨土の法門とては何事をきかれけるぞ、あの阿波介も、佛助け玉へ

と思ひて、南無阿彌陀佛と申す、源空も佛助け玉へと思ひて南無阿彌陀佛とこそ申せ、更に差別なき也と仰せられければ、元より存る所なれ共、宗義の肝心今更なるやうに貴く覺て感涙を催しきとぞの玉へりと、又記主禪師曰、先師の定言に、心にも助け給へと思ひ、口にも助け玉へ南無阿彌陀佛と云ふ也と相傳し玉ひぬ、見つべし三代上人連綿代々の相傳也、又派祖寂惠上人の起請文曰、先師に(記主)承り候ひし相承の安心は、偽はらざる心にて、疑ひなく往生せんと思ふを申侍る也、これも猶わづらはしくは、唯助け玉へと思ふが往生の安心にて候、此助け玉への心の内に三心も四修も籠りて、必ず往生するぞとの給ひし也已上、

前來の義趣、明に大師より鎮西に助け給への外に別念なしと傳へ給ひ、鎮西上人より記主禪師へ助け給へと心にも思ひ、口にも云ふ也と傳へ玉ひ、記主禪師より寂惠上人に、助け玉への一念に三心も四修も皆籠ると寫瓶相承如斯、猶已後代々相承の義、安心決定集の如し云々、然れば鎮西白旗正統

の相承は、往生の一大事は助け玉へと思ふ一念也と習ひ傳る故に、助け給へを相傳の義と云ふ也。

第四に助け給へを祕事と習ふ也、(祕事とは、祕密かくすと云ふ事にてはなし、至て大切大事にするると云ふ義なり)なせ助け給へを祕藏し大切にするぞなれば、佛助け給へとだに思へば三心自ら具する也心具の念佛なれば、十即十生百即百生決定必定往生する正定業なるが故に、譬ば證券手形の如し、所知所領金銀米錢等の品は證券に具してあり、されば助け玉へ南無阿彌陀佛の中に、往生淨土は具してある事準じて可レ知、證券誰か祕藏せざらん、故に祕藏祕事と習ふ也、(已上四種は三心の總釋なり)

第五に助け給へを還愚痴と習ふ、是自然と至誠心に當る也、還愚痴をなせ至誠心と云ふぞとならば、如何なる智者學匠も念佛を信じ願生するには、文字一つ知らぬ愚痴蒙昧の者に成り還りて、尼入道と等しく念佛申せば本願に乗じて往生す、愚痴にさへ還れば正直質直也、質直なる故に虚假なし、

虛假なければ至誠心也、かゝれば世の生賢き人は愚痴なる人と笑ふ、是に少しも取り合はず、唯助け玉へ南無阿彌陀佛と申してをるなり、古に云ふ人笑はずんば誠の道に非すと、實に大功は細瑾を顧りみすと云へる如く、出世に大望ある人は萬事を忍恕し辱を忍ぶべし、韓信出跨下（托、事實卷四）天王寺の蕪坊が讚に「堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬかんにんするがかにん、今も左の如く、助け給へと愚痴に成り還りて念佛すれば、天下萬民に笑はれても、本願に乗じて往生成佛の果報を得、笑ひし人をも逆縁を手づるとし濟度利生を授くるは、其もと至誠心の愚痴の念佛也、故に至誠心を還愚痴に配する也。

第六に助け給へを執心と習ふ也、總べて聖道自力家には執著を斥ふ、其故は無念無想になるを本とすれば也、是に對するが淨土他力也、實我實法の有相耽著の凡夫を濟ひ給ふ本願唯稱の妙法なれば指方立相住心而取境と云ふ也、依之淨土他力家には愛著するを最上とす、不貪淨土無生解脫障故

也、聖道門の人の淨土の法門を知らざるは、無念無想のみに滯りて淨教を拒まんとする多し、大に錯れり、譬へば一の手なれども開けば掌、にぎれば拳と云ふ如く、腰打に開きたる掌を用ひしが、顔洗ふに拳ではこすられまじ、又小兒の手拍々々と、拳を吸ふと開合各々其の用を異にするが如し故に古歌に、「分け登る麓の道は多けれど、同じ雲井の月を見る哉」と詠じ、曇鸞は氷の上に火を焚の譬を示し給へり、謂く見生の火の熾なる則は法の譬の氷り解く、法性の氷解くる則は見生の火滅す、是を見生無生の法門と習ふ也、是は彼責鼓密にして響を含み、龍笛するて音を出すと云へるわかち也、又君子は色の儘にす、小人はこれを色にすと、吾願王阿彌陀如來は凡夫貪愛の色のみ、に十方衆生と誓ひ給ふ、是不簡擇大悲の致す所君子の風也、故に大師は本願の十方衆生をなからと悟入して、凡夫の貪愛執心其まゝに助け給へと思へ、淨宗の故實は本願に執心する者が往生するぞと習ひ究る也、（西宗要口筆意）又他經に其證を出さば、菩薩

所胎經に曰、或有菩薩摩訶薩從初發心乃至成佛、執心一向無若于想、願樂欲生無量壽佛國、何以故皆由懈慢執心不堅固已上、今執心と云ふ、何を執著するを執心と云ふや、謂く本願念佛に執著するを執心と云ふ、阿彌陀經に執持名號即得往生と説かれたまふ是れなり、偕て又た深心には機法を分ち、正雜と助正とを判斷して、就人就行の立信を建立し、本願行體を一向稱名と選定し玉ふを考ふるに、深心は念佛執心の義と知られたり、「是に就て亡妻現に來て夫に遇ふこと、長明發心果五又亡夫來て現に其妻に値ふ事、今昔物語十四丁出たり、此等は其願なけれども夫妻の執心強ければ、妻死して後にも夫に遇ひ、夫と死して後にも妻に遇へり、況んや本尊阿彌陀如來は、其人臨命終時與諸聖衆現在其前若不爾者不取正覺と、一大事の正覺をかけて誓ひ玉ふに、此方よりは是非其往生せんと執心して、一筋に稱名するものなれば、碎啄同時の機感佛應豈に往生せざらんや、云何ぞ來迎を拜せざらんや、是れ深心は執

心なる故也、故に懷感禪師の曰、雜修者爲執心不堅固人、放生懈慢、若不雜修專行此業、此即執心堅固定生極樂、但欣西方一願一行萬不一失也已上、又導師云、願生何爲切、正爲樂無窮已上、又曰、不貪淨土無生解脫障也已上、一心專念彌陀名號、行住坐臥、不問時節久近、念々不捨者是名正定業、願彼佛願故、これ正しく深心具足の行者にて、取りも直さず執心堅固の人なれば、生けらんほどは願王隨逐影向の護念を加へ、乃至臨終の砌りには來迎引接の大利を與へ、順次に往生成佛の本懷を達せしめ給ふ事なれば、脇目を振らず一筋に助け給へと思ひ込み、一向に念佛を執心する是れ深心具足の行也、故に助け給へを執心と合點するを深心と習ひ定む、是れこの宗出離の故實なることと思て知るべし。

第七に助け給へを發願の義と習ふ、是即ち第三回向發願心也、故に光明大師の釋に、言南無者即是歸命、亦是發願回向之義也云々、（此義次下諺註に至つて委しく可辨）上來の通、助けたまへに

七義全備し具足する故に、本文に、中々たゞ助け玉へと思ふは故實にて侍るなり、とはの給へり、所詮機法二種の趣を決するが宗の故實也、畢竟は自身は出離の縁なき身ぞと思ひ定めて、偏に本願助け給へと思ひ込み、一向に南無阿彌陀佛と申が故實也、故に松蔭の顯性房曰、佛助け給へと思ふ心は第一のよき心にてある事を、眞實に思ひ知る人ごとになき也と、其助け給へと必至と思ひ込まれぬは、生死流轉を恐るゝ心なき故也、譬へば大井川を渡るに歩行渡りすると、川越し頼むとの如し、彼の川端に到り渡り錢を惜み喧嘩口論に及ぶとは、川越人足の渡るを見る故也、大井川は三界五濁惡世の、凡夫の罪惡の激しきに喩ふべし、川越人足を上代上根利智精進の人に譬ふべし、ざるを川越ならぬ平生の素人も、渡らば渡らる事のやうに思て、あらがひ勝ちて渡る程に、間々命を捨る人少なからず、平生の素人とは、罪惡の凡夫人無戒破戒の衆生に比すべし、あらがひ勝ちて渡るとは、上代逆も賢ならず末代とても愚ならず、大丈夫何

ぞ卑しく他力を惜らんや等と、自身の下機を忘れて高く上代上智の人に等しむる故、徒らに法身の惠命を失ひて、六道四生に流轉して永く生死の苦を受くる也、而るに身の程を知る人は、川越人足の易く渡るは、多年此事に馴れ習ひたる故也、中々水心なき身に渡らるゝ事にてはなしと決心する故、渡り錢出して、或は肩車或は蓮臺越にて易々と渡る也、今浄土門の人も其の如く、古人の自力は其のする力らありての事、云何ぞ愚縛の鳥、利智精進の鵝の眞似せんやと、自身を出離無縁と決心し、助け給へと本願にすがり、一向口稱相續して順次往生の大利益を得る也、已上助け玉への念慮は、末世の出離最上の法門なれば、代々祖師の相傳にして、我門宗義の源底なれば心腑に納めて大益を得べき也。

●されは法然上人は。

註に曰、是は御臨終にあそばしたる起請文の詞也、釋尊は鶴林にして遺教經を説き給へり、世人臨終に言を遺して子孫に示すを遺囑と云ふ、人の將に

死せんとす其言ふ事善といへり、これはこれ吉水上人最後の教誡也、流を汲ん道俗は是を憑據とすべし、生々賢き風情を習ふ事勿れ。

●念佛を信せん人はたとひ一代の法をよくく學すとも、尼入道の無智の輩に同じふして、智者のふるまひをせずして、唯一向に念佛すべしとの給へり。

註に曰、如來甚深の境界にして果海の法なれば、とても因分の智慧にては及び難し、(經には、聲聞或菩薩二乘非所識、釋に三賢士聖弗測所闕)、ただ打ち知きて仰信すれば佛願に叶ふ也、一代の法等とは、釋尊一代五十年説き玉へる大小漸頓半滿の經法也、ふるまひとは行迹の二字を指也、一向とはひたすらと訓ず、唯一筋の事也、大明の琦公浄土曰、道也順夷不可離、愚蒙即是佛根基、不_レ愁_二耳目聰明誤_一、何異_二乾坤混沌時_一、但念_二樂邦無_二別念_一、專持_二聖號_一、勿_二他持_一、回_二頭却笑_一、慳々漢、蹉_二過彌陀_一、總_二不知_一、祖訓如此なるに、當世の末學は、猥に唇吻を弄して智者なりとのしり、

異を顯して愚民を囉亂す、是皆一生の程なき事を忘れて名利を貪る故也、在家の人は其内心をば知らずして偏に信用す、害をなす事深しよく料簡すべし、みづからきらひ自らほこるは人倫の醜行也、世俗の君子猶愚にかへるをよしとす、孔子の家語に孔子曰、聰明睿智守之以愚、抱朴子曰、於_レ是明哲色斯而幽遁、高俊括囊而伴_レ愚、但我宗にすゝむる所は、本來正直の愚痴也、一字に畫を點せず、八字にノへなきが如し、然るを世に狂解の人ありて、悟了同未悟、なと云ふ事を引て、一枚起請に愚鈍と有は、たゞの愚鈍には非らず、一度智慧を極めての上の愚痴の事也と云ふ、これは淨土宗にかつて師承なく無案内の故也、當流歴代の起請文をも見るべし、全くさる事なし、上人の抄物御消息幾らも世間であり、夫をよくく讀みて知るべし、子細もなき愚痴の事也、人の心すなほならずして、かくなまさかしき事のみ聞ゆるぞかなしきや已上註、然れば從來の通り我門所被最上の機は、助け給へと本願にすがり、念佛一行に結歸す

る人なれば、其證に大師の御遺訓を引玉へり、文に一代の法をよくく學すとも、この玉へるは、愚痴愚昧の人に非ず智者學匠の事也、其智者學匠が、尼入道の無智の輩に同じくして智者のふるまひをせずして、たゞ一向に念佛すべし、とあるが還愚の教示也、若これが在家愚昧の人をさし玉へる御示しならば、まぎらはしき方もあるべけれど、智者學匠の還愚痴の一向なれば、少しの紛らはしき事はなき也、學びたるさへ捨果て專修、況や學ばざる者の但信元よりの正機なる事を知るべし、今御遺訓を引證し玉ふ御意は、往生を願ふ人は智者も愚者も、皆本願念佛專修の人になれど勸め給へる也、なせ夫程一向を勧め給ふぞと云ふに、非本願の餘行兼修は往生不定、本願念佛專修の人は決定往生する故也、されば大師開創の淨土宗と云ふは、一向專修宗と云事也、故に開宗本疏、選擇集の題後文前に、南無阿彌陀佛（往生之業念佛爲先）と標し、御生涯の御勸進唯此一事、而して御臨末の遺訓に唯一向に念佛すべしと結勸絶筆し玉

へる也、依之大師の正統を繼ぎ玉へる鎮西上人は、今此一向專修は廣大慈悲の支度を構へ、正義正理の方便を設け、末代愚鈍の衆生に與へ玉へる出離の要法也、(徹撰擇集)次で三祖記主人(決疑鈔二初正雜二行章)云、和尚深く經の本意を探り、隨自の正意に約して往生の得失を判す、必ず廣く隨他の機を勧めざれと判定し玉へり、斯正統相承の一向專修の法門、彌陀の大悲本願の源底に徹する故、今此所へ御遺訓を引證し玉へる也。

● 專修の得 (托、譬喻之部委出)。

● たとへば人に身をまかせて世をわたらん者は、いかにさへかしく心すくよかなりとも、人をたのみ程にては、われはがほならんはにくき心なるべし。

● 已下は、還愚念佛の義を顯はすの爲のたとへなり。さへは才の字也、音を轉じて訓とする例也、(源語梯下丁)すくよかとは健也、よやの音通、われはがほは、かしこたて也。

● ましてその身にとる所なからんは、おのが程(我

身の程)うちおもひしりてかゝるいたづら者にいさゝかのなさを、のこさるゝは、ありがたき志ざしかなとおもひいれて、心たらぬ、(氣のつかぬ心、思ひの外也)あやまりしいでたる時も、うららかにうち向ひ、あさましとわびいたるむさうさには、よくにくかりぬべきとがなれども、さながらつみゆるさるゝやうに、(是迄たとへ也、已下合釋)、今の世の衆生は、たとひ智者學生なりとも、そのちからにて生死をいでん事のかなはずして、他力本願をたのみとならば、かひなき才をさりととも、たのがちからがありがほならんよりは、中々たひたすら助け給へてこそあるべけれ。今の世とは、今時澆末五濁増の世をさす、正像の上世には自力出離の機もあるべけれども、末法の人は悉く十惡故に、釋尊は、我末法時中億々衆生、起行修道未有一人得者、との玉へり、元祖大師は、今時の人自力をもて生死を出でんとするは、弓なくして空飛ぶ鳥をとり、船なくして大海を越えんと欲せんとするが如し、との玉へり、

されば古來の大德智者高僧、南岳大師、天台大師、傳教、慈覺、顯真、明遍、行基、空也、惠心、永觀、玄敏、増賀、覺超、覺英等皆往生を願ひたまへり、別してとても他力を頼むとならば我は願すまじき義は、導師に機信の釋文あり、元祖大師の御法語には、十惡の法然房愚痴の法然房が、念佛して往生せんとする也とも玉ひ、又われは烏帽子もきぬ法然房なり、黒白をも知らぬ童子の如し、是非をも知らぬ無智のものなり、たゞ念佛往生をあふぎて信ず、等との玉へり、云々。

● いはんや戒定惠のとる所もなく、貪瞋痴のあやまりのみ多からん身には、いよくさりとてはとうちたのみたてまつらん心にぞ、佛もよるづはたもひゆるし給べき。

上の段は他力を頼むとならば、智者學匠なりとも其智慧學問をも物だてず、偏に助け玉へと本願にもたれよと云を、譬に合せて勸誡し、當段は元來の無智造惡不善の吾儕凡夫を勸誘の段也。

● いはんやはましてと云意、智者學匠さへひたすら

(710)

の助け玉へなれば、況やと受けて下を發す詞也、戒定惠とは、安法師の曰、防非止惡曰戒、息慮靜緣曰定、破惑證眞曰惠、上、貪瞋痴は、聞持記曰、引取無厭曰貪、忿怒無慈曰瞋、迷惑不了曰癡、上、いよくさりとてはと、うち頼みたまつらん心にぞとは、智者學匠さへ頼むなれば三學無分の三毒熾盛の身なればいよく也、さりては、げに惡き我身哉と、わびつ、佛願にすが、る様上の譬に合せて合點すべし、佛もよろづは、よろづの罪過也、此のよろづの罪過を思ひゆるし給ふこと餘佛餘法にある事に非ず、是は彌陀如來終窮無極の大悲にして、建立し玉へる本願念佛一法に限る也、其本願とは、口傳相傳觀念學解をもて唱るに非ず、唯己れの分に隨ひ口稱念佛する迄也、口稱念佛は佛の本願往生の正定業也、その故は如來の本願名號は兆載永劫苦修練行して、萬善萬行諸波羅密、無量恒沙の功徳をつかねて本願の名號とし、御身の成佛に代て、若不生者不取正覺と誓ひ玉へる本願なる故に、口稱念佛が決定

往生業となる也、さて其唱ふる人は、十方衆生とて、本來煩惱具足三學無分の吾等凡夫の爲に誓ひ玉へば、罪の輕重煩惱の厚薄を論せず、唯口に唱ふる計り也、此事餘佛餘法に習てなき法門なれば、他宗他門の智者學匠のふつに御存なきこと也、故に大原問答第十二問(永辨の問)に云、罪惡妄念の者も往生と許さば人皆惡見に住すべし、先づ廢惡を安心の表とすべしと難じたるを、大師答へて曰、不止貪愛瞋憎者雖似好造惡、只是本性所致也、依憑本願今更非許作之、然者於彊強罪者、聖道淨土其恐後世之人何不禁止之、等云々、今の惡人は本性の性得をいふ、若し事を本願に托して故起邪見者、出家は破戒し放逸に生涯を送り、在家は本性三毒の五欲の上に、吾が職分に非ざる殺生をすき、大酒博奕淫亂放蕩と云如きは、聖道淨土共に禁誡する處也、此事たとへば、一子あり性得の無智或は片輪なりとて、追放し勘當する親あらんや、生得の白痴埒明かすの上に、博奕をうち、盜をし、色慾放蕩の故に久離

(711)

切り勘當するなり、此わる業止めさへすれば勘當許して本家に還る也、惡業止まざる故に雲介非人となりてうき目を見る也、親は實子なる故に、風雨寒暑につけても、何とぞ本心になりて還れかしと忘れず常に思念する也、(主人や他人は不爾可_レ知)、今も其の如く、元來阿彌陀佛因位法藏比丘に堪へ兼て、發起し玉へる念佛往生の本願なれば、凡夫の自體本性より出たる三毒五欲は許して、念佛往生せよとは本願大悲の密意なれども、三心不具足の、雜行雜修、祈念祈禱、二世安樂、身すぎ、口すぎの虛假不實、本願誇りの僻見に入、惡無過の邪見を起す等は、大悲本願の御手にもものらす三惡四趣の苦聚に墮する也、是等の邪見僻見に發さねば、性得所具の煩惱はあり乍ら、念佛だに稱ふるものなれば、元來是れ我が法王家の淨土に皆悉往生を遂ぐる也、他人は馬鹿の埒明かすには名跡は讓らぬ、是の聖道諸宗の立派、三世の諸佛の錠式也、諸惡莫作衆善奉行は諸佛の通誡、三毒五欲

は云ふにや及ぶ、僅かに起る妄念異念も拂ひ切ての三學均等の器にあらざれば、生死出離は免れぬ也、此の性得の煩惱は許して往生させしめ玉ふが淨土超世の大悲の法門、性得の煩惱も悉く斷滅せざれば、利益の得られぬが聖道諸宗の立る所也、爾れば人々、此聖道淨土所立の差別する所を能々我身の上に引あて、分別すべし、さらば誰れ進むるをも不待、歸入淨土の心は決立すべき也云々。●さればかゝるわろかなる身にては、いかゞとたもふより佛にはとほざかり、(これしりぞきのくなら)わろきにつけてもさりとてはたすけ玉へと思ふより、佛にはちかづき奉るなり、本願によりのさかさかひは、この心のすゝみしりぞくあはひにて侍るべし。此の進み退くあはひが、淨土門の骨髓の習ひ事、末世の出離全く此處にある也、佛に遠ざかる機に、未具と退者の二機あるべし云々、聖道諸宗の教の如く、惡を止めて善人となりて、申せと云ふを聞ては、皆佛に遠かる外はなき也、是れ未具也、又自

造罪退、異學異見退等あり、可_レ知、佛に近づくいはれ、後世往生を願ふ程の者に、分々に悪をつつしむ心のなきはあらし、されども煩惱具足の凡夫なれば三業に罪のみ造る、爾るに意樂正見の故に罪造を悲みて、かゝればぞ、げに三世の諸佛にも捨られたるに、かゝるものを彌陀の大悲さりとては助け給へとわびて、佛の大悲を仰げば、平等不簡の大悲本願、必らず攝取護念に預り、順次往生の大益を蒙る也、註に、佛に近よるも遠のくもこなたの心次第也、此の抄の上卷に曰、たゞひたすらに頼ましかば、よろすのことが許し玉ひなんかし、たもはずに心たきはみたるは、この世さまにもにくき事なり、いたくわるからんにつけてこそ、いと助け玉へとは思ふべけれ_上、大師、宇都宮彌三郎入道蓮生の問に答へて、往生しやうせまじはわれの心もあり、この玉へり、蓮生此御示しに決信して課佛三萬稱を相續し、大往生遂られたるこ_と御傳二十六卷_下已下に有り、爾れば此の佛によりのきのあはひは、實に一宗別開の源底、澆末の

下機の超_レ生死海_二往生成佛の故實なれば、心腑に銘じて忽諸なるべからず云々。

●すなはち(助語辭云、則是は此因有_二上意發_一下語_上)

註に曰、これ三心の所詮は助け玉への一念に不足なき證據也、俚語に云、なせ助け玉へが、三心とはなるぞと云ふに、「偽らすまた疑はず彼國を、ねがふは三つの心なりけり」と、助け玉へに偽りなく、本願を疑はず念佛申すは、三心具足なれば、經の具三心者必生彼國に當るなれば、助け給への一念にさへなればよしとの引證也。

●善導大師の。

註に曰、觀經疏之文也、玄義分曰、言_二南無_一者即是歸命、亦是發願回向之義也、言_二阿彌陀佛_一者即是其行、以_二斯義_一故必得_二往生_上已上、鎌倉宗要曰、南無者歸命、歸命者助け給へと云意也、大師十念有_二十願十行_一釋し給へり、所言願者南無也、即當_二横三心_一又曰、安心略說者歸命二字是也、起行略說者故一字是也、故に先師の定言に佛助け玉へと被_レ仰

即是れ歸命也、次に起行の略說、故の一字者願_二彼佛願_一故之故の字是也_上、又向阿上人の往生至要訣は、此釋を本として記し玉へり、こゝに相照らして可見_上。

●南無者即是歸命との給へるも、南無といふはたすけ給へといふことばと釋する也、そのことばのしたに三心あるべければ、亦是發願回向之義ともいふなるべし、阿彌陀佛者即是其行とは、助け給ふべき本願の名號なればなり、しかれば阿彌陀佛と_二なふるは、たすけ玉へ阿彌陀佛といふことば_一なり、いふことばに思ふ心はあらはる、故に、(陸機文の賦曰、思風發_二於胸臆_一言泉流_二於唇齒_一已上)南無阿彌陀佛と唱ふることばに、たすけたまへ阿彌陀佛とたもふ心ありとせられたり。

俚語に云、「誰もしる南無阿彌陀佛の六字も、傳へてこそはなほとふとけれ、(東野別胤縁歌)南無は助け給への安心也、阿彌陀佛は助け玉ふ本願の行體也と習ひ傳ふる也、又歌に、「南無と思ふ心の外に道もなし、阿彌陀ほとけのちかひまかせに、大

師の曰、南無阿彌陀佛といふことは別したることには思ふべからず、阿彌陀佛助け玉へといふ詞と心得て、心には助け給へ阿彌陀佛とたもひて、口に南無阿彌陀と申を三心具足の念佛とは申也、又御詠歌にも、「阿彌陀佛といふより外は津の國の、難波のこともあしかりぬべし」と、美濃國孝子(托、往生部卷四)。

●これによりて十_二念佛を念すれば、十願十行ありといへり、以_二此義_一故必得_二往生_上との玉へば、たのもしかるべき事ぞかし。

註に曰、玄義記曰、但就_二南無_一有_二願有_レ行、口唱_二南無_一是行、心念_二南無_一是願_上、願孤行孤無_レ所_二至願行具足する故に必ず往生を得ると也、「必といふ一文字の誓をも、疑ふ人は生れざりけり」と、必は必定と動きなきの義、されば必ず往生と思ひ取るは深信にて、具すれば必前後の二心をも具す、三心具すれば必ず往生を得る故に今も必ず字を置給ひ、又往生禮讚の終り、現生護念増上縁の下にも、若我成佛十方衆生、稱_二我名號_一下至_二十聲_一若

(714)

不生者不取正覺、彼今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生と釋す、(大師云く、此文は四十八願の肝也神なり、文字四十八あり深きことあるべしと已上)又法事讚、諸佛護念の下の釋にも、衆生稱念必得往生と證誠斯事との玉へり、斯の諸處に必字を以て判釋し玉ふ、彌陀の應述たる善導大師、豈に衆生を欺き玉ふものならんや、露も心を置べからず、打任せて唱ふべし誠に我曹造惡凡夫の分として、願次に生死の苦海を離れ、即生報土の大果を得る事、實に超世大悲の大願の御構、貴しとも忝なしとも言に述る限りならんや、故に本文に頼もしかるべき事ぞかし云々、時宜によりて此下にて、邪義を拂ふべし、邪書拔書を披見。

●さればとしてもかくしても、つみふかき身のかこつかたには、たすけたまへとにてあるべき也。
 註に曰、兎角罪深き身の頼みには、助け玉へとのみ念すべき也、としてもかくしてもは、神代記に

取捨を兎も角もとよみ、三代實錄萬葉集に、左右をどにかくにとよめり、今どかうとも云へり同じ言なり、兎角龜毛の意に云ふは傳會なるべし、(和訓栞取意)此兎角と云ふを註主は、下機不學の一機の心行のよはきにつけてもと云ふの義、通師の俚語は、知具と機具との二機に配して解し玉へり、横具結勸の段なればなるべし、かこつは託著也何にても其物によせかくる事に云ふ、(言釋の意)。

●世にこゐたる御慈悲なればとれもふのみこそ、又なくたのもしき事にては侍めれ。
 註に曰、機の拙なきにつけても、心のよはきにつけても、世に超へ玉へる御慈悲なれば、これほどの分にも助かるぞと思ひしめて頼もしく思て、助け玉へ南無阿彌陀佛と申すべき也、是迄に三心の沙汰終りぬ。

これより下は右の三心に就て、邪義僻見の起る事を誡むる段也、三段あり已上、初に惡無過の邪見を誡め玉ふ。
 ●さてこのころの學生たちの中に、かく罪人

をすてぬ本願の心やすき事を申たてんとて、つみをはかるまじきやうにいひなさるゝ人おほし。

是所謂本願ほこりにして惡無過の邪見也、夫彌陀如來罪人を捨てずして攝取し給ふ事は、終窮無極の大悲の致す所也、夫れにほこり罪を恐れぬは邪見也、是全く一念義の邪說邪勸を恐れよとの教也。註に圓信阿闍梨往生捷徑を引て曰、洛陽にある念佛勸進の講席にして、念佛の人は罪をほしひま、につくるべし、彌陀の名號にて罪が滅したらぬぞと談義したりしを、愚僧まのあたり聽聞せし事也、これ淨土門の本願ほこり淺ましき事也云々已上、秘傳鈔に云、(存覺之作)此一念の外行として行すべきものなく、罪として恐るべき罪もなし、譬へば薪多ければ火の勢もはげしく、瓦礫多ければ金も莫大なるが如し、凡夫の罪多ければ如來の智火も烈しく熾んに、一念信解の寛丹あれば、十惡五逆の瓦礫變じて滅罪得生の金寶、無上功德の光りを増す、かゝる不思議の願意は、十地の大聖も測て窺ふ所に非ず等云々、猶一念義の邪見を大師の御

破釋、勅傳二十九之卷を拜讀して可レ知云々。

●さればとて、つみをよき物といはんとにてはよも侍らじなれども、ひがくしからん機は、さゝあやまりぬべきぞかし、さればすゑくには、邪見なる義ども、きこゆるにや、返々あさましき事也。俚語に云、人間の本心ある人ならば、よもや罪咎をよきものとは云はじ思はじ、なれども天魔波旬に精氣を奪はれたる人は、それをよきこと貴きことと思ふ也、譬へば野狐に精氣を奪はれて馬糞を喰ひ、野中山林を結構なる住所と思ふが如し云々。註云、大師之七ヶ條起請文に曰、つみをつくらじと身をつゝしみてよからんとするは、阿彌陀ほとけの願をかるしむるにてこそあれといふ、かやうの僻事ゆめく用ゆべからず、いづれの處にか阿彌陀佛は罪つくれとすゝめ給ひける、ひとへに我身に惡をもやめぬす、罪のみ作り居たるまゝに、かゝるゆくへほとりもなきそら言をたくみいだして、物もしらぬ男女の徒をすかしほらかして、罪業をすゝめ煩惱をおこさしむる事、返々天魔の

(715)

(716)

たぐひなり、外道のしわざなり、往生極樂のあだがたきなり、と思ふべし云々、又曰、佛は悪人を捨て給はねども、このみて悪をつくる事これ佛弟子にはあらず、一切の佛法に悪を制せずといふとなし、(十二ヶ條問答)向師の在世すら斯く邪見あり、況や此頃は、見濁いよくまさりて邪説都鄙に多し、其性偏なるは、堅く持戒に局して破戒無戒の往生を妨げ、其性邪なるは、甚佛願にほこりて放逸を事とし、白眼にして持戒の人をねたむ、これらの偏邪ことに熾也、其見所は佛祖の御心に契ふや否、私なく此鈔を鏡として見るべし云々已上、

●すべて罪をかへりみぬものは身のわるき事をしらす、身のわるき事をわすれぬれば、又助け給へともおふ心もなし、助け玉へと思ふ心をすゝめん爲にも、ことに罪業をおさるべき也、本願にほこりてつみを心やすくおもはん人は、はじめは信心のあるに似たりとも、のちには助け給への心もなくなるべし、よくよくよいあるべき事をや。

註に、これ機法二種の信の意にて肝要の詞也、世

間を見るに此御詞に違はず、利口にて本願にほこる程の人は、久しからずして信心もたれて、果には狂亂の者になる也、罪を恐れねば臨終の事も心にかゝらず、地獄も恐ろしからず、死にかゝりて萬づを取り失ふ也、確かに此の誤りを知るべし、西要鈔に云、我身の有様に心をかけてなすわざの、皆罪なる事を思ひ知れば、斯るをも捨給はぬ不思議さよと、彌本願に信心がすゝむ也、其現證を云は、和州川原村彌三郎、(托、往生卷五)宇治田原淨閑(但信鈔下卷、托、往生卷三)

三段の第一、邪見簡別の下畢。

●又人のつねにうたがひあひたるやうは、たとへば智慧才學はいらすもあれ、同じくたすけ給へと思ふとも、骨髓にとほりてふかゝらんこそ往生をもせめ、我らが心はさまでもなし、たゞかたのやうなる心ざしにては、かなふべしともわねばぬす。

三段ある中第二段にて、三心の要は助け玉への一念にありと聞くまでを疑はねども、其助け玉へと願ふ心を徹骨徹髓變盛ならずばと思ひ僻むを、

擧玉ふ也。

此徹骨深求は、三心の中にも至誠心が表にてあれば、蓮華谷の所計なども此内にこもる也云々、髓は、和名鈔に、骨中の脂也と、かたのやうなるとは、形ばかりにて真似のやうなる心也、下のよはよはしと云ふに照合して可し知。

●又しらす、佛もさ程によはしくしからん心なりとも、すてじとまではちかはれずもやなんどかもひあへり。

第三段、弱き志迄を攝せんとは誓ひ給はずもやと疑也、註に、寂惠上人の曰、志の淺深は人に隨ひてあるべき也、いかさまにも、木のれくが分をきはめて往生の行を勵まさば往生すべき也、我よりも志も深く、行業もたけたらんを見ても卑下すべからず、我よりも志あさく行業も少なからんを見ても高慢すべからず、只分々に志を勵まし念佛を行せば、十即十生の往益更に疑ふべからず、(起請文)

(717)

俚語に曰、本願には唯十方衆生と誓ひ給ひて人簡

びなし、行體をば乃至と誓ひ給ひて、是又何程と云ふ限りもなし、喩は鶴の足は長く、鴨の足は短かけれども、己々が用を達し、飢へず凍へず自由自在也、今の心行も又准じて可し知云々。

●かやうの疑は、ひたすらにくからざれども、(一向悪しきにはあらず)。

上の惡無過の邪見に對して見れば、願心ある故、此疑を起すなれば一向にあしと云ふにはあらずと也、「ともかくも思ふ人なき世の中に、まだ疑ふはたのもしき哉」(無能上人)喩は信は火の如し、疑は煙の如し、煩惱は薪の如し、火を離れて煙なく、薪のみにて煙を生せず、信なければ疑もなし、信火ある故に煩惱の境に對して疑の煙を生ずる也「彌陀頼む昔の人も我如く、思ひ返し絶えずもある哉」。

●さりとは、佛の本願はさるをも、(さうあるものをも)。

俚語、上の二つの疑をなす人をさしてさうある者をもと云也、二の疑とは、一には、まねかたのや

うなる心ざしにては、叶ふべしともたほせずと云疑、二には、よはくしからん志迄を捨てじと、よも誓玉はじと疑ふ也、下は簡別なくたしなべて十方衆生を。

●すてじと誓はれたらんには、そのうへをなをよもとは、(よもさうはあらじと也)。

「木がくれの外は小草の末葉なる、露も残さず宿る月影」、少しにても助け玉へと頼む心の露あれば、攝取の月はやどる也、邪見及非本願の餘行の木がくれは、攝取の月は宿らざる也云々。

●いかゞ疑ふべき、(疑ふべき筈なき也)凡夫の分齊の心は、つよくとても何程のことかあらん、(分齊は、分段齊限也、正源記)。

註、記主上人曰、凡夫所修不出偏計々々之心何成、往因、偏計とは、法相宗の名目に三性法門を立、偏計は凡夫(繩を蛇と執する也)、依他は菩薩(蛇には非ず繩也)、圓成は佛(繩の性わらと知る)、偏計所執と云は、依他の因縁和合の假なる相に、實我實法の情を起すとき、情に當て現する、

六趣四生の形これなり、凡夫顛倒して煩惱を起し、業を作り苦を受くる、是れ偏計妄情のどが也、依他と云ふは、一切衆生に八識あり、其中第八阿頼耶識(合藏識云)に諸法の種子悉く具足して、因縁假りに和合すれば、非有にして有に似たる、染淨の諸法現する也、水月鏡像の如、圓我實性と云は、眞如の妙理諸法の實相也、譬へばわらを以て繩となす、繩に於て蛇の思ひをなせば、蛇の勢現するは偏計所執の如し、是は情のみあつて其理なし、繩の上に蛇の體用の會てなきが如く、繩の相のかりにあるは、依他の(わらを打、繩になひたるは人のわざ也)かりなるが如し、ほどけば其體あることなし是因縁成也、唯た藁の誠の體あるは圓成の理の如云々、吾等凡夫は迷妄の一念起動より迷ひ出で、無始已來顛倒迷惑流轉せり、其本は、いとし、可愛、憎や、恨めしに止る、喻は繩を蛇と思ひ、茄子を藁と思ひしめたる情也、(唐土の望夫石、我朝つ松浦佐世姫の類は、夫を慕ひて石となり、唐土の懶夫は虎となりて姑を害

し、我朝の庄司が後家は、安珍を戀ひて大蛇となる、皆是凡夫一念の妄情の起動より出たる也、是凡夫偏計の信心、何ぞ報土得生の因とならんや、故に本文に、凡夫の……

やぶむは願力をいやしむるになるぞかし、たゞかまへてわのが力のよはからんにつけても、いと、佛の御力をたのむべき也。

俚語に曰、頼むべき佛の方は頼まずして、頼むまじき我が信力、念力、行力など、心のはたらきを頼むは逆さま事なり、烏澁がましきわざ也、念佛申は我等がわざなれども、往生は一向佛の御しわざなることを信知せざる故に、手前の信心沙汰をするなり、(船よぶ迄は我わざなれど、正しく海川を越ゆるは船人がことのわざ也、)良遍僧都の決心記に曰、佛力和合して不可思議なるが故に、我願雖弱散心雖濁、成清淨廣大業也、此理既極成豈可不信耶。

●我ころろざしの弱ければとて、佛もいかゞあ

往生を得ず、邊地へ生じ胎生を受べし。註、顯揚論に曰、於不思議境、強思議者有三、過失、一得、心狂亂過失、二生、非福、過失、三不得、善過失、如非強思議者得三善果、此可知、(已上出廣清涼傳)傳通記曰、若今凡夫生報土時、願力不加強不可生故、別以佛願爲増上縁、令凡夫行成報土因、譬如一滯水依龍力成大雨也、已上。(惡人往生七喻、托、譬喻卷三)

●又いかによはくしからん心ざしまでもすてらるまじき事はうたがひやは侍る。

已下は、次の弱き心ざし迄は攝せんと誓ひ玉はず

もやと、疑ふを拂ひ玉ふ也、疑ひやは侍るは疑はなきと云義也。

●其故はすでに機をさだむるとき、いたりてたもき五逆までををさめ、行を願する時は、いたりてすくなき一念までをたてたり、心をとらん時、いかゞ又いたりてよはき心ざしまでも、をさめられざらん、いはんやつみふかき機ならば、心もしたがひてたろかに、行あさきものならば心ざしも、たのづからうすかるべきいはれにてこそあれ、しかあるに機と行とのつたなきを救はん爲の本願に、心はふかゝらんをちかはれたらんは、あたらず本願のよきかたはなるべし。

註に、機と心と行との三つがそろひてこそ、下機の得度もあるべけれ、二つがやすくして、一つがたたくば、まことにかたはなるべし、玉の盃にそこなしとや申べき已上、註に、片輪とあるを言釋に片羽也、片輪はかな既に別也と云々、(私に曰、本文のは字わ字を誤るには非ずや、片輪片羽かけて用をなさいるは同じけれ共、片輪の方言便に親しけ

れば也、本語可考、和訓栞集曰、片輪演照の露に云ふ疇人は是也、不具を曰ふ、倚或は缺ともよめり、片輪の義車によりていふ事石集に見ゆ、公羊傳にいふ變輪なり、佛書に五體を五輪といへば也、源氏にあるかたわやと見たり、乳母の女の目を糸の如しとほめたる事(沙石集)。

●さしも五劫まで案じ給ひけん、善巧のさるてづつなる事やは侍るべき。

註に、善巧はたくみなる方便の事也、(上巻に註せり)、手筒とは、不調法なるを云ふ云々。

和訓栞に云、紫式部日記無名抄等に見たり、手筒の如くはたらかぬ意也、宇治拾遺に、口てづゝとも見たり、今人専ら女工の精しからぬに云へり、てづゝ山は越前也。

●かやうのことはりをもて思ふに、いかにあさき心ざしなりとも、いつはりなくたすけ玉へとだに思ふならば、往生にふそくあるべからず。

註に、劉子に曰、尺蠖穿堤能漂一邑、寸烟泄窓致灰千室、已上、これ水火の力にて蚰烟の力に非

ず、安心の了簡以上に畢る已上。

俚語に、とかく私のはからひを止めて、一向佛に任せ奉るべし、機心行の三つ何れを強かれと云には非ず、唯本願の強力を頼めとの教也。

已下は三心の總結分にして、聖淨二門の菩提心を擧げて、聖道難發の菩提心に、淨土易發の菩提心を對して勸進し玉ふ也。

●たほよそ生死をいづる事のかたきにはあらず、發心することのかたかりしゆゑに、過去遠々生死悠々たりし身の。

凡そはすべくゝるの言也、今は三心の總結分にして、而も二門の大意を述べ給ふ故に凡と云ふ。

註に、發心と云ふは、大菩提心のことなり、四十二章經に云、既興信心發菩提心難已上、圭峯の勸發菩提心文の序に曰、發菩提心者、崇徳廣業虛心外身、圓覺之謂也、自非達恢郭之道、稟仁恕之性、懷遠大之志者、其誰能發斯意

焉、豈其如來滅後々五百歲、佛法衰末世人少信已上、悠々とは古に曰、生死悠々無停止已上、五車韻瑞

に曰、悠々は行貌無期貌已上、是則大菩提心は難發の心なれば、世々徒らに生死の苦海を出得ざりし事を明して、而して次下易發横具三心を嘆じて、大悲本願の旨趣を示し結ふ。

●このたび彌陀の本願にあひて、わずかに助け玉へと思ふ計りの心を起して、往生のほいをとげん事は、偏へに佛の御ちからぞかし。

最初修行者の問に 至心信樂乃至なごてか、又た助け玉へと思ふ一念にはたるべからん、くはしくかたらひ玉ひなんやと問を、從來答へ玉ひて、其結勸の文也、文法の妙絶云ふべからず。

註に、凡そ菩提心は大乗修行の綱要にして、佛祖の本意也、然れども下機は其行を遂ることなし、最極の劣機を救はんが爲の本願なれば、念佛の行者には更に菩提心をはげめとは云はず、末代の愚かなる男女は、猶三心の名義をまはかくしく聞き分くる者稀れる故、唯助け給への一心を發さしむる也、これもと法藏比丘の大悲より始りて、本願の文に菩提心を誓ひ玉はず、觀經の中下六品に

(722)

も菩提心を説き玉はず、彌陀經には一向に其説なし、光明大師、憬興、龍興、等の高僧たちの釋にも、菩提心なければ往生すといふこと分明也、毘沙門堂の(明禪法印)云、大菩提心は甚難可發、三心は我れ等が分也已上、和語灯五、二十元祖大師の云く、淨土の人師たほしといへども、皆な菩提心をすゝめて觀察を正とす、たゞ善導一師のみ菩提心なくして觀察をもて稱名の助業と判す、當世の人善導の心によらずば、たやすく往生を得べからず、曇鸞、道綽、懷感等、皆相承の人師也と云へども、義にわいてはいまだ必ずしも一准ならず、よくよくこれを分別すべし、此旨をわきまへずば、往生の難易にわいて存知しがたきもの也已上、三心菩提心の同異の下(玄記一、二、丁巳下悉委也)。

●かゝるみのりをきゝつる、むかしのむくひうれしくこそと、宿因たもひつゞけて悲喜こもくゝながれきなり。

註に、是程心易くして、生死を出る御法を聽聞す

る事は、先きの世のよき報ひなるべし、今迄此の本願に逢はざりし故、六道に迷ひし事のくやしければ、悲の涙眼に餘り、此度此の本願を聞き得たれば、過去の善因思ひやられて、喜びの涙また袂をひたすもの也。

大經に云、若人無善本不得聞此經云々、清淨覺經に曰、若人聞說淨土法門聞即悲喜交流身毛爲豎者、當知此人過去已曾修習此法、今得重聞即生歡喜、正念修行必得生已上、光明文句記云、悲昔不聞喜今得聞、悲他不聞喜自得聞已上、往生講式云、我等思往昔結緣宿善如恒沙、妄輕自身不怯弱、值甚難值之教、信極難信之法、自非久殖勝因、何由忽值此緣云々、續古今(永觀律師)、「いにしへにいかなるちぎりありてかは、彌陀につかふる身となりけん。」
已上安心の問答註し畢んぬ。

歸命本願鈔講說卷四終

歸命本願鈔講說卷五

●修行者又とひていはく、(是は願文の内の乃至十念の四字に付ての問答なり、これ起行なり)、本願すでに乃至十念とちかはれたれば十聲一聲までもすてられず、かならず往生すべしと、の給ひつるは、よにたのもしく侍れども、いかに猶それ程の念佛のさだめて往生の業となるべしともおぼへず、(これは行のすくなきを疑ふなり) ましく妄念うちおこしながら申す念佛は物のかすならじと、かるしめおもはるゝはいかゝ侍るべき、(是は妄念のまじはるを疑ふなり) 老僧のいはく、これは御身ひとつのうたがひにしもあらず、なべて人ごとにおもひあへる事なんめり、本願のおもむきをよくもしらざる故に、かゝるなまざかしき心もおこるなるべし。

註に云、世間の人たほくは此うたがひをなすなり、これ大悲の本願は、劣機をかゝみてたこし玉ふ事

をいまだ心得ぬ故也。

私に云、劣機を鑑みて發し給ふは、彌陀一佛の別願にて、餘佛に在さざる超世の大悲なれば、宗の相承をつぎ得たる明師の示教を受けざれば、納得することを得ず、必他宗の人師の推義の及ぶ所に非すと知りて、其妨を蒙ること勿れ云々。

●佛すでに一念十念迄も生れしめんとかひ玉ふ、その願ひむなしからずばいかでか往生をとげざらん。

註に云、我念佛の力にてする往生には非ず、佛の願力にてとぐる往生なり、念佛の數は多くともすくなくともそれにはよらぬなり、本願の文には十念とあり、願成就の文には乃至一念とあり、私に云、隆寛律師の多念義相傳に背くこと可し知、いか程多念にはげみ勤むることも、機功を募りて本願の大悲を餘所にせばいかでか往生することを得んや、他力の法味よくく喰受すべし、云々。

●たゞ聲を本願にまかせて名號をとらふべき也。
 註に云、往生至要決云、彌陀の名號は往生の定業

(723)

(724)

也、我名をとなへば必ず生れしめんと誓はれたるがゆゑに、これによりて上に一形を盡し下一念に至る迄、決定往生の業にあらずといふ事なし、これ則ち南無阿彌陀佛といづる聲は皆彌陀の本願に順する故也已上、私に云、申せ助けんと云ふが佛の本願なれば申せば本願に叶ふ、本願にだに叶へば生るまじき罪惡の凡夫を、往生遂させ玉ふは本願の力也、是を他力の教と云也。

●これによりて法然上人は、(大胡太郎實秀に給はりし御消息の詞也)、たれしも煩惱のうすきあつきをもかへりみず、罪業のふかきあさをいふべからず、たゞ南無阿彌陀佛と申して、こゑにつき決定往生の思ひをなせとの給へり。

註に云、煩惱とは心の三毒なり、罪業とは身口の惡業なり、こゑにつきてとは、我申す念佛の聲則往生の驗とわもへとなり、一遍上人傳に云、口に南無阿彌陀佛と唱ふなれば聲すなはち往生也、云々詩經幽風伐柯篇に云、伐柯伐柯其則不遠已上、中庸の章句に云、柯斧柄、則法也、人執柯伐木以

の能あることなし、云々。

三藏法數云、一期謂人從生至死也已上、私に云、

一念十念は約臨終也、云々。

●されば我等はしどけなくとなへたれども、佛は一とこゑもきこしめしすぞさす、みな若不生者不取正覺といふ本願の中に、うけとり給ひて。

註に云、しどけなくとは、無四度計と書等とあるを、言釋には是はしだれけなてふ言にて、志杼の杼は、太禮の約、泥なるを杼に轉じ、計はありさまを云、那支の那は言ひ押へる辭、支は氣利の約にて又辭也、こは荒きことを、あらげなきてふ類にて無の意に非、畢竟は筋なく亂れたることを云ふと、云々。

註に云、念佛の數をわねぬこと也とあるは、其意なきにはあらねども、私に考るに心の亂不亂身の淨不淨、四威儀をわらます申を云ふの義なるべし、されば數をとめざる義も此中にこもれり、古人の(註に)了實上人の歌かよと云へり「我は唯御名をとなふる計りなり、數は佛のしろしめすら

爲柯者、彼柯長短之法、在此柯耳已上、いふ意は、斧の柄をきる寸法は持たる柄にくらぶる也、其如く往生のしるしは申念佛にある也、外にもこむべからず、私に云、煩惱の淺く罪業の輕きに付て、斯くてこそ往生と思ふは機功を募りて他力を忘れたる不安心、また煩惱の厚く罪業の深きに付て、是ではよも往生と疑ふは、超世大悲の本願を不知の不安心なれば、いづれも往生の機分にはあらざる也。

●その故は往生せんともひたちて、南無阿彌陀佛と一聲となへはじめぬるが、一念をも必生れしめんと誓ひ給ふ、本願のなかにをさまりむるより、十念になれば十念をもといふ願にをさまり、一期申ぬれば一形をもといふ願にをさまるなり。

註に云、一形とは此身の一生涯をいふ、釋に云、上盡二形下至十聲一聲等、以願力易得往生已上、大師云、安心はやはらかにとりて起行はこはく勵め、一念にも往生と云ふを決定せざれば多念も更に益あるとなし、贖金はいか程ありても眞金

ん、本願の中にうけとり給ふと云ふ義を、手近く示さば、念佛は名體不離にて或は念佛の聲佛體と現じ、(導師康師等の御事蹟見つべし、近くは上利傳左衛門が妻なる、戒名瑞譽紫迎妙雲大姉、先師の十念を受けしに、聲々佛體と現じたるを感見せしこと、先師(法岸老師)の行實に出すが如、云々)、或は光明と現す(念佛神力傳に清泰院殿の感見)、見不見の別はあれども三心具の念佛皆悉く爾り、化佛と現するは本佛に歸し、光明と現するは彌陀の大光明中に歸攝す、故に念珠もとらずとも四威儀をわらばず、つい唯申に申て居れば、如來方に一聲も聞し召過させ給はずと云ふ義趣、青天に白日を見るが如し、此ことを能聽受するが安心の徹底なれば、忽諸の思をなすこと勿れ。

●佛力守護すれば六塵のぬす人にもかすめられず。

註に云、われら無始よりこのかた隨分の善根をも修しつらめども、三毒の火にやかれ六賊の爲にかすめられて、一善をもたくはへざりつる身の、此

(725)

度本願の名號をとなへて、無上の功德もとめざるに、おのづから得たり、是を本願にあづけて佛を方人とす、すこしもなにおそれかあらん、風早三位某脚木魚うち念佛する畫贊、「家の犬くるは、狂へ名號の、杖とる身には何かおそれん」、六塵とは色聲香味觸法なり、南山曰、云何名塵、空汚淨心觸身成垢、故名塵、(淨心誠觀)涅槃經云、六大賊者即外六塵也、能劫一切善法、故曰上、かすむるは劫の字也、戒疏云、公白而取曰劫、上、言釋に、あを霞めるてふは、人の去にしあを隠すといふ、その如く人の物を隠し取を、かすめるといへり、かう字にては聞に遠しと云へり、私に云、本語隠取の義なるべけれど、劫の字をうづめたる上にて云へば、盜は隠し取の義、劫は顯露に取の義なれば差別あり、今は六塵の賊の功德を奪ふは、公白して取の義にて隠し取るの義に非れば、註の意よくかなへり、又山賊海賊押込盜などは皆顯に取るなれば、あらはにかすむると云ふときは、唯是ぬすみ取ると云ふことにて隠すの義はなし、漢語も盜

は隠し取るの義なれども、劫盜と續くときは又唯ぬすみ取ることにして隠すの義はなき也、故に言釋に云ふ如く、かすむるは隠し取るより發る本義なるべけれど、義は種々に轉すれば隱顯共に通するなるべし、云々。
人々能々思ふべし、若聖道門の修行なれば此六塵に垢されず、一切の善法を修せざれば生死出離は思ひたれたることなるに、他力本願に歸入すれば始終六塵にけがされ乍らも、申だにすれば佛力守護して劫められず、順次往生の本意を遂ること、實に尊き限りに非や、此ことを古人の夷曲に、「念佛は野にも山にも申わけ、ぬす人とならず鼠かぢらず」、少年拔參宮、(托、譬喻卷三)。
●三毒の火にもやかれずして。
注に云、貪欲瞋恚愚癡を三毒といふ、法界次第云、通名毒者以三鳩毒爲義、惱壞之甚故云三鳩毒、以其能惱壞出世善心、故名爲毒、上、華嚴經云、三毒の猛火恒に熾然たり、無始時より來た不休息、已上隨相論云、欲瞋癡爲三火、此三有三義、故名火、

一能燒衆生一切善根、故、二此三煩惱能使心熱、即有燒心義、三能燃三界、故名火、已上、自力の修行功德は瞋火に燒失すれども、他力念佛の功德は即佛體即光明なれば、何の故に燒くことあらん、云々道乘法師、(托、事實卷九)、要吐火焰(連譽上人行實上卷に出)。
●一念より一形にいたるまでみな決定往生の業となるや、(一聲もむなしき事なし)是名正定之業、順波佛願故と釋するこの心なるべし。
註に云、これ疏の文なり、記主上人云、對助業、故名爲正業、對不定業、故名爲定業也、所以念佛一行獨名正定業者、彼佛願中唯明念佛、大願業力接引衆生、百即百生萬無一失、故也、已上(正業は酒店、助正は居酒屋の煮賣を兼る如く云々、定業は火付の火あぶり、不定業はすり盜人等の如云々)正定業の念佛一行、佛菩薩諸天善神の御本意なるを釋尊出世の本懷云々、藥師八菩薩をして引導せしめ玉ふ云々、觀音の惠日三藏へ告命、文殊普賢の法照禪師へ告命、觀音の惠日三藏へ告命(托、往生卷四)

不動尊の覺城上人へ告命、(托、往生卷二)。
●聲につきて決定往生の思ひをなせといふげにもいはれけり。
註に云、右の上人の詞を甘心解釋するなり。
●異香よりも紫雲よりも、南無阿彌陀佛と唱ふる聲にすぎたる往生のしるしやは侍るべき。
註に云、むかしより諸家の往生傳にさかんに異香紫雲の事をのせたり、是を往生の祥瑞とす云々、されば世間の念佛者、まさしく異香も薫せず、紫雲もたなびかねば瑞相なしとたもへり、其紫雲異香はなほ佛の誓ひに必ずしもなき事なれば、ともかくもあれ、不取正覺と誓ひたまへる念佛の聲ほど、たしかなる決定往生のしるしはなき也、松蔭の顯性房の云、心の專不專を論せず、南無阿彌陀佛と唱ふるころこそ詮要なりと、眞實にたもふ人のなきなり、私に云、實に此元祖大師の御示は、淨土一宗安心の徹底にして餘蘊あることなし、故に今斯く讚嘆し玉へる也、因に往生傳を讀に心得あることなれば示すべし、夫れ往生傳記の本意は現

瑞あるを目的として記するものなれば、其人々の常の行には必至と本願に應せりとも見えず、諸人の準繩としがたきとまゝあれば、往生傳にて安心の正意は得がたきこと也、若し難じて其人の平生の行儀必至と本願に乗じかねば、云何ぞ現瑞ありやと云は、是に付ては種々の義あり、其大概を擧るに三義あり、一には内外相違の別、二には平生臨終回不同の別、三には顯機冥機の別也、初に内外相違の別とは、是則外虚内實の人也、故に常の行ひは餘所目には不調の如く見るも、内心眞實なる故に現瑞あるなり、是外の不調なるを標準とせば甚だ不可也云々、一に平生臨終回不同の別とは、常の行ひをかける所は不調にして本願に叶はざれども、臨終に回心して現瑞往生遂るもあり、不調不回の平生をならは、是甚だ不可也、三に顯機冥機の別とは、常の行ひは不調なれども、臨終回心の直下に現瑞あるは是れ顯機顯應の機なれば也、平生不信行惡の回心にさへ現瑞あれば、(彼張善和、張鐘馗等の如し云々)、況や平生法門に暗き

故不調の所は有ながらも、已に機は信機也、回心の直下勝瑞あるを疑はんや、斯く種々の義ありて、一機一縁の別機もまゝあるを見聞に任せて記するものなれば、是をもて安心の鏡とはしがたきこと可知、(又現瑞により他の志をたつる因縁あれば佛力加被して現せしめ玉ふとあり、快圓の金色舍利連譽上人の化をたすけ、勵進法子が往生によりて鶴江浦の者念佛往生數々あるが如し)、一時小松溪老隱空阿義柳上人の許へ、(大阪天王寺東門蒼龍寺に居住のとき)大阪上本町錦屋重兵衛と云ふ者來りて云く、私母は御存の通念佛の行者に有之候所、病中には折々無理なることを云はれ候、古來の往生傳など拜見候には、餘り理なきことなど云ひし人は見えず候得ば、往生もいかゞあらんと存じられ、歎しくなど申しければ、空阿上人の云、正念違はず念佛せし者の往生に何の疑あらん、彼病中に折々無理など云はれたるは病苦に逼められては誰もあること也、夫れを古來の往生傳の人に引合せて不足に思はるゝは、其許の了簡違ひ也、

近く此ことを譬へて示さば、畫師の屋舎など畫くに、必ずなくてはならざる便所を畫くことなし、若し是を畫けば鄙陋になりて見ものにならざる故除きて畫かず、往生傳記も亦爾り多くの往生人の中には病中には無理なること云ひしも數々あるべけれども、唯正念厭欣の念佛のよき所計りを書して、不出来の無理なること云ひしは除きて記さる也、然るを其許自身看病せし病人を、除劣學勝の取捨せし傳記に相對する故物たらず思ひて疑をなす也、是物のすぢ道を心得分けざる誤りなれば、必正念々佛せし人の往生を疑ふべからずと示し玉ひければ、彼の者大に感服せり、さて又物は一概に論せられず、餘は闍て往生の法の上に於て云ふに、惡事によりて善心を發(古來惡人發心數々多、大和九右衛門「新撰發心傳」、善事より惡心を發することあり、(觀成退、「隨聞往生記」長四郎等、「托、往生卷二」)今往生傳にのみ心をよせて現瑞のみに執するときは、聲につきて往生を決するの安心を建て得ず、却て往生の大益を失する也云々、又斯く云へ

ばとて、偏へに往生傳を拜見するは惡しと、僻して思ふべからず、地體を聲につきて往生と決心、其上にはよりく、拜見して我心行を策勵すべき也云々、又此聲に就て往生と決心が實に一大事なれば、紫雲異香の現瑞に目くるめく計りに非ず、其餘の法門にても往生を決せず、唯聲につきて決定心を建つべき肝要の御法語あれば是れを示さん、稱念上人の法語に云、(後世のつとの追加にあり、出所は未考、謂ふに諸處の法語を撮要してしるし給ふならん)、法然上人曰く、四修三心を沙汰する事は一向專修になるまでの事也、一向專修になり終りぬれば別に四修三心の沙汰なし、一向專修になさんばかりのこと也、念佛者になりぬれば、只相續して往生を待つ計りなり、身を顧み心をかへり見て、よきに付て往生と悦も別の心を發すにてあり、あしきにつきて今度の往生は大事と思ふも別の心をたこすにてある也、唯よしあしをかへり見ずして申せば極樂に生るゝと心得て、今より後臨終までひらに南無阿彌陀佛と唱へ給ふべきもの也、た

(730)

とひ信心かひなくなり稱名もよはくなるも、只決定往生の思ひをもち給ふべし、若往生の大事なりと底にておぼるゝ心あらば、又別の心を發すに於てある也、かくいへばとてあしきも往生なり、信行かひなき程のよはきも往生するなりと思ふも、又別の心をたこすにてある也、唯唱ふる念佛にて往生の定不定をば定むべし、身もちにても定むべからず、心持にても定むべからず、聽聞にても定むべからず、相傳にても定むべからず、唱ふる念佛にて定むるが往生人の身もちなり、心持なり、聽聞也、相傳也、知識也、淨土宗也、能き同行也、此外に何にても存せず候穴賢々々、又私の本尊也、異香也、紫雲なり、世間佛法の深奥は只南無阿彌陀佛へ。

古人の云、玉本無瑕、雕文喪德已上、(淨慈自得陣錄)されば一切之乎者也分別をすて果て、聲につきて決定往生の思ひをなせと云、淨土一宗の至極徹底の御示しを奉信受べき也。

●かまへてたゞとかくのうら思なく、ま心に念佛

して本願にあづけたてまつり給へ、いのちをばらん時佛たしかに返したまはずべし。

●註に云、かまへてとは、ねんごろにすゝむる詞也、ま心とは眞實の心なり、さればすゝるにとなふる一こそをも、若不生者の御胸の中にをさめたくべし、佛の念力にて功德も増長し魔事のたそれもなし、まことにたしかなるあづけ所也、佛も一大事の正覺をかけ給へる名號なれば、油斷なくまもり給ふ也、爲尹「是も又花の臺のためとてや、まづあすけたく十こそなるらん」。

●それをこそ最後の念佛にもし侍らんすれば、臨終の十念は佛の御はからひにて相違ある可らず。註に云、臨終の十念もたのがちからにて成就せん、とたもは相違し侍りなん、たゞ佛の御はからひを頼むべし、上人の云、平生の念佛と臨終の念佛と全同無異、設難作平生念佛之想、願死者即是臨終念佛也、設難作臨終稱名之思、命延者即爲平生之持念也、(已上要義鈔)私に云、宗の安心は平生臨終々々平生、今の本文引文等にて可知、他

(731)

師は臨終の念佛は無後心無間心及強發猛利の心故に、百年の業に勝るゝと云が定まりなるに、兩祖の正義は臨平を論せず願彼佛願故の成立也、可仰可仰今の本文の註、髮髻として初心は心得難し、委曲に指揮せば、本文それをこそ最後の念佛にもし侍らんすればと云迄は、常に申念佛を最後の念佛と心得べし、人命無常いかにして命終らんも計り難ければなり、最後に必十念して終らんと思ふは、常に申す念佛は軽く臨終の念佛は功德深重、彼百年の業に勝るゝと心得るに近ければ感心せられざるに簡ぶ心ある歟、されば元祖大師の詠に「阿彌陀佛と十聲となへてまごろまん、ながき眠となりもこそすれ」と、是れ臥す時に十念唱へて寢乍ら死せば是を最後の十念とせん也、是にて死の縁無量、必最後に十念して終らんと思ふべからざる可也、次に臨終の十念は佛の御はからひにて相違あるべからずと、此文一往打聞所は臨終の十念は佛の加被にて必唱ふるぞと云如くに聞ゆれども、夫れにてはそれをこそ最後の念佛にもし侍ら

んすればと云ふに連続せず、依て謂ふに、此文意は常に申す念佛の内に死せば夫れを最後の念佛とし、又正しく命終のとき念佛して終るべき機ならば、佛の護念力にて十念せさせて迎へ玉ふべし、いづれ申してだに居れば往生に相違あるべからずと云ふ意と見れば、前後脈絡貫通して穩當なるべし、高野山宰相入道木津禪院主の事。

●かやうにうしろめたからぬ。

言釋に云、吾うしろの見ゆすて、心痛きをうしろ目痛といふを轉じて、人の心のうしろくらきをもいふ、こゝはさる心ぐらくたぼつかなき事のあらぬ也、註に影護の二字傍に書れたるは、源氏の桐壺の河海によられたる也、(今に叶はず可考)眞名伊勢物語に後ろ目痛とあり、言釋と同義云々、後ろから浪人の如きもの來り、或は山中で狼などに追かけられて、氣味の悪きをうしろめきと云ふ、今は其の恐れなきを云ふ。

●慈悲の父母にて、心やすくうしろみ給ふうへは。註に云、慈と悲とをわけて父母といふ也、佛の後

(732)

見なればこゝろもとなき事なし、(慈父悲母、慈は
拔苦悲は與樂又慈悲の父慈悲の母、拔苦の故に與
樂、與樂の故に拔苦離れたるものには非、唯主伴
の異云々、) 惠鏡法師、(托、往生卷四)

●南無阿彌陀佛となへて、よろづは佛にまかせ
奉るべし。

註に云、御約束の名號を唱へて、心も行も平生
も臨終も何事も佛を打たのみて、此身をまかせ奉
るべし已上、古歌に「我は唯御名を唱ふる計なり、
身をば慈悲ある彌陀に任せて」、臣となりて君に身
を任せずば忠臣に非、子として親に任せずば孝子
に非ず、妻として夫に任せずば貞女に非ず、君親
夫同じ迷ひの凡夫なれば、任せがたき方もあれど
も、任すべきには任するに非や、然るに超世大悲の
本願を成し玉ふ彌陀如來に任せ兼ね、種々に氣い
じり心さばくりは實に失心顛倒の最頂なり、此世
及後生願佛常攝受、唯一向に打ち任せ奉るべし
云々。

●さてこそ念佛の聲をばみどり子の哭するころの

ごとしとも釋したれ。

註に念佛鏡に云、又念佛喻如「孩子哭聲、父母聞
之急來相救、飢即與食、寒即與衣、熱即與涼、是
父母力非是子能、念佛之人亦復如是、唯知念佛
佛大慈悲尋聲即救、所有罪業佛與滅却、所有病患
佛與差却、所有諸障佛與拂却、猶如父母養子相
似已上、(字書に孩は始て生せる小兒也、哭は哀聲
也)已上。

●たとへばをさなき子のあしてもたゝず、物もに
いはぬは、うゑたるにもさむきにも、たゞ母をか
こちてなくよりほかの事なし、母其聲を聞ぬれば
かならずゆきてたすく、うゑたるらんとおもへば
むねをひらきてちぶさをふくめ、さむかるらんと
おもへばふところにいれてはだへをあたゝむ、さ
ればうゑをやすめさむさをやむるは、ひたすら母
の力にあり、わびてなくばかりこそ子のわざにて
は侍るやうに。

註に、彌陀の悲母衆生を一子にかなしみ、我等の
稚子に名號の乳をくゝめ、凡夫の嬰兒を大悲の膺

にあたゝめ給ふなり、わびてとは佗の字なり、字
彙に云、佗條は失志貌已上。

是迄譬也已下合釋、

●我等が身の智慧の心もさかしからず、行の足手
もたゝぬ事は、をさなき子よりもなほわろかなれ
ども、さすがありはてぬ世もあぢきなく、ながき
まよひもかなしければ、たすけ給へと佛をかこち
て、南無阿彌陀佛となふるほかは、はげみ得た
るかたなし。

註に、いかなる赤子も物のほしきとさむきをばし
るごとく、わろかなる我等も此の世の無常なる事
と後生の迷ふべき事とは、あぢきなくかなしきな
り、あぢきなしとは、史記には無爲の字也、遊仙
窟には無常とも書くなり、せんかたなき心なり、
私に云、和訓栞に日本紀に無道無狀等をよめり、
無味氣と眞名伊勢物語に見ゆ、古事記に味の字を
うましと訓ず、史記の母爲、遊仙窟の無情をもしか
讀めり、後生歌によむは此意なり、倭漢ともに情を
五味にたとへて云ふもの多し云々、懣の字は字書に

(733)

見せず已上、かこちて、和訓栞に白氏文集に詔の字
をよめり、借言するの義とすの反つなり等云々、私
に云、かこちの言所によりて義趣少異あれども、今
は何のこともなく我に物たつべき力らなければ、
詔びて佛を頼むの義として叶へり云々。
●佛この聲をきこしめすに、一子の慈悲いかでか
やすき事を得ん。
註に、大集經月藏分の偈に云、視於諸衆生如母
念子已上、人間界ではまさかの時には子をも捨て
るとかや、「身にまさる物なかりけり縁子は、やら
ん方なく悲しけれども。」
●されば穢土をいで淨土にうまれん事は、しかし
ながら佛の御ちからなり、たすけ給へと思ひて名
號をとふるのみぞ、わのがはげむ所なる。
註に、西方合論に云、如「一綫之蟻孔、能穿連山之
堤、是水之力非蟻力故、又如「一葉之葦席、能運
萬斛之舟、是風之力非葦力故。」
●化佛菩薩尋聲到(此句は往生禮讚にあり)たのも
しき慈悲の父母なれば、たゞかまへてをさなき子

の母をよばふれもひをなして、こゑにまかせて來迎をまつべし。

註に、わが念佛の聲をたづねて來迎あるなり、明禪法印の云、赤子念佛がよきなり已上。

●あなかしこ、こぞかしき心ありて往生を疑ふ事なかれ。

註に、多念も本願なり一念も本願の名號なり、すくなきもたほきも往生の業なり、しかるに當世の念佛者は、かしこだてをさきとして如法の行者をもどかしく思ふなり、かゝる心の人他はいさめをも用ゆべからず、そのかしこだてが佛祖の御心になふや否や、此三部の抄を鏡として邪正をてらし見るべし、私の作意はおぼつかなき事なり、あなかしこ、註には下學集に出る恙虫の云々の説を引、要解の此下は註に同く、又下の所には、古語拾遺、古語に事の甚切なるを阿那といふとあり、萬葉集に畏の字をかしこと訓せり、しかればあなかしこはあらわをろしといふ義なり、女文のかしくもその義にて恐々と書がごとし云々、言釋に

云、あな恐にて、あは歎の詞、なはいひ入る辭なり、あなたふとあなうれしなどの、あなは皆同じ、かしこはわをるゝなり、仍て謹むかたにも用ふ、人を敬ひて書るふみのはてに、恐惶と書にひとし、穴賢はかり字のみなる事明らけきを、今はあらぬ事を附そへいふとかや、(附添は恙虫の説をさす也)又開窓雜錄(諦忍律師隨筆一卷物^{二十})には神代卷大已貴命(常にはたほあなむちと云へども、たほあなむちとよむ本義なり)大野の火を穴に入れ、遁れ玉ひし時、穴賢との玉ひしが本説也、賢く穴に藏して火難を免る、則ち目出度しと祝する意なり、假名文の終りのために目出度かしくと書は、全此意味也、總じて文章の終りに穴賢とかくは祝する詞也已上、私に云、斯く説々多ければ取捨は其人にあり、爾し此所にては誠慎の義として契へり云々、今本文子母の譬に就て一つの事實を出さば、
輓骨童(托、事實卷一)

已上は行の少きに依て往生を疑ふを釋し、已下は妄念に依て往生の疑をほらひ玉ふ下也、其妄念の

疑を拂ひ玉ふに三義あり、初に宗義徹底の直答、いかに已下よりあゆむべしとこそ見わたれ迄、三義の淺深を云は、初義は宗門徹底の故實、次の義は解義分、後の義は唯妄念に滞るの初心に示す義也云々。

●又(隔の字也)いかに妄念に申まじへたる念佛も往生の定業となるなり。

註に、妄念の中の念佛をも佛はよくしるしめす事、たとへば乳水混すれども鵝王のよくしるが如し、觀經に云、爲煩惱賊之所害者、説清淨業云々、大品經曰、若人散心念佛、亦得離苦其福不盡已上
●その故はもとより罪惡深重の機の、妄念といま

りがたかるべしとは、佛もたほしめしもうけたるらん、そのうへにたほされたる本願なれば、にこれる念佛を否などにはよも侍らじ。
註に、最劣の下機をたすけんとして、五劫まで思惟し給へる事なれば、末世の凡夫の心に妄念の濁りあるべしとは、佛もとくたしはかり給ふべし、續千載(從三位宣子)「濁り江の水の心はすまずとも、

やどれる月の影はくもらじ。

●されば中路の白道も、なみをふみてあゆむべしとこそ見わたれ。

註に、是は善導大師三心の釋の中にある事なり、貪欲瞋恚のさかんなるは水の川火の川のごとし、その煩惱の中にいさかの極樂をねがふ心あるは、しるくほそき道のごとしとたとへ給へり、くはしくは西要抄にあり、なみをふみてあゆむとは、妄念に目をかけずねがひとなふる義也。

次に依發願回向決定往生、況や已下此心なるべしまで。

●いはんや人ごとにその日の數遍にとりむかふをりは、まづいかにも往生のたもひより申せめらるる事なれば、念々の念佛は皆本のやくそくにかへりて、はじめの心ざしにをさまりぬ。

註、聖光上人云、行者先發往生願、後數稱名時、或心相應或不相應、皆成往業、謂起行時、餘心雖難、安心亦起數用、回向是故所引、初後善心、皆成往業已上、往生要集云、若至誠心心念口言、我從今

日乃至一善、不爲己身有漏果報、盡爲極樂一盡爲菩提、發此心後所有諸善、若覺若不覺、自然趣向無上菩提、如一穿渠溝、諸水自流入、轉至江河、遂會大海、已上、(兩益の念佛は溝を二つ穿つ如し、後益は緩流現益は急流の如し、緩は急に奪はる、現益に後益は奪はれて不往生可知、因等記と利那等起の料簡あり、傳通玄記の第四を見るべし。

●又しどけなく申ちらしたる念佛なれども、後にかならずとりあつめて極樂に廻向する思あり、此とき妄念はたのづからいらびすてられ、念佛はこどくくいらびとられて、けがる、所なくみな清淨の業となる也。

初の願心と後の回向を分て二段とす、註に、心はこれ業の主として行をはこぶ車なり、心にたゞ念佛を回向す妄念をばうちすて、かへり見ず、周易に云、雲從龍風從虎、龍虎に風雲のしたがふが如く、回向の心に念佛がしたがふなり、古徳の云(惠心僧都の法語也)妄念はもと

より凡夫の身體なり妄念の外に心なき也、一向臨終の時までは、妄念の心にてあるべきぞと心得て念佛すれば、來迎にあづかり蓮臺に乗する時、妄念の心をひるがへしてさとり心とはなるべき也、妄念の中より申出したる念佛は、にごりにしまぬはちすのごとくにて、決定往生うたがひなし云々、(蓮花三徳、華果同時、汚泥不染、不落果) ●さればかまへて口ばかりにもあれ、となへたくべき也。

かまへて、和訓葉にかまへて何々といふ詞は、後を鑑みていふ詞也、私に云、後を鑑みて云の義も通ず、今も後を制誡するの意あればなり、猶親しく云は、常に身構とはたじろかじと構ふるの義なる如く、今は則ち構也、口計りの念佛は往生せまじやなど、疑心退墮の失を生せず、妄念異念の中よりも申せば、必ず往生と心構ひせよと教示の詞なり云々。

註に、前後の心に發願回向ある故に中間の事を口計りといふなり、それも妄念にむせびたる時の事

也、いつも口計りにす、むるにはあらず、記主禪師云、問、心無歸命、口唱南無、此亦有願而得往生也、答、不然、意若闕者身口焉成云々、私に云く記主の此の御釋は、彼の西山流の無願有行の所立を簡ぶの釋也云々。

はじめ、修行者の問に妄念心にきほひて念佛は口ばかりなりとありしを(上卷第二の問)こゝにてこたふる也、私に云、此口ばかりにも等とあるは上卷の問を答ふるにてはなく、此の問答にまして妄念うちたこしながら申念佛は、物のかすならじとかるしめたもはる、等と云ふ問を答へ玉へる也、上卷の問は上卷の所に御答あり、つたなかりし心のもちやう、わろかりし身のふるまひを、あらためて後かなふべくば、善人をのみ救ふ本願とぞ申べき等數々あり、口計と云ふ詞ありとても上の問を此にて答ふると云ては及びこし也、若し上の問に念佛は口計とあるに、御答の委しきこと當段の如くならざるはいかにと云は、上卷は願文の十方衆生の四字にて機を誓ひ玉ふ下なれば、罪惡の

者のもれざる義を詮と釋し玉ふ故、妄念異念の義は御示し略也、罪惡の者に煩惱妄念なき者あらんや、罪惡の者の往生を舉玉へば此内に籠る故也、(煩惱は罪惡の根本なれども、業道を決するは罪業と現れたる上にて定る云々)當段の御示委しきは乃至十念の四字にて起行を誓ひ玉ふ下なれば也、されば問に二段ありて、初にわづかに念佛十聲計にては往生なるまじと疑ひ、次に妄念發し乍ら申す念佛にてはと疑ふ、故に妄念中の念佛往生の業となる義を舉示し給ふなれば、委しき上にも委しからざればならぬ義趣可知云々。

●をはりに廻向せん時心ざしとひとつになるべきが故に。

註に、此時心口相應の念佛になるなり。

●妄念とにも申たらん念佛の、つゝにいたづらなる事はゆめ／＼侍るまじ、水火の二河をかへり見ず、念々に忘れざれといふ此心なるべし。

註に、いかに妄念の中より申念佛もみな往生の業となる也、大師の御釋に、二河をかへり見ずと侍

(788)

るは、妄念に目をかけずしてとなへよとの心なり、疏に云、信順二尊之意不願水火二河念々無遺已上、むかしある人、心に妄念をたこし口に念佛するは内外各異なれば、至誠心にそむきて往生せずといへり、ゆゑしきひがごととなり、念佛の間に餘事を思ふは自然の妄念なり、至誠心かけたるにはあらず、又世に善導法語といふ物あり、その中に妄念のまじはる念佛はかたく往生せずといへり、かの人淨土宗の大意に無案内なり、經釋も未練なる故私の義をしるして世に披露す、愚かなる男女はこれにまどふ、大悲の佛願をへだて人をして疑悔せしむ、無智の輩に見せしむる事なかれ、正法弘通の邪魔となるべし、彼の書の非をいさむる事、洞公の破戒往生章のごとし。

●又せめて千遍萬遍申つゞけん、妄念たこりて心やましくば、中々一念十念づゝなりともつねになへてみ給へかし、餘念はよも侍らじ。後に念佛の聲伏_三妄念、又せめて已下申が手にて侍るなりまで。

註に、是非妄念が心にかゝらばかくのごとくすべしとなり、又六字をとなふる中に餘念なきやうにすべし已上、私に云、又六字の註は此のこと元祖大師和語燈_二丁_四にもあれども此は是制教用心、格内の了簡にて、次の本文及び元祖大師の妄念發らば發れとふり捨て申すが手にて候也と仰られたる格外の活手段に非が如し可考見_一云々、下文の註の意とも相違す。

●たとへば河をわたる時は水のたれ間をまつ事なし、たゞそのながるゝうへをふめばあまつさへ、あしのしたの水がせかるゝやうに、われら貪瞋の河ふかくして、妄念のながれやむ事なれども、南無阿彌陀佛と申せば、かへりて聲のしたの妄念はたのづからやむなり。

註に、我等欲界散地に生れたる煩惱具足の凡夫なれば、妄念のくせはやむことなし、その妄念のやむ時を待て念佛せんと思はゞ、河の水のひる時を待て渡らんといふが如し、一生はつくることも妄念はやむまじ、いまだ妄念がやまぬとて、いたづら

に手をこまぬきて臨終の苦痛をまたんや、二河の釋によりて此たとへ出たり、めづらしき譬說にしてよくかなへる事なり。

●かやうに申つけぬる念佛は、妄念をこそさまたぐれ、妄念にさまたげらるゝ事はなきなり。

註に、妄念は衆生顛倒の心よりたこりてさらに實體なし、譬へば風をつなぎ影をとらふるがごとし、念佛は如來の願行より成じてたしかに萬徳をそなふ、その堅實なる事金石の如し、一虛一實のことはりなれば、名號の徳として妄念はたのづからやむ也、すでに普門品に觀音の御名をとなふれば三毒を離るゝとあり、十輪經に地藏の寶號を念すれば煩惱消滅すと見たり、菩薩の名號なほしかなり況や如來の洪名をや已上。

私に云、註に一虛一實のことはりなれば名號の徳として妄念は自らやむなりと云々、此やむとあるを強く見て氣いじりすべからず、煩惱妄念は生れ付の目鼻に同じと、前後の本文註の引文等にて可知、今不案内の行者は始終妄念を離れたる念佛はある

(789)

まじと思ふ故、聲の下の妄念はたのづからやむものぞと示し至へるを註したるもの也、此に引れたる一虛一實の道理と云は、源と論註の三決定の下の釋也、論註の本義は罪業と念佛とを對待して、罪業は虛妄顛倒の見より造り、念佛は實相の法を聞て唱ふ、一虛一實天淵隔別、故に至て重き念佛の功德輕き迷情の罪業を滅して、決定往生遂るぞと判じ給へるが本義也、今の義は重き念佛の力用輕き迷情の煩惱妄念を押へ伏するの義に轉用せられたり、此轉用の義を云はゞ格内一往の義、再往格外の活手段、宗の故實は次の本文に。

●わざとやめんとすれば妄念いよくたれず。註に、たもはじとたもふも物を思ふなれば、やめんとたもふが又一つの妄念となる也、新古今集に「しのばじよ岩間傳ひの谷川も、瀬をせくにこそ水まさりけれ。」

●たこらばたこれとうちすてゝ、妄念をかへり見ず申が手にて侍る也。後義は一往妄念に滯る故、聲の下の妄念は伏らる

るぞと示し玉へども、終に至ては宗義の徹底妄念の起不起に取あはず、唯申計ぞと結び玉へり云々、註に、釋に不顧水火二河といふ此心也、手といふは習事といへる義也、此條は法然上人明遍僧都良遍僧都などの御勸め皆一同也、(決答、語灯)

上人の云、すでに凡夫の往生をゆるす、なんぞ妄念の有無をきらふべきや云々、一遍上人の歌に「あともなき雲にあらそふ心こそ、中々月のさはりなりけり」(扶桑抄)、疏鈔に曰、但以心雖離念而無明染心念々相續、如七年之病久亂之民故曰慣習、茲欲勉強過捺立使空寂而止動歸止、止更彌動、縱念暫息細念猶存、便謂相應錯謬非小、既居凡地未能絕慮忘緣、何不即緣慮而作修進故以念還攻於念、念一佛名一換彼百千萬億之雜念也、(上)、涅槃經曰、亦如畫水隨畫隨合、(上)、古に云、如日中逃影波中逃濕沙中逃塵無可逃、(上)。

私に云、此の煩惱妄念に取りあはず、申すと云が宗の故資格外再往の深義、一虛一實論註の本義、

超世別願の大悲を顯すこと可貴云々、此煩惱妄念起不起に就て、邪義と格内と格外の差別あり、一念義の邪立は煩惱妄念に培ふ云々、聖淨混雜、初心の行者は煩惱妄念を止んとする意樂は正見なれども、且て他方の故實を知らず、十百生の利を得ること不能云々、我門格外の深義は、わこらはこれどうちすて、申が手にて侍るなり、是則宗義の骨髓、格外他方の別風、十即十生百即百生の故實なるに能々可信受云々、已上妄念の疑をはらひ玉ふ、已下一念の疑と妄念の疑とを合して勸誡也、註には下の凡已下二の疑の結釋とあれども、此文に二の疑を拂ひ玉ふことは、直に下文に、かならずしも千遍萬遍申つかけたる等とあるにて可知。

●さるを世のまされのひまなさに、念佛が申されぬなんといふ人は、たゞ往生の心ざしのなき故にせめての事とこそわゆる。

註は此文をも妄念を拂ふの料と見られし故、一方に片よれり云々。

註に、身にもいとまありて、心のすみたらん時の念

佛計りが往生の業にはあらず、妄念をもやめて申念佛ならばこそ靜なる際も待べけれ、すでに妄念の中ながら申せとのすゝめなり、いかほど世間のいそがはしきうちにも、ちりみだれても申べき念佛なり、念佛往生義に云、(此引文一念十念の疑を拂ふ方つよし)世間のいとなみに際なければこそ念佛の行をこそ修すべけれ、その故は男女貴賤行住坐臥をわらはず、時處諸縁を論せず、これを修するにかたしとせず、乃至臨終にも其便宜を得たる事念佛にはしかすといへり、餘の行まことに世間念々の中にしては修しがたし、念佛の行にかぎりては在家出家をわらはず、有智有無をいはす稱念するにたよりあり、世間の事にさへられて念佛往生をとげざるべからず、たゞ詮するところ無道心のいたす處なり、(上)、死心新禪師曰、奉勸諸人十二時中、不簡公私幹辦、近實接客忙中取靜、開裡偷閑記取念阿彌陀佛、或百聲千聲萬聲以爲日課、畢世受持即生彼國、(上)。

●かならずしも千遍萬遍申つかけたるのみやは往

生の業なるべき、一念十念づなりとも本願はよもきらひ給はじ。

註に、本願には必しも數をさだめず、一念十念迄をもをさめらるゝ也、上人の云、名號を相續せんためなり、かならずしも數を要とせず云々(此引文不契當)、助重念一聲念佛往生、(托、往生卷四) ●すゝをとりたるがいみじきにしもあらじ、とてもかくても申こそ詮にて侍るべけれ。

註、念佛が往生の正業なり、數珠は念佛の數とり也、數をとるは懈怠せざらんが爲なり、世間至愚の男女よる晝數珠計をまはして是を往生の業とわもへり、をしゆべき事也、すでにものろこしの崔婆我朝の紀吉住などは、數珠をもたず數を覺せず、ひたすらとなへて往生をとげぬ、これ現證にあらずや、猶ほ此事女人往生傳にしるしたればかれを見給ふべし、總じて和字の物には數珠をすゝとかくなり、しゆをかへせばすになる故也、又西要抄下卷第二の問答を見るべし、予むかし關東にてある宗匠の説をさゝ侍りしに、石清水の神詠とかやい

ふ歌を引て、たゞ手にすゝをまはしても佛神の喜び給へば、往生の業なりとす、められぬ、これゆゆしきひがごとなり、數珠をとらばたのづから念佛すべきをよるこび給ふなるべし、つゝに念佛せねば本願に乗せず、なにとてか往生をとげん、況んや彼神詠いづれの集にあるやらん出處たしかならず、たゞ例の妄傳なり、たとひ古老の説なりとも典故なき事をば信すべからず云々。

●されば樂天のことばには。

註、唐の白居易の頌なり、樂天は西方の行者にて諸部の往生傳にのせたり、日記故事大全に云、唐白居易、字樂天、(下邳人)生七月能展書、指之無二字、雖百試不差、其聰明出於天性、如此、後登貞元十四年進士、(貞元、德宗年號)官至刑部尚書、(少年有高才、又加學文之功、故其成就者不少也)、雲棲往生集云、唐白居易官中大夫太子少傅、捨宅爲香山寺、號香山居士、晚年患風痺、出俸錢三萬、繪西方極樂世界一部、依正莊嚴悉按無量壽經、靡不曲盡、頂禮發願云々、要解。

●たちても阿彌陀居ても阿彌陀、たとひいそがはしき事きるに似たれども、一聲の阿彌陀はすたれずといへり。

註に、樂天云、予年七十二不復事吟哦、看經費眼力、作福畏奔波、何以度心眼、一聲阿彌陀、行也阿彌陀、坐也阿彌陀、縱饒忙似鑽、不廢阿彌陀、日暮而途遠、吾生已蹉跎、普勸法界衆、同念阿彌陀、達人冷可笑、多却阿彌陀、達人作恁麼、不達又如何、且暮清淨心、但念阿彌陀、(已上在于決疑抄、諸上善人詠歸元直指字少相違)

私に云、本文にきるに似たれどもとあるを一本に火きることあり、言釋に唐土にては鑽字に作りて、火きることの目じるしにせしは、其一字にて聞ゆ、我朝は字はかり物にてひきると云はでは火をきること非ず、故に一本に火きるとあるを必ず用ふべき也。

●すでに先賢の故實なり、さらに後學の今案にあらず。

註に、世のまぎれのひまなきうちにも、一聲づゝ、

きりて中がむかしよりかくある事也、明教大師の云、使世不昭々見先賢之德、亦後學之過也、(已上)。

●すべからく一聲の阿彌陀をたもちて、よるしく九品の無生忍を證すべし。

註、大乘義章曰、從境爲名、理寂不起、稱曰無生、惠安此理、名無生忍、亦得名爲遣相爲因、得此忍時捨離生相、故曰無生。

●たほよそ。

註、是は前の一念と妄念との二つの疑をあはせてむすぶなり。

●稱佛一聲の風、すみやかに妄念の雲をはらふ。註、散善義に云、稱佛一聲即除罪已上、風とは速疾の義をとる也、たほよそ四大の中に地には色香味觸をそなへてその體たもし、水は香なく、火には香味なければやゝかるし、風はたゞ觸のみあればいよゝゝかるくしてすみやかなり、妄念には自性なければ雲に喩るなり、袁中郎西方合論に云、如黑雲障空風至則滅、若雲實者吹亦不去、虛空喻性、黑雲喻業、念佛喻風云々、後中書王西方

極樂讚曰、雖十惡、今猶引攝、甚於疾風排雲、雖一念、今必感應、喻之巨海納涓露、(已上の二件所、喩不同)已上(註主は、上にも云ふ如く、始終此所の本文を念佛にて妄念を拂ふの義のみとして解釋せらるれば、袁中郎の論文も後の中書王讚文も、念佛の功德にて妄念罪業のつみとがを滅すると云ふ義なる故、所喩不同と云れたる也)、今の本文稱佛一聲の風すみやかに妄念の雲を拂ふと云ふは、一往文の面は唱ふる念佛にて發る妄念を拂ふの義と見ゆれども、念佛の功德にて妄念の罪を滅する義も含容せり、二義含容の中に於ても妄念の罪を滅する義は本と也、發る妄念を拂ふの義は末也、此本末分別の義趣はと云は、念佛の功德妄念の罪を滅するの義は、宗門大悲の徹底の故實、念佛にて發る妄念を拂ふの義、強て妄念に滯る初心に示す、一往の義なれば也、上に分別する三義に勘合して知るべし。

●正坐十劫の月、木のづから信樂の露にうかぶ、げにたれか往生をとげざらんと、まめやかにたのも

しくこそ覺れ。

註に、念佛の風妄念の雲をはらへば、來迎の月あらはれて信心の露にうかぶとなり、正坐十劫とは法藏の因願むなしからずして、すでに正覺をとり給ひしより已來、およそ十劫を經たり、(大經、小經)、法華讚云、正坐以來經十劫、心緣法界照慈光、已上、月とは佛の御事也、滿月の尊容をいふ、たのづからとは至信心樂と誓ひ給へる佛なれば、自然に信心の露にうかぶ也、信樂とは本願をげにもと信じてふかく愛しねがふをいふ也、(大經鈔云々、露とは人の心にたふ、はちす葉の露にも、稻葉の露にもその大小に隨ひてそれづに月のかげはうかぶ也、本願を信する心はふかくともあきくとも、まことだにあれば來迎の月はたれにもやどるなり。

●又(これは名號の徳として妄念はたのづからやむといふ證據なり)曇鸞の釋には。

註、曇鸞菩薩は淨土の祖師也、此文は論註にあり、迦才淨土論曰、師并州汝水之人也、魏末高齊之初

猶在、神智高遠三國知聞、洞曉衆經獨步人外、梁國天子蕭王、恒向北禮曇鸞菩薩、註解天親往生論、裁成兩卷、撰集無量壽經奉讚、七言偈、百九十五行、並問答一卷、流行於世、已上(略傳、托往生卷四)。

●至極無生清淨寶珠の名號といへり。

註、涅槃經云、如淨摩尼珠、投之濁水、水即爲清、已上、論註云、譬如淨摩尼珠、置之濁水、水即清淨、若人雖有無量生死之罪濁、聞彼阿彌陀如來、至極無生清淨寶珠名號、投之濁心、念々中罪滅、心淨即得往生、已上、翻譯名義集云、摩尼或云踰摩、應法師云、正云末尼、即珠總名也、此云離垢、此寶光淨不爲垢穢所染、或加梵字顯其淨也、已上。

●たとへば淨摩尼珠上いふたまを、濁れる水に入れば水たちまちにすむなるやうに、名號のたまを口のうちにふくみぬれば、妄念のつみのにごりすみて、心の水きよくなりぬ。

註、十二問答云、淨摩尼珠といふ珠を、にされる

水になぐれば、珠の用力にてその水きよくなるが如し、衆生の心はつねに名利にそみて、にされる事かの水のごとくなれども、念佛の摩尼珠をなぐれば、心の水のたのづからさよくなりて、往生を得る事は念佛のちからなり、云々。

●一念に八十劫の生死のつみを滅すといへるも、かゝるゆゑなるべし。

註、此事は觀經にあり、五逆の罪人臨終の時、善知識のすゝめによりて、南無阿彌陀佛と唱ふるに、一聲にたのづから八十億劫が間、生死にめぐるべき罪を滅して、往生すとき給へり、此結句にて妄念の罪を、稱名にて滅する義なる事可知、知云々、論註の文も大師の御法語も皆爾り、註は唯念佛の聲に妄念の息む義のみに偏れり、感心せられず、さればとて稱名の下に妄念の息むなしと思ふべからず、罪滅の方詮にして息妄の義を含有すと知るべし、宋胡闡往生(托、往生卷三)。

●さて、かやうに一念も往生にふそくなき事をきつて、かならずしも數遍を上げますともななど、

申すやからも侍るやらん。

註、是は右に一念も往生すと勧るを聞て、扱は數遍無益といふ、世の僻見をいましむる也、此一念といふ邪義は、法然上人御在世の時よりありし事も成覺房といふ僧、一念の新義をたて、數遍の行を妨げ、門徒を擯出せられたり、其後越後に下りさかんにこれをひろめ、漸く日本一洲にみちたり、その時上人一念義停止の御消息、起請文をしるし給へり、のせて御傳第五卷にあり、炳誠嚴重なりたれか恐れざらんや、鎮西聖光上人も念佛名義集の中に、かの偏邪をしるしてつよく誠め給へり云々、よく祖師の御抄物をよみて、かの邪義にしたがふ事なけれ云々、私に云、一念義を立てし根本は成覺房なれども、日本一洲普く毒を流せしは親鸞也、同く邪義の中にも親鸞は成覺房に立超たる大邪義也、二邪對待勝劣のこと強會辨に云々するが如。

註、聖覺法印の唯信抄に云、往生の業一念にたれりといふは、その理誠にしかるべしといへども、

(76)

遍數を重ぬるは不信なりといふ、すこぶるその詞
すぎたりとす、一念をすくなしと思ひて數遍をか
さねずば、往生しがたしとたもはまことに不信
なりといふべし、往生の業は一念にたれりといへ
ども、いたづらにあかしいたづらにくらすに、い
よく功をかさねん事要にあらずやとたもひてこ
れをとなへば、ひねもすにとなへ夜もすがらにと
なふとも、いよく功德をそへますく業因決定
すべし云々、又云、一念決定しぬと信じて、しかも
一生をこたりなく申すべきなり、已上。

●それは本願をあしく心わたる人なり。

註、本願の文に乃至十念とあり、成就の文に乃至
一念とあるは、ともに臨終にかざる事なり、一生
造罪の人臨終にはじめて名號をとなへ、二念に及
ばずして命終り、第十念にして息のきるゝ物を、
一念十念にて攝取し給ふといふなり、それをあし
く料簡してひとへに平生にとりなして、一念の義
をたつるなり、(上人御消息のこゝろなり)すでに
乃至といふは、多より少にむかひ、平生より臨終

にむかふ詞なり、釋にも上盡一形下至十聲等とあ
り、(是は當流の心なり)選擇集に云、諸師之釋別
云三十念往生願、善導獨總云三念佛往生願、諸師別
云三十念往生願者、其意即不周也、所以然者、
上捨一形下捨一念之故也、善導總言念佛往生
願者、其意即周也、所以然者、上取一形下取
一念之故也、已上。

●法然上人の御すゝめには(十二問答黒田の消息
等にあり)信を一念にとりて行を多念にはげめ、
一念を生ずいはんや多念をやとの給へり、(信は
行をすゝめ、行は信をすゝめ、旋火輪のごとくす
べし)一念もうまるゝとは本願を信するやうをい
ふ、多念にはげめとは起行をすゝむる方を申す也、
(右の詞の評量なり)一念も往生すと信するにより
て多念はげまざるは、信の行をさまたげたるなり、
多念はげめとすゝむるによりて一念をかるしむる
は、行の信をさまたげたるなり。

註、上人禪勝房にしめし給ふ御詞に云、一念十念
にて往生すといへばとて、念佛を疎相に申せば信

が行を妨ぐるなり、念々不捨者といへばとて、一
念十念を不定にたもへば行が信をさまたぐるな
り、已上。

●すべからく安心をばかまへてやはらかにとり
て。

註、上人云、一念を不定にたもへば、念々の念佛
ごとに不信の念佛になるなり、そのゆゑは阿彌陀
佛は一念に一度の往生をあて置給へる願なれば、
念々ごとに往生の業となる也。

●起行をばいかほどもこはくはげむべきなり。

註、念佛の法は心の相續を本とす、懈怠なれば無
間修にそむくなり、淨土用心に云、一念十念にも
往生はすれども、たほく申せば上品に生るなり、
已上、釋に云、上品華臺見慈主、到者皆因念佛多、
已上又云、三萬六萬十萬者、皆是上品上生人也、
已上。

●一念功たへにして往生決定ならば、いよく多
念をこそはげむべけれ。

註、一聲も不可思議功德ならば、いよく幾萬聲

(747)

も唱ふべし、善根深固にして往生うたゝ決定すべ
し、阿彌陀佛の自説にも、我國に來生せんとたも
は、常に我名を念じてやむ事なかれとの給へり、
(般舟經)法照禪師の釋にも、但使回心念佛とあり、
和漢の先達みな日課の數遍あり、いはゆる懷玉禪
師(五萬聲)、道綽禪師(七萬)寶相禪師(六萬)智覺
禪師(十萬)なり、雲棲の云、玉念佛日記五萬、綽
七萬、相今六萬、三老者皆高僧而日課有常數、今
人忽之曰、此愚夫愚婦所作也獨何歟已上、我朝に
ても惠心僧都は生中の念佛二十俱胝返、永觀律師
は日課六萬聲、法然上人は七萬遍、聖光上人良忠
上人は六萬聲、乃至隆堯法印は八萬四千遍の日課
なり。

●たゞしはげめとすゝむるにつきて、いか程まで
といふきは、あるべからず、たゞ身のたへ心のた
よばん程なるべし。

註、十二問答に云、念々に捨ざれと教ゆる事は、
人の程にしたがひてすゝむる事なれば、我身にと
りて心のたよび身のはげまんほどを、心にはから

ふべし已上、明遍僧都の云、機にしたがひて行はたつべきなり、たとへば道をいそぎゆかんとするに、強力の者とひとしく甲斐なき身の劣らじとゆかは、一日二日こそはげむともつゝには叶はぬ事なり、あやまつ先きよりも道をなづみて行つく事かたくなるが如し、衆生は機根不同なり、上根の人とひとしからんとすれば、退轉の過ありとて、佛法にはきらふなり、(出閑亭記)鎌倉の常譽上人の云、我機分に隨て往生の志をいたすべきなり、我よりも志深く行もたけたるを見ても、これ程ならではないかと思はんはひが事也云々、般舟讚曰、人々有分不可疑已上、きはとは分齊の事なり。

●その中に毎日百遍が身にたへたるもあるべし、千遍が心のおよぶもあるべし、乃至三萬六萬も、機にしたがひてはげみぬんまで也、在家の人はまざるゝなかにはげみぬん程、出家の人はのどかならんにつけてはげみぬん程。

註、念佛往生修行門に云、故上人の仰られさふらひしは、在家のいとまなからん人は一萬二萬など

をも申べし、僧尼などてさまをもかへたらんしるしには三萬六萬などを申べし、いかにも多く申すにすぎたる法門はあるべからず云々、觀念門の記に云、先師語曰、若有人始趣念佛門、請問其數遍之時、上人授云、善導之意、隨機令勸、一萬已上十萬已下、然者在家人之經緣務故、減定可、行一萬已上、若行六萬十萬者不能、左右、出家之人離家業故、相構可、行三萬已上、即爲上品上生業因故也云々、又上人彫善導模下銘云、三萬已上行者可、以爲本尊云々、又稻谷禪尼被行十萬、上人歎云、希代行人也云々、然今學者不、釋數遍、甚違上人遺誡已上。

●又いたづらなるいとまに、わこたらじはやとはおもへども、などやらんわすられんは、ちからなき懈怠の機なれば、それもはげみて思ひいだされんほどなり。

註、それ彌陀悲願の海は深廣にして涯底なし、なんぞ此機をもらし給はんや、定惠上人云、淨土宗の大意は下機の往生を先きとす、三心のをしへも

愚癡をさきとし、念佛のすゝめも下機を本とす、(已上起請)。

●すべて人によりて事ことなるべし、さらにひとつらにはあるべからず。

註、總じて行人の心によりて重々の差異あるべし、一列にはいひがたし、異本の寶物集に云、長きものをば鞅に作り、短きものをば鞅に用ひ、曲るものをば輪になし、直ぐなる物をば幅にさだむ、彌陀如來の人を捨給はぬ事、明王の車を作るがごとし。

●機にしたがひて行の多少はともかくもあれ、いづれもその心ざしの、いつはりなからんまでを身のぶんとすべし。

此いつはりなからんまでと云は、我機分につとまるだけを怠らすつとむるを云ふと見たり、若是を至誠心の義としては前後の文に應せず云々。

●おほかたは不簡行住坐臥、不論時處諸縁と侍れば。

註、往生要集曰、今勸念佛、非是遮餘種々妙行、

唯是男女貴賤、不簡行住坐臥、不論時處諸縁、修之不難、乃至臨終願求往生、得其便宜、不如念佛已上。

●時をきらはす所をいはず縁によらず、たゞたぢゐおきふしにとなふべし。

註、時は晝夜十二時、心のすむ時、にぐる時、身のきよき時不淨なる時也、處はさはがしき處しづかなる處、清淨なる處不淨の處也、縁は縁務なり、公私善惡よろづのいとま中なり、たちゐおきふしは四威儀なり、龍舒淨土文云、念佛法門、人皆可、以通行、不妨一切俗事、在官者不妨職業、在士者不妨修讀、在商賈不妨販賣、在農夫不妨耕種、在婦人不妨女工、在公門不妨事、在上、在僧徒不妨參禪、凡一切所爲皆不相妨、或在晨昏禮念或在忙裏偷閑、每日或念千聲百聲、或念三五百聲、或念十聲、唯要回向發願、往西方、誠能如是決定往生矣已上、淨土詩云、忙裡偷閑亦在人、人生誰滿百年春、送迎畢竟無時了、悲喜交煎逐日新、休念功名惟念佛、但

憂道業勿憂貧、忽然鐵樹花開也、妙轉如來正法輪、已上諦忍律師大光普照集は、此文(淨土文)に本いて廣め述せらるゝ歟、云々。

●念佛に無禮といふ事はあるべからず、いか程も申ぞうやまふにて侍らん。

註、弘決云、西方風俗稱名爲尊、如子之名兼於父母、佛當生彼預設斯儀、使慕德稱名故也、此方風俗避名爲敬、故以所居而顯其人、已上、御名をとなふるが、すなはち禮儀なればなり、たゞし四修の中に恭敬修あり云々、世に放逸のものあり、此詞を證據としてことさらに無禮をいたし一向に敬の心なし、たましく威儀うるはしき人あれば白眼にしてにくみきらふ、これ邪見のはなはだしき也、此抄の前後をよくく見るべし、このみて放逸なれとはあらず。

●さて、もとよりたこたりがちなりし身の、いどど老につかれやまふにくたびれて、しばしたきゐる事だにもかなはずなりぬ、まして威儀をうるはしくする事はまれなり、たゞいつとなく帶ときひ

れふしながら、猶さりとると出離を期する事は、淨土の一門ならで又いづれの教にかあるや。

註、うまれつきの下機はつねに懈怠がちなるに、としもより病もある身は、たゞしく坐して念佛する事もかなはず、床にふし枕につきながら南無阿彌陀佛と申居て、是にても生死を出べしとおもふなるは、たゞ念佛の一門なり、これ身儀の正不正にはよらず大悲の引接による故也、むろの戸をいづるもかたき老が身に、御名よふ外の行ひぞなきに大原の法語に云、佛法修行中、不可有易於此而已、上、白氏文集に云、伯禽之理魯也、變其禮革其俗、三年而政成、太公之理齊也、簡其禮從其俗、五月而政成、周公歎曰、夫平易近人、人必歸之云々、是はよしなき事ながら心にうつりしまま、かきつけ侍りぬ。

●かゝるにつけても、すゝるに本願がかたじけなくたほぬ、念佛がたふとく侍るそとよ。

註、かならず威儀をととのへて申念佛ならば、かかる老病の身にはおもひたれたる往生にてぞあるをもてし、臣君につかふるには忠をもてするがごとく、佛はいつくしみふかくませば、一念をもすてじとちかはれたり、機は忠あるべければ多念にはげめとすゝむるぞかし、機の多念にと思ふ心ざし、佛の一念をもとおぼしめす御志に相應しなば、感應水月にひとしく往生の道、そらに通じ侍りなん已上、愚迷發心集云、或思始日別之所作、兼退屈無企、此故身所堪尙不動之、心所及多有怠之云々、西要鈔云、たゞしかゝる悲願にあまへて心ざしゆるゝかにはあるべからず、位を上品にあてがひて、心行を急にすべきものなり、已上。

●いかにもやすきに事をよするは、かだましがいたす所ならんかして、たしはかりもようにくかりぬべくや、(疑の詞、きつと云つめぬなり)。

註、念佛は易行なり、本願は一念をもすて給はずとて、身のたふるところを怠り、力のたよぶ所をつとめざるは不義のいたり、かだましき心なりと云々、要解云、結處警策而有氣力、蓋亦章法也、解脫上人云、若期後而不動歟、期日是何日哉、將

べきに、こまやかなる大悲の本願なれば、行住坐臥不問時節久近と釋せられてあるこそ、ことに身にあたりてかたじけなくはおぼゆれ、念佛大意に云、彼聖道門はよく清淨にしてその器にたれらん人のつとむべき行なり、懈怠不信にしては中々行せざらんよりも、罪業の因となるかたもありぬべし、念佛門にたいては行住坐臥、ねてもさめても持念するに、そのたより過なくしてその器をきらはず、悉く往生の因となる事疑なし云々、決疑論云、人身難得淨土易生、何以故、五戒不持人天路絶、五戒清淨方得爲人、況以五戒難持、亦無願力攝受、此所謂人身難得也、修淨土者、未必持戒全與不全、但念阿彌陀佛名號、縱有罪業、亦許懺悔、臨命終時、阿彌陀佛、觀音勢至清淨海衆、各有願力、共來接引攝受、此所謂淨土易生也、已上。

●さればとてあなかしこ、かなひぬべからん心を、ゆるしはすぐすべからず。

註、西要抄に云、たとへばきみ臣を愛するには仁

(752) 任性緩慢歟、緩慢其爲何哉、若思愚癡之至者、速可慎愚癡、若讓懈怠之過者、何不誠懈怠已上。

歸命本願鈔講說卷五終

歸命本願鈔講說卷六

(本鈔下卷)

諺註、上の二字は衆生能歸の心、次の二字は佛所歸の本願なり、信佛因縁感應道交の題號なり云々。

●修行者又問ていはく。

此卷にも二番の問答あり、初問答は、易修易往の義を問ふに、若不生者不取正覺の八字を以て、誓願成就必得往生の義を辨じ、次の問答には、大師の正流と不正の邪義とを辨示決擇し玉へる也。

●本願の中の機と心と行と別の仔細なく、我等がつたなき(無戒破戒、煩惱罪業深さを、拙きと云ふ)程にかなへりといふ事、あきらかに承りひらきぬ。

註、上巻と中巻とに本願の文をわけて機と心と行との問答あり、それをよくきゝわけて疑のはれたるなり。

(753) 俚語に云、機とは上巻に明す、十方衆生善惡衆機也、不簡擇大悲本願申必往生、別の仔細なしと云

をさす、心とは安心なり、委く云へば三心なり、要をとれば助け玉への一念也と、中巻に委く明し玉ひ、別の仔細なきをさす、行とは中巻に乃至十念の一句を起行と云、上一形より下臨終の十念一念まで皆悉く往生して、別の仔細なしと示し玉ふをさす。

●このふんにて。

註、つたなき我身の分際を改めず生れ付のまゝにて。

●往生をとげん事は、若不生者不取正覺と誓ひ給ふ、佛の願力に乗するゆゑ也と、の給はせつるいはれは、さからとたほゆるやうなれども。

註、さからとは、さるからといふ詞なるべし、さうある故とまではたもはるゝなり、言釋には、さながらのなを略したるかといひ、要解には、さかして、げにさぞといふ意とあり、私に考るに、さるからも、さながらも、さかしも、皆思ひゆるす詞なれば通ずる也云々。

●なをひしとも心ぬとかれ侍らぬといへば。

(754)

註、本願のいはれ大かたにはこゝろわたるやうにて、**いまだ、しかと手にとりたるやうには、おしらすと也、**とかれぬとは、意解せぬ也、ひし、言釋に云、物の音にひしと鳴てふは古へよりありて、詞にいひしはわづれと(著聞集古事談、徒然草等)後世常にいふを思へば、猶古言にもあり來りしなるべし、さて菱の子は押平たる如き形より、ひしといふか、ひしげたるといふも、菱よりいふと聞ゆ、かくて物を壓平しておしつめたる如く極りたる事を、ひしとしていふならん、(要解、諺註に、字を當てたるはいかにぞや)私に云、和語を解するに字を當てたるはいかんなれども、**必至必死等の義は今に違ふことなし。**●老僧のいはく、人ごとにみなそのしきにて侍るぞよと。註、その程生でにわもひてうちすぐるが、世の風俗と見ゆるなり。●凡夫の往生は本願に乗する故とまでは、たれしもみ、なれてぞ侍らんれども、まさしく願に乗

すとはいかやうなるすぢといふ事を、思ひときたるはまれならんかし。註、此下に引れたる孟宗が事、香釣の魚のたとへをよくよみて、本願に乗すといふことわりをしるべし、是がこの鈔の肝要なり、すぢとは、理の字義、理のすぢ道なり。●**偈語(取意)本願に乗すと云ふに二節あり、一には能乘彌陀大悲本願の御構、孟宗の喩是れ也、二には所乘本願に歸命し易き義、香釣の喩是れ也**云々されば題號、歸命本願の四字を、孟宗香釣の二喩にて結歸せしめ玉ふ、是を則他方本願の不思議とは習ひ究る也、是がこの鈔の肝要所詮甚深妙處也と可知。●よろづたゞ人の心のまことなき故に、しりがほにだにもなりぬればたりぬと思て、さしもとひ究めんとはせざんめるを。註、總じて人の心まことすくなく、萬事に付て偽り多き故、無常の事も本願の事もしりがほにして、心にはたしかにしらす、されば本願もよそよ

(755)

そしく念佛もまめやかならずして、一生むなくすぎなんあさましき事也。しりがほのかほは、字書に何々の貌と云意也とありて、凡似よりて眞にあらざるを云と見たり、慈鎮和尚のしりがほにしてしらのかな、西行のこち顔など皆其意なり。●**偈語(取意)慈鎮和尚の歌に、「通るべき道はさすがにあるものを、しらはやとだに人のわもはぬ」と其道を探ねだにすれば知れるぞと也、**用事ありて何方へも行かんと欲する者は、其道を探ね問也爾るに往生の道を探ね問はぬは死を忘れたる也、病ある者は必醫を尋ね藥を服用するが如し、されば釋尊も往昔阿彌陀佛に千年給事の有様を、提婆品に、奉事經於千歳、爲於法故、精勤給仕、令無所乏云々、最勝仙人善財等云々。註、修行淨土法門後序(侍郎英仲珪)曰、世之人於西方說、情不能知比々皆是、知矣而不信、信矣而不修、修不能力者、十亦常八九焉云々、決定往生集に云、稱念彌陀之行愚智共從、良以契時

稱機故耳、然或知不趣、或趣而莫進、即如子之流也、豈不可痛乎已上。●かくねんどろにたづね給ふこそ、げに往生の心ざしもおはするにこそとありがたく覺ゆれ。註、とふ事のねんどろなるは、道心のあるしるしなれば殊勝なり、新著聞崇行篇(托、事實卷五求法の部)●**さればいか程もくはしくきこゆべし。**志しありて法を求人に、我知れる法を傳へざれば惜法の罪とて大罪なる也、盤特尊者の愚なりし、叡山の或師無手鬼となりし等、皆惜法罪報也、可怖而說法意樂、身命財の三つを抛て説くべしと也。●**偈語に云、此下誓願を釋するに三科あり、初總釋**●まづ若不生者不取正覺とは、かゝるつたなきものなりとも、南無阿彌陀佛と、なへばかならず我國に生せしめんとねがふ、(これは願なり)この心ざしのちからむなくして、もし生るまじくは佛にならじとなり、(これは御身の上にか引かけ誓ひまたふ)次、別釋

(756)

●これにつきて、そのつたなきものなりとも、念佛せばかまへて生れしめんとながむを願とはいひ、生るまじくば佛にならじとちかごとし給を誓とは申なり。

註、上卷の總了箇に佛につきて誓願あるべしといふ是なり、願文をわけて誓と願とをしめすなり、天台梵網疏曰、菩薩常應願求勝事緣心善境、將來因此尅遂、若不發願求善之心難遂、乃至誓是必固之心、願中之勇烈意也、已上、發隱曰、期其志而必到者、願爲之先導也、堅其願而不退者、誓爲之後驅也、故疏稱誓爲願中勇烈意、已上、車を曳は願の如く、押すは誓の如云々。后、誓と願との細釋

●いまこの誓願は、彌陀如來いまだ佛になりたまはざりしいにしへ、法藏比丘と申しとき。

註、此事は無量壽經にあり、過去久遠劫に世自在王佛と申佛出世まします、其時に一人の國王あり、佛の説法をききて比丘となり給へり、これを法藏と號せり、頌をときて佛に申て、一切衆生の

爲に淨土の行を修せん事をもとめ、五劫の間思惟して、諸佛にこゝたる大慈大悲の誓願をかこし玉へり、これを四十八願といふ、その中の第十八は念佛往生の願なり、其後兆載永劫の修行をつみ、十劫已前に成佛して極樂淨土の主となり給ふを、阿彌陀如來と申也、梵語には曇摩迦といひ、此には法藏といふ、玄一大經疏云、法藏者出家名、所聞法教護持不失、故名法藏、已上、所聞法教護持不失故、諸佛超世願王となり玉へり、いかなる尊教を聞くとも護持せずは何の益かあらん、爾れば人々今所聞の二尊示現尊教、善導元祖兩大師の御教示の徹底、本願口稱の二教を護持して失せず、無上の大果を得べき也云々。

●一切衆生を平等にあらはれみ給ふ御慈悲のあまり。

註、總じては一切善惡の凡夫、ことには愚癡怯弱の下機までも、修しやすき往生の業をさだめんとし給ふに、諸餘の萬行はみなたやすからず、これによりて一切衆生をして行じやすからしめ、あま

ねく往生せしめんとあはれみ給ふ、むらなき御慈悲にて、念佛往生の願をかこし給へり、選擇集云、然則彌陀如來、法藏比丘之昔、被催平等慈悲、普爲攝於一切、不以造像起塔等諸行爲往生本願、唯以稱名念佛一行爲其本願也、已上、淨土十勝論曰、夫吾彌陀如來、法藏菩薩之古、住極愛一子地、被催平等無偏之大慈大悲、普爲攝益三學分外之一切衆生、巧發起十念往生之別願、已上

●わがねがひのまゝに、衆生往生すべくばわれもほとけにならん、(御名をとらふるものを、來迎し給はんとのねがひなり)その生るゝ事かなふまじくば、たいもろともにしづみこそせめ、(衆生とともに地獄の薪となりて、いつまでも佛にはなり給ふまじとの、御ちかひなり)衆生をすて、我ひとり佛にならん事、さらにのぞむ所にあらず。註、さてくかやうに御身にかへておぼしめしけん、御心ざしのかたじけなき、あやしのわれらまでも、すゝろになみたをもよほし侍る、決疑鈔云、問誓願意何、答憬興云、汎言願者即攝求義、所

謂設我得佛等、又言誓者即邀制義、不取正覺是也、諸願若不滿終不成佛、故假使願不滿、而得成者誓終不取、故諸餘諸願皆有此二應如理思矣、已上、

●あやまで。

註に、御心には決定とおぼしながら、御詞にはかく不定にのたまへり、これ因位謙退の御詞也、次に望西師、設我得佛設字、因位謙退卑下詞と云釋を引證せられたり、(要解にはもしやといふ義なり、御卑下の詞なりとあり)洲曾て此註は文意に叶はず、設字の因位卑下は例し難し、これは決してあやまらでの略辯ならんと思ひしかど、もとより和字に暗らければ、正否いかあらんと決心ならざりしに、後に言釋を見るに、あやまらでのちを略したる也、(他にもかくさまに略す事、物語ふみなどに多し)、とあれば、爰に於て決心云々。

●衆生だにもたすかるべくば、假令身止諸苦毒中、我行精進忍終不悔とまで。

註、これは大經の文なり、衆生だにもたすかる事

(761)

(763)
 ならば、たとひ御身はいかなる苦痛を分け給ふとも、一念もくやしとおぼしめすまじ、心よくたへしのびて益々難行苦行し玉はんとなり、字彙云、毒は音は續、害也痛也苦也也上、法事譜曰、賢愚經云、一々諸佛從初發意終至菩提、專心求法不顧身財、悲智雙行曾無退念、或可逢人逼試、皮肉分張(第一卷、羅提波羅因緣品、忍辱仙人之緣)或自割身而延、鶴命(雜譬喻經之說)或釘千頭以求法(第五卷、月光王頭施緣品之說)或釘千釘而求四句(雜譬喻經之說)、或刺身血以夜叉(第二卷、慈力王血施緣品之說)或捨妻子以充羅刹(雜譬喻經、妙色王之緣)或設慈悲方便(化作禽魚、用濟蒼生免其飢難(第七卷、設頭羅健寧緣品之說)或作金毛獅子(以上獵師(第十三卷、賢誓師子緣品之說、亦第三卷、鋸陀身施緣品之說)或作白象、抽牙爲求菩提、而奉施(大論九十三に出)或觀怨家、由如赤子、或視外道、比若親兒(云々、(記之上)已下)此經文釋尊求法深念、難行苦行說相なるをひとしめて、彌陀

兆載永劫苦修難行し玉へるを知らしむる也。
 ●身にかへてかなしみおぼしめされし程に、(右の經文のごとく)さしも一大事の正覺をかけたるかひ給へる本願なり。
 註、惣じて菩薩多劫の御修行は、たゞ此正覺をとり給んが爲也、正覺とは成佛の事也、これが菩薩の御身の上には一大事なり(此一大事の正覺を、我等が往生にかけて誓ひ玉へる大悲、そも忽諸に思ふべきことならんや云々)。
 往生捨因曰、誠彌陀願非少緣悲願、不勝大悲立不可得願、如彼藥師立得菩提時、不誓不取正覺、又如千手誓不取正覺、猶未證得菩提、而我法藏比丘、恐誓不取正覺、成佛以來於今十劫、隨從十方生彼國者、猶如駛雨、雖不可得願、今者已滿足、是幾許修行之功乎、是幾許大悲之力乎、誠以不可思議々々々也也上。
 俚語、如是大慈大悲に堪かねて、視若自己の本願を建立し玉ふ、爾るに上は行者用心、子の親を慕ふ如くせば父子の道、天然にして決定して回り逢

ふべし、昔し橋の逸勢の娘妙沖(托、事實卷八)又新學比丘のこと、又白河院天下殺生禁斷の時、孝僧のこと「親と子のめぐりあふみの浦なるに、などであはづの名にや立らん」楞嚴勢至圓通章、思ひ合すべし、母の子を思ふ如く子として親を思ふときは、世々を經ても違遠せず、逃逝するときは云何ともすることなし云々。
 ●されば念佛せんもの生せしめんといふ御ねがひかなふべくば、その御ちかごとくにむくひてたのづから佛になりたまはんすらん、(念佛するものを生れしめんとして、はげみ給ふ願行なれば、その純熟する時自然に成佛し給ふなり)御ねがひむなしくして、我等念佛すともうまるまじくば、又この御ちかごとくにむくひて、よも佛にはなり給はじなれば。
 註、そもく、不取正覺の御ちかひは、人のすゝめたてまつりし事にあらず、あなたの大慈心よりみづからたてたまへる、御誓ひなればなり。
 ●法藏比丘の成佛が我が往生せんするしるしに

てはあるべき也。
 註、淨土十勝論(三學無分勝)曰、依之而觀之者、六合八極一切衆生往生極樂、於如來初成之時、而決定之矣、彌陀覺王成正覺、由異生即詣之理、而尅果之焉、行者染指自量矣、「春といへば必ず花の咲ものを、唯任せはや南無阿彌陀佛(貞極上人)爾れば一切之乎者也分別を取り捨、口稱相續云々。
 ●これによりて善導大師は(これは往生禮讚の文なり)若我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺、彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生と釋して。
 此御釋は彌陀義一百卷の中、第十八願の釋文なりとぞ、往時鎮西上人彌陀義あることを聞き給ひ、懇望の餘り御弟子白蓮社を唐土(宋世)へつかはし玉へども、天子の寶庫に納りて他見を許さず、詮なく歸朝ありしとなん、されども十八王本願の御釋は、禮讚の後序に入である故、本朝に流布せり歡喜に堪へたり云々。

(79)

註、上人云、此文をつねに口にもとなへ、心にも
 うかべ眼にもあてよ、此文は四十八願の眼なり肝
 なり神なり、(眼は一身にありて一大事の物なり、
 故に肝要なるを眼目なりと云ふ、肝は氣の元の略
 なるべしと云ふ(和訓栞)、云ふべきことを云はず、
 すべきことを得せざるを肝なしと云ふ、信長戦士
 の武略を感じて、肝に毛生たる者なりと云へると
 あり、蒲生氏の家臣に此事あり、新著聞集に見ゆ
 たり、又唐土三國の時、蜀大將姜維が肝は斗の如
 くなりしと云々、神は魂魄又靈を云ふ、玉火の義、
 しは助語なり(和訓栞)、されば臨終近き病人の魂
 火(俗に人だまと云ふ)ぬけ出るとまゝあり、和泉
 式部が歌に「物おもへば洋の螢も我身より、あく
 がれ出したまかごぞ見る」又無性になりしを魂ぬ
 けしたと云ふ、魂結びの義は伊勢物語の歌に見
 ゆ、魂よばひの法徒然艸に見ゆ、鎮魂祭のこと、
 令義解に、召三復離遊之魂魄、令鎮身體之中府
 等と見ゆたり云々、されば人の一身にありては、眼
 肝神は皆最要の物也、是れを譬として四十八願中

にても此十八願の釋文は、要中の要、勝中の最勝
 たることを顯し玉へるなり、餘の四十七願は眷屬
 の願、此十八は王本願、已に十方三世の諸佛に捨
 られたる、五障三從の女人十惡破戒の我等を、僅
 に御名よぶ斗を因として、順次に往生成佛の大果
 を與へ給ふの本願なれば、實に眼なり肝なり神な
 り、要中の最要、勝中の最勝なること信すべし、
 可貴云々、四十八字にむすびたる事は此故なり、
 譬へば此の十八願は大綱の如く、餘の四十七願は
 綱目の如し、大綱を曳けば綱目はひとりてによる
 如く、此唯稱本願にて往生遂れば、初め無三惡趣
 の利益より、終り得三法忍の利益迄悉く與へ給ふ、
 故に導師は、一々願言稱我名號と釋し玉へり、今
 四十八字に結び給へることは、此の深意を顯し玉
 ふぞとなり。
 又云、信じても信すべきは必得往生の文なり(和
 語灯六三三)黒田の聖人に遣し玉ふ小消息の結文な
 り)又云、此文に至心信樂欲生我國の安心を略し
 給ふ事は、衆生稱念必得往生としりぬれば、自然

(80)

に三心を具足する故に、此理をあらはさんが爲に、
 略し玉へる也、(出三進集、語灯五三三)長樂寺の
 隆寛律師は、常に此文をよみて往生の肝心此文に
 あるべし、文字又四十八まさしく本願の數にあた
 り、定て深き心あるべしとて、常の詞には衆生
 稱念といふ、われあに其人にあらざらんや、必得
 往生といへり、ひとり何ぞかのむかへにもれんと
 て、感涙はなはだしかりき、(御傳四十四丁)
 導師の御釋四十八字に結び給へるを、大師は深義
 を釋成し、律師は定めて深き心あるべしと仰信し
 玉ふ、爾るに一向の邪徒、在世成佛の世字淺近な
 りとて、是を除きて四十七字となす、(邪徒印板の
 選擇案には、世の字を箱に入れて除けり、世字は彌
 陀佛極樂世界に現在し玉ふ、報身常住の徳を顯は
 す至て肝要の文字なり)若彼れが邪言の如くなら
 ば、彌陀尊の師たる世自在王佛は淺近佛なりや、觀
 世音菩薩は淺近菩薩なりや、極樂世界、香積世界、
 無勝莊嚴世界等の一切の諸佛の淨土は、淺近なる
 不淨世界なりや、是則別なし、一字を除きて導師

深妙の御釋を損害し、誦する信者の利益を奪はん
 爲の獅子心中の蟲の邪謀、天魔破句の人を生死の
 苦海に繋がんとする邪構なり、可怖可悲云々、從
 來の如く、元祖大師此御釋を四十八願の眼なり肝
 なり神なりと讚じ玉へるが、此御釋の中にて殊更
 に其要たるは何れの句ぞと云に、衆生稱念必得往
 生の二句、要中の亦要也、故に大師信じても信すべ
 きは必得往生の文也との玉へり、是則(已下俚語)
 三佛隨自意の本懷なれば也、されば釋尊は、如是
 大願誠諦不虛超出世間と、先本願を讚嘆して、正
 しく念佛往生を勧め玉ふときは三根共一向專念と
 勸進して、終に附屬に至ては三經共に唯稱名を多
 聞第一の阿難と、(觀經)智慧第一の舍利弗と(阿彌
 陀經)當來の教主彌勒菩薩(大經)に對して、唯稱念
 佛を附屬し玉ひぬ、又六方恒沙の諸佛は、執持名
 號の一行に舒舌三千の證誠あり、故に法事讚には
 衆生稱念必得生證誠斯事と釋し玉へり、されば唯
 稱は三佛隨自の法門、釋尊出世の本懷、兩祖開宗
 の知見也、爰を以て記主禪師は、萬行の中口稱の

(32)

一行特り佛願に願すとは判じ玉ふ、三經の本意、三佛の本懐、兩祖の懐抱、宗の元由、唯稱往生の一事に決すれば、眼也肝也神也との玉へり。

●かの佛いま現に成佛し給ひぬ、まさに知るべし、うまるゝまじくば正覺とらじとたて給ひしちかごこのおもさにかへて、うまれしめんとおぼしめす御ねがひむなしからずして、われら稱念せばかならず往生すべしといふ事をこの給へり。

註、これまで右の釋文の和解也、扶木抄、當知本誓重願不虛の心を、中務卿親王「いつはりのあるをならひのこの葉も、ちかふになればたのみやはせぬ」必といふ一文字の誓をも、疑ふ人はうまれざりけり。

●されば衆生の往生すべきによりて佛は正覺をとり、佛の正覺なり給ふによりて衆生は往生すべきなり。

註、上人は云、いかなる彌陀が十念の悲願をおこして、十方の衆生を攝取し給ふ、いかなる我らが六字の名號をとなへて、三輩の往生をこげざらん、

永劫の修行はこれたれが爲ぞ、未來の衆生に譲り給ふ超世の悲願はまた何の料ぞ、心ざしを末法の我等にをくり給ふ、我等もし往生をこぐべからずば佛豈正覺をなり給ふべしや、我等また往生とげまじや、我等が往生は佛の正覺により、佛の正覺は我等が往生による、若不生者のちかひこれをもてしり、不取正覺の詞かぎりあるをや已上、(御傳三十二の卷。)

●この故に念佛申さんものゝ往生せんする事は、はやすでに本願成就して正覺なり給ひし時なり、ゆるぎなくさだまりてしかば。

註、はやとはむかしの事也、すでにといふもすぎさりし詞なり、十劫已前彌陀成佛の時をさすなり、ゆるぎなくとは少しも變改なく、うちきはまりたる義也、十因云、設日月輪落地、實彌陀願不虛、只取仰信作往生意、てしかば、てありしかばの約なり。

●我等をみちびき給ふべき佛の御方便は、もとよりしたゝめまうけられたるを。

註、いかなる惡人なりとも、わづかにたすけたま

へとたもひ、南無阿彌陀佛と、なへば、必往生すべき支度をは、法藏比丘の昔かねてもよほされ

て、つひに成佛したまひし後は、たしかに其力をまうけ給ひつれば、我らが往生すべきことよりは十劫已前より、とくさだめられたる事なり、觀

經云、諸佛如來有異方便、已上、止觀云、方便名善巧、已上、十勝論曰、夫伏犧造八卦、神農造五穀、貨狄造舟、(黃帝臣也)維文造杵臼、(黃帝臣也)蚩尤造兵、(炎帝時臣)黃帝造冠冕、容成造曆

(黃帝臣也)岐伯造醫、(黃帝臣也)隸道造數、(黃帝臣也)臯陶造獄、(舜時臣也)稷仲造軍、伯益造

井、蒙恬造筆、蔡倫造紙、吾彌陀世尊始造六八大願之巨船、普絕三學分外之群類矣、三學分

外の機を攝し玉ふは、唯吾彌陀尊一佛にして諸佛に此ことあることなし、善巧中の最善巧、故に起信論には勝方便と嘆じ玉へり云々

(79)

●たい衆生のかたよりあやぶみて。

註、あやぶみてとは本願の由來をしらぬ故、身を

卑下してあやうがるなり、それも道理なり、世の人多くは此度の生にはじめて本願にあへり、たと

ひ過去にてきゝしものも生をへだて、わすれたるが故に、事あたらしうたがひあやしむ也、見る

ところすくなければ、あやしむ所多しといへり、たゞたもひきりて佛に任すべし、いさゝかもあやぶむ事なかれ、俚語に、彼惡虎に追はれたる樵夫

の一聲の念佛、多劫を経て、も其因不朽終に佛弟子となれり、片言念佛功德如此、況や撰擇本願の勸めを聽受し、願生極樂の心を以て分々に念佛

相續せん人は、決定往生と思ひ伏すべき也。●身を本願にまかせかねたる心のなまざかしさにこそ。

註、松蔭の顯性房の云、眞實に此身を佛にまかせたてまつる心をは、人ごとにおこさる也云々、さればとかくの吟味なく、たゞ愚痴になりて佛に任せ奉るべし、なまざかしき心ある人はみづからあ

だにて侍るぞかし、古徳の云、露計も心さばくりせんほどは、他方に歸したりと思ふべからず。

曰上、大公望妻不貞(托、事實卷二)

私云、生は熟に對して害あること、生煮のもの、腹を損し、生兵法の大疵をうけ、生學生の高慢に墮し、生悟りの邪見を發し、なま公等、なま女房なま侍、なま心、なま覺等よきことに云るは一つもなし云々、今もさかしさに熟したらば、不簡大悲の本願をはや已に成し玉へば、申せば必往生と身を本願に打任すべきに、我妄念強ければと生ざかしさを出して往生を疑ひ、罪業多ければと卑下の心を生じ、是身より出る錆、なまさかしさの害にこそ云々。

●けふまで往生もといこほりぬれ。

註、無始生死よりこのかた、さすが念佛をも修しつらめども、とかくのかしこだてにて身を本願にまかせ得ざりし故、此生まで往生が延引したる也、經に易往而無人とあるもかゝる故なるべし、蓮宗寶鑑に云、君看淨土恒沙佛、盡是當年正信人曰上。●いまよりにても心わかつたのみをかけば、やがて本願には乗すべし。

註、露も心を置すうちたのむ一念がおければ、その時すなはち本願に乗するなり、此上卷に云、さしも佛のかたよりは、いかさまならんをもすてじとおぼしめされたるを、俚語に、いかさまならんをもとは世間十惡罪人よりも一段すぐれたる惡人を云ふなるべし、女は傾城遊女の類、男は野郎殺生人等の類に至る迄、我身わろしと知りて助け玉へと打頼む心にて稱名する人は、捨じと思召して十方衆生と誓ひ玉ふ、然るを手前から、こなたより罪ある身なればと、なまさかしき心の鬼こそ中々身のあだにては侍れ、唯ひたすらにたのましければ、よろづのことがゆるし給ひなんかし、おもはずに心をきばみたるは此世ざまにもにくき事なり、いたくわるからんにつけてこそ、いといたすけ給へとは思ふべけれ曰上。

「あさましとわぶる計を手向にて、唱ふる外の心あらじな」
本願にだにも乗じなば又命終らん時かの國に生せん事、いさゝかも疑あるべからず。

註、劉子曰、載石於舟、置之於江湖、則披風截波汎、颶長澗、非石質輕性浮、所託浮也曰上、十因云、又如善惡法、遇勝緣力、即非常途、謂肉眼不見障外、依法華功、能見大千界、眼識唯緣色塵、依威德定、亦緣法處色、此等非自力、是勝緣力也、准之應、知行業雖疎、乘彌陀願、十念得往、易往無人斯之謂焉曰上、是より下へかけて見るべし。
(凡夫の肉眼には屏風障子の外をも見ざれども、法華修行の功德に依て肉眼清淨になりて、三千大千世界の内外をも見、下は無間の底上は有頂天迄見之也、されば傳教大師は日本に有乍ら、天竺の祇園精舎の焼るを見、智證大師歸朝の船中にて唐土青龍寺の火災を見、火炎制止の印を結びて彼火を滅し玉へる也云々、法處色者定中所緣境色也、今其一を云は、日觀々成の日輪是法處色也、經、閉目開目皆令明了、眼識に法處色を見るの義顯然たり、定記一十七柔抄三十五丁(三十)可見)。

●それにつきては、本願に乗じて往生すといふことばかりをこそ、よくよく心得わくべけれ。

是より下が正しく本願に乗する所以を述べて安心を決定せしむるに、孟宗吞釣の譬を擧て示し玉ふ也、(此本願に乗する姿を示し玉ふと云ふを忘るべからず云々、孟宗吞釣の下は小松溪義柳上人の講本によりて記す、但し諸所添加省略はあり云々)是が念佛の行者の肝要の法門也、念佛者の安心の所詮は申せば往くと落つく迄也、申せば何とて往くぞ本願に乗る故也、其本願に乗する姿はと云ふにそこを得心するがこれから也、(聞て彌々本願に乗すると云ふことを決心すべし)。
此下に大科を分つに五あり、初に總釋、次に譬説、次譬説の評釋、次に法譬合釋、後に結勸也。
今此文は總釋也、先此文の意は、是より上に人の往生を疑ふは本願に乗する筋道を知らざる故也、本願にだに乗する道理を知れば、稱ふる者は皆往生と云ふこと明になる也と示し玉へり故に今上をうけて、それにつきては乃至心得わくべけれ、心得分けて安心決着すべしと也。

●たとへば孟宗といひしもの、おやは、たかなをあいしけるなるべし。

(766)

たかかなどは竹の子也、和字の物にたかかなども、
 たかうなとも、たかなともあり、
 大科五つの中、第二の譬説と云ふ段也、此譬説甚深
 にして一旦に辨じ難し、(孟宗の孝行のこと計なれ
 ばむつかしきことなけれども、爰に引合せ玉ふに
 は一字々々に深きことあるればなり)、されば今席
 は先譬説の大意を文を離れて辨すべし云々。
 註、日記故事大全を引て云、晋孟宗(字恭武)少孤
 (幼き時父に離れ、母の手にて育られたり)母老疾
 篤、(其母老て疾危し、孟宗驚き看病心を盡す)冬月
 思、笋煮羹食、(凡天地の物を生ずるに其時あり、
 爾るに冬笋を求む、非時何得るとあらん)宗無計
 可得、乃往竹林中、抱竹而泣、(冬笋のあるべき
 とは思はねども、笋なければ母の望みを叶へず、爾
 も其命危し、どうぞ得たいと云ふ孝心より、竹數
 の中へ往きて、せん方なさに竹に抱きつきて、笋
 ほしひと泣いてもとめたるなり)孝感天地、(一切に
 求むる孟宗が孝心、天地も是を感應ありて)須臾
 地裂生笋數莖、持歸作羹奉母、食畢疾癒、(雪

ふりつみし數中に笋の生すべき理はなけれども、
 孟宗が孝心に依て天地も是を感じ、雪つんぎきて
 數莖の笋生ひ出し故、孟宗悦び堪へず、直に是を
 持歸りて羹に作りて母に與へられたれば、危急に
 及びし疾ひ忽ちに全快せられたりとなん、依て古
 人此ことを感心して作りたる詩に云、涙泪湖風
 寒、蕭々竹數竿、須臾冬笋出、天意報平安、
 猶此事實は楚國先賢傳にも出、委くは吳志第三の
 卷にあり、別して近くは世に廣く行はる、二十
 四孝の隨一なれば誰も知ること云々、(因に云、此
 廿四孝の發りは、昔し大内太郎と云ふ者、或子に
 孝行を教ん爲に、唐土にて孝行なりし人の繪を、
 六枚屏風二雙にか、せり、因て二十四人になれり
 云々、此人物好き有て、桐に鳳凰の模様など織らせ
 し故、世にこれを大内切と云ふ云々、羣書拾唾五丁
 古今言孝者有、此二十四人、連名大内依之、
 しめたるならん、)さて此事實を本願に譬へ玉ふ大
 意は、先孟宗を彌陀如來に譬へ、笋を衆生に譬ふ
 る也、其所以は孟宗は一人也、(是彌陀の別願に比

(767)

し)笋は多し、(是十方衆生に譬ふるなり)寒中に笋
 の生せしを我等が往生に譬ふる也、彼寒中の笋に
 生ひ出んと云ふ心もなく、又孟宗に念じて呉れい
 と頼む意もなければ、生ひ出たは是孟宗が願ひ
 にて、其念力に引出されたる也、我々元と往生の
 望みなし、故に彌陀如來本願を立玉ひて、我等を
 助け給へと御願ひ申せしこともなき也、然れば往
 生すまじき者の往生するは、是れ彌陀如來の御願
 にて、其深重の願力に引發されたる也、云何か引
 起されたる謂く彌陀如來十八念佛往生の本願を立
 玉ふ前に於て思惟し玉ふには、十方衆生念佛た
 唱ふれば往生すると云ふ願を立つることも、一切衆
 生是を聞得ざれば其詮なし、其一切衆生に是を知
 らするには諸佛に稱揚と云ふて譽られざれば知ら
 ぬと云ふよりして、第十七の願に我願の超勝する
 ことを譽められずば正覺を取らじと、諸佛稱揚の
 願を立玉へり、是則我等が今聞知りて唱ふるも釋
 尊の開示による、其釋尊の開示も元とは彌陀如來
 の立玉へる十七の願益なれば、我等が唱へて往生
 するも其本は彌陀大悲の願力に引發されたる道理

應知、(今時邪義の所立に念佛申すは自力、一念
 歸命の念もあなたからなと云ふ類に、混せぬやう
 心をとめて可聽云々)元より寒中の笋に雪をはら
 つてはゆべき力なし、孟宗が切つに願ふ願力では
 いたる如く、今時末法寒中の衆生自力で煩惱の雪
 霜をはらつて往生すべき力なし、偏に彌陀のせ
 つなる願力で往生するなり、(此處を得心さへすれ
 ば、本願に乗ずる決定往生の行者となるなり云々)
 さて又此孟宗が泣て願ひし數の中に、定めて他の
 草木種々あるべし、(うど、わらび、ふき、みつ
 葉等)爾れども生ひ出でず、孟宗の願ひは専ら笋
 にありて餘の草木は願ひものに非ざる故なり、さ
 れば又笋であればたとひ粟粒ほどあるものはゆるな
 り、大小善惡の差別なく笋でさへあれば生る道理
 は、孟宗が心に簡別なきゆゑ也、今も又如此彌陀
 如來の本願は専ら稱名なる故餘行では生れ難く、
 念佛なれば機に善惡の簡びなく行に多少のわかち
 なく、唱へてだにあれば生る、道理也、十方衆生
 乃至十念、本願に簡別なき故也、(卑下怯退の心を

(768)

離れて、決生の安心を立べし云々)又孟宗が筍を持
 歸て母にすゝむるや否、母の病のなほりに妙な
 る勸進ある也、總じて筍を藥喰に用ふるとなし、
 竹漚を用ゆるとはあれども筍には所見なし、藥で
 なければこそ醫師の用ひぬのみか禁むる也、其上
 病人の好むは藥に非ざる故也、(應聲虫を煩ふ人
 に、本草をよませしに、貝母とよむを答へざりし
 故、貝母を用ひて平愈せしことあり云々)然るに孟
 宗が母の用ひしには疾ひ癒たり、是何故なれば此
 筍は通塗の筍でなく天地感應の筍なる故也、いか
 計雪の下なる筍の、親思ふ人の心しりけん今も
 其如く、佛の名號を唱へた計で十惡五逆の病が癒
 て往生することならば、釋尊諸佛の名號をも勸め
 玉ふべけれども其ことなし、尤も地藏の名號を唱
 へて五無間業を除くとは(地藏本願經)說玉へど
 も、往生の決定業とは說玉はず、五逆の十念一念
 迄往生の決定業と說玉へば、彌陀の本願念佛一行
 に局る也、是何故なれば此名號は諸佛通塗の名號
 に非ず、法藏比丘無極の大悲、天地感動の名號故

なり、其所以は阿彌陀如來四十八願を建畢て重ね
 て四の誓を建玉ふ、文に曰、斯願若剎果、大千應
 感動、虚空諸天人、當兩珍妙華と誓ひ玉へば、
 空中讚言、決定必成、無上正覺、已上、是則誰ともな
 く自然の讚言也、天感じて華ふり降り地感じて震
 ひ動き、實に天地一枚になつて感動したる大願の
 名號也、如此名號なる故に一念彌陀佛、即滅無
 量罪の強縁に引立られて往生遂るなり、孟宗の念
 力筍を生ずる寒中なれども疑なし、況や彌陀如來
 の念願力に引立られて我等往生遂ざらんや、專修
 念佛の筍とさへなれば、いやでも極樂に生ひ出る
 也、我等が往生と云ふは不思議なれども、彌陀如
 來の本願力に引立らるゝと思へば疑はしきこと微
 塵もなし、丈夫に落つき本願に打任せて可唱、孟
 宗が念せし數の中にあり合せたれば、念力に引立
 らるゝ故いやでも筍のはへ出ねばならぬ如く、今
 日南無阿彌陀佛と唱れば惡念を發し惡業計作つて
 居る我々も、本願に引立らるゝ故往生遂ること明
 白也、故に釋尊も此名號に限ては不簡擇とて、人

(769)

ゑらびなく誰か唱へても往生するとは說玉ひたる
 也、されども心得違ふて惡人を捨玉はずと云ふに
 ほこりて、一念義の如く、惡無過の邪見に落入て
 は往生にもはづるゝとなれば、止惡用心の正見を
 たつべし云々、是をも譬へば彼惡無過のものが本願
 にもれて往生得遂ぬは、朽たる竹の根よりは、いか
 なる孟宗の念力でも筍を生ずるを得ざるが如し
 (佛方も加すべきに加すと云々)正見の機の本願に
 引立られて往生遂るは、正見の竹の根朽すして微
 細なれ其願生の心の芽しあれば、惡も止まらず行
 もはかしくしからねども、皆願力に引立られて往
 生遂るの道理、譬へに合せて領納すべし、又一つ
 心を付て置かば、彼筍の方には雪中に生出でゝ名
 を揚やうと云ふ心はなけれども、孟宗に念じ出さ
 れたれば筍の名も廣く知られ、千載の末迄名を殘
 し、遠く唐土の筍日本の人に迄知らるゝ也、(西晋
 乙酉より今文政に至る中間、凡千五百年に垂んと
 す云々)我人も亦其如く、凡夫の至て短い心なれ
 ば無上菩提を悟らふと云ふ程の、たくましひ上求

の心もなかりしに、つい唯申た念佛が本願に相應
 して、阿彌陀如來の願力に引立られて往生遂れ
 ば、極樂は早作佛國速に成佛をとなへる處なれば、
 天上天下唯我獨尊の名を、萬天にあぐるゝこと遠か
 らぬ内にあるなり、斯く理をせめて見れば、實に
 佛任に專修念佛する身の上ほど末頼もしいことは
 なければ、人々此所に心をとめて專修云々、先是れ
 で大意を辨し畢る。
 さて此所に於て孝徳の至れること可知、孟宗が願
 ひも親の爲故叶ひし也、他の爲にては成就はせぬ
 也云々、紫笛禪人孟宗の贊「孝行の深き徳なり不孝
 では、ほつても出ぬ雪の筍」凡孝の一事は三教一
 致に肝要とすゝむる所也、先佛教にては、孝名爲戒
 是れ梵網の所說、最初成道の始より終り涅槃に至
 る迄一代盛んなり、就中其一を云はば、大藏一覽
 第四彌勒勸孝偈云、堂上有佛二尊、懷憫世人不
 識、不用金彩粧成、非是檀香彫刻、只看現世爺
 孃、便是釋迦彌勒已上、次に神道を云はば、諸神孝
 を貴び給ふ中に、今其一を擧げ、龍田明神託宣云、

人の兩親は則これ内宮外宮の神明なり、汝等よく是につかへずして、何ぞ外に祈り求んや、(三嶋明神の託宣、大に同、共に和論語に出)故に遊行の六世、尊任僧正駿州富士郡今泉村中村五郎右衛門が父母の像贊に、「あふげ唯うつし繪ながらかぞいの、外にはあらじ神も佛も」又儒には、人の子としては孝に止まる四書六經に散在し、別して孝經一部は偏にこの一事をのみ説く云々、如是三教等しく勸めて肝要の法也、爾れは人々現世には孝を専らにし、(孝行なれば餘は悉く是に隨ふ、綱の大綱を引くが如し)後世の勳には念佛を證とすべし、(八萬の法門皆具はる、念佛に統攝の義ある故に)如是勤る人は現當共に善法の最上をわり取つとむると云もの也。

偽吉利支丹孝子(托、事實卷二)

以上は大意を辨じたれば、是より已下入文解釋。たとへば、法華疏云、譬者比況、喻者曉訓と釋して、以世間事顯出世法體義也、されば動樹訓

風、舉扇喻月と云々、堯の代九年大雨人月を知らず、殷の代十三年風吹かす人不知風云々。●ある冬の頃(煩ふときのことなり)せちにこれをねがひけるに、(せちは、切の字にてしきりになり)時しもあれ(所に依て時の前後もあれども、定めて夏のものにてある也)心づきなしとねほぬべけれど、(冬のことなれば時ならぬ物を望るゝは、母の心づきなき無理なることを云はるゝとは、思たであらふなれども)孝養の心ざしねんごろなる子なりければ、(親に孝行なること至てふかき人なれば)雪いたくふりつみて(いたくとは、甚しくつもりし也)あるべうもなき竹の中にむかひ居てせめての事になきわたるほどに、と見ればさるべきころよりも、なほあざやかなるたかうな時のまにをひいでたりけむ、ふしきなりける事ぞかし。是れ一と通りの孝に非ず、何とぞ母の好まるゝ物を進らせ度と云至極の心切也、全體母の願は無理なれば、通塗の子なれば此寒中に竹の子のあらふ道理がなければ外の物をと云ふが、世間通塗十人

並みの子也、爾るに孟宗詞をかへさず雪ふりつみし數へ筭ほりに行しは、孟宗は筭の生る時節もしらぬ愚かな人かと云ふに、此人のことは晋書楚國先賢傳等の諸書にも出、近くは蒙求などにも撰出して、學文才智も至て勝れた人なれば、愚かな人でも知るとを知られぬとはなけれども、無と知りつゝ掘に行くこゝが孝養の志至てねむごるなと云もの也、親もたる人は此孝養の志の深いと云ふを聞に付ては、たとひ親がどのやうな無理を云はふとも無理をとがむること勿れ、或人桶屋の息男に教示の歌に「木に竹の無理をいふともそこが親、いはせてをけやたがわらふとも」云々況んや親の無理をも云はず子の爲を思ふて云ふことを、聞入ずして親に心勞をかけ、無理を逆にはたらくなどは、畜生にも劣つたことなれば、身を省みて本心に立還り、人間仲間に入るやうにせいでは叶はぬ、さて其孝行なる孟宗故、あるべきことゝは思はねども詮方なきに鋤うちかたげて藪の中へ行しに、雪漫々とより積りて草の葉一つも見ぬ程の

ことにてまして望の筭などのあるべしと云ふたのみもなければ、せめての事にせん方なくも思あまりてなき居たる程に、筭を得れば母の命をのべ得ざれば老衰の命危ふし、此所に至てさすがに孝行の志深き孟宗なれば、せん方なきの餘り鋤なげすて、竹にしがみ付聲打たて、泣居たるなり、と見れば泣しみつきて居たる顔ふり上てと向ふの方を見れば也、と云ふを、註にはきつと云ふ、又時と云字を傍註にし、要解にはとみかう見のこの義とし、言釋には時の義よし暫時也といへれど、何れも今にかなひ難さか、私に考るに泣居たる顔ふり上て、向を見たる貌ちを云言葉とするときは今にかなはんか云々、さるべきころよりも筭のはゆる時節夏のころよりも、なほすぐれて、あざやかなるせいゝとしたる、たかうな時のまにむかひいでたりけん今迄もなかりし筭たちまち生せし也、漸長に非、筭のび易しといへども、今生じて直に一尺にはならざるなり、不思議なりける事ぞかし冬と云、雪ふりつむ中と云ふ、一時にのび立ちし

(772)

と云ふは不思議なり、先是で文面一應の講談はず
 又是より此上を一遍法に合して勸進釋と云ふを設
 くる、此法譬合釋を聞ば彌陀如來の大悲の至極が
 顯はれ、斯迄にやと思ひ知らるれば懶き心も忘れ
 て念佛を進む云々。
 孟宗といひしもの、(法藏比丘)おやは、たかな
 を愛しけるなるべし。親は法藏比丘の大悲に譬
 へ、筍を衆生に譬ふ、法藏比丘菩薩の修行を進み、
 初歡喜地の位に昇り一分法性同體の悟を開き玉ふ
 時、其大悲の母親が何として法性同體の衆生の筍
 を迷はせて置れう、助け度と深く愛し給ふ也、(向
 譽上人の偈語には、孟宗の母を世自在王佛に譬へ
 玉へり、二人を二佛に譬ふれば配當よくかなへど
 も、若し攝凡の大悲法藏比丘自ら發し玉へるには
 あらず、世自在王佛の仰付られたるより發するか
 と、聞違へまじきものにてなし、故に母をば法
 藏比丘の大悲に譬也と、小松溪義柳上人講説し玉
 へり、孟宗と母と二人を、法藏比丘御一人として

は配當は不合なるやうなれども、右に云ふ聞違
 への失なき故今も亦此義によりて辨するなり、
 ある冬のころ、此五濁惡世末法の世、せちにこれ
 ねがひけるに。法藏比丘同體大悲の母、平等一子
 の大悲大悲に催され、末代惡世の凡夫を助度く
 と、無理にせつかれ願ひ玉ふ如く、時しもあれ心
 づきなしとはわばぬべけれども。時は末法也三
 毒熾盛の惡凡夫が地前三賢の菩薩を飛超て、報身
 報土へ往生など、云ふは思よりもなきことなれど
 も、孝養の志ねんごるなる子なりければ、雪ふか
 くふりつみてあるべうもなき竹の中に向ひて。
 法藏比丘衆生濟度の御志一と通りに非ず、至てね
 んごるに在す也、通塗十方の諸佛ならば、末代の
 惡衆生を報土へ往生などは思ひもよらぬこと、
 見放玉ふ也、爾らば此法藏比丘は末代の惡衆生三
 學無分の者は助けられぬと云ふことを知り玉はぬ
 かと云ふに、初歡喜地の證りを得玉ふ上位の菩薩
 なれば能御存知ませども、こゝが衆生濟度の
 御志至てねんごるに在すと云ふもの也、三學無分

(773)

の惡衆生出離はならぬとしろし召ながら、されど
 も同體法性を具へし衆生をどう迷はして置れう、
 苦を抜き樂があたへたい、どうぞ助けてやりたい
 と、無縁無極の慈悲を以て無理なる願を起し玉
 ふ也、(彼孟宗が親孝行の志の至て切なりしより、
 雪中に筍をと無理な願を發せしが如く、今此無理
 なる御願をば阿彌陀如來は誰が爲に發し玉ふぞ
 や、皆我等を憐み玉ふ大悲なることを、身に引
 いて、感受し奉るべし云々、)其末代の衆生をどう
 ぞ助け度と、雪いたくふりつみて。雪甚しく降り
 積りし如く、惡業罪障甚しく生々世々にふりつも
 れば、あるべうもなき。助かるべき縁もたよりも
 きれば、是ぞ往生しさうなど云ふ人は唯一人
 も見えず、其出離無縁の大罪人の、竹の中にむか
 ひて。末代の衆生我々が方に向ひて見玉ふに、
 無始已來造り積し罪業と云ふも、明ても暮てもな
 しとなすことは此世の營み、思ひと思ふことは後
 世に三塗に落ちたね計で、五戒十善をつとめて人
 間天上へ生ずる程の草の葉さへも見えねば、まし

て報身報土へ往生など、云ふあざやかなる筍は思
 ひもよらぬ也、孟宗せん方盡て鍬打捨し如く、法
 藏比丘も初阿僧祇の修行成就して初地の菩薩とな
 り、第二阿僧祇の修行にかへり玉ふ時なるに、其
 修行の鍬なげすて、せめての事に。あきればは
 しやうことなしになき居たるほどに。孟宗は竹
 に抱き付て泣きさげびしが、法藏比丘はどうぞ惡
 の衆生を助け度と、五つの巖なで盡す五劫の年月
 肝膽を碎き思惟し玉ひしなり、さて其五劫満する
 とき漸く御工夫成せしに依て、世自在王佛の御前
 に出玉ひし所、世自在王佛法藏比丘に向ての玉ふ
 には、汝が建る所の願唯今爰にて具さに説くべ
 し、一切衆生は聞て喜び菩薩は汝の勇猛にならひ
 て大願を満足せんとの玉ふ、是を大經に、佛告比
 丘、汝今可說宜知是時也、發起悅可一切大衆、菩
 薩聞已修行此法、緣致滿足無量大願、とある是
 也、此時法藏比丘佛の告勅に従て、唯垂聽察、如
 我所願、當具說之とて、四十八の大願を説き玉へ
 る也、譬の孟宗が泣たるを四十八願を建玉ふに譬

(776)

ふるは、凡人の泣くは皆同じことを云ふて泣く也
 (世間可知)今孟宗も亦同じ云々、法藏比丘の四十八願も、初め無三惡趣の願より終り得三法忍の願迄、設我得佛不取正覺くと同じ誓願を立玉ふ、其數四十八に及ぶ、孟宗が泣く一聲々々にはどうぞ筭を得て母に進らせ度と云ふ心で泣く、法藏比丘の四十八願は一願々々が衆生を助け度、いみじき果報が受させ度と云ふことを建玉ふ、故に導師は、一々願言稱我名號、一々誓願爲衆生と釋し玉へる也、又譬の孟宗が同じ言はにひたもの泣たと法の四十八願の設我得佛不取正覺と同じ言の誓願と合するのみか、孟宗が心に一筋に母に筭がすゝめ度と云ふと、四十八願一筋に衆生の爲と思し召御心迄が譬と法ときつしりと能合するに非や。
 (孟宗が母の爲に男泣に泣て筭を求めしを、人の子として羨む心のないはあるまじ、若其心がなければ平生の不孝は知れてある、夫が段々つのと終りは知れた逆磔、所詮兩親のない者はなければ生るに孝行死せるに回向云々、人々此の孟宗の譬か

ら押もとづけて、阿彌陀如來の四十八願は斯迄の御慈悲にやと、我身に引受けて信受念佛せらるべし、若此心發らずば臨終の時至らば火の車の引廻し三惡道の逆磔好んで惡趣に墮すると云ふもの、所詮死なぬ人はないことなれば、生きなば念佛死なば往生と云ふ身の上とならるべし、已に人の子が人の親に孝行したをさへ、隨喜しうらやむ正心を持たながら、我爲に苦を抜き樂を與へ大菩薩となしてやらうと、難作能作難捨能捨の修行をなし大慈大悲を運び玉ふを、難有忝と悦ぶ心が發されまいか、つとめ易念佛の申されまい筭はないとなれば、知らぬ昔しはせん方なし已に聞得し是より後は、人々分ある心をすゝめ稱名相續云々、と見ればとは、孟宗泣しみづいたる顔をふり上て向ふの方をと見ればと、筭を見付た時がはや母の病の癒る願成就のしるし也、彌陀は四十八願立畢り重ねて四誓を建立し玉ふ、其終りに斯願若尅果、大千應感動、虚空諸天人、當雨珍妙華と言を擧玉ふやいな、虚空よりは華雨りくたり大地は震動し、空中

(775)

自然に決定必成無上正覺と讚言の聞わしが、名號を唱ふる者をば皆悉く迎へ取り玉ふと云ふ大願成就の驗しにてある也、さるべき頃よりもなほあざやかなるたかうな時の間にわひいでけん、不思議なりける事ぞかし。(さるべきはさうあるべき也、譬の意略解)。

此譬にて本願稱名の利益の廣大なること可知、總じて筭にも生ゆるに時節のあるごとく、佛道修行にもさうあるべき時節があるものなり、爾るに念佛唱へて御利益にあづかる者は、時節不相應にして得まじき利益を得ると云ふが大意也、此下の勸進釋に二義あり、先第一義は極樂は報土也、其報土に生るゝ時節あたりまへは地上の菩薩也、自力では地前三賢の菩薩往き玉ふこと叶はず、唯地上證眞の菩薩のみが往生し玉ふ也、先この地前の地上のと云ふは、菩薩の階級の邊で菩薩の位に五つ通りわかる、凡夫より修行して少し計り證りを開きしを十信と云ひ、其上を十住と云ひ、其上を十行と云ひ、其上を十回向と云ひ、其上を十地と云

ふ是れを菩薩の五位と云ふ也、此菩薩の位を世間の商人中間の位に准らへて合點すべし、總じて云、世間商人にも五位ある也云々、一には下駄足駄賣(裏借屋にて荷ひ歩行て賣人)二に小間物屋等(家は自身に造り屋敷は借地にして商する人)三に穀物店(家も地面も自身の持にて店商する人)四に諸色問屋(木綿問屋米問屋材木問屋等なり)五に三年寄、此初の下駄足駄賣は菩薩の位にあつれば十信一萬劫の菩薩の如く、小間物屋は十住、穀物屋は十行、諸色問屋十回向、三年寄は十地の菩薩の如し、如是菩薩の位を世間の商人の次第にあて、合點すると、我人の如き信外輕毛の凡夫をばいづれへ當ぞと云ふに、既に十信の菩薩を下駄足駄賣に當るなれば、夫より下になる者は芝居の番附柱層み流行歌の讀賣の類に當る外なし、夫も善人の事なれば我々如きの惡凡夫は讀賣よりも劣つた雲介か乞食にか當てやうはなきなり、然に讀賣位は勿論のことたとひ諸色問屋などでも三年寄の格に連ることとはならぬ也、爾るに雲介乞食の類が直に飛超

て三年寄と同格になると云たならば、是通塗で論せられぬ不思議にて、さうあるべき比よりも尙あざやかなる筈の如し、今も亦如斯凡夫の善人位は勿論のと、たとひ十行十回向の菩薩で往生ならぬ報身報土へ、彼雲介乞食に喩られたる我々如き悪凡夫が、念佛唱ふる計にて地前の菩薩を飛越て報身報土へ往生遂ることなれば、通塗の道理で論せられぬ不思議にて、是さうあるべき比よりも尙あざやかに生ひ出たる筈の如し、故に、本文にさるべき比よりも、なほあざやかなるたかうな時の間に生ひ出たりけん、不思議なりける事ぞかしとあるなり。

次に第二の義とは、凡佛道修行にもさう有べき時節ある也、釋尊の御在世は佛力住持し玉ふ故に、聖道淨土共に利益廣大也、佛の滅後に於て正像末三時の配當あり、如來の滅後初の五百年を正法と云ふて、教行證の三つ具足して教もあり行もあり證する人もある也、其次の千年の間を像法と云ふ(像は似也正法に似る也云々)此時はや時節衰へて

教行する人はあれども證する人なし、其次一萬年を末法と云ふ、此時に至ては時節も人の機根も至極衰へて唯教のみあつて行證の二つはなき也、其末法と云ふは何れの時ぞと云ふに、今が其末法のたゞ中也、故に今時聖道の諸宗は教のみあつて行證なきこと可知、如し是通塗佛法の修行、正像には利益あつて末法には得益なく後程劣るが定り也、爾るに此本願念佛の法門も、唐土に渡りしは後漢の明帝の時なれども(像法の世なり)法門の弘通はななく、三部經の中無量壽經の翻譯ありしは曹魏の時なれども其代にも未だ盛ならず、夫より後佛圖澄三藏、道安法師、惠遠大師、續て淨影、天台、嘉祥、憬興等の諸師出で、種々に弘通し玉へども盛に行はれず、本願の正意も顯はれざりし、竟に唐の世に(末法の世也)至て善導大師御出世あり、觀經によつて古今を楷定し本願念佛の正意を見開き專修念佛を御弘通ありしに、長安城は申に及ばず大唐四百餘州に弘まり、捨身往生の者計りも百有餘人ありしと也、故に御傳記にも、佛法東漸より

以來未嘗有^三如^レ師盛徳とある也、如此上代に勝れ、末代唐の世に至て念佛の法門盛ん也、又我朝に念佛の法門渡りしは、人王二十九代欽明天皇の御宇にて、則聖徳太子七日別時念佛を修し玉ひしともあり、夫より後行基、空也、惠心、永觀等の師弘通し給へども、本願念佛の正意もあらはれず、弘通もさのみ盛んにもなかりしが、人王七十五代崇徳院の御宇長承二年元祖大師御出誕あり、人王八十代高倉院の承安五年の春御年四十三にして善導大師の御指南に依て、選擇本願念佛を御弘通ありしに、上は萬乘の天子より月卿雲客武門の人々、下り下ては高砂の漁人、室ろのうかれめ、盗人の骨張天野四郎など、云ふ様なる難化難入の者に至る迄、御化益にあづかりて目ざましき奇瑞を現して往生を遂たり、如此元祖御出現の後はその已前に勝れ、今時に至て盛んなるは聖道通塗の次第劣りとは違ふて彌陀一教利物偏増、さうあるべき昔より末代に盛なるは、さるべき頃よりも、なほあざやかなるたかうな時の間に生ひ出たりけん、ふしぎなりける事ぞかし、通總の格から見れば不思議なるこ

と也云々、古語に國亂れて忠臣出、家衰へて孝子出ると云ふ如し云々、此下にて勝易の二義を譬説によりて辨せば(大原問答の初問答の下なる講録見合)●つらくこの事を思ふに、かぎりありてたのれとたふべきころならば、夏の末さまをこそまつべけれ。五科の中已上に總釋譬説の二科を畢是より第三譬説の評釋の科也、つらくとは、日本紀には究字をよみ、遊仙窟には一一をよみ、常には熟の字をよむ、つらくの義也(つらくと云ふに同)此事とは上に擧玉ひし孟宗が孝行のねむるなるより筈の生ねしことなり、是則老僧の此孟宗がことをとくと考へて見るにと云ふ意で、つらく此事を思ふにこの玉ふ也、かぎりありてとは總じて何にても期限とて、此時分には何がはゆると云ふ定まれる時節のあるもの也、依てかぎりありて也、たのれと生ふべき比ならば、筈がたのれと一りてに生出べき頃ならば、夏の末さまをこそまつべけれ、夏の末つかたを待てこそ生ね出さうなものな

(773)

り。今爰に夏の末さまとあるはいかゞ夏の末と云へば六月也、今時笋の出るは夏の初四月が盛り、五月にもなり半夏生を過れば人も賞翫せず、六月にははや竹になつて居るがと云ふに、凡そ笋の生ずる時節、所によりて相違する也、故に註に、本草綱目を引て、晋武目載凱之、宋僧贊寧、皆著竹譜、凡六十餘種、其所産之地、發筍之時各々不同とあり、爾れば今夏の末さまとの玉ふは、晋地に（孟宗居住の地）筍の生ずるは六月比なるにやあるらん（考得は爰にしるせ）又さう時節に左右ありとも、夏の末炎天の比を證位の菩薩にたとへ、玄冬の寒き比を重障の凡夫に譬れば、誠に對待よく叶ふ故にもあらんか云々、是等の道理あれば夏の末さま、この玉ふなるべし云々。

●これはしかしながら。
●これはとは寒中に笋の生せしをさす詞、しかしながら、要解にしかしなからを皆と云ふ意とあるを、言釋にしは助字にてしかながらなり、解に皆と云ふ意とは、何事ぞやと破せり、されども日本紀に

り頼りに願ふとなれば、其願力に引立られ催されて心ならず生れ出し也、是全く笋の力ではなたでなく孟宗が願ひのかなひし也と云ふ意で、これはしかしながら孟宗が願ふ心のせちなりしかば、乃至心ならず生るなりと示し玉へり。

●まめやかにねんこごなるねがひの、かなはぬ事は侍らぬにこそ。
まめやかとは眞實と云ふこと也、「ねがへどもしるしなきこそしるしなれ、ねがふ心にまことなれば」と誠めたるらで眞實に願ふならば叶はぬと云ふことはなきなり、されば註に、さればこのみにかぎらず、眞實にねがひねんごろに志す事は、つひにかなふものと見たりとある也、是迄に五科の第三譬説の評釋の科が畢て、是より下が第四法譬合釋の科にて正しく法と譬と引合せて勸進也 ●彌陀の本願もかくのごとし、我等が生るべくもなき事は、雪の中の笋の生ふべきもなきに似たれども。

(770)

彌陀如來の本願も、彼孟宗が願ひと同じことにて、

一切を訓すれば要解に皆と云ふ意とあるも強てとがむべきことには非、しを助字と見れば言釋の如、又助字と見ずしかりしながらの約言と和訓業に見たり、此文意は、寒中雪の中より笋の生せしは全く笋の力にあらず。

●孟宗がねがふ心のせちなりしかば。
孟宗が願ふ心至て、親切にして雪ふり積る數に來り、何とぞ笋がほしい筍がなければ母の命危し、何卒ほしいと泣々願ふ心ねむごろにして、我身も命もかへり見ず手強く願ふことなれば、孝行の深念天地を感動して笋が生せし也、依て

●其ねがひむなしからずしてかなひし故なり、たふべくもなき時なれども、こゝろならずおひにけるなり。

中々此寒中雪ふり積る中より笋のひとりでに、はは出やうなど、云ふことは思ひがけなきこと也、地中の竹根などには粟粒程はめぐんでもあらふなれども、中々今やなどはは出やうなどは笋の方には思ひもよらぬこと也、爾れども孟宗が孝心よ

我々如き惡凡夫の報身報土とうづたかき極樂へ生れまじきことは、孟宗が願ひの雪中の笋のはは出べきもなきと同じことぞと云ふ意なり、時節を云へば末法の冬、惡業煩惱の深き事は雪深くふり積りたるに異ならず、助るの往生のと云ふは思ひもよらぬ事也、人々自身を願るべし、思ひと思ふことは後世の仇、なしとなすことは此世の營み、輩倫の吉事を見ては嫉妬の意る劍を呑み、怨家の凶事を聞ては歡喜の顔せ花を生ずと、人のよきことを聞ては妬み、日和のあとはある善き事はないもの、人のあしきことを聞ては喜ぶ、（さうあらふとかもふた）其證は好事不出門、惡事千里走、なしとなすこと思ふこと能く胸に手を置いて考へて見れば争はれぬ、中々往生などは思ひたれたるありさま也、依て彌陀の本願もかくの如し、乃至雪の中の笋の生ふべくもなきに似たれどもとある也。

●深重の慈悲よりかこりて。
導師の御釋にも深重誓願と在て、阿彌陀佛の因位

(780)

法藏比丘のとき、同體法性の證りを開き玉ひて發し給ふ御慈悲なれば、至て深く至て重き也、云何深きぞと云ふに、設我得佛十方衆生乃至不取正覺と十方の衆生誰にもあれ念佛唱ふる者生れずんば正覺を取らじと、勿體なくも目當とし玉ふ正覺をかけたものにして御誓ひ下されしは、是至て深き御慈悲に非や、又一所の御誓ひには、假令身止諸苦海中、我行精進忍終不悔とて、何卒十方の衆生を助けたい若し助ると云ふにならば、たとひ我身は地獄のすもりとなるとも一念も悔る心を發さず、唯衆生が助かるを見て地獄の釜中からも悦んで居やうとまで御誓ひ下されしは、是れ至て重き御慈悲と云ふものに非や、依て深重の慈悲よりたこりてと示し玉へり。

●ねんごろなりし本願なれば。
ねんごろとは慇懃と云ふ字にて、釋にも四十八願慇懃喚とあつて、何とぞして惡凡夫を助け度、助けたいと思し召大慈大悲のねんごろなる所より立玉ひし本願なれば。

れしめんと云ふ御願ひ空しからず、本願成就し成等正覺なり玉ひし故、此末法の寒中煩惱惡業の雪中生るべくもなき我々が、往生することになりしは、是全く衆生の力に非ず佛の本願叶ひし故也、是れ則孟宗が願ひのせちなりしによりて笋の生しがごとし、彌陀の本願他力にひかれて我々往生する也。

●かゝるを本願に乗じて往生すとはなづくるなり。
如是心得たるを本願に乗するすぢ道を、能々心得たる人と云ふ也、先是にて文段は畢れり、上來の義を能く味ひて本願に乗すると云わけを可心得也。

(781)

此下の註に、雪の中に笋の出たる事は、たゞ孟宗のねがひのあながちなりし故也、またく笋のわざにはあらず、凡夫の極樂に生る、事は佛の志願のつよかりし故なり、さらに衆生のちからには非ず、是にて人々往生は佛の御力にて全く我力に非ることを得心すべし、此すぢ道をはきと心得分けたる

●念佛せんものかまへて(かまへてとは、是非ともになり)我國に生れしめん願はれし、その御願ひむなしからずしてかなふゆゑに、となふるものことぐくうまるゝ事は。

上は日々六萬十萬の行者より、下は臨終の一念一念に至る迄、唱ふる者は是非とも我國に生れしめんと願ひ玉ひし、御本願空しからずして叶ふ故に、已に十劫已前に佛となつて在せば、唱ふる者は悉く御來迎にあづかりて往生する也、偕其生るることは。

●孟宗がねがひのせちなりしによりて、たかんなのねがひしがごとし。
是正しく譬と法と合釋し玉ふ也、孟宗が親孝行の志至てねむごろなる所より無理なる願ひを發し、寒中笋をとせちに願ひしに依て、其眞實の願ひ空しからず、生出づべくもなき雪中より笋の生出しは是笋の生れたには非、孟宗が願ひの叶ひし也、今も又其如く、彌陀如來深重の御慈悲至てねんごろに在すによりて、念佛せし者は是非とも我國に生

人、少し申せば往生ときけば多くは我力で往くことの様に思ひ違へて、心行の弱を願ひて疑を生ずるもあり、或は機功を募りて本願に乗じかぬる等あり、爾るに從來の講説を聞得るときは、是等の心得違ひをせず本願所乘の人となる也云々、偕此孟宗の願を譬として、彌陀の本願を示し玉ふこと返々甚深なること也、夫願に二種あり、可得の願と不可得の願と也、可得の願とは願へば得べき道理のある願也、大論に曰、鑽木求火、穿地得水、修福得人、天中生、及得阿羅漢、辟支佛果、乃至得諸佛法王、如此等名皆可得願(文意盡談すべし)不可得の願とは願ても得べき道理なき願を云也、有人欲籌量虛空、盡其邊際、及求十方邊際、如小兒求水中月鏡中像、如是等願皆不可得(文意盡談)、是可得不可得願と云ふ也、今孟宗と彌陀如來の願とは二ながら不可得の願と云者也、孟宗の寒中と云ひ殊に雪降り積し敷にて笋をと願ふ、是一向得べき道理なければ不可得の願也、彼水中の月鏡中の像を求るが如し、爾れども孝行の志至て懇なる